

シク活用形容詞の歴史的研究

于
艶麗

博士論文

シク活用形容詞の歴史的研究

立教大学大学院

文学研究科

日本文学専攻

于 艶麗

目次

序章	研究の目的	一
第一章	上代語シク活用形容詞について	一九
第一節	上代語形容詞の概観	一九
第二節	上代語形容詞の語構成	二〇
二―一	上代語ク活用形容詞の語構成	二〇
二―二	上代語シク活用形容詞の語構成	二三
第二章	意味論的研究	五
二―一	語構成論的研究	二
二―二	意味論的研究	五
第三章	研究の方法	一
三―一	語彙概数と研究対象	一
三―二	用語と表記	一五

二―三	上代語ク活用とシク活用形容詞の語構成比較	二五
第三節	上代語形容詞の情意性	二九
三―一	ク活用形容詞の情意性	二九
三―二	シク活用形容詞の情意性	三一
第四節	シク活用形容詞語幹の性質	三四
四―一	単純形式の語幹の性質	三五
四―二	合成形式の語幹の性質	五六
第五節	まとめ	六五
第二章	中古中世シク活用形容詞について	六八
第一節	『日葡辞書』に見る形容詞語構成の変化	六八
一―一	ク活用形容詞の語構成の変化	六九
一―二	シク活用形容詞の語構成の変化	七〇
第二節	中古中世新出シク活用形容詞の語構成	七〇
二―一	平安時代新出シク活用形容詞の語構成	七一

	二―二	鎌倉・室町時代新出シク活用形容詞の語構成	七二
	第三節	中古中世新出シク活用形容詞の語幹の性質	七四
	三―一	単純形式の語幹の性質	七五
	三―二	合成形式の語幹の性質	九八
	第四節	室町時代シク活用形容詞の接尾語の性質	一一九
	四―一	接尾語「がまし」とその派生語	一一九
	四―二	接尾語「らし」とその派生語	一三五
	四―三	その他の接尾語について	一三九
	第五節	室町時代形容詞活用の変化	一四四
	第六節	まとめ	一五三
	第三章	近代語「しい」型形容詞について	一五六
	第一節	近代語「しい」型形容詞の語構成	一五六
	一―一	近代語「しい」型形容詞の語構成の変化	一五七
	一―二	各時代の新出「しい」型形容詞の語構成	一五八

第二節	近代語の新出「しい」型形容詞語幹の性質	一五九
二―一	単純形式の語幹の性質	一六〇
二―二	合成形式の語幹の性質	一六四
第三節	近代語「しい」型形容詞接尾語の性質	一七三
三―一	既存の接尾語の発展について	一七三
三―二	新出の接尾語「たらしい」について	一八一
第四節	漢語形容詞について	一八三
第五節	まとめ	一八八
第四章	シク活用形容詞の意味分類	一九〇
第一節	『分類語彙表』に基づく意味分類	一九〇
一―一	『分類語彙表』に基づく意味分類	一九〇
一―二	分類から見るシク活用形容詞の意味傾向	二二八
第二節	シク活用形容詞の意味分類の再検討	二三〇
一―一	シク活用形容詞の意味分類の試案	二三〇

一―二	各時代シク活用形容詞の意味分類	二二二
第三節	まとめ	二三四
第五章	シク活用形容詞の意味変化	二三六
第一節	状態シク活用形容詞の意味変化	二三六
一―一	分類からみるシク活用形容詞の意味変化	二三六
一―二	状態から状態へ変化する場合	二三九
一―三	状態から情意へ変化する場合	二四七
第二節	情意シク活用形容詞の意味変化	二六二
二―一	情意から状態へ変化する場合	二六二
二―二	情意から情意へ変化する場合	二八〇
二―三	その他の意味変化について	二九九
第三節	まとめ	三〇六
終章		三〇九
参考文献		三一七

表 24	分類からみるシク活用形容詞の意味変遷傾向	四六九
表 23	シク活用形容詞の意味変化	四六四
表 22	シク活用形容詞の意味分類の時代別比較	四六三
表 21	シク活用形容詞の意味分類	四四三
表 20	『分類語彙表』からみるシク活用形容詞の意味傾向	四四二
表 19	逆引き『日本国語大辞典』「しい」型形容詞	四二六
表 18	各資料におけるシク活用形容詞の収録語彙	四〇三
表 17	シク活用形容詞語構成の歴史的变化	四〇一
表 16	シク活用形容詞の出現時期の時代別表	三七九
表 15	近代語新出「しい」型形容詞語構成の時代別比較	三七六

序章

第一節 研究の目的

古代日本語の形容詞は、形態的特徴によって「ク活用」と「シク活用」の二つのグループに分けられる。「ク活用」の形容詞には、「多し、清し、遠し」など物事の客観的な属性を表す言葉が多いのに対して、「シク活用」の形容詞には「嬉し、苦し、寂し」など主観的な情意を表す言葉が多い。それ故、現代日本語の感情・感覚を表す表現には、「しい」型の形容詞が多く存在している。『日本国語大辞典』（二〇〇一）に収録されている「しい」型形容詞は八九七語である（「じい」型十語を含む）。上代から用いられるものもあれば、中世や近代に新出してきたものもある。また、歴史の流れの中で姿が消えた語も少なくない。

こちらの感情・感覚を表す語彙は各時代にどのようなものにつくられ、また意味変化してきたかは興味深い問題である。本研究は、主に語構成論と意味論の視点から、古代語から形態と意味の上において特徴がある「シク活用形容詞」の歴史的变化を明らかにすることを目的とする。

第二節 先行研究

日本語の形容詞は古くから形態的特徴があり、さまざまに研究されてきた。形容詞全体を扱い、分類を試みる論もあれば、個別の語彙に対する考察や、一つの意味や形態のカテ

ゴリーを取上げる研究もある。本研究は、シク活用形容詞の全体像を扱うものである。主に形容詞の語構成、活用、意味の特徴及び歴史の変遷について考察を行い、「人称制限」など文法や構文上の問題は扱わない。

二―一 語構成論的研究

語構成論的研究は、言語研究において非常に重要な視点である。

(1) 阪倉篤義『語構成の研究』(一九六六)

「語構成論」について定義し、さらに「語形成論 (word-building, word-making)」という実践的な立場から、a 「語根創造」、b 「借用」、c 「変形」、d 「合成」といった方式を挙げ、それに対応する問題を「語構造論 (word-formation)」という観察的立場から検討した。また、語構成の歴史の変遷研究の可能性を示した。

語構成論といふのは、一言語において、「語」といふ單位が構成される、その方式 (pattern) を考究する、言語研究の一分野である。 (『語構成の研究』p.5)

(a) 命名にあたって、一つの言語記號を創造する、そのもつとも根本的な手段は、あるあたらしい事物の概念に對應すべき記號として、音韻の、當の言語體系にはそれまで存在しなかつた、あたらしい組合せをこころみることによつて、まったく新規な形式を創造し、設定すること、すなはち「語根創造」といふ方法である。

(b) 命名にあたって、他の言語體系にすでに存在してゐる記號を、そのままに、あるいは多少の修正をくはへて、當方の言語體系中にかりもちゐること、すなはち「借用」とよばれる方法である。

(c) 「造語」といふ中心をなすものは、やはり、當の言語體系内にすでに存在する形式にもとづき、あるいはまた、これを利用して、あたらしい記號を創造する方法である。もつとも、そのなかには、かならずしも意圖的な新造語とはいひにくく、音韻の轉倒・脱落・縮約・同化・添加などによつて、新形がうまれてたと見るべきものはおほい。

(d) 造語法全體の中心をなすといふべきものは、既存の、二つ（以上）の要素をあたらしく結合することによつて、一つのあたらしい形式を創造するといふ方法である。もつともしばしばおこなはれるのは、複合法——すなはち、本來自立の用法を有する二つ以上の單語（または、これに準ずる言語單位）を結合して、形態上一つの單語に相當する形式（「複合語」、また「熟語」）を創造するといふ方法であり、そしていま一つは、派生法——すなはち、本來自立の用法を有する一つの單語に、一つ以上の非自立的要素（いはゆる接辭）を接合して、おなじく形態上一單語に相當する形式（「派生語」、また「由生語」）を創造するといふ方法である。「疊語」は、特に同一の單語（または、これに準ずる言語單位）を二つ結合させる、特殊な複合法によるものであり、（中略）複合語（複合法）と、派生語（派生法）とをあはせて、合成語（合成法）とよぶことにする。

（『語構成の研究』p.p. 6-14）

まづそのやうな、各共時態における語構成法をあきらかにすることができたらうへで、さらに、これを通時的に見ることによつて、そこに日本語における語構成様式の變遷を歴史的にたどることも可能になる道理である。それは、いはば語構成意識の變遷をあとづけることになるであらう。

(『語構成の研究』p. 30)

(2) 蜂矢真郷 『国語重複語の語構成論的研究』(一九九八)

国語重複語の語構成を考察し、重複形容詞を言及した。まづ、形状言の重複、名詞の重複、動詞連用形の重複、副詞の重複に分けて重複形容詞の重複素を考察した。そして、「セハセハシ」のような具体的な語例を挙げ、重複形容詞とそれに対する単独の形容詞に関する種々の問題点について検討した。さらに、「ススドシ」のような重複形状言が形容詞を伴って形成する複合形容詞についても考察した。

和語の重複形容詞について見ると、全体として相当の例があり、(1)形状言の重複のものは基本的にア列・ウ列・オ列のものであるが、イ列・エ列のものも若干あり、(2)名詞の重複のものはア列・ウ列・オ列のものもイ列・エ列のものもあるが、前者の方が多く、(3)動詞連用形の重複のものは当然のことながらイ列・エ列のものばかりである。重複素の音節数については、やはり二音節のものが多い。

(『国語重複語の語構成論的研究』pp. 254-255)

(3) 村田菜穂子 『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』(二〇〇五)

上代資料・八代集・中古散文作品から採取された千二百余りの形容詞を対象として、ク活用形容詞とシク活用形容詞の結合タイプ（三八種類）と造語形式（九種類）を徹底的に分析し、形容詞の語構成における「階層構造」について考察した。また、「イカメイ」「うたてし」をはじめ中世語における両活用形容詞を論じた。さらに、各作品における量的構成や単語の運用の在り方を分析・考察すること（計量的分析）を目指し、形容詞の語彙論的研究を行った。上代から院政期を含む中古に至る古代語形容詞の語構成上の特性について、次のように述べている。

要するに、中古において、形容詞は、ク活用については『複合形容詞』の産出を主とした二次的（乃至三次的）な自己増殖をかなりの規模で行い、そして、シク活用形容詞については既存の動詞を派生源にした増殖を展開するという二方向から造語を推し進めていたのである。（『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』p. 358）

蜂矢真郷（一九九八）と村田菜穂子（二〇〇五）は、阪倉篤義（一九六六）の語構成理論を継承し、語基の品詞性を意識し、語構成という観点から古代語形容詞の具体的な分析方法を示した。語構成と意味の関わりを解き明かす試みが見られるが、なお進めていくべき重要な課題である。

二―二 意味論的研究

まず、ク活用形容詞とシク活用形容詞の形態と意味の違いについての研究が見られる。

(1) 山本俊英「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」
『国語学』二三号(一九五五)
ク活用形容詞とシク活用形容詞の意味上の対立関係を見出した。

ク活用に属する語と、シク活用に属する語との間には、それらが表わす概念の上で確かに大きな相違がある。即ちク活は「重し」「白し」「高し」「長し」「深し」等の状態的な概念を表わす語が大部分であるに反してシク活は「うれし」「恨めし」「悲し」「樂し」「恋ほし」等の心的な、情意的な面を表わす語が大部分である。相互の例外は無いではないが、極めて僅少である。奈良時代における例外の率は約二十パーセントである。この例外は時代がたつとともに増加するが、それは形容詞の意味がしだいに転用されて、本来あった活用形と意味との密接な関係が次第に薄くなって行った結果であろうと思われる。

(『国語学』二三号 p.71)

(2) 橋本四郎「ク活用形容詞とシク活用形容詞」『女子大國文』第五号(一九五七)
いろいろな文法的環境に立つ形容詞語幹を、接続要素に対する依存度の強弱によって分類し、依存度の弱いすなわち独立性の強い修飾要素にク活用形容詞語幹が多く位置し、反対に接続要素に対する依存度の強いすなわち独立性の弱い修飾要素にシク活用形容詞語幹が多く位置するとした上で、前者が状態的な意味を表示し、後者が情意的な意味を表示すると指摘した。

また、以上の形容詞の活用と情意性に関連して、属性形容詞と感情形容詞などの意味分類が行われる。語源や意味、統語的振舞によって、いくつかの分類法が提案される。

(3) 西尾寅弥『形容詞の意味・用法の記述的研究』(一九七二)

感情形容詞と属性形容詞の生起する環境について考察するほかに、「主語の制限」問題や、属性形容詞の感情形容詞の用法、感情形容詞の属性的用法、感情と属性の両面をもつ語などの「属性形容詞と感情形容詞の交渉」問題を論じた。

また、形容詞の属性と内容に関して、「広汎なものごとの属性」「ものに関する属性」「人に関する属性」「こととの属性」と分類して記述した。主に、「感情形容詞と属性形容詞」「属性の主体と内容」「程度」「形容詞の意味における主観的な側面」など形容詞の意味の諸側面について、具体的な語彙の分析例によって、形容詞の意味・用法記述の方法論を提示した。

ちなみに、「主語の制限」(あるいは「人称制限」)問題は、日本語の感情・感覚を表す形容詞の特徴として多く議論される。その定義と原因について西尾寅弥は『「ぼくは悲しい」けれど「彼女は悲しがる」―感情・感覚形容詞の特色―』『新・日本語講座2 日本文法の見えてくる本』(一九七五)で次のように述べている。

すなわち感情形容詞が、そのままの形で平叙文の言い切りの述語になるばあいは、普通は話し手自身の感情・感覚しか表さない、という制約です。(中略)人間が直接に経験できるのは、自分自身の喜怒哀楽や痛さ・くすぐったさ、まぶしさ等だけで、

自分以外の人の気持や感覚は、その人の言葉によって知ったり、表情・態度・行為などを通じて推測できるにすぎません。どんなに親密な間柄であるうとも、深い感情移入ができるに止まります。日本語の感情形容詞が、その瞬間における感情・感覚に関するかぎり、話し手自身についてしか断定的に用いることができないのは、この根本的な事実と相応じているように思われます。

（『新日本語講座2 日本文法の見えつくる本』 pp. 82-83）

（4）山崎馨「形容詞とは何か」『研究資料日本文法』（一九八四）

形容詞の起源発生の観点から、名詞系形容詞と動詞系形容詞とに二分類し、さらに、名詞系形容詞について四分類を試みた。語幹の安定度に着目し、A群は高く、B群は低く、C群における語幹の安定度はA群とB群との中間にあり、D群は濁音語尾を有する特異な一群で、語幹の名詞としての安定度が高いことにおいてA群に近く、また、不安全ながらもシク活用をする点においてC群に近いと述べている。また、動詞系形容詞について、形容詞を派生させる動詞は四段活用、上一段活用、上二段活用、下二段活用の動詞に限られ、形容詞を派生させる動詞としては四段活用が最も多いと指摘した。

名詞系形容詞

A 群	あかし	かしこし	きよし	なし	よし
B 群	かそけし	さやけし	たひらけし	はるけし	ゆたけし
C 群	あし	いやし	すがし	はし	ひさし
				をし	

D群 いぬ(犬)じ いへ(家)じ うま(馬)じ おな(己)じ おも(母)じ
 おや(親)じ かこ(鹿子)じ かも(鴨)じ しし(猪)じ とき(時)じ
 ゆき(雪)じ われ(我)じ をとこ(男)じ

(『研究資料日本文法』p.4)

動詞系形容詞

四段活用 あたらし いきづかし ゑまはし あさまし いそがし いたまし おも

はし さわがし なげかし なやまし のぞまし ほこらし をかし

(母音の交替) いきどほろし たのもし よろし

上二段 うらめし

上二段 くやし

下二段 やさし

(『研究資料日本文法』pp.11-15の記述からまとめた語例)

(5) 八亀裕美『日本語形容詞の記述的研究―類型論的視点から―』(二〇〇八)
 時間的限定性の有無に注目し、「時間的限定性」と「評価」を軸として、形容詞を五つのタイプに分類した。また、「特性」〈状態〉〈存在〉〈関係〉を表す形容詞述語文について考察した。ただし、この分類は本来動詞分類でよく用いる「時間性」を形容詞に導入するため、属性形容詞と感情形容詞の分類とは大きく異なる。

そして、歴史的变化の観点から、形容詞の意味変遷や語の消長を論じる研究もある。

(6) 山口仲美「感覚・感情語彙の歴史」『講座日本語学 四語彙史』(一九八二)

意味の歴史という観点から、感覚・感情語彙の全体的推移の傾向について考察した。感覚語彙と感情語彙の差異点として、「感覚語は、刺激に対する生理的な反応をあらわし、直接的、具体的な性質をもつのに対し、感情語は、刺激に対する精神的反応をあらわし、間接的、抽象的な性質をもつ」(『講座日本語学四語彙史』p.207)と指摘し、また、語彙の意味推移を辿り、感覚語彙の永続性と意味の不変性に対して、感情語彙の意味の可変性を述べた。さらに、「感覚語から感情語へ」「感情語彙の意味変化」「状態語から感情語へ」など感情語彙に関する意味変化のパターンを提示した。

これまでの研究は、形容詞の形態的特徴に注目する語構成の研究が多い。しかし、ク活用形容詞とシク活用形容詞の意味上の対立関係や、語幹の品性論的区別など、形容詞の語構成と意味との関連性に着目する研究が行われているが、研究対象の範囲をさらに広げて考察を進めていくべきであると思われる。形容詞の意味に関して、体系的な研究は極めて少なく、特に、形容詞の歴史の変遷の研究は、「かなし」「ねたし」などの語彙を個別に取り上げるものがほとんどである。歴史的变化の観点から、形容詞の語構成、特に意味に関する体系的研究は非常に重要な課題であると思う。

第三節 研究の方法

三―一 語彙概数と研究対象

『時代別国語大辞典 上代編』『時代別国語大辞典 室町時代編』『日葡辞書』(『邦訳日葡辞書』による)、『大辞林』『日本国語大辞典』などの辞書から、シク活用形容詞を取り出し、その意味記述と用例を分析し、形容詞の語構成、活用及び意味を考察する。シク活用形容詞の形態と意味の特徴及びその歴史的变化をより全面的、体系的に把握したい。調査した資料における形容詞の語彙概数は次のようであつた。

○ク活用形容詞

『万葉集索引』(二〇〇三)	一二三語
『時代別国語大辞典 上代編』(一九六七)	一五六語
『邦訳日葡辞書索引』(一九八九)	二七五語
○シク活用形容詞	
『万葉集索引』(二〇〇三)	八六語
『時代別国語大辞典 上代編』(一九六七)	一四二語
『邦訳日葡辞書索引』(一九八九)	二二二語
『時代別国語大辞典 室町時代編』(一九八五〜二〇〇〇)	四八四語
『大辞林』(第二版)(二〇〇六)	三九六語
『日本国語大辞典』(第二版)(二〇〇一)	八九七語

歴史的変化の観点から、日本語の発達変遷の全容を考察するには、奈良・平安・鎌倉・室町・江戸・明治以降の六期に区分するのが望ましいが、資料も限られることから、古代語と近代語の過渡期と言われる室町時代を境目に、シク活用形容詞の歴史的变化を考察することにした。つまり、上代（主として奈良時代）、室町時代、近代（江戸・明治・大正以降）の三つの時期を取り出して考察を行うこととし、中古・中世については適宜必要に応じて考察対象とすることとした。次に、時代別に語構成を考察する際、研究対象となる形容詞を確認しておく。

『時代別国語大辞典 上代編』（一九六七）は昭和一六年に着手した斯界最高の編修陣による時代別国語大辞典の首巻であり、文献的に知りうる上代語の全貌をとらえ、その科学的、歴史的な位置づけと、体系化をめざした本格的言語辞典である。

上代形容詞の数は少ない。『時代別国語大辞典 上代編』（一九六七）に収録されている形容詞の語彙数は、ク活用形容詞一五六語、シク活用形容詞一四二語である。日本現存最古の和歌集『万葉集』（七世紀後半〜八世紀後半頃）では、八六語のシク活用形容詞が用いられている。このうち、『時代別国語大辞典 上代編』（一九六七）に見出し語として収録されていない、あるいは収録されているが、品詞をシク活用と明記していないのは次の九語であった。

○あたし【他・異】他の。別個の。形容詞語幹の連体用法のようなものが大部分であり、その点「同じ」に似ている。

○ありがほし（形）ありたい。住みつづけたい。在り||ガ||欲シの意。これと同じ構成を持つものにミガホシがある。「聞きのかなしも」（万四〇八九）「着の宜

しもよ」（神楽歌）のように、名詞形Ⅱノ（対象格助詞）Ⅱ情意性形容詞という形が固定するにしたがって、ノがガに代わったものである。

○うまし【味・可美】（形ク）①うまい。味がよい。②よい。美しい。結構である。この意に用いられるときは、シク活用をした形跡がある。

○ゑまし 見出し語ではない。「ゑまはし」はほほえましく感じられる、嬉しい意。

○つきよらし【着宜】見出し語ではない。「着の宜しもよ」（神楽歌）から。

○とこめづらし【常珍】見出し語ではない。複合形容詞。

○まうらがなし 見出し語ではない。接頭語「マ」による派生形容詞。

○まかなし 見出し語ではない。接頭語「マ」による派生形容詞。

○ゆきあし【行悪】見出し語ではない。複合形容詞。

また、「軽軽い」「香ばしい」「心愛し」「騒がしい」「凄まじい」「まきらわし」の六語は、『日本国語大辞典』（二〇〇一）には上代の用例が示されているが、『時代別国語大辞典 上代編』（一九六七）にはシク活用形容詞として収録されていない。「まきらわし」は『時代別国語大辞典 上代編』（一九六七）で活用不明と記述され、「霞む意の動詞キルに動詞語尾フの接したキラフからの発生の場合には、シク活用と考えられ」と記される。他の五語は見出し語に現れない。

上代形容詞の活用の種類や、複合語を一語として扱うべきかどうかの判断に難点があるため、各資料の収録語数は多少の差異が見られるが、考察には基本影響を及ばない。上代ク活用形容詞との比較を考慮し、『時代別国語大辞典 上代編』（一九六七）に活用の種

類を明記したシク活用形容詞一四二語、ク活用形容詞一五六語を上代語としての研究対象とする。

『時代別国語大辞典 室町時代編』（一九八五～二〇〇〇）は、室町期から織豊期（安土桃山時代）に及ぶ約二百年間の言葉を取扱ったものである。収録したシク活用形容詞は四八四語である。また、『日本国語大辞典』（二〇〇一）に収録された「しい」型形容詞は八九七語である。年代の古い挙例によって、江戸時代以前に現れたものを取り出した。さらに、上代から生き残ったものを除き、合わせて四九二語は平安時代から室町時代までの八百年の間に現れたものだと考えられる。この中で、『日本国語大辞典』（二〇〇一）の最も古い挙例は平安時代に遡れるものは一四六語、鎌倉時代であるものは四五語、それ以降のものは一七八語である。残り一二三語は『日本国語大辞典』（二〇〇一）に用例がなく、具体的な出現時期が確定できなかった。語彙収集や出現時期の確定など、調査は不十分であるが、一応、室町時代シク活用形容詞を考察する際、『時代別国語大辞典 室町時代編』（一九八五～二〇〇〇）と『日本国語大辞典』（二〇〇一）から得た四九二語を研究対象とする。

ちなみに、上記の両辞書に収録されず、『邦訳日葡辞書』（一九八〇）に収録されているのは「あな浅しい」「あな囂しい」「事よりしい」「正直らしい」「すさまじい」「まほしい」「めさましい」の七語であった。

「あな」は何ごとかに感動したり驚いたりしたときに発する言葉で、「あな恥づかし、あなふしぎ、あな哀れ」など、上代から用いられた感動詞であり、「あな浅しい」「あな囂しい」もこの類である。また「正直らしい」は形容動詞語幹に接尾語「らし」が付いた

ものである。「事よりしい」は「事宜し」の音便で、「すさましい」「まほしい」「めさましい」はそれぞれ濁音形のほうが収録されている。そのため、この七語を考察の対象外にしておく。

『日本国語大辞典』に収録されている「しい」型形容詞は八九七語である。その最も古い挙例によって、上代と室町時代の研究対象と扱うべきものを除いて、残りの五二二語を近代語の研究対象とする。『大辞林』の収録語はすべて各時代の研究対象に含まれている。

三―二 用語と表記

阪倉篤義は『語構成の研究』（一九六六）で、「語根」「語幹」「接辞」などの語構成要素について言及した。また、厳密な定義を見当たらないが、動詞を派生する接尾語を考察しやすいため、語基を五種に分類した。

分解をそれ以上にすすめ得ない、単語の基體をなす最小の意義的單位であり、意義および形のうへで類似した一類の語に共通するやうな要素としての「語根」、また、語根に接尾語（ゼロの場合もあり得る）がついて、なほ自立の単語となるにいたらず、活用に際して變化しない語の基幹部をなすものとしての「語幹」、および、それに接される「語尾」あるいは「接辞」、などの語構成要素が理論的に設定されることになるのである。（『語構成の研究』p. 23-24）

まづ語基の種類としては、かりに、つぎの五つをたてる。

一 名詞

二|| 「さや」「しづ」のごとき、いはゆる語根。「たを」「きら」のごとき象徴辭
(擬聲語・擬態語)をふくむ。

三|| 「すずろ」「あきら」「たひら」「たしか」のごとき、形容動詞語幹乃至は副詞
の類。みぎの(二)に比して、そのあらはす概念はさらに明確で、獨立性がつよい。
四|| 形容詞。語基としてあらはれるのは、「いた」「ひろ」のごとき語幹部分であり、
したがって、みぎの(二)と本質的には同性格のものであらうが、形容詞語幹にな
り得る點で、それらとは概念内容に差があらうと考へて、別にたてる。

五|| 動詞

この五種の分類は、やや、便宜的なものであつて、嚴密な意味論的範疇にもとづく
ものではない。しかしながら、かうした、語基の品詞論的な區別がある程度は、そ
の概念の性格の差異にも平行し得ることを考へるならば、これによつても大勢をうか
がふことは可能であらう。(『語構成の研究』p. 130)

形容詞の語構成に関する研究では、「語基」「語根」「語幹」などの用語は必ず嚴密に
區別して用いられるわけではない。本研究は、語基を品詞論的な區別をするため、便宜的
に阪倉篤義『語構成の研究』(一九六六)が挙げた五種の語基について次のように表記す
る。

- 一の場合 「名詞」あるいは「名詞被覆形」で示す。
- 二の場合 「語根」の使用を避ける。「語基」で示す。
- 三の場合 「形容動詞語幹」あるいは「副詞」で示す。

四の場合 「形容詞語幹」で示す。

五の場合 「動詞未然形（被覆形）」あるいは「動詞連用形」で示す。

なお、品詞性が判明できない語構成要素については、かりに「語基」と表記する。「語根」は、「分解をそれ以上にすすめ得ない、単語の基体をなす最小の意義的単位」と厳密に定義するが、その判断は難しい。本研究は、シク活用形容詞の語構成の特徴と歴史的変化を傾向として把握することが目的であるので、「最小の意義的単位」まで解明する必要はなく、「語根」の使用を避ける。「語幹」は「活用の際して変化しない語の基幹部」で、ク活用形容詞の語幹は当然接尾語を除いた部分である。シク活用形容詞の「し」については、従来語幹の一部分であると接尾語「し」であるとの二つの考えがあり、後者が妥当だと思われる。ただし、形容詞語構成を分析する際、便宜的に「し」を除いた部分を語幹として扱うことにする。

語構成から日本語を分類する場合、単純語と合成語の二分類法、あるいは後者を派生語と複合語に分ける三分類法が一般的である。これに従い、形容詞は大きく「単純形容詞」と「合成形容詞」の二分類、あるいは「単純形容詞」、「派生形容詞」と「複合形容詞」の三分類できると思われる。この中で、派生形容詞は接辞による派生に限られ、動詞からの派生は含めない。また、「豊語」は「特殊な複合法によるもの」であるため、豊語形容詞（重複形容詞）を複合形容詞に分類する。阪倉篤義（一九六六）、蜂矢真郷（一九九八）、村田菜穂子（二〇〇五）が提示した語構成の分析方法を参考にして、品詞別に形容詞語構成の構造を次のように分類した。

(1) 単純形容詞

主に接辞「し」（「はし」などの肥大形を含む）の添加によるもの。
「名詞＋し」「語基＋し」「副詞＋し」「動詞未然形（被覆形）＋し（はし）」「形容詞語幹＋し」「形容動詞語幹＋し」など
「し」以外の接辞（接頭語・接尾語）の添加によるもの。

(2) 派生形容詞

接頭語による派生形容詞の場合

「もの＋形容詞」「あな＋形容詞」「こ＋形容詞」など

接尾語による派生形容詞の場合

「名詞＋ぐまし」「動詞連用形＋がまし」「形容動詞語幹＋らし」など
実質的意味を持つ単語と形容詞を合わせたもの。なお、疊語形容詞を特
殊な複合形容詞として扱う。

(3) 複合形容詞

「前項（実質的意味を持つ）＋形容詞」の場合

「名詞＋形容詞」「語基＋形容詞」「動詞連用形＋形容詞」「副詞＋形

容詞」「形容詞語幹＋形容詞」「形容動詞語幹＋形容詞」

疊語形容詞（重複形容詞）の場合

「名詞の重複＋し」「語基の重複＋し」「形容詞語幹の重複＋し」「動
詞連用形の重複＋し」「形容動詞語幹の重複＋し」「動詞未然形（被覆形）
の重複＋し」「副詞の重複＋し」

先行研究を踏まえて、上代、室町時代、近代の三つの時期に分け、より全面的、体系的に考察を行い、シク活用形容詞の全容と歴史の変遷を把握することを目指す。

第一章 上代語シク活用形容詞について

第一節 上代語形容詞の概観

日本語の歴史は、五世紀から七世紀にかけてはじまるが、それから奈良時代の終わりまでを「上代」と呼ぶこととする。文献上でたどりうる最古の時代である。その時代に続くのが平安時代であり、これを「中古」と呼ぶこととする。

形容詞は、性質・情態、感覚・感情などを表し、独自の活用を有する品詞である。その種類にはク活用とシク活用があり、シク活用は、ク活用と比べて、その発生・発達が遅れたと見られている。この点について、『時代別国語大辞典 上代編』（一九六七）の序文には、語幹の用法を分類した上で、次のように述べられている。

これらの用法のうち、名詞・副詞・形容詞として働く語としての位置には、シク活用は現れない。この点、シク活用の方が独立性に乏しい。ク・シク両活用語が現れる用法の際は、シク活用はシを伴った形でク活用語幹と同じ用法に立っている。この点から、シク活用のシは、実は語幹部分に属するものとみななければならない。語幹を重ねた畳語によってできる形容詞、動詞から派生する形容詞（悔ヤシ・愛ヅラシ・恋ホシ・サブシ・ワビシ・恨メシなど）がシク活用をする点や、上記の語幹用法、意義の差、次代にはシク活用が増加するなど、シク活用は二次的なものであることを推察させる根拠は、いくつもある。

このように、ク活用とシク活用の差は形容詞という品詞、および形容詞型活用の成立と不可分の関係にある。中古以降の形容詞についても意味的な側面から考察すべき点はあるものの、形容詞の成立をめぐっては上代語における問題として扱って取り敢えずは問題なからう。そこで、本章では、形容詞の成立、語構成、意味について、ク活用形容詞とシク活用形容詞との違いをめぐって考察したいと思う。

ちなみに、意味的には、ク活用をする語は情態的な属性概念を表すことが多く、シク活用は情動的な意味を含む傾向があることがほとんどに指摘されている。「ク活用に属する語は、状態的な属性概念をあらわし、シク活用に属するものは、情動的な面をあらわすのが、大部分であるとす」という傾向については、山本俊英「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」（一九五五）に明らかにされている。このような、意味と活用形式の対応関係を考えると、形容詞を分析する際、その両者を切り離して扱うことは適当でないと言える。

第二節 上代語形容詞の語構成

二―一 上代語ク活用形容詞の語構成

主に『時代別国語大辞典 上代編』（一九六七）にシク活用形容詞として収録されている一四二語を研究対象として、一五六語のク活用形容詞と比較しながら、上代語におけるシク活用形容詞の語構成と語幹の性質について考察する。『時代別国語大辞典 上代編』（一九六七）に収録されているク活用形容詞は一五六語である。その語構成から見ると、次のようである。

1 接辞「し」の添加によるもの

① 語基に「し」がついたもの

ク活用をするものは、外形的・状态的属性を表す語基にシがついたものが多い。

例 熱・厚・青・薄・遅・多・重・堅・軽・狭・寒・茂・白・近・小・強・遠・長・柔・

早・広・太・細・短・脆・安・緩・弱・若 など

また、次の語基は形容詞のほかに、動詞にも用いられた。

例 あかし(あかす・あかる) いたし(いたむ) いぶせし(いぶせむ) うとし(うと

ぶ) かしこし(かしこむ) かたし(かたむ) きよし(きよむ) くさし(くさ

る) しげし(しげる) せばし(せむ・せまる) たしなし(たしなむ) たふとし

(たふとぶ・たふとむ) たゆし(たゆむ) なほし(なほす) にくし(にくむ)

ねたし(ねたむ) はやし(はやる) ひろし(ひろる・ひろむ・ひろぐ) めぐし

(めぐむ) やすし(やすむ) ゆるし(ゆるふ) よわし(よわる) など

ちなみに、同源の動詞を持つク活用形容詞二語のうち、情意的意味を持つものは八語

あった(下線部)。

② 動詞から派生したもの

例 あかし(あく) あさし(あす) あらし(ある) くらし(くる) ころし(くる)

ふかし(ふく) ふるし(ふる)

ク活用形容詞の中で、動詞から派生したものは極めて少ない。

2 「し」以外の接辞の添加によるもの

① 接頭語「か・さ・た」の添加によるもの

例 か|ぐるし か|やすし さ|どほし さ|まねし た|どほし た|やすし など

② 接尾語「なし」の添加によるもの

例 あぢきなし(あづきなし) いらなし うつなし うやなし(ゐやなし) うらもと
なし おぎろなし ころなし ことなし さがなし すべなし つつがなし つねな
し みつなし をめなし など

このうち、「いらなし」と「おぎろなし」の「なし」は「無」と理解することはできず、他の語と区別する。「いらなし」のイラは、尖锐なるものをいう語かと推測できるが、確定できない。形容詞「無し」と関係づけることができるものと、単純に否定の意とは考えにくいものがあるが、ここで区別せずに接尾語として扱う。

③ 接尾語「けし」の添加によるもの

例 あからけし あきらけし あざらけし あたたけし いささけし けやけし さやけ
し しづけし すむやけし たしけし たひらけし つばひらけし やすらけし ゆた
けし など

「けし」がついたものは普通「カ」を伴うことができる。たとえば、「あきらか・あざ
らか・いささか・けやか・さやか・しづか・すみやか・たしか・やすらか・ゆたか」など
である。

① 3 単語と単語とを合わせたもの
名詞＋形容詞

- 例 うらわかし おとだかし【音高】 かほよし【端正】 くさぶかし【草深】 ころ
 いたし【情哀】 こだかし【木高】 こちたし【言痛】 こととし【言急】
 ② 動詞連用形＋形容詞 ききよし【聞吉】 こひたし【恋痛】
 ③ 語基＋形容詞 とほながし【遠長】

二―二 上代語シク活用形容詞の語構成

『時代別国語大辞典 上代編』に収録されているシク活用形容詞は一四二語である。その語構成から見ると、次のようなのである。

1 接辞「し」の添加によるもの

① 語基に「し」がついたもの

周知のように、ク活用形容詞と比べて、シク活用をするものには、情意を表す語基が多い。

例 愁あぢし・惜あぢらし・勞いたはし・嬉うれし・悲かなし・苦くるし・不樂さぶし・親しとし・快たぐまし・樂たのし・愛あはし・幸あがし など

また、形容詞から動詞を派生するもの、或は動詞と同源であるものも少なくない。

例 あからし（あからしむ） あたらし（あたらしむ） あやし（あやしむ・あやしむ）
 いそし（いそふ） いたはし（いたはる） いふかし（いふかる） うつし（うつす）
 うれし（うれしむ） うれしむ・うれしむ） おほほし（おほとる） かなし（かなしむ・かなしむ）
 くし（くしむ） くるし（くるしむ・くるしむ） さだし（さだむ）
 さぶし（さぶ） すずし（すずむ） たくまし（たくましむ） はげし（はげむ）
 ほし（ほる） やはし（やはす） をし（をしむ） など

ちなみに、形容詞が動詞を派生する場合、マ行四段活用は完全なものが少なく、「あらかしぶ・あやしぶ・うれしぶ」のようなバ行上二段活用が多い。

② 動詞から派生したもの

例 あさまし(あさむ) いきどほろし(いきどほる) いたぶらし(いたぶる) いくし(いつく) いとはし(いとふ) いとほし(いとふ) うたがはし(うたがふ) うらごひし(うらごふ) うらごほし(うらごふ) うらめし(うらむ) うらやまし(うらやむ) うるはし(うるふ) おもほし(おもふ) およし(おゆ) かからはし(かからふ) かたまし(かたむ) くすばし(くしぶ) くやし(くゆ) こひし(こふ) こほし(こふ) さびし(さぶ) したゑまし(したゑむ) たたはし(たたふ) たのもし(たのむ) つからし(つかる) なぐし(なぐ) なつかし(なつく) なみだぐまし(なみだぐむ) なやまし(なやむ) ねがはし(ねがふ) はづかし(はづ) むつまし(むつむ) めだし(めづ) めづらし(めづ) やさし(やす) ゆるほし(ゆるふ) よろこぼし(よろこぶ) よらし(よる) よろし(よる) わびし(わぶ) ゑまし(ゑむ) ゑまはし(ゑまふ) など

シク活用形容詞の中で、動詞から派生したものが圧倒的に多い。動詞から派生したものはほとんどシク活用する。

③ 疊語形(語基を重ねた形)に「し」がついたもの

例 いくつし うやうやし おおこし おどろおどろし おほほし きらきらし くだし くまくまし ござし すがすがし(そがそがし) たぎたぎし たづたづし とほとほし ながながし ひねひねし ゆゆし わきわきし をさをさし をし など

これはシク活用形容詞特有の語構成形式である。疊語形に「し」がついたもの、すなわち疊語形容詞（重複形容詞）は必ずシク活用する。

2 「し」以外の接辞の添加によるもの
① 接頭語の添加によるもの ものかなし ものこひし
② 接尾語の添加によるもの みだりかはし
「みだりがはし」の「がはし」は接尾語「がはし」が添加したもので、中古には「らうがはし」なども見られる。このように、上代語シク活用形容詞の中で、「し」以外の接辞の添加によるもの、すなわち派生形容詞の数は極めて少ない。

3 単語と単語とを合わせたもの

① 名詞＋形容詞

例 うらがなし うらぐはし うろごひし うらごほし かぐはし ころがなし ころぐるし ころこひし なぐはし はなぐはし まぐはし
② 動詞連用形＋形容詞 おもひがなし おもひぐるし きほし みほし みがほし
③ 語基＋形容詞 うただぬし うただのし
「うら・おもひ・ころ・くはし・ほし」など、複合に用いる語彙は限られている。

二―三 上代語ク活用とシク活用形容詞の語構成比較

『時代別国語大辞典 上代編』（一九六七）に収録されているク活用形容詞一五六語の

語構成（表1参照）と、シク活用形容詞一四二語の語構成（表2参照）を比較する。記述しやしやすいように、分類を試みた。「単語と単語とを合わせたもの」は複合形容詞に分類し、「し」以外の接辞の添加によるもの』は派生形容詞に分類するのは問題がないが、『接辞「し」の添加によるもの』を単純形容詞に分類する場合、『疊語形に「し」がついたもの』すなわち疊語形容詞はそれに当たるものとはしがたい。そもそも、形容詞そのものも厳密に言えば、接辞「し」の添加による派生語であるため、単純、合成、複合の三分類には対応しにくいとも言える。そこで、疊語の特殊な複合法である性質を考慮し、語幹の構成を考察しやすいように、便宜的に疊語形容詞を特殊な複合形容詞として扱うことにする。次に、単純形容詞、派生形容詞、複合形容詞の分類から、ク活用形容詞とシク活用形容詞の語構成を比較する（表3参照）。

1 単純形容詞の違い

語基の情意的意味の違いは別として、上代語においては、単純形容詞の割合はク活用形容詞が五割、シク活用形容詞が七割に達している。その構造を見ると、ク活用形容詞の場合、「語基＋し」と「動詞未然形（被覆形）＋し」の二つの形式しか見られない。そして、単純形容詞七四語のうち六七語は「語基＋し」である。シク活用形容詞の場合、「語基＋し」と「動詞未然形（被覆形）＋し」のほか、「名詞＋し」と「副詞＋し」の構造も見られた。シク活用単純形容詞九九語のうち、「語基＋し」は約五割の五一語で、「動詞未然形（被覆形）＋し（はし）」は四一語もあつた。

概して言えば、単純形容詞の語構成から見ると、ク活用形容詞とシク活用形容詞の違いは、ク活用形容詞がほとんど「語基＋し」の構造をとるのに対して、シク活用形容詞はよ

り豊かな構造が見られ、特に「動詞未然形（被覆形）＋し」のほとんどはシク活用するこ
とである。

形容詞は動詞と同源あるいは派生の対応関係にある。動詞と同源の形容詞は、ク活用二
二語、シク活用二〇語で、それほど差はない。なお、ク活用二二語のうち八語は情意的意
味を有している。また、動詞から派生した形容詞はシク活用するのが圧倒的に多く、動詞
から派生したシク活用形容詞が四一語もあるのに対して、ク活用するのはわずか七語あり、
極めて少ない。したがって、全体から見ると、動詞との対応関係の中で、情意的意味要素
を持つ語はより多く見られると言える。

2 派生形容詞の違い

ク活用形容詞は、接頭語と接尾語による派生形容詞は五〇語もあった。これに対して、
シク活用形容詞は接辞による派生形容詞は極めて少なく、「ものかなし」「ものこひし」
「なみだぐまし」「みだりかはし」のわずか四語であった。また、接頭語「もの」は、接
辞ではなく、名詞と考えてもよい。「涙ぐまし」は動詞から派生した形容詞とも考えられ
る。ほかに、『万葉集索引』（二〇〇三）で挙げた考察対象外の「まかなし」「まうらが
なし」は接頭語「ま」による派生形容詞であるが、『時代別国語大辞典 上代編』（一九
六七）では一語として認められていない。ク活用形容詞は「か」「さ」「た」などの接頭
語、特に優れた生産力を持つ接尾語「なし」「けし」によく結合するのに対して、シク活
用形容詞と接辞との結合は未発達の状態であったようである。

3 複合形容詞の違い

複合形容詞からみて、ク活用形容詞は三二語、シク活用形容詞は一八語（疊語形容詞を除く）あり、両方とも上代からよく用いられる。ただ、ク活用形容詞の場合、より多くの語彙の複合が見られるのに対して、シク活用形容詞の場合、複合はいくつかの語彙に限られている。

具体的に言うと、「名詞＋形容詞」「語基＋形容詞」「形容詞語幹＋形容詞」「動詞連用形＋形容詞」という構造がある中で、「形容詞語幹＋形容詞」だけは、シク活用には見られず、ク活用には「とほしろし」「とほながし」の二語が見られた。

また、シク活用形容詞一四二語の中で、疊語形容詞は二〇語もあった。「ながながし」「とほとほし」の「形容詞語幹の重複＋し」の場合、ク活用形容詞「ながし」「とほし」と意味の主観性の違いについて注目されることが多いが、実は「名詞の重複形＋し」や、語基の品詞性が断定できない「語基の重複＋し」は多く存在している。「動詞連用形の重複＋し」も「わきわきし」の一語があった。ちなみに、語幹は複合法による疊語のため、便宜的に特殊な複合形容詞として扱うが、疊語形容詞の場合、「前項＋形容詞」の構造は必ずしも成立するわけではない。

本節は、上代語ク活用形容詞とシク活用形容詞の語構成を考察し、また、単純形容詞、派生形容詞、複合形容詞に分けて両者の違いを比較してみた。上代語形容詞は、語基の意味が重視され、単純形容詞の割合が大きい。またシク活用形容詞は、動詞、名詞、副詞から転ずるものが多く、疊語形容詞があり、派生形容詞が未発達であるなどの点で、確かにク活用形容詞と大きく異なり、その発生・発達が遅れているように見える。

第三節 上代語形容詞の情意性

山本俊英（一九五五）が指摘した「ク活用Ⅱ状態的意味、シク活用Ⅱ情意の意味」という、活用と情意性との相関はおおかたの傾向として認められるが、「憂し・憎し」（ク活用Ⅱ感情形容詞）、「現し・険し」（シク活用Ⅱ属性形容詞）などの例外もかなりあって、ク活用とシク活用の意味の違いは必ずしも厳格ではない。しかし、本節では、山本俊英（一九五五）の「ク活用Ⅱ状態的意味、シク活用Ⅱ情意の意味」という考えに基本的に基づき、意味を具体的に分析し、ク活用形容詞とシク活用形容詞の情意性について考察してみることにする。

三―一 ク活用形容詞の情意性

一般的に状態を表すとされるク活用形容詞の中で、情意の意味を持つものも少なくない。

例 あつし【熱】 いたし【痛】 いぶせし【鬱】 いらなし【楚】 うし【厭】 うし
ろかるし【後軽】 うとし【疎】 うまし【味】 うらもとなし うらわかし うれた
し【慨】 おほつかなし【疎】 かしこし【恐】 かそけし かたじけなし【辱・羞】 ここ
ろいたし【情哀】 こころぐし【無心】 こころよし【快】 こひたし
【恋痛】 さやけし【清】 すかなし【憎】 ねたし【嫌】 ふとし【太】
めぐし【愍】 やすし【安】 など

この中で、「いたし・うし・にくし」のような完全に情意の意味をもつものもあれば、状態の意味と情意の意味の両面をもつ語もある。後者には「あつし・うとし・ふとし・やすし」などが挙げられる。

○あつし【熱】 あつい。気温や、ものの温度や、心・思いなどについていう。

*「千思千腸熱」（遊仙窟）

○うとし【疎】 疎遠だ。親しくない。おろそかだ。

*「汝若以国神為妻、吾猶謂汝有疏心。」（神代記下）

○ふとし【太】 ふとい。しっかりしている。物に動じない。物の形状に関して用いる場合に精神の状態について用いることもある。

かに精神の状態について用いることもある。

*「真木柱太心はありしかどこの吾が心しづめかねつも」（万一九〇）

○やすし【安】 安らかである。おだやかである。平穩である。心の状態についていうこと

とが多い。クルシの対。

*「さ寝る夜は多くあれども物思はず夜須久寝る夜はさねなきものを」（万三七六〇）

普通、各語の持つ状態性と情意性の比重はある程度決まっている。たとえば、『時代別

国語大辞典 上代編』（一九六七）の記述から見ると、「やすし」は心の状態についてい

うことが多い。「きよし」と比べて、「さやけし」は情意の意味が強く、また、「きよ

し」が対象の汚れない状態をいうことが多いのに対して、「さやけし」はその対象から

受けた主体の情意・感覚についていうことが多い。

*「大滝を過ぎて夏実に沿ほりみて淨き河瀬を見るが明けさ」（万一七三七）

以上、ク活用形容詞の中にも、情意的意味を持つものが存在している。ちなみに、両方

の活用をする語もある。『時代別国字大辞典 上代編』（一九六七）には、ク活用形容詞

「うまし」は「よい。美しい。結構である」の意に用いられるとき、「シク活用をした形

跡がある」と記述されている。また、「『うまし』が複合名詞の前項になるについて、

『ウマ酒・ウマ国』のような二通りの形式をもつことから、上代にもク活用もシク活用も存したと考えられる。ク活用形容詞は状態的意義を、シク活用形容詞は情意的意義をもつ傾向があるとの見方に従えば、『ウマ寝・ウマ人』など『ウマク』の複合語にあらわれる意味も含めて、ウマシ（ク活用）は対象自身に備わる性質、ウマシ（シク活用）は対象に対する主観的な価値評価というように、この活用の対立を理解することができる」と述べられている。調査した範囲で、上代において、両方の活用をする語は「うまし」だけであつたが、中世になると、両活用形容詞が多く現れる（後述参照）。

三―二 シク活用形容詞の情意性

ク活用形容詞の意味には状態性が強く、シク活用形容詞の意味には情意性が強いという傾向に、かなりの例外が伴うことも一つの事実である。他方、状態的意味を持つシク活用形容詞も少なくなき、次のように六二語を挙げることができる。

例 あし【悪】 あらたし【新】 いかし【厳】 いさをし【功 勤】 いすかし【傲
 恨】 いそし【勤】 いつくし【厳】 いつつし【現】 うやうやし【恭】
 おこし【沈毅】 おだひし【穩】 おどろおどろし おなじ（おやじ）【同】 およ
 し かからはし かぐはし かたまし きらきらし くだくだし くはし くまくまし
 けがらはし けし【異】 こきだし こごし さかし【賢】 さがし【陰】 さだし
 【貞】 しけし【穢】 たぎたぎし ただし【正】 たたはし【偉】 ときじ【不時】
 ながながし【長永】 ながし【和】 ながはし【名細】 なまし【生】 にたし【不
 し にひし【新】 はげし【烈】 はなぐはし【花細】 はなはだし【甚】 ひさし

【久】 ひとし 【等】 ひねひねし ほかし 【他】 まさし 【正】 まだし まづし
 【貧】 みだりかはし むなし 【空】 ゆるほし 【縦】 よろし(よらし) めだし ま
 ぐはし わきわきし 【分明】 われじ をさをさし 【幹了】 ををし 【雄】 など
 このうち、下線を引いたものをグループ(1)、その他の語をグループ(2)とすると、
 グループ(1)は、シク活用形容詞でありながら、状態の意味の意味だけを有する、情意
 とはほぼ無関係のものと見られる。グループ(2)は、価値判断や、好悪、感覚などの情
 意の意味合いを帯びているものの、あくまでも事物そのものの属性や特質を表すので、状
 態の意味が強いものである。

また、語構成から考えると、前節の論述でも少し触れたように、状態の意味を持つシク
 活用形容詞には、「ひさ・むな・なま」などのような語幹の独立性が高いものが多い。グ
 ループ(1)の大部分はこの類である。また、形容詞の語幹などを重ねたものや、評価的
 意味のある「くはし」がついたものも、多く状態の意味を有している。これらの語をグル
 ープ(1)(2)に分類させるには、判断しがたいところがある。意味の上では、「おど
 ろおどろし・ながながし・くだくだし・まぐはし」などは情意的意味がより強く、「きら
 きらし・くまくまし・わきわきし・なぐはし」などは状態の意味がより強いとも言える。
 次に、情意的意味の強いシク活用形容詞(七九語)をあげる。

例 あからし 【懇】 あさまし あたらし 【惜】 あやし いきづかし(いきづくし)
 【気衝】 いきどほろし いたはし 【労】 いたぶらし いとほし いとはし 【厭】
 いとほし 【労】 いふかし 【不審】 いやし 【賤】 うたがはし 【疑】 うただのし
 (うただぬし) うつくし 【愛】 うむがし うらがなし うらぐはし うらごひし

(うらごほし) うらめし【恨】 うらやまし【妬忌】 うるはし【愛】 うれし
 【歡】 おほほし【鬱】 おむがし【欣感】 おもひがなし おもひぐるし おもほし
 かなし【悲】 きほし【欲服】 くし(くすし)【奇】 くすばし くふし くやし
 【悔】 くるし【苦】 こころがなし【情悲】 こころぐるし【情苦】 こころこひし
 【心恋】 こひし(こほし)【恋】 さびし さぶし【不樂】 したし【親】 したゑ
 まし【下咲】 しりひかし すがし すがすがし すがす【冷】 たくまし【快】 た
 づたづし たのし【樂】 たのもし【頼】 つからし【疲】 ともし【乏】 なつかし
 なみだぐまし なやまし ねがはし【願】 はし【愛】 はづかし【恥】 ほし【欲】
 みがほし(みほし)【欲見】 むつまし【親】 めづらし ものがなし【物悲】 もの
 こひし【物恋】 やさし やはし【飢】 ゆゆし【齋忌】 よろこぼし【悦】 わびし
 ゑまはし をし【惜】

山本俊英(一九五五)が示す、奈良時代のシク活用形容詞の大部分はこの類の語である。
 感覚を表す「すずし【冷】・やはし【飢】・つからし【疲】」の三語以外は、情意形容詞
 あるいは感情形容詞と呼ぶことができる。先に挙げた「状態的意味をもつシク活用形容
 詞」と異なり、この類の語の多くは時代とともに変化して、「くしい」の形で現代語にお
 いても形容詞としてその姿が見られる。情意的意味の強いシク活用形容詞をみると、対応
 の動詞型があるのが大部分である。

右のうち、線を引いていないものをグループ(3)と呼び、線を引いたものをグループ
 (4)とすると、グループ(4)は、より純粹に心の動きや感情状態を表している。その
 感情に何となく陥った状態を表し、特にその感情を引き起こす誘因や対象がなくても成り

立つ。これらの語には、「こころ・うら・おもひ・もの」などの複合語を除いて、多くは同源の動詞型が見られる。語基は情意の意味を表すものが多い。

これに対して、グループ(3)は動詞から派生したものが多く、主観的評価や特定対象に対する感情を表す。なお、情意性との具体的な関係には多様性が見られる。たとえば、「あさまし・うたがはし・たのもし」などは客観性が強く、心の感情状態に用いることはあまりない。「いとほし・はづかし・あやし」などは感情状態と主観的評価の両面に用いられる。「いとほし」を例として、自己に関して、苦痛だという意になり、他に比重があるときは、かわいそうだ、気の毒だの意になる。感情にかかわる形容詞の意味の多様性は非常に興味深い。

* 「遠つあふみ引^{イナ}細^ナ江^ナのみをつくし我を頼めて安^{ヤス}佐^サ麻^マ之ものを」(万三四二九)

* 「汝守志待命、徒過盛年、是甚^イ愛^イ悲^ヒ」(記雄略)

また、上代語シク活用形容詞を考察するとき、心理状態以外の感覚を表す語は「すずし【冷】・やはし【飢】・つからし【疲】」の三語が見られた。「さむし【寒】・いたし【痛】・かゆし【癢】」などの同じく感覚を表す形容詞はク活用である。ここまで見てきたように、状態性、情意性と活用の対応関係は傾向として認められるもの、すべてのシク活用形容詞に当てはまるわけではない。上代語シク活用形容詞の意味特徴を把握するには、さらに具体的な分析を行う必要がある。

第四節 シク活用形容詞語幹の性質

これまで、ク活用形容詞とシク活用形容詞の語構成を比較し、また活用と情意性との関

連性から考察し、シク活用形容詞を情意性の有無、強弱によって分類を試みた。シク活用形容詞の中で、状態的意味を持つものも存在している。また、形容詞の持つ情意性も語によってさまざまである。上代において、どの種類の語彙がシク活用形容詞になりやすいのか、シク活用形容詞語幹の性質について、さらに詳しく考察する。

四―一 単純形式の語幹の性質

1 名詞

例 いさをし ときじ ほかし われじ

○いさをし【傑】（名）勇ましい男。氣力のすぐれた男。勇^{イサ}||男^ヲ。「天穗日命是神之傑^{いさを}也^{ナリ}」（神代紀下）

○いさをし【功・勤】①勇ましく雄々しい。「伊佐袁志久^い正しき道のおむかしさとてぞわが名も君は賜ひし」（日本紀竟宴歌）②勤勉である。「今より往前も伊佐袁志久^い仕へ奉らば益々^{マス}治め賜ふものぞと宣ふ大命」（後紀延暦一年）③てがらがある。「天皇厚賞^ニ野見宿禰之功^キ」（垂仁紀三二年）

○ほか【外】（名）外側。ある境界の外側。

○ほかし【他】普通と異なる。外^{ホカ}を形容詞化したもの。「他形者 倭言保可^ま之伎可^か多知^た、又異形」（華嚴音義私記）

○とき【時・期】（名）②機会。それにふさわしい時期。それらしい季節。複合語中のトキや、トキナラズ・トキトナクなどの慣用句中のトキはこの意のものが多し。

○ときじ【不時・非時】時^{トキ}が形容詞語尾ジをとったもの。（ト）時を選ばない。絶えまない。

「山越しの風を時^{とき}自^じみ寝る夜おちず家なる妹をかけて偲^いひつ」(万六)(五)
時ならず。その時でない。時節はずれである。「正月立つ春の初に斯くしつ

つあひし笑みてば等^と枳^き自家^{じけ}めやも」(万四一三七)

○われ【吾・我】(代名)一人称。ワに同じ。

○われじ わがことであるかのようにだ。反射指示の代名詞ワレに、形容詞構成の語尾ジが

接したものの。「立ち別れ君がいまさばしき島の人は和^わ礼^れ自^じ久^く斎^{さい}ひて待たむ」
(万四二八〇)

名詞から形容詞を形成する場合、意味の成立は二通りあると考えられる。一つは、名詞の備えている性質を強調的に抽出したもので、その名詞は象徴的な存在である。もう一つは、名詞が表す概念と類似するか異なるかの判断からきたもので、その名詞は標準的な存在である。前者(抽出)の場合、評価的情意性を帯びる傾向が見られるに對して、後者(類似)の場合、状態性の形容が多いように思われる。

「じ」は、体言に接して、「くらしいさま、くのようなさま」の意の形容詞を作る語尾である。山崎馨(一九八四)が挙げた名詞系形容詞のD群として、「名詞+じ」の形容詞は十数語挙げられている。この種類の語と「じ」の意味について、山崎馨(一九八四)は次のように述べている。

この一群の語は、紛れもなく名詞が濁音語尾ジを伴ったシク活用の形容詞であるが、形容詞としては十分な発達、継続を見せないままに衰亡して、平安時代以降にはほとんどその痕跡を残さなかった。(中略)その特異な濁音語尾ジは、助動詞「じ」「ま

しじ」などの「じ」と本来は同一のものであったと考えられ、否定的状態を指定する接辞として「それではないが、そのようだ」という意味を表わしている。

(『研究資料日本文法』pp. 9-10)

2 副詞

例 こきだし はなはだし まだし

○こきだ (副) 多く。沢山。程度のはなはだしさを意味する用い方もあったか。「後妻ウサメが

肴ナヒ乞はさば 檜イナ実ミの多オホけくを許ユ紀キ陀ダひヒゑエね」(記神武)

○こきだし 重大である。きわめて大切である。「許ユ貴キ太タ斯ス伎キおほき天テンの下の事をやたや

すく行ユクなはむ」(七詔)

○はなはだ【甚・太】(副) はなはだ。非常に。

○はなはだし【甚】はなはだしい。極度に異常だ。ハナハダからの派生。「寒之雷雨

已ハ甚ハ、從シ駕ハ者ハ衣ハ裳ハ濕ハ以ハ不ハ堪ハ寒」(天武紀元年)

○まだ 『時代別国語大辞典 上代編』(一九六七)の見出し語に見当たらない。

○まだし 時節がまだそこまで至らない。時期尚早である。「わがやどの植木橘花に散る

時トキを麻アサ大オホ之ノみ来キ鳴ナかなくそこは怨ウラミみず」(万四二〇七)

数量、程度、時間を表す副詞はシク活用形容詞の語幹に現れた。『時代別国語大辞典

上代編』(一九六七)に収録されていないが、ほかに「いまだし(未)」「ほとほとし

(殆・幾)」「もあつたようである。また、「まだし」について、『時代別国語大辞典 上

代編』(一九六七)で「ク活用のマダシもあつたようにみえるが、連体形に相当するかと

思われる形しか見られず、多くはそれも体言的に用いられて、形容詞と認めてよいものであったかどうかは疑わしい」と記述されている。実は、副詞からきた形容詞の多くは、シク活用形容詞には定着せず、本来の副詞に戻ってしまった。また、中世語においてク活用とシク活用の両活用がある形容詞に「はなはだし」「うてたし」がある。意味から見ると、形容詞化したと言っても、基本的には副詞とほぼ同じ意味を表す。形式の上だけは形容詞的に整えられる必要があったため、副詞の語幹となったもので、「シク活用」となることが絶対的に必要な条件ではなかったように思われる。

3 動詞

① 心的状態や心理活動を表す動詞

例 あさまし いきどほろし いつくし いとはし いとほし うらめし うらやまし

くやし こひし こほし さびし したゑまし ながし なつかし なやまし はづか

し むつまし めづらし めだし よろこぼし わびし

○あさむ 『時代別国語大辞典 上代編』（一九六七）の見出し語に見当たらない。

○あさまし 未詳。浅マシで、冷淡・意外だ、などの意か。「遠づあふみ引佐細江のみを

つくし我を頼めて安佐麻之ものを」（万三四二九）

○いきどほる【懐惚】（動四）心中に不満や憤懣がふすぶる。心が晴れない。「伊伎騰

保流心のうちを思ひ延べ」（万四一五四）

○いきどほろし 心が晴れない。憂鬱である。「淡海海瀬田の渡りに潜く鳥目にし見え

ねば異枳廻倍呂之も」（神功紀元年）

- いつく【齋】（動四）①けがれを忌み、清浄に祭り仕える。「吾者伊都岐奉」（記神代）②大切にする。愛護する。「さぶる子が伊都伎殿に」（万四一〇）
- いつくし【巖】巖然としている。威厳がある。「そらみつ倭の国は皇神の伊都久志吉国」（万八九四）
- いとふ【厭】（動四）厭う。嫌う。忌まわしく思う。「向ひ居て一日も落ちず見しかども伊等波ぬ妹を月渡るまで」（万三七五六）
- いとはし【厭】厭わしい。いやに思う。「生死の二つの海を厭み潮干の山を偲ひつるかも」（万三八四九）
- いとほし 苦痛・煩悶などにたえられない、つらくてたまらない気持をあらわす。イトフから派生した形容詞。「朕が劣なきに依りてし、かく言ふらしと念ほし召せば愧しみ伊等保自みなも念ほす」（二七詔）
- うらむ【怨・恨】（動上二）うらむ。不満を持ち憎く思う。心が活用した語であろう。「逢はずとも吾は怨じ」（万二六二九）
- うらめし【恨・恹】恨めしい。うらみに思われる。残念である。「宇良売之久君はもあるか」（万四四九六）
- うらやむ【嫉妬】（動四）そねむ。にたむ。「有二嫉妬（ウラヤミ）人、讒二天皇一奏」（靈異記中一話）
- うらやまし【妬忌】ねたましい。「時兄妬忌（于良ヤマシ）殺レ吾取レ銀」（靈異記上一二話）
- くゆ【悔】（動上二）後悔する。残念がる。「君が久由べき心は持たじ」（万三三六）

五)

○くやし【悔】残念だ。心残りだ。くやしい。「わが心しぞいや愚アホにして今ぞ久ク夜ヤ斯シ岐キ」
(記応神)

○こふ【恋】(動上二) 思い慕う。眼前にないものに心惹かれることをいう。特に異性を
思う場合に用いられることが多く、通常、格助詞ニに導かれる文節を受ける。

「後れたる我アや悲アしき旅ツに行く君キかも孤コ悲ヒむ」(万四〇〇八)

○こひし【恋】こいしい。慕わしい。コホシとも。「今のごと古コ非ヒ之久ク君キが思オモえば」(万
三九二八)

○こほし こいしい。心惹かれる。「君が目の姑ハ裏マ之シ枳キからに泊トて居イてかくや恋コイひむも
君が目を欲ホシり」(斉明紀七年)

○さぶ(動上二) ある状態が勢いの赴ツくままに、とめどもなくひたむきに進むことをいう。

①感情が荒れずさんでいく。「まそ鏡見あかぬ君キミに後オれてや朝夕アサユに左サ備ビつつ居イら
む」(万五七二) ②静かに奥ゆかしく振舞う。「彼妻カノメ着キニ紅ベニ欄ラン染シ裳カ一ヒト而ニ窈ウツクシ窕カ

(佐備)裳欄引逝也」(靈異記上二話)

○さびし サブシの転か。「遠トき山ヤマ関セキも越ワえ来キぬ今イマ更シに逢アふべきよしの無ムきが補ホ

佐夫サウ之シ佐サ、一ヒト云イハ、左サ必カナラ之シ佐サ」(万三七三四)

○したゑむ(動四) 心のうちに喜びが満ち溢れること。「忍ト咲タ」(遊仙窟真福寺本)

○したゑまし【下咲】心中に喜びが溢れるさま。「明石瀉潮千の道を明日よりは下シ咲タ異マむ
家近イカづけば」(万九四一)

○なぐ(動上二) ①心や恋が静まる。おさまる。やわらぐ。穏やかになる。「あひ見てば

しましく恋は奈木むかと思へどいよよ」(万七五三) ②海が穏やかに静まる。
「海つ路の名木なむ時も渡らなむかく立つ波に船出すべしや」(万三九八五)

○なぐし【和】穏やかである。平穏である。和グからの派生か。「復至ニ竹野郡船木里奈具村一、即謂ニ村人等一云、此処我心成ニ奈具志久一古事、平善者云ニ奈具志一、乃留ニ居此村一」(逸文丹後風土記)

○なつく【馴】(動四) 馴れ親しむ。親しみ近づく。「時曠野中遇ニ於妹女一、其女婿レ壯馴(奈ツ支)之」(靈異記上二話)

○なつかし 心ひかれて離れがたい。「百鳥の声名束敷ありがほし住みよき里の荒るらく惜しも」(万一〇五九)

○なやむ【悩】(動四) なやむ。苦勞する。精神的なことにもいうが、本来病気による肉体的な苦痛をいうか。病む。わずらう。「金かも足しけくあらむと思ほして心奈夜麻すに」(万四〇九四)

○なやまし【不平・阻】①苦しい。障害にあつたり、病気にかかつたりして苦しむのにい
う。「吾父先王雖ニ是天皇之子一、遭ニ遇連遭一、不レ登ニ天位一」(顕宗紀二年) ②官能を刺激して心を悩ませる。「奈夜麻思家人妻かもよ漕ぐ舟の忘れはせないや思ひ益すに」(万三五五七)

○はづ【恥・羞】(動上二) 恥じる。恥ずかしがる。「神八井耳命懣然自服」(懣然ハチテ) (綏靖前紀・私記甲本)

○はづかし【恥じ】恥ずかしい。きまりがわるい。「里人を見る目波豆可之さぶる子にさどはす君が宮出後姿」(万四一〇八)

○むつぶ【親・睦】睦ぶ。親しむ。仲よくする。【考】ムツムの形もある。「篤むつぶる二於親族トキハ一、則民興レ仁」(顯宗前紀)

○むつまし【親・睦】睦まじい。親密な。親しい。仲がよい。「熊が爪六ムツ爪ツろかもし鹿が爪八ヤ爪ツろかもし无都ム万マのみわれこそ此処に出でて居れ」(琴歌譜)

○めづ【奇】(動下二)感心する。心ひかれる。愛する。「花妙ゾハし桜のめでこと梅メ涅デば早くは梅メ涅デずわが梅豆メ留ル子ら」(允恭紀八年)

○めづらし【珍・希見】①心ひかれる。可愛らしい。「朝にけに常に見れども目メ頬ホ四シ吾が君」(万三七七)②珍しい。たぐいまれである。「大宮の内にも外にも米都メ良ラ之シ久クふれる大雪な踏みそね」(万四二八五)

○めだし 愛すべきだ。ほめるべきだ。「薬師ヤクシは常のもあれど賓客ヤクの今の薬師貴かりけり米太メ志シ加カ利リけり」(仏足石歌)

○よろこぶ【喜・歓・悦】(動上二)喜ぶ。快く感じる。「蟋蟀コホキの待ちヨ秋アキの夜を寝ヌるしるし無し」(万二二六四)

○よろこぼし【悦】喜ばしい。「うれし与呂許保志ヨとなも見る」(四六詔)

○わぶ【侘】(動上二)①困惑する。迷惑する。「又其神之嫡后、須勢理毘売命、甚為ニ嫉妬ニ、故其日子遲チ神和備弓自ニ出雲ニ将レ上ニ坐倭国ニ一而」(記神代)②ある事柄が思い通りにならないで落胆する。心情についていう場合。「ますらをの思ニ和備ニつたびまねく歎ニ歎ニきを」(万六四六)

○わびし わびしい。がっかりしている。「君は来ず吾は故無み立つ浪のしくしく和備思ニかくて来じとや」(万三〇二六)

動詞の場合、心的状態や心理活動を表す動詞から派生したものが多い。「いとふーいと
はし」のように、形容詞はその心理状態を引き起こす対象について用いられる場合もあれ
ば、「はづーはづかし」のように、両方主体の情意を表す場合もある。また、「あさむー
あさまし」「いきどほるーいきどほろし」「いとふーいとはし」「くゆーくやし」「こふ
ーこひし（こほし）」「うらむーうらめし」「うらやむーうらやまし」「したゑむーした
ゑまし」「なぐーなぐし」「はづーはづかし」「むつむーむつまし」「めづーめだし」
「よろこぶーよろこぼし」のように、意味が完全に対応しているものがほとんどであるが、
形容詞の意味は動詞のそれと少しずれが生じていることもある。

② 思考・願望などの精神活動を表す動詞

例 うたがはし おもほし くすばし たのもし ねがはし

喜怒哀楽などの心理状態を表す動詞のほかに、外部世界に対する思考や願望など、精神
活動を表す動詞も見られる。

「思考を表すもの」

○うたがふ【疑】（動四）疑う。あやしむ。「是時天照大神疑^{うたがひ}三弟有二悪心一」（神代紀
上）

○うたがはし【疑】疑わしい。あやしい。「赤鯛、疑^{うたがはし}是之吞乎」〈疑宇^{うたが}太加波^{たが}之〉（神
代紀下・私記乙本）

○おもふ【思・念・憶】（動四）（a）思う。「争はず寝しくをしぞも愛^{かひ}しみ意母^{おも}布^ふ」
（記応神）（b）欲する。（c）心配する。気にやむ。おもんばかる。（p）な

つかしむ。恋しいと思う。(e) 予想する。推量する。(ハ) 気が合う。親しむ。

○おもほし 心に考え望んでいる。望ましい。「於母保之伎言伝やらざ」(万三九六二)

○くしぶ(動上二) 靈妙のしるしがあらわれる。神秘的な力を持っている。「是、太玉命久志備所レ生神」(古語拾遺)

○くすばし ふしぎである。珍しい。「古へにありけるわざの久須婆之伎事と言ひつぐ」(万四二一一)

「願望を表すもの」

○たのむ【憑・恃】(動四) 頼りに思う。「大船の思ひ多能無に」(万九〇四)

○たのもし【頼】頼みになる。頼みとしよう。「歎しみ明みおだひしみ多能母志み思ほしつつ大坐し坐す間に」(五一詔)

○ねがふ【願・望】(動四) 心に願う。希望する。「なほし禰可比つ千年の命を」(万四四七〇)

○ねがはし【願】望ましい。願うところだ。「欲レ帰ニ汝国」耶、対諮、甚望也」思考や願望を表す動詞から派生した形容詞は、動詞本来の意味から、ある程度の評価の意味を持つようになっていくように思われる。

③ 状態や動作・作用を表す動詞

例 いきづかし いたぶらし うるはし ゑまはし およし かからはし かたむ けが
らはし たたはし つからし やさし ゆるほし よらし よろし

「状態を表すもの」

○うるふ【湿】（動四）ぬれる。うるおう。しめる。「牽^レ馬就^レ前遊牝、觀^ニ女不淨^一、

沾^づ湿^へ者殺、不^レ湿^う者没^は為^ニ官婢^一」（武烈紀八年）

○うるはし【愛・麗】①風景などが美しい。壮麗である。「たたなづく青垣山ごもれる大

和し宇流波斯」（記景行）②容姿などが端麗・端正である。「宇流波斯と

さ寝しさ寝てば」（記允恭）③心がうつくし。誠実である。「あらそはず

寝しくをしぞも宇流波志み思ふ」（記応神）

○けがる【穢】（動下二）よごれる。けがれる。「于^レ時河際^仁志天、倭姫命御裳裔長

計^け加^が礼^れ侍^へ介^介留^留於^於洗^洗給^給倍^倍利^利」（倭姫世記）

○けがらはし【汗穢・穢】よごれている。不浄である。「汝是躬行濁悪」（濁悪

介^け加^が良^ら波^は之^之）（神代紀上・私記乙本）

○たたふ【溢・盈】（動四）充滿する。満ちてふくれあがる。「時伊弉冉尊脹満太高」

（脹満太高波礼多々倍利）（神代紀上・私記乙本）

○たたはし【偉】満ち足りた。偉大な。「吾が大君皇子の命の天の下知らしめしせば春花

の貴からむと望月の満波之計むと」（万一六七）

○つかる【疲・勞】（動下二）疲れる。「其鬼走疲（都加礼尔弓）」（靈異記中二五

話）

○つからし【疲】疲れた状態にある。「朕は御身都可良之久おほましますに依りて太子に

天つ日嗣高御座の継は授けまつると命ひて」（四五詔）

○やす【瘦】（動下二）肥ユの対。①やせる。身体が細る。肉が落ちる。「吾が君に戯奴

は恋ふらし賜りたる茅花を喫めどいや瘦に夜須」(万一四六二)

○やさし 恥ずかしい。肩身が狭い。「世の中を憂しと夜佐之と思へども飛立ちかねつ鳥にしあらねば」(万八九三)

〔動作を表すもの〕

○いきづく【気衝・息衝】(動四)①息をつく。息をする。「鴉鳥の潜き伊岐豆岐しなだゆふささなみ路をすくすくと我がいませばや」(記応神)②苦しい息をする。嘆息する。あえぐ。「かくのみや伊岐都枳居らむかくのみや恋ひつつあらむ」(万一五二〇)

○いきづかし【気衝】ため息が出るほど苦しい。嘆かわしい。「あな伊伎豆加思見久にして」(万三五四七)

○ゑまふ【咲】(動四)笑う。ほほえむ。「心には思ひ誇りて恵麻比つつ渡る間に」(万四〇一一)

○ゑまはし ほほえましく感じられる。嬉しい。「あぶら火の光に見ゆるわが縋さ百合の花の恵麻波之伎かも」(万四〇八六)

○かたむ【奸】人をあざむく。いつわる。おかす。「雄鳥…、求レ食養ニ抱レ児之妻、求レ食行之頃、他鳥通来婚奸(可陀弥)」(靈異記中二話)

○かたまし【姦・奸】心がよくない。心がねじけている。「悪く姦岐奴」(二八詔)

○よる【縁・依】(動四)①近寄る。あるものの傍へ近づく。寄ってくる。「予屢ましじき川の隅隅寄るほひ行くかも末桑の木」(仁徳紀三〇年)②心を寄せて人にたよる。ある人の意のままになる。③もとづく。

○よらし よろしい。ふさわしい。好ましい。「みつみつし久米の子らが頭椎カウヅイい石椎イシヅイいも

ち今撃たば余良斯ヨラシ」(記神武)

○よろし よろしい。ふさわしくてよい。好ましく立派である。ヨラシとも。「宮人の袖

つけ衣秋萩アキハギにほひ与呂ヨロ之伎高円タカカマドの宮」(万四三一五)

〔作用を表すもの〕

○いたぶる【甚振シタビ】(動四) 激しく揺れる。「風をいたみ甚振浪の間無く吾が思ふ君は相思ふらむか」(万二七三六)

○いたぶらし ひどく動揺しておちつかない。「おして否と稲はつかねど波の穂の伊多夫良思もよ昨夜一人ねて」(万三五五〇)

○おゆ【老】(動上二) 老いる。年よる。「引田ヒキタの若栗ワケ栖原セ若くへに率寝てましもの淤伊オにけるかも」(記雄略)

○およし 年をとった。老いこぼれた状態にある。ワカシの対。「か行けば人に厭はえかく行けば人に悪ワまえ意余斯オホヨスをはかくのみならし」(万八〇四)

○かかる【懸】(動四) ①かかっている。とりついている。「まなかひにもとな可カ可カ利リてうやすいしなさぬ」(万八〇二) ②かかりあいになる。病ヤ気キにかかることや罪に連座することという。③よりかかる。たよる。④神が人間によりつく。

○かからはし 離れがたい。関係を断ちにくい。互いにかかり合う。「鸕ウ鳥トリの可カ可カ良ラ波ハ志シもよ行方知らねば」(万八〇〇)

○ゆるふ【緩・縦】(動四) ①ゆるやかになる。ゆるむ。「瑞垣ミヅキの久しき時ゆ恋すれば吾が帯緩朝夕オビユル毎ヒに」(万三二六二) ②心がたるむ。油断する。

○ゆるほし【縦】ゆるやかである。「抑縦上倭言於之布須、縦、由流保之」（華嚴音義私記）

「いきづく」「ゑまふ」のような息をする、笑うなど、心理状態と関係づけられる類のものもあれば、「かかる」「いたぶる」のような感情と無関係のようなものもある。状態や動作・作用を表す動詞から派生した形容詞の中には、「ゆるほし」など動詞と同じ状態を表すもののほかに、「かからはし」「いたぶらし」のように感情とは無関係の動詞から派生して感情・心的状態を表す形容詞も見られる。

シク活用形容詞を派生した動詞の中に、情意や心的状態以外を表すものが存在しないわけでもない。ただ、その場合でも、派生した形容詞は思った通り、願った通りになれるかどうかと評価したり、外面の状態を内面の心的状態に用いたりするなど、情意的意味を帯びることが多い。ちなみに、「かからはし」と「けがらはし」が「し」ではなく、本来は「かかる」「けがる」に存続の意を表す接尾語「ふ」が付いたもの、接辞「し」が添加したものと見られるが、ここでは拡張形の接辞「はし」が付いたものとして扱うことにする。これらの例も動詞の状態性の強さと関係あるかと考えられる。この点について、阪倉篤義『語構成の研究』（一九九五）で、次のように述べている。

そのかはりシ②は、「はし」といふ拡張形をとつて、

○イタツカハシ「莫^{イタツカハシ}煩^{イタツカハシ}ニ饒語^{イタツカハシ}」（一九・97）」

○ケガラハシ「躬行濁^{ケガラハシ}悪^{ケガラハシ}」（一・38）」

のごとく、動作・作用を意味する外形的情態性の語基からも、情意的な情態を意味す

る語を派生することが可能であった。

(『語構成の研究』p. 386)

動詞の活用から見ると、四段活用が最も多く、上二段活用と下二段活用も見られる。「うらむ」の活用について、『時代別国語大辞典 上代編』で「ウラムから派生した形容詞ウラメシのメが甲類であることから、古くは上一段ではなかったかと推定する説がある」と記述されている。上一段活用動詞の派生はこの一語のみである。

四段活用(一八語) いきどほる いつく いとふ うらやむ したゑむ なつく なやむ
うたがふ おもふ たのむ ねがふ たたふ いきづく ゑまふ よ
る いたぶる かかる ゆるふ

上二段活用(九語) こふ くゆ さぶ なぐ はづ よろこぶ わぶ くしぶ おゆ
上一段活用(一語) うらむ
下二段活用(四語) めづ けがる つかる やす

ほかに、「あさまし」「うるはし」「うつくし」を派生した動詞には少し疑問が残る。上代文献に動詞「浅む」の存在が確認できず、そこで、アサは浅ス(四段)の未然形で、マシは推量の助動詞とする説もある。「うるはし」は四段活用動詞「うるふ(湿)」の派生であると考えられるが、両者の意味は関係づけにくいようである。イツク―イツクシと同様に、「うつくし」の派生動詞は「うつく」ではないかとも考えられるが、この動詞は見当たらなかった。

4 その他の語基

① 情意的意味を持つもの

〔心理状態〕

○あからし【懇】痛切である。いたましい。「懇_{ネムコロ}、ネモコロ、カナシフ、アカラシ」(名義抄)

○あたらし【惜】派生動詞↓あからしぶ

○あたらし【惜】惜しい。大切である。もったいない。「考」「あたら(可惜・恠)」形

状言。惜しむべき。もったいない。「可惜_{アタラ}」(名義抄) 派生動詞↓あたらしぶ

○いたはし【労】苦痛である。骨折って苦しい。「劬_{ハシ}・労_{イタハシ}、イタハル」(名義抄)

「勞_{ハシ}・勤_{ハシ}・倦_{ハシ}・劬_{ハシ}・憂_{イタハシ}」(色葉) 同源動詞↓いたはる

○うむがし うれしい。喜ばしい。

○うれし【歛】嬉しい。よろこばしい。すべて心にかない満足することをあらわす。「偉

慶説也、奇也、賀也、幸也、宇_{礼志}」(新撰字鏡) 「切_{ハシ}・怡_{ウレシ}」(名義抄) 派生動詞↓うれしむ

○をし【惜・愛】①惜しい。手放しがたい。思い切って捨てることがむずかしい。②名残

り惜しい。心残りである。③いとしい。↓をしむ

○おむがし【欣感】喜ばしい。うれしい。ありがたい。ウムガシ・ムガシ、あるいは「偉慶説也、奇也、賀也、幸也、福也、於_{毛加志}、又_{宇礼志}」(新撰字鏡) のように

オモガシという形もある。

○かなし【悲・哀・憐】①心をうたれる。痛切に心が動かされる。身にしみて感じる。悲しい。②いとしい。派生動詞↓かなしぶ

○くるし【苦】苦しい。つらい。肉体的にも精神的にも用いる。派生動詞↓くるしむ・さぶし【不楽】さびしい。心が鬱々として楽しまない。サビシとも。同源動詞↓さぶ

○したし【親】親しい。「適・身・党・昵シタシ」(名義抄)

○たくまし【快】気持がよい。うれしい。「泰然太久万志久」(新撰字鏡)「快ヨシ、タクマシ」(名義抄)派生動詞↓たくましぶ

○たのし【楽】楽しい。快い。「阿波礼、阿那於茂志呂、阿那多能志言、伸レ手而舞、今指二樂事一、謂二之多能志一、此意也、阿那佐夜憩、飫憩」(古語拾遺)「倡樂也、太乃之」(新撰字鏡)【考】古語拾遺の「言伸レ手而舞」は当時の語源俗解によるもの。タノシは行動することによって生ずる快適の感情を表す。

○はし【愛】いとおしい。かわいらしい。【考】同じ愛情の深さをいう形容詞でも、カナシが切なさを伴って、どうにもならない気持を表わし、悲哀を表す方向に向かうのに対して、ハシは讚美の気持を伴うものと思われる。

○むがし【幸】好都合である。心になかう。喜ばしい。オムガシ・ウムガシとも。「思考・願望」

○あやし【恠・靈異】①靈妙である。②不思議である。奇怪である。めずらしい。【考】感動詞としてのアヤは「中大兄、見下子麻呂等畏ニ入鹿威一、便旋不上レ進日ニ咄嗟一」(皇極訶紀四年)に見え、神名の「阿夜訶志古泥神」(記神代)のアヤも同じ語と思われる。クスシは靈妙・神秘の意に、アヤシはより多く奇怪・不審の意に傾くようである。派生動詞↓あやしぶ・同源副詞↓あやに(奇妙に。むりように。非常に)

○いふかし【不審】様子が知れず気がかりである。心もとない。「鬱・不審・未審イフカシ」
シ・訝イフカシ、イフカル」同源動詞↓いふかる

○くし【奇】不思議である。靈妙である。クスシとも。派生動詞↓くしぶ

○くすし【奇】ふしぎである。靈妙である。「神クスシ」(名義抄)

○ほし【欲】欲しい。動詞の名詞形にガのついた形、または接尾語クをうけて用いることが多い。同源動詞―ほる

〔価値評価〕

○あし【悪】悪い。ひろく、不快・拙劣・邪悪・醜悪・卑賤・強暴なさまにいう。ヨシの対。

○いやし【賤】卑しい。賤視、あるいは卑下すべきものに対していう。「鄙野也、伊也志」(新撰字鏡)「侮賤也、伊也志」(新撰字鏡享和本)「野・卑・賤・鄙イヤシ」(名義抄)

○くはし【妙・細】こまやかにうるわしく、すぐれていること。ウラグハシ・マグハシ等、複合形容詞として用いられることが多い。

〔人の性質〕

○いすかし【傲佞】性質や、やり方が曲がっている。「考」「悞」や「佞」は曲がる意である。

○いそし【勤】よく勤める。勤勉だ。同源動詞↓いそぐ・いそふ

○おだひし【穩】おだやかである。安らかである。のどかである。「考」「おだひウダヒ」(穩)「形状言。おだやかなさま。やすらかなさま。しずか。「穩ウダヒニ、

ヲダヒカナリ、ヤスシ・雅ミヤビカナリ、オダヒカナリ」(名義抄)

○さかし【賢】賢明である。

○さだし【貞】貞節である。実直である。「貞サタ」(岩崎文庫本法華経音訓)「貞サダ

シ」(名義抄)【考】「さだか(貞)」形状言。たしかなこと。確実なこと。

サダはサダム・サダマル・サダシのサダに同じ。

○ただし【正】正しい。まっすぐである。同源動詞↓ただす

② 状態的意味を持つもの

〔存在状態〕

○うつし【現・顕】うつつである。目の前に顕在している。この世に生きている。心持が

正気である。【考】形状言ウツが形容詞に活用したもの。

○おなじ【同】同一である。変わらない。

○おやじ【同】同じ。

○けし【異】普通でない。心ココロという語を連体修飾して用いられる例がほとんどである。

○ひとし【等】ひとしい。同等である。

○まさし【正】はっきりしている。たしかである。まことである。【考】「まさ(正)」

形状言。正しいさま。条理になつたさま。確かなさま。「多年風声為レ行、

自悟塩醬まきナルコトフへ末佐奈留己止乎まきサナルルコトフ存レ心」(靈異記上二三話興福寺本)「実マサ・

理タダシ、マサ」(名義抄)同源副詞↓まさに

○むなし【空】①空虚である。からである。②無益である。何もしいない。【考】「むな

(空)「形状言。空虚なさま。内容のないさま。むなしさま。「おほろかに心思ひて牟奈言も祖の名断つな」(万四四六五)

〔時間や量〕

○あらたし【新】新しい。「新アタラシ、アラタシキ、アラタム」(名義抄)【考】「あらたしき年の始め」の例がほとんどである。上代において、アタラを語根とする語はすべて可惜の意。新の意は、アラタを語根としたが、やがて形容詞アラタシのみ音の転換を起こしアタラシとなる。

○にひし【新】新しい。【考】「にひ(新)」形状言。新しいさま。初めてであること。初々しいこと。「尔比嘗屋に生ひ立てる」(記雄略)

○なまし【生】生である。鮮度が落ちたり、枯れたりしていかない。【考】「なま(生)」形状言。生きていること。生なこと。また未熟な・中途半端な意にも用いる。単独の用例はない。また、後世には、薪などが十分乾燥せず燃えにくいことをナマシという。

○にはしにわかである。あわただしい。同源副詞↓にはかに【急・俄】(急に。にわかに。病気に用いられたときは危篤状態をいう。)

○ひさし【久】久しい。時間が長い。【考】「ひさ(久)」形状言。形容詞久シの語幹。長い間。長らく。「良久玉篇曰、良猶レ長也、長対ニ於促一、非ニ暫時一也、夜々比佐尔安利天」(華厳音義私記)

○ともし【乏】①少ない。とぼしい。貧しい。「匱乏止毛之」(最勝王経音義)「微トモシ、スクナシ・乏トモシ」(名義抄)②心が惹かれる。③羨ましい。

○はげし【烈】はげしい。勢いが強い。「悍勇也、猛也、波介之也」（新撰字鏡）同源動詞
↓はげむ

〔生活などの状況〕

○しけし【穢・蕪】きたない意か。「蕪穢也、荒也、志介志」

○すがし 清らかである。すがすがしい。【考】「すが（菅）」菅スゲの交替形。直接、もし

くは助詞ノを介して、複合語を作る場合に用いられている。「須賀スガ置いやさや敷きて」（記神武）

○まづし【貧・貧窮】貧乏な。貧しい。【考】語幹マヅは貧ヒナと同源であろう。

○やはし【飢】飢えている。ひもじい。

〔自然環境〕

○すずし【冷・涼】すずしい。さわやかな。同源動詞↓すずむ

○いかし【蔽】①勢いが盛んである。穀物の稔りや、樹木の繁茂や世の繁栄している状態に對していう。②いかめしい。おごそかである。③重大である。

○さがし【険・峻】けわしい。山や坂についていうことが多いが、浪が高くはげしいさまにいうこともある。

○にたし 水気が多くじめじめしている。【考】「にた」①（名）湿地。②が地形名として名詞化したもの。②形状言。柔らかくどろどろなさま。水気が多く湿潤なさま。

以上、単純形式の語幹の性質について考察した。まとめて見ると、情意的意味を持つ語基は、よく派生あるいは同源の動詞が存在している。前述したように、動詞から派生した

形容詞の場合、両者は意味的に違いが生じることもしばしば見られる。これに対して、形容詞と同源の動詞はもちろん、形容詞から派生した動詞は基本的にほぼ同じ意味を表している。また、形容詞の語幹は「あつかたことば形状言」からくるもの、あるいは形容詞の語幹が「あつかたことば形状言」になることもある。この場合、さらに多くの複合語を形成することができる。状態の意味を持つ語基は、シク活用するものも見られた。人間は自分の感覚に基づき、それを基準として事物の性質を捉える場合にシク活用する傾向が見られる。事物の価値、他人に対する印象、時間、空間、量、程度などの判断は個人の感覚によって左右される場合があるからである。

以上で示したように、シク活用形容詞の語幹に、情意的意味を持つものが約三〇語、状態の意味を持つものが約二〇語で、その差は思ったほど大きくなかった。しかし、動詞から派生したシク活用形容詞の多くは情意的意味を表すため、特にク活用形容詞と比べると、シク活用形容詞は情意性が強いという印象が与えられる。シク活用形容詞の中で、動詞から派生した形容詞は非常に重要な位置を占めていると言える。

四―二 合成形式の語幹の性質

1 疊語形式の語幹

シク活用形容詞の中には、形容詞語幹や擬声語などを重ねた形を語幹とするものもかなりある。いわゆる疊語形容詞あるいは重複形容詞である。疊語形容詞はシク活用形容詞にしか見られない。『時代別国語大辞典 上代編』（一九六七）に見出し語として収録された疊語形容詞は二〇語あり、その重複要素は次のようである。

名詞の重複

うやうやし
くだくだし
くまくまし
ひねひねし
をさをさし
ををし

「エヤ」は「礼」である。「うやなし（無礼）」という語もある。
「クダ」は「管」であると考えられる。
「クマ」は「隈」であると考えられる。
「ヒネ」は「干稲（倉に積みあげて古くなった稲）」であると考えられる。
「ヲサ」は「長」である。頭を意味する名詞である。
「ヲ」は「雄」である。「めめし」もあつたと思われる。

語基の重複

いつつし
おこし
おどろおどろし
おほし
きらきらし
ごし
すがすがし
そがそがし
たぎたぎし
たづたづし
ゆゆし

「イツ」は「厳」である。
「おこし」という形容詞の存在が推測できるが、語基不明。
「オドロ」は「驚」であり、語基不明。擬声語か。
「おほし」という形容詞の存在が推測できるが、語基不明。擬声語か。
「キラ」は情態的意義をもった擬声語である。
「コゴ」は重複によって構成された擬声語である。
「スガ」は「清」であり、「すがし」という形容詞もある。
「すがすがし」に同じ。
「たぎし」という形容詞の存在が推測できるが、語基不明。
「たづがない」という語と関係があるなら、名詞の可能性があるが、擬声語も考えられる。
「ユ」は「斎」か「忌」であると考えられる。

形容詞語幹の重複

とほとほし 「トホ」はク活用形容詞「とほし」の語幹である。

ながながし 「ナガ」はク活用形容詞「ながし」の語幹である。

動詞連用形の重複

わきわきし 「ワキ」は動詞「別く」の連用形である。

よく言われるのは、ク活用形容詞と、その語幹が重複するものの、両者の意味的差異である。たとえば、「ナガシ」のもつ客観性に対して、「ナガナガシ」は主観において必要以上に長いと判断する気持を表し、また、「トホシ」に対して、「トホトホシ」はその距離を眺めたりする心理状態を伴っているようである。その意味で、疊語形容詞の機能は強調とも考えられる。凹凸・高低・深淺などの状態を表す語基を重複することによって、その状態の特徴を意識させ、もしくは心理状態を伴って、情意的意味を持つようになる。

○ながながし【長永】いかにも長い。長ったらしい。

*「あしひきの山鳥の尾の長永夜をひとりかもねむ」（万二八〇二）

○とほとほし 遠い。非常に遠い。

*「八千矛の神の命は八島国妻枕きかねて登富登富斯高志の国に賢し女を有りと聞かして」（記神代）

次に、重複要素が名詞である六語について見てみる。普通、「山々」のような名詞が重複する場合、「山が沢山ある」という複数を意味する。しかし、これは語幹の本来の意味にはなるが、疊語形容詞が成り立つ場合、別の抽象的意味も新しく成立する。したがって、「山々」のような単なる複数を表す疊語は、シク活用形容詞にはなりにくいと思われる。

○うやうやし【恭】礼儀正しい。「今の帝と立ててすまひくる間に宇夜宇夜自久相従ふ事は無くしてとひとの仇の在る言のごとく言ふましじき辞も言ひぬ為ましじき行も為ぬ」(二七詔)

○くくだし【細碎】こまごまして、わずらわしい。くだい。「阿リス等知其細碎くたくたしきコトヲ為事、不務所期、頻勸二帰朝一」(継体紀二四年)

○くまくまし 奥が深くて暗いようなさま。「爾時到来此処一詔、甚久麻々々志枳谷在、故云ニ熊谷一」(出雲風土記飯石郡)

○ひねひねし 久しく古い。古くひからびたさまをいう。「新墾田のしし田の稲を倉に挙

げてあな干稲干稲志我が恋ふらくは」(万三八四八)

○をさをさし【幹了・直・卓】すぐれている。はつきりしてきてさとい。整ってきちんとしている。「取当国之幹了者一任其国郡之首長一」(成務紀四年)

○ををし【雄】おおしい。勇ましい。男性的だ。「香具山は畝火雄男志と耳成とあひあらそひき」(万一三)

「をさ(長)」は一群の人々の上に立っている統御、支配する人である。そのすぐれた統御力や判断力などのよい性質から、「をさをさし」の意味が成り立つ。「を(雄・男・夫)」は男、男子のことである。男性の持つ属性として、「ををし」は勇ましいさま、男らしいさまを表す。この二語の意味の成立は、前述した「名詞+し」の構造をとるシク活用形容詞「いさをし」と同じパターンである。

「ひね」は干稲、「くま(隈)」は曲がり角、「くだ(管)」は記載がないが、同じく具体名詞と考える。この両者も複数というより、「ひね」の古くなって干からびたさま、

「くま（隈）」の入りくんで見えにくいさま、「くだ（管）」の直接ではないなどの性質を抽出して、疊語形容詞の意味が成立したと考えられる。「うや（礼）」は礼儀の意味で、具体名詞ではないが、「うやうやし」はそれを重ねて状態の表現としたものである。

その他の語基の重複の場合、重複要素が不明であるものが多いため、疊語形容詞の意味と語基との関連性は断定できない。「すがすがし」「おこし」などの場合、疊語形ではない「すがし」「おこし」もシク活用形容詞であり、そして両者の意味はほぼ同じである。この点は、「ながながし」のような活用形容詞語幹の重複による主観性の介入とは異なっている。また、語基が擬声語の場合、疊語形容詞の意味は当然その聴覚から変化したものである。たとえば、「ごご」は物をすりあわせる音を表す擬声語であり、それは聴覚から視覚に転用され、「岩がごごつごつしてけわしい」状態を表す。「きら」は擬声語であるかは疑問であるが、それは聴覚あるいは視覚から、「姿や顔がととのつて美しい」という評価的意味を表すようになるのは確かである。「おどろ」も聴覚から驚きの情意的意味を持つようになった。ほかの語は基本的に強調と考えてよいであろう。

○いつつし 未詳。勢力のあるさまをいうか。「御床つひの佐夜伎、夜女の伊須々伎、

伊豆都志伎事なく平らけく安らけく護り奉る神」（祝詞大殿祭）

○おこし 【沈毅】力強いかめしい。沈着豪毅である。オコオコシ・オコシとも。「武芸過人、而志尚沈毅」（沈毅於己々々）（綏靖前紀・私記丙本）

○おどろおどろし ぎようぎようしい。物々しい。驚くべきである。「其人等の和み安み為べく相言へ、驚呂驚呂之岐事行なせそ」（五六詔）

○おほほし 【鬱】①ものの形がおぼろである。ぼんやりしている。「海人処女漁り焚く火

の於お煩ま保ま之く久く」(万三八九九)②心がぼんやりとして晴れない。心が結ばれて物悲しい。③おろかである。ぼかかけている。

○きらきらし【端正】姿や顔がととのつて美しい。「漸随ニ長大一、面容端は正し」(岐良支良シ) (靈異記中三一話)

○こごし 岩などがごつごつしてけわしい。「許こ其こ志こかも岩の神さびたまきはる幾代経にけむ」(万四〇〇三)

○すがすがし【清清】清々しい。さわやかで快い。ソガソガシとも。「求ニ出雲国一、爾到ニ坐須賀地一而詔之、吾来ニ此地一、我御心須賀須賀斯而、其地作レ宮坐、故、其地者於レ今云ニ須賀一也」(記神代)

○そがそがし すがすがしい。スガスガシとも。「菅生、一云品太天皇巡行之時、關ニ井此岡一、水甚清寒、於レ是勅曰、由ニ水清寒一、吾意宗々我々志、故曰ニ宗我富一」(播磨風土記揖保郡)

○たぎたぎし 凹凸・高底・深淺のある状態をいう。「即幸ニ屋形野之帳宮一、車駕所レ経之、道狭地深淺、取ニ悪路之義一、謂ニ之当麻一俗云ニ多支多支斯一」(常陸風土記行方郡)

○たづたづし ①たよりない。心細い。「草香江の入江にあさる蘆鶴のあな多豆多頭思友無しにして」(万五七五) ②あぶなつかしい。確かでない。

○ゆゆし【齋忌・忌】忌み慎まれる。憚られる。神聖なもの・恐れ多いことに触れるのを遠慮する心持をあらわす。「いつ白禱カがもと白禱がもと由斯ゆ伎しかも白禱原をとめ」(記雄略)

上代語の疊語形容詞の中で、唯一動詞連用形の重複によるものは、「わきわきし」である。動詞「わく」は「わける、区別する」という意味を表し、その連用形である名詞「わき」は「区別、けじめ」の意味を表す。前述したように、語基が名詞である場合、「ほかし」のような異同を表すものは、シク活用形容詞にする傾向があるようである。この「わきわきし」は上代早くも成立したのは、その「区別する」という意味と大きく関係しているのではないかと思われる。

○わきわきし【分明】はつきりしている。きわだっている。「雖^レ檢^ニ按^ニ其^レ国之神宝^一、無^ニ分^ニ明^ニ申^ニ言^ニ者^一」(垂仁紀二六年)

2 その他の合成形式の語幹 名詞／語基＋形容詞

○うらがなし 心がなしい。

○うらがはし 心にうつくしく感じられる。クハシは美妙・美麗・楽の意で、すべて美的な快感をおぼえたものについていう語。

○うらごひし【裏恋】心恋しい。ウラゴホシとも。

○うらごほし 心恋しい。

○こころがなし【情悲】そぞろに悲しい。はつきりした理由もなく悲しい。

○こころぐるし 気がかりだ。心配だ。「あしひきの荒山中に送り置きて帰らふ見れば情苦も」(万一八〇六)

○こころこひし【心恋】心ひかれる。

○うただぬし ただただ楽しい。
○うただのし ただただ楽しい。

○ものかなし 【物悲】何となく悲しい。うら悲しい。

○ものこひし 何となく恋しい。モノコホシとも訓める。

○かぐはし ①においがよい。香りが高い。かんばしい。②なつかしい。心惹かれる。香

りの高いものに心がひきつけられるとことから生じたものである。「見まくほり思ひしなへにカサ薷カ香具カ波ハ之君を相見つるかも」（万四一二〇）

○なぐはし 【名細】名がすぐれている。

○はなぐはし 【花細】花が美しい。そのものの美しさが特に花において目立っているという意。「はなぐはし」枕詞。花の美しい意で、桜・葦などの植物名にかか

る。
○まぐはし 【目細】うるわしい。見てうつくしく思う。

右のように、「うら」「こころ」「うた」「もの」「くはし」の五語による複合や派生が多く見られる。このうち、「こころくるし」と「かぐはし」の二語だけは、単独の語の意味のプラスより少し意味の違いが生じている。「うら」「こころ」「もの」は接頭語であるが、名詞として扱ってもよいように思われる。

○うら 【裏】（名）②心。思い。心は内にこもっているものとして裏というのであろう。

下・奥・底・根なども、心の意に用いられる。独立の用法は慣用的なウラモナクのみで、他は接頭語的に使われ、それもモノ悲シと同様に、何となくの意を示すことが多い。

○こころ【心・情】（名）⑥接頭語として用い、形容詞に冠する。表面に現われず、内面だけに生ずる感情を示す。ウラにも同様の用法がある。

○うた 形状言。形容詞などに上接して、何となく・むしろように等の副詞的な意味を添え、また副詞ウタタ・ウタテなどの語基となっている。

○もの【物・者・鬼】（名）⑥形容詞に冠して用い、何となくその感じが生じることを表す。

○くはし【妙・細】（形シク）こまやかにうるわしく、すぐれていること。ウラグハシ・マグハシ等、複合形容詞として用いられることが多い。

動詞連用形＋形容詞

○おもひがなし ころかなしい。心が傷む。

○おもひぐるし 心苦しい。思いに堪えかねる。

○きほし【欲服】着たい。

○みがほし【欲見】見たい。心ひかれてみたく思う。ミホシとも。

○みほし【欲見】見たい。

動詞連用形は「おもひ」「きる」「みる」のように極めて少ない。ここでの「おもふ（思・念・憶）」は「くを」と思う」の思考を表すものではなく、心配するなどの意である。「ほし」による複合語は、ほかに「有りがほし」が挙げられる。

その他

○しりひかし 未詳。気がかりで後より引っぱられる。後髪が引かれる思いであるの意か。
○なみだぐまし 涙ぐましい。ひとりでに涙が出てくるような気持ちをいう。動詞ナミダ

グムの形容詞化したもの。ただし動詞の例は見えない。
○みだりかはし【妄・闖】乱雑だ。無秩序だ。

「しりひかし」は「いきづかし」と同じく複合動詞からの派生とも考えられるが、「しりひく」という複合動詞は見当たらない。また、「ひかし」は形容詞ではない点で、他の複合形容詞と異なっている。「なみだぐまし」は接尾語「ぐまし」による派生形容詞、あるいは複合動詞「涙ぐむ」からの派生である。「みだりかはし」の「かはし」も接尾語と言われるが、いずれも生産力が乏しい。上代において接辞による派生は極めて少ない。

第五節 まとめ

上代語シク活用形容詞とク活用形容詞は、活用形式だけでなく、語構成と意味の上でも大きく異なっている。

まず、語構成からみると、ク活用形容詞の語幹は独立性が高く、「し」は付属的な存在である。それ故、「語基＋し」の造語形式を一般的に用い、「名詞＋形容詞」が多く見られ、接辞との結合性もよい。これに対して、シク活用形容詞は、情意性を表す語基が多く、独立性に乏しいため、「し」との結合がより緊密的であり、「し」は語幹の一部と見るほうが妥当である。シク活用の発生・発達はク活用形容詞より遅れたと言われ、「動詞未然形（被覆形）＋し」といった動詞から派生した形容詞と、「ながながし」「とほとほし」のようなク活用語幹を重ねて用いる疊語形容詞などの存在は、シク活用形容詞が二次的なものと見るべき根拠となる。したがって、シク活用形容詞は上代において、接辞との結合はほとんど見られず、複合形容詞に用いる語彙も、かなり限られている。

意味から見ると、ク活用形容詞には属性を表すものが多く、シク活用形容詞には情意を表すものが多いという傾向が認められる。しかし、具体的に分析してみると、ク活用形容詞の中でも、情意的意味を持つものがあり、シク活用形容詞の中でも、状態的意味を持つものが決して少なくない。それは、事物の属性というものは、一定の客観的な基準がある一方、個人による主観的な判断基準でも成り立つためである。時間や空間、事物の質や量の判断、人の行為に対する評価など、個人の主観が認識に影響を与えうる。したがって、シク活用することによって、この主観性がよく伝わるとも言える。

シク活用形容詞は、その語幹から見ると、動詞からの派生である場合に最大の特徴がある。その動詞は心理活動を表すものが最も多いが、それ以外に、思考や願望を表すもの、状態や動作・作用を表すものも見られた。後者には、「息づく・微笑む・涙ぐむ」など感情と関係あるものもあれば、「いたぶる・けがる」のような感情と無関係のものもある。次には情意的意味を持つ語基が多く存在している点である。ク活用形容詞と比べた場合の、シク活用形容詞語幹の特徴の一つである。しかし、実際には状態的意味を持つ語基も少なくなかった。時間・空間、質・量・程度、美しさ・汚さと、人柄・品行・性格などの人の性質、人間はこれらの状態を表す概念を認識するとき、判断側の主観性も介入しうる。ただし、心理状態を表す情意性の高いものと比べて、この類のシク活用は不安定な一面があるように思われる。「ほかし」「われじ」「しりひかし」のような、一時的にシク活用されるものも歴史の流れの中では少なくない。また、疊語形容詞もシク活用形容詞独特の存在である。その機能は基本的に強調であると考えられ、重複要素である語基との情意性の違いは、語によってさまざまである。

上代において、もう一つ注目するのは、自然状況と関係ある語幹の存在である。自然環境は人の生活に大きく影響しているため、道の険しさなど、本来ク活用すべきものをシク活用する傾向が見られた。疊語形容詞の中で、「おほほし」「くまくまし」「ごごし」「たぎたぎし」「たづたづし」「とほとほし」などの存在もこのような古代に人の生活状況と関係あると思われる。疊語形容詞や動詞からの派生形容詞の存在は、上代シク活用形容詞語構成の特徴であると思われ、その意味表現からすると、当然のことであると思われる。シク活用形容詞の語構成はその語の持つ意味および機能と深く連関する。平安時代以降、シク活用形容詞は語構成及び意味上にどんな変化を生じるのか、引き続き考察する。

第二章 中古中世シク活用形容詞について

『時代別国語大辞典 室町時代編』（一九八五～二〇〇〇）の序文で、「日本語の歴史において、古代から近代へ推移する過渡期に当り、古代語の継承と近代語の生成発展という二面が交錯して複雑な様相を呈しつつ、次第に近代語の輪郭を現わすに至るのが室町期である」と述べている。ここでは、大きく古代語と近代語とを分ける室町時代を境目として、平安時代の古代後期から室町時代までの流れを大きく「中古・中世」として捉え、その時代におけるシク活用形容詞の変遷を考察する。

平安時代（七九四～一一九二年）末期になると、連体形の終止用法が広まり、古代語の終止形は次第に消滅していく。こうして、古代語の連体形が終止連体形となり、「くき」から「くい」へと転化することによって、ク活用とシク活用の区別の消滅という大きな変化が生じた。その活用における変化とは別に、平安時代から室町時代までの八百年の間、シク活用形容詞の語構成および意味には、どのような変化があったのか、本章では、『日本国語大辞典』（第二版）、『時代別国語大辞典 室町時代編』（三省堂）、『日葡辞書』（『邦訳日葡辞書』岩波書店による）などを中心に、各時代の新出語を収集するとともに、形容詞語彙の諸相を考察することにする。

第一節 『日葡辞書』に見る形容詞語構成の変化

『日葡辞書』は、一六〇三年イエズス会宣教師らが編纂した日本語とポルトガル語の対

訳辞書で、京都の話し言葉を中心として、雅語・俗語・方言・婦人語などを含め約三万二千語を採録し、語義・用例を示すほか、語法・発音まで説明が及ぶという、日本語史を考察する上で不可欠の、第一級の資料である。以下、『日葡辞書』は『邦訳日葡辞書』（一九八〇）を用いることにする。

一―一 ク活用形容詞の語構成の変化

『日葡辞書』（一九八〇）に収録されているク活用形容詞は二七五語である。その語構成を分析し、上代語ク活用形容詞の語構成と比較すると、次のような変化があることがわかる（表4・表5参照）。

まず、上代語ク活用一五六語の中で、単純形容詞、派生形容詞、複合形容詞はそれぞれ四七％、三二％、二一％を占めている。これに対して、『日葡辞書』（一九八〇）収録の二七五語の中で、三者の比重は、三七％、二三％、四〇％である。つまり、単純形容詞と派生形容詞の比重はそれぞれ一〇％ほど減少し、複合形容詞は二〇％ほど増加している。特に、複合形容詞の増加は注目されるところである。

また、語構造を見ると、単純形容詞の中で、「語基＋し」と「動詞未然形（被覆形）＋し」にはあまり増加は見えなかったが、動詞連用形、形容動詞語幹、名詞と副詞に「し」を付けて作られたものが現れている。派生形容詞には新しい接頭語がいくつか現れるが、生産性は持っていない。また、上代からの接尾語「なし」は依然として造語力を発揮しているが、「けし」は消滅し、新しい接尾語も現れていない。複合形容詞の中では、「名詞＋形容詞」の増加が著しく、また、「副詞＋形容詞」も一語現れた。

一―二 シク活用形容詞の語構成の変化

『日葡辞書』（一九八〇）に収録されているシク活用形容詞は二二二語である。その語構成について、上代語シク活用形容詞と比較すると、次のような変化があったことがわかる（表6・表7参照）。

まず、上代語シク活用形容詞一四二語では、単純形容詞は七〇%、複合形容詞は二七%（疊語形容詞は一四%、「前項＋形容詞」は一三%）を占め、派生形容詞は極めて少ない。これに対して、『日葡辞書』収録の二二二語は、単純形容詞は四六%、複合形容詞は二七%（疊語形容詞は一九%、「前項＋形容詞」は八%）を占めているが、なかでも全体の二一%を占めるようになった派生形容詞は最も注目される（その他は六%ある）。

語構造から見ると、単純形容詞の中では「動詞未然形（被覆形）＋し」が依然として優勢を持ち、従来の名詞や副詞以外に「いみじい」「おさなしい」「すぐしい」のような動詞連用形・形容詞語幹・形容動詞語幹に「し」を付くものも現れた。複合形容詞の中では、疊語形容詞の語数はかなり増えたが、その他の複合形容詞はそれほど変わりがない。すぐれた生産性を持つ接尾語「がまし」「らし」の出現は派生形容詞の大量増加の原因ともなっている。

第二節 中古中世新出シク活用形容詞の語構成

『時代別国語大辞典 室町時代編』（一九八五）二〇〇〇）に収録されているシク活用形容詞は四八四語である。また、『日本国語大辞典』（二〇〇一）に収録されている「し

い」型形容詞は八九七語である。その最も古い挙例によって、合わせて四九二語は平安時代から室町時代末までの八百年の間に現れたと見られる。その中で、最も古い挙例が平安時代に遡れるものは一四六語、鎌倉時代に遡れるものは四五語、室町時代以降のものは一七九語である。残り一二二語は用例の記載がないため、具体的な出現時期が確認できなかった。出現時期が確認できるものを挙げて、その時代におけるシク活用形容詞の語構成特徴を把握してみる（表8・表9・表10・表11参照）。

二―一 平安時代新出シク活用形容詞の語構成

まず、平安時代の新出シク活用形容詞一四七語の語構成から見てみる。

一四七語のうち、単純形容詞は四七語、疊語形容詞の四四語を含め複合形容詞は六一語である。また、派生形容詞は、接頭語による一二語と、接尾語による一六語を合わせて二八語もある。『日葡辞書』（一九八〇）から見た室町時代における合形成容詞の発展は、早くも平安時代から始まったと考えられる。

具体的に見ると、単純形容詞の中で、特に注目するのは、情意性の高い語基の減少である。「語基＋し」はわずか一語であり、そして、その中で情意を表す語基は「むつかし」の一語だけである。「動詞未然形（被覆形）＋し」は二八語であり、上代と同じく心理状態や思考など多様な動詞から形容詞を派生させている。

また、上代から存在した疊語形容詞も多く現れた。この語構造は平安時代に入ると、より広い語彙範囲に用いられるようになった。たとえば、上代「わきわきし」の一語しかなかった「動詞の重複＋し」も七語に増加した。このほか、名詞と形容詞語幹の重複もそれ

ぞれ一六語と九語の新出語が見られた。疊語形容詞と比べて、「名詞＋形容詞」はそれほど目立たなかったが、「うら」と「くはし」の衰弱に伴い、より多くの語の複合が現れた。そして、最も注目されるのは、上代にはほとんど見られなかった、接辞による派生形容詞の大量出現である。上代から存在した接頭語「もの」も造語力を発揮するほかに、今までになかった接尾語「めかし」、特に「がまし」の出現は重要である。

二―二 鎌倉・室町時代新出シク活用形容詞の語構成

『日本国語大辞典』（二〇〇一）の最も古い挙例によつて、出現時期が鎌倉時代と確認できたのは四五語である。平安時代や室町時代と比べて、語数はかなり少ないようである。単純形容詞一四語の中で、「語基＋し」は「いし」と「はばし」の二語のみで、八語は「動詞未然形（被覆形）＋し」である。動詞は「痛む」「苛立つ」「慕う」「嘆く」「妬む」「忌む」のような情意的意味を表すものが多い。疊語形容詞は一三語あり、形容詞語幹の重複が多く、名詞の重複は三語だけであるが、「愛愛し」と「福福し」のように字音の重複による形容詞が出現するとともに、「げにげにし」のような副詞の重複も見られるようになった。

派生形容詞では、接尾語「がまし」が引き続き多く用いられる。また、鎌倉時代において、接尾語「らし」は「愛らし」の一語のみが見られた。ただし、接尾語「らし」は室町時代に入ってから多用されるようになり、『日本国語大辞典』（二〇〇一）の接尾語「らしい」の項目に最も古い挙例は一四七七年である。個別的に早く出現した「愛らし」の「らし」が接尾語としての存在が認められるべきかどうかは少し疑問に思われる。

『日本国語大辞典』(二〇〇一)の最も古い挙例によって、出現時期が室町時代(安土桃山時代を含む)に特定できるのは一七九語である。室町時代新出シク活用形容詞の語構成について、まず、単純形容詞からみると、それまで多用された「動詞未然形(被覆形)＋し」といった語構造の割合が少なくなつた。「あやうしい」「おおしい」「ちかしい」「ふかしい」「ふるしい」のようなく活用形容詞から転ずるもの、「いよし」「きつとし」「なにとやらしい」「よたたし」のようなく副詞から転成したものが前代よりも多く見られた。そして、単純形容詞全体の割合も少なく、五分の一近くの三五語である。

また、疊語形容詞は二七語があり、和語が多く用いられるが、「どくどくし」「そうぞうし」「てふてふし」「ぎやうぎやうし」「ぞうぞうし」など、漢語によるものも見える。そして、「うれしがなし」「おもしろをかし」のようなく「形容詞語幹＋形容詞」が現れ始めたことも注意される。

派生形容詞を見ると、接頭語は「もの」によるものは見当たらず、「こ」によるものは四語あつた。そして、「うそ恥づかし」「真新しい」などが用いられるようになり、シク活用形容詞と程度を表す接頭語の結合も見えるようになった。接尾語「がまし」を付く名詞には、「愛敬」「意見」「隔心」「分別」「油断」などの漢語が見られる。そして、接尾語「らし」による派生形容詞は三二語もあり、「がまし」に劣らない造語力を持つている。ただし、「ばけらしい」のような動詞に接続するのは極めて少ない。「らし」のほか、「くろし」と「らかし」も現れたが、それほどの造語力を持たなかつた。

これまで述べたように、平安時代から室町時代まで、「語基＋し」といった基本造語形式は優勢を失い、特に情意を表す語基が激減した。「動詞未然形(被覆形)＋し」は依然

多く用いられ、また、名詞、副詞ないしく活用形容詞からシク活用形容詞に転じるものも多くなつた。「ながながし」のような疊語形容詞はそのまま命脈を保ち、上代から広い範囲で使われ、名詞、形容詞語幹、動詞連用形をはじめ、副詞も用いられた。上代では、限られた語彙に用いる「名詞＋形容詞」という語彙の複合も多く見られるようになり、室町時代には「うれしがなし」「おもしろをかし」のような「形容詞語幹＋形容詞」も現れた。

上代シク活用形容詞では、接辞による派生形容詞は極めて少なかった。上代以降、情意を表す語基による単純形容詞の語構成は少なくなる一方、複合や派生によつてシク活用形容詞の語彙を豊かにする傾向が見られるようになった。この際、接辞による派生形容詞が大量に用いられるようになった。平安時代に入つて、「もの」は接頭語として定着し、接尾語「がまし」が現れ、そしてその後も優れた造語力を發揮していった。室町時代に「こ」などの程度を表す接頭語はいくつかシク活用形容詞に用いられ、接尾語「らし」が現れ、「がまし」に劣らない造語力を發揮した。造語力はそれほどではないが、「かまし」「がはし」「くまし」「めかし」「らかし」「くるし」「くらうし／くらはし」「くろし」などの接尾語も用いられるなど、合成形容詞が發展した傾向が伺える。また、鎌倉時代から、漢語もシク活用形容詞の造語に用いられるようになった。

第三節 中古中世新出シク活用形容詞の語幹の性質

平安時代に入つて王朝文化が盛んになり、文学の發展に伴つて、形容詞には一段と豊かな表現力と柔軟性が要求されたと見られる。本節では、新出シク活用形容詞の語幹の性質を考察することによつて、形容詞が發展していく中で、平安時代以降、古代語の近代語と

の境目である室町時代までの語幹の性質を探ってみる。

三―一 単純形式の語幹の性質

1 名詞と副詞

〔名詞〕

例 おとなし まことし げすし かたはし じやうらふし はかし ひとし またうどし わらうべし かどまし

○おとなし【大人】一族の長らしい、また、年長者らしい思慮、分別がある。おもだつている。年配である。

○まことし【実】①あくまでも誠実なさまである。②そのことがあくまでも真実であつて、疑う余地がないと思われるさまである。③そのもの本来の、あるべき正しいすがたである。

○げすし【下衆】品格が劣り、いかにも下品な感じのするさまである。「げす」身分や素姓の卑しい人。下賤げせんの人。下臍げら。下手げしゅ。

○かたはし【片端】事物の一部に何らかの欠陥や異常が認められて、見苦しく思われるさまである。「かたは」不完全であること。欠点があるさま。また、不十分な点。欠点。

○じやうらふし【上臍】人品や言動に、いかにも高貴な出らしい趣が見られるさまである。「じやうらふ」①修行の年数を多く積んだ僧。年功を積んだ高僧。②上位に着座すべき官位の高い人。身分の高貴な人。上流の人。上席。

○はかし 打消の言い方を伴って用いられ、これといつてぱつとしないうさまである意を表す。はかばかしい。「はか」はか目あて。あてど。はかり。

○ひとし【人】 一人前のものとして恥ずかしくないさまである。

○またうどし【真人】 直実で生真面目なさまである。

○わらうべし【童】 その言行などがいかにもこどもじみでいて、おとながないさまである。

○かどまし 物がとばっている状態である。

この十語のうち、「おとなし」「まことし」の二語は、平安時代に出現したと見られるものである。「おとなし」は「いさをし」と同じく、「大人」の「年長者らしい思慮、分別がある」性質を抽出した表現である。「まことし」は「ほかし」と同じく、「実」であるかどうか、異同に基づく判断からくるものである。この二語は上代の語構造意識を継承したものである。

「げすし」「じやうらふし」はそれぞれ鎌倉時代に用いられるようになった語で、語幹「下衆」「上臈」はそれぞれ地位身分を表す反対語であり、ともに漢語である。ここに、漢語の浸透をうかがうこともできよう。地位身分を表す語を形容詞化しているものとしては、「わらうべし(童)」「またうどし」もあげられよう。さらに、「かたはし」「はかし」「かどまし」のような象徴性や区別基準の含意がなく、ただ状態を表す名詞もシク活用形容詞に用いられた。

〔副詞〕

例 いとどし いまだし うたてし いよし きっとしい なにとやらしい よたたし
○いとどし ①ますますはなはだしい。②そうでなくてもひどい。

- いとど 副詞「いと」の重なった「いといと」が変化したもの。①程度が更にはなはだしいさま。ますます。いよいよ。ひとしお。一段と。②事態がいつそうひどいことへの否定的な感情。その上さらに（…のような事さえ加わり）。ただでさえ：なのにならに。これ以上（…でありたくない）。
- いまだし【未】現在または過去のある時点を基準として、その時まで、当然その実現が期待される事態が実現していない状態である。
- うたてし【転】事態の程度やある傾向が異常なまでに甚だしくて、同感できない状態である。
- うたて 物事の度合が異常に進んではなはだしい意を表す。なぜか非常に。ますますひどく。いよいよただならず。
- いよし【弥】「いや（弥）」の交替形「いよ」を形容詞として活用させたもので、事態が以前よりも一段とすぐれた段階に進んで、その価値を高める状態にある意を表すか。
- いよ 事柄や状態がだんだんはなはだしくなるさまを表す。いよいよ。ますます。
- きつとしい【急度】かた苦しい。きびしい。一説に、現金である。せわしい。
- きつと【急度・屹度】動作、行為が、物理的、心理的にゆるみのない状態で行なわれる時の、そのゆるみのないさま。
- なにとやらしい【何】何だかはつきりとはわからないが、何かいわくありげである。
- よたた【夜】夜の間ひたすら。夜中じゅうずっと。
- よたたし【夜多多】夜通しねないでばたばたするさまである。

副詞「うたて」の意味はいくつかあるが、基本は程度を表すものと考えてよい。後述するが、この語はク活用形容詞の用法もある。ほかに、「いよし」は程度、「きつとしい」「よたたし」は時間と考えてよいであろう。また、前述したように、副詞を形容詞化した場合、形式上だけは形容詞的に整える必要があるため、基本的に意味変化は生じない。また、形容詞の形をしても、述語の位置に立ちにくい。ただ、「なにとやらしい」だけは別のようである。

*玉塵抄〔1563〕三九「色を揉とよまうか。色をもむはなにとやらしいぞ」

2 動詞

〔平安時代に新出した形容詞〕

平安時代に現れたと考えられるシク活用形容詞一四七語の中で、動詞から派生したものは次の二八語である。

① 心的状態や心理活動を表す動詞

例 いそがし いそがはし うとまし おそろし このまし このもし しのばし そね
まし つつまし はらだたし ほこらしい わづらはし

○いそぐ【急】（自四）早く目的を果たそうと心掛ける。

○いそがし【忙】早くしなければならぬ用事に追われるさまである。また、用事が多く重なったりして暇がない。多忙である。

○いそがはし【忙】（第三者的な立場から見ても）いそがしい。せわしい感じである。するべきことがたくさんあって落ちつかない様子である。また、目的をできる

だけ早い時期に短時間で達成しようとしているようである。

○うとむ【疎】（他四）いやだと思ふ。親しくしないで遠ざける。おろそかにする。うとんずる。うとぶ。

○うとまし【疎】ある事態に対する嫌悪の気持を表す。

○おそる【恐・畏・怖・懼】（自下二）恐怖を感じる。身に危険を感じたりしてびくびくする。心がひるむ。

○おそろし【恐・畏】身に危険が感じられて、不気味である、不安である。こわい。おっかない。

○このむ【好】（他四）他とくらべて特にそれを好きになる。気に入る。興味をもつ。愛する。

○このまし【好】好きである。気に入っている。このましい。

○このもし【好】「このまし（好）」に同じ。

○しのぶ【徳・慕】（他四）過去のことや離れている人のことなどをひそかに思い慕う。思い出してなつかしむ。しぬぶ。

○しのばし【徳】したわしい。恋しい。忘れがたい。

○そそく（自四）①事を急ぐ。とり急ぎ事をする。②そわそわする。落ち着かないでいる。○そそかしい 態度、行動に落ち着きがない。軽率で不注意である。軽はずみである。あ

わて者である。

○そねむ【嫉・妬・猜・嫌】（他四）自分よりすぐれているもの運のよいものをうらやみねたむ。嫉妬する。そねぶ。

○そねまし【嫉】そねみたいさまである。ねたましい。

○つつむ【包・裹・慎】（他四）①ある物を別の物で覆ったり囲んだりする。②（慎）人の感情や表情を内におさえて、外に表れないようにする。

○つつまし【慎】①他に対して心が置かれ気恥ずかしい。気がひける感じである。きまりが悪い。②自らの挙動が重々しく控えめであるさま。表だたないで控えめである。思慮深い。

○はらだつ【腹立】（自四）怒りのために腹の中が燃えるようになる。怒る。いきどおる。立腹する。

○はらだたし【腹立】そばで見ていて腹が立つような物事のさまである。癪である。

○ほこる【誇・矜】（自四）すぐれていると思う気持を態度に表す。意気揚々とする。得意になる。自慢する。

○ほこらしい【誇】得意で人に自慢したい気持である。

○わづらふ【煩・患】（自四）①そのことに心がとらわれて思い苦しむ。悩む。心配する。②難渋する。苦勞する。骨を折る。

○わづらはし【煩】①めんどろな事などにかかずらうていやだという感じである。いとわしい。うるさい。めんどろである。厄介である。②物事が入りこんでいる。繁雜である。こみ入ってて複雑である。などの意味。

② 思考・願望などの精神活動を表す動詞

例 いさまし おもはし そそかし

○いさむ【勇】（自四）心が奮い勇氣がわく。氣負ってはやり立つ。勢い込む。

○いさまし【勇】気乗りがしている。気が進んでいる。

○おもふ【思・想・憶・懐】（他四）何か具体的な考えや感情を心にいだく。

○おもはし【思】①心に何かを思っている状態である。②好ましいと感じる。よいと考える。また、ある人をいとおしく感じる。

③ 状態や動作・作用を表す動詞

例 あわたたし をかし おもだたし かがやかしい くるおしい なずましい におわしい ふさわしい めざまし もどかしい ゆかしい なげかはし につかはし
「状態を表すもの」

○おもたつ【重立】（自四）集団の中で主要な人物である。中心になる。かしらだつ。

○おもだたし【面立】身の光栄に思う。名誉である。面目が立つ。はれがましい。

○くるふ【狂】（自四）精神、動作、状態などが正常、通常と違うようになる。

○くるおしい【狂】今にも気が狂ってしまいそうである。また、常軌を逸していてもでない。くるわしい。

○なずむ【泥・滞】（自四）人や馬が前へ進もうとしても、障害となるものがあって、なかなか進めないでいる。進まないで難渋する。②物事がなかなかうまく進まなくなる。

○なずましい【泥】物事がかばかしく進行しないさまである。難渋している状態である。○にほふ【匂】（自四）①色がきわだつ、または美しく映える。また、何やら発散するもの、ただよい出るものが感じ取られる。②（「臭」とも書く）嗅覚を刺激する

気がただよい出る。香り、臭みなどが感じられる。

○におおしい【匂】においやかである。つややかに美しい。

〔動作を表すもの〕

○をく【招】（他四）まねきよせる。よびよせる。

○をかし【可笑】①普通と違って、笑うべきさまである。②普通と違って格別な趣があるさま。賞すべきさまである。魅力のあるさまである。

○めざむ【目覚】（自下二）眠りから目がさめる。起きる。

○めざまし【目覚】物事が心外であり目もさめる思いがする。驚きあきれたり、不快に思ったりするほどである。目ざわりである。気にくわぬ。

○もどく【擬・抵悟・牴牾】（他四）①他と對抗して張り合つて事を行なう。他のものに似せて作つたり、振舞つたりする。まがえる。②さからつて非難または批評する。また、そむく。反対して従わない態度を見せる。さからう。

○もどかしい【擬】①非難すべきである。気にくわぬ。②思うようにならないで心がいらだっている。はがゆい。じれったい。

○ゆく【行】（自四）今いる所から向こうの方へ進み動く。

○ゆかしい【床・懐】心ひかれ、そこに行きたいと思う意。

○なげく【嘆・歎】（自四）①氣持が満たされないので、ため息をつく。嘆息する。②かなしみにひたる。かなしんで泣く。悲嘆する。

○なげかはし【歎】氣持が満たされないので、思わずため息が出るようなさまである。なげかしい。また、腹が立つほどなさけない。

〔作用を表すもの〕

○あわたたつ【泡立】（自五）泡ができる。泡が立つ。

○あわたたし【慌】物事を急いでしようとして慌てるさまである。心がせわしなく落ち着かない。

○かがやく【輝・耀】（自四）まぶしいほど四方に光を発する。きらきらと美しく光る。また、つややかな美しさを発する。

○かがやかしい【輝・耀】①四方に光を発してまぶしいほどである。美しくきらきら光っている。②顔が赤くなるほど恥ずかしい。おもはゆい。てれくさい。

○ふさふ【相応】（自四）よく合う。適合する。似合う。つりあう。また、心になう。気に入る。

○ふさわしい【相応】似つかわしい。似合っている。つりあっている。心に適っている。○につく【似付】（自四）よく似合う。よく調和する。

○につかはし【似付】似合って見える。いかにもそれ相応でふさわしい。つりあっている。似合わしい。

平安時代に現れたシク活用形容詞は一四七語で、上代語シク活用形容詞一四二語とほぼ同数であるので、数量的に比較しやすい。語幹の動詞未然形（被覆形）は三〇語弱で、上代の四〇語よりは減少している。また、上代では、心的状態や心理活動を表す動詞が圧倒的に多かったのに対して、平安時代では状態や動作・作用を表す動詞との差がそれほど見られない。

動詞と形容詞の意味的対応関係は、語によってさまざまであるが、動詞における状態性の意味の有無にかかわらず、基本的に形容詞は感情あるいは評価などの情意性を帯びてい

る。「なずましい(泥)」だけは例外であるが、この語も江戸時代には「ほればれするよ
うなさま」というような情意的意味を持つようになる。

動詞の具体的な意味から見ると、心理状態や心理活動を表す動詞の中で、「いそぐ―い
そがし・いそがはし」「うとむ―うとまし」「おそる―おそろし」「つつむ―つつまし」
「ほこる―ほこらしい」は新しい意味領域を獲得したようで、上代には類義的なものは確
認できない。また、心理状態がプラスの語とマイナスの語は上代においてほぼ量的に均衡
していたのに対して、平安時代になると、マイナスの心理状態に傾く形容詞が多くなつて
いる。

思考・願望などの精神活動を表す動詞の場合、上代において、「不審・不思議」の意味
を表すものが多く見られるが、平安時代においてこの意味の語は一語も見られなかった。
積極的な能動性を表す「いさむ―いさまし」と思考を表す「おもふ―おもはし」の僅か二
語が見られ、平安時代においては思考・願望を表す語は極めて少ない状態である。

また、状態や動作・作用を表す動詞は、上代にも平安時代にも十数語見られ、「なげ
く」のような情意と関係あるものもあれば、情意とは無関係で何らかの連想で情意的意味
を持つようになったものも多い。たとえば、上代において、「いたぶる―いたぶらし」
「かたむ―かたまし」「よる―よらし」「いきづく―いきづかし」「かかると―かからは
し」などの語が挙げられ、平安時代の語例を見ると、「あわたつ―あわたたし」「もどく
―もどかしい」「ゆく―ゆかしい」「なげく―なげかはし」「につく―につかはし」など
が挙げられる。

「鎌倉時代に新出した形容詞」

鎌倉時代に新たに用いられるようになったシク活用形容詞四五語のうちで、動詞語幹のもの八語である。

① 心的状態や心理活動をあらわす動詞

○いたむ【痛・傷・悼】（自四）①傷や病気などのために、からだに苦しみを感じる。②

心に強い悲しみを感じる。心痛する。

○いたまし【痛・傷】相手を哀れみ、同情して、心が痛む。また、心を痛ませるような状態である。かわいそうで見るに忍びない。ふびんだ。痛々しい。いたわしい。②心身が苦しみ悩む。つらい。苦しい。悩ましい。

○いらだつ【苛立】①とげや毛が一面に立つ。②（思うようにいかなかったり、不快なことがあったりして）気持ちがたかぶる。あせってじりじりする。いらいらする。じれる。いらつ。

○いらだたしい【苛立】あせって心に余裕がない感じである。思うようにいかない事や、不快な事などのため感情がたかぶっている。また、人の気持をいらいらさせるような物事のさまである。

○したふ【慕】（他四）①あとを追う。②恋しく思う。会いたいと思う。離れがたく思う。○したはし【慕】心がひかれて、なつかしく、あるいは、恋しく思う。

○ねたま【妬・嫉】（他四）うらやましく憎らしいと思う。そねむ。

○ねたまし【妬】うらやましく憎らしい。くやしい。残念だ。

○いむ【忌・斎・諱】身を浄め慎んでけがれを避ける。禁忌とする。忌みきらう。

○いまはし【忌】よくない事が起こる前兆のように感じられて、縁起が悪い。不吉である。
② 状態や作用・動作を表す動詞

「状態を表すもの」

○めだつ【目立】（自四）特に人目につく。きわだつて見える。目に立つ。

○めたたし【目立】目立って見える。いちじるしい。顕著である。めだたわしい。

「動作を表すもの」

○すすむ【進】（自四）前方へ動いて行く。前進する。

○すすまし【進】気がすすむ。勇みたっている。乗り気である。

○なげく【嘆・歎】気持が満たされないで、ため息をつく。嘆息する。

○なげかし【嘆】「なげかはし（歎）」に同じ。

このうち、五語は心理状態や心理活動を表しており、思考・願望を表すものは一つもない。また、鎌倉時代の「いらだつ（苛立）」「めだつ「目立」」や、平安時代の「おもだつ（重立）」「はらだつ（腹立）」など、この時期に「立つ」による複合動詞の形容詞化が見られるようになることも特徴的である。

「室町時代に新出した形容詞」

室町時代に現れたと考えられるシク活用形容詞三〇一語（具体的に出現時期が確定できない一二二語を含む）の中で、動詞から派生したものは次の二三語である。

① 心的状態や心理活動を表す動詞
○やむ【病む】（自四）①病気にかかる。気分が悪くなる。わずらう。②精神的に苦しむ。

心に悩む。③傷などが、痛む。

○やまし【病・疚】（自四）①病気にかかっている感じである。気分がすぐれない。②思い通りにならなくて、不満・もどかしさ・あせりなどが感じられる。気にやんでいるさまである。③良心に恥じるところがある。うしろぐらい気がする。気がとがめる。うしろめたい。

○あやぶむ【危】（他四）危険だと思ふ。不安で気がかりに思ふ。また、不確かで実現し
そうもないと思ふ。

○あやぶまし【危】事態の成行きなどを案じて、悪い結果になりはしないかと気がかりな
さまである。

○うやまふ【敬】（他四）相手を尊んで礼をつくす。つつしんで対する。尊敬する。いや
まう。

○うやまわしい【敬】相手をうやまい、行動をつつましくするさまにいう。ていちょうで
ある。うやまわしい。

○うらむ【恨・怨・憾】（他上二）自分に対してひどいことをした人、または、自分の思
い通りにならない物事やその状態などに不満を持ち、悲しく思ふ。また、残
念に思い反発する気持を持つ。うらぶ。うらみる。

○うらまし【恨】相手の心や処置が期待に反するものであったり、望ましくない事態が自
力ではどうにもならないような場合、それに対する不満、嘆きなどが心の
内にわだかまっている。残念で悲しい。

○うれふ【憂】（他上二）心を痛める。思いなやむ。心配する。

- うれはし【憂】心が晴れず、もの悲しい気分に含まれるような状態である。
- かなしむ【悲・哀・愛】（他四）かなしく思う。なげく。あわれむ。転じて、単に心情をあらわすだけでなく、それをあらわす行為をも含めた意味で用いられることもある。哀願する。
- かなしましい【悲】悲しい。
- きづかふ【氣遣】（他四）気をつかう。気づかわしく思う。心配する。案じる。
- きづかはし【氣遣】気がかりである。心配である。心もとない。危い。
- いたづく【労】（自四）①苦労する。ほねをおる。②疲れる。悩む。病気になる。
- いたづがはし【労】①つとめて骨折る。ご苦労千万だ。②仕事などで疲れている。疲れなやむ。③煩わしい。めんどろだ。気苦労だ。
- そそく（自四）①事を急ぐ。とり急ぎ事をする。②そわそわする。落ち着かないでいる。
- そそかはし せかせかとして、みるからに落ち着きのない感じのするさまである。
- もどく【擬】①非難すべきである。気に入らない。②思うようにならないで心がいらだっている。はがゆい。じれったい。
- もどかはし いかにも悠長でじつれたく思われるさまである。
- きらふ【嫌】（他四）①捨てる。除き去る。②いやがる。好まない。忌みきらう。憎む。
- きはし【嫌】いやで、退けたいと思う気持である。
- ② 思考・願望などの精神活動を表す動詞
- とぼく【恍・惚】（自下二）わざとしないふりをする。そのことに気づいていないようにふるまう。しらばくれる。

○とぼかし【惚】わざと知らぬふりをしていよう、うさんくさく感じられるさまである。

○のぞむ【望】（他四）そうありたいと願う。こうしてほしいと思う。こい願う。期待する。ほしがる。希望する。所望する。

○のぞまし【望】望むところである。願うところである。そうあってほしい。このましい。
③ 状態や動作・作用を表す動詞

〔状態を表すもの〕
○にぎはふ【賑】（自四）①富み栄える。豊かになる。繁栄する。②にぎやかになる。繁盛する。盛んになる。活気に満ち花やかになる。

○にぎははし【賑】繁盛している。にぎやかである。

○いまめく【今】（自四）当世風で、はなやかなさまになる。目新しくにぎやかである。気がきいてしやれている。

○いまめかはし【今】当世風でりっぱだ。目新しくすぐれている。気がきいてしやれている。現代風で若々しい。

○くもる【曇・陰】①雲、霧などで空がおおわれる。②心がはればれしない状態になる。心がふさぐ。

○くもらはし【曇】雲がかかって、はっきりしない空模様である。

〔動作を表すもの〕
○あつかふ【扱】（他四）人の相手になつて話をしたり、もてなしたりする。応対、待遇する。また、人を意のままにする。冷たくあしらう。冷遇する。

- あつかはし【扱】物事を取扱うのに苦勞するさまである。処置しにくい。
- いきづく【息】（自四）①息をする。呼吸する。②ためいきをつく。嘆息する。
- いきづがはし【息】ため息が出るような気持だ。悲しく嘆かわしい。
- ありつく【有付】（自四）ある場所に到着する。また、住みつく。住居が落ち着く。安住する。
- ありつかはし【有付】①その場所が、そこに落着いて住むのに適している状態である。
- すずむ【涼】（自四）暑さを避けて、清涼な空気にあたる。涼しい風にあたって、暑さをしのぐ。
- すずまし【涼】いかにも暑さを忘れさせるような、冷気が感じられるさまである。また、そのように、心に何の雑念もなく、爽やかな気持である。
- 〔作用を表すもの〕
- にあふ【似合】（自四）よく釣り合う。適合する。相応する。似つく。
- にあはし【似合】似合って見える。ふさわしい。相応している。につかわしい。
- ゆるく【緩】（自下二）ゆるくなる。ゆるむ。
- ゆるかしい【緩】ゆったりとしている。ゆとりがある。寛大である。
- うける【受】（他下一）他から加えられる作用を身に引き取る。また、他の言うことやすることに応じて行なう。
- うけらうし【受】事態が望ましいものであって、それを喜んで受け入れたいと思う心情である。

以上、平安時代において心的状態や心理活動を表す動詞が少し衰えを見せるようであるが、それ以降もやはり主として用いられた。また、「いさむ―いさまし」「とぼく―とぼかし」のような能動性や意図性を帯びるものは見られるものの、思考・願望などの精神活動を表す動詞はあまり用いられなくなつたようである。状態や動作・作用を表す動詞から派生した形容詞は、基本的に情意的意味を持つているが、「くもらはし」「あつかはし」「ゆるかしい」の三語は例外である。特に、動詞「くもる(曇)」は「心がはればれしない状態になる」という情意的意味を持つているが、派生した形容詞の方は情意を持つていないことは注意される。

上代と比べて、明らかに「動詞未然形(被覆形)+はし」は多用されるようになった。この六〇語の中で、「動詞未然形(被覆形)+はし」は一二語も見られた。「はし」は「し」の拡張形であり、「なげかはし」「につかはし」「ありつかはし」「いまめかはし」「そそかはし」「もどかはし」など多くの場合、「はし」と「し」はほぼ同じ意味になる。しかし、「いそがし」と「いそがはし」の場合、第三者の視点という点で使い分けがあるようである。また、「くもらはし」の意味を考えると、「はし」は「し」に比べて、状態性が強く、観察的な視点が介入しているのではないかと考えられる。ただ、語例は少ないので、詳しくはわからない。「いそがし」と「いそがはし」以外にも、「いまし」と「いまはし」も同様な視点から捉えてよいように思われる。

○いそがし

*石山寺本大般涅槃經平安初期点(850頃)「吾は今劇務(イソカシ)」
○いそがはし

*徒然草〔1331頃〕七五「走りていそがはしく、ほれてわすれたる事、人皆かくのごとし」

○いまし【忌】いまましい。忌み嫌うべきことである。腹立たしい。残念である。

*仮名草子・見ぬ京物語〔1659〕下「いましひ所業をすてて、浄土専念の宗旨をひろめ給へり」

○いまはし【忌】よくない事が起こる前兆のように感じられて、縁起が悪い。不吉である。

*平家〔13C前〕三・医師問答「何と候やらむ、あの御浄衣のよにいまはしきやうに見えさせおはしまし候」

「いまはし」は「いまふ（忌）」の形容詞化と考えられる。前章で述べたように、接尾語「ふ」が付いたもので、上代における「けがらはし」「かからはし」と同じ派生であると考えられる。このほか、「いみじ」「あまりし」の二語の語幹は動詞連用形であると考えられる。上代には動詞連用形が疊語形「わきわきし」しか見当たらなかったが、室町時代には「あまりし（余）」「おもぶせし（面伏）」のように、疊語形でなくとも用いられるようになったことは銘記される。

3 形容詞語幹と形容動詞語幹

単純に形容詞語幹そのものであるものは次の通りである。

例 おぞまし あらまし あやうし おおしい をさなし をそなし ちかし ふかし
ふるし

「おぞまし（悍）」「あらまし（荒）」の二語は平安時代に現れたものである。「おぞ

し」「あらし」はク活用形容詞であり、その語幹に情意的意味をもつ「ま」が接することによって、シク活用形容詞に転成された。上代において、ク活用形容詞からシク活用形容詞に転じる場合、疊語形にしなければならなかった。たとえば、「ながながし」「とほとほし」のようである。ここで挙げた「おぞまし」「あらまし」以外の室町時代に現れた七語は、ク活用形容の語幹に直接「し」がついたものである。ク活用形容詞から直接にシク活用形容詞に転成することができるようになったのは注目すべきである。中世における両活用形容詞について、詳しくは第六節に記述する。

次に、形容詞語幹が形容動詞語幹（もしくはそれ相当）であるものは次の通りである。例 かたくなし おろかしい こまかし あやかしい あはれし いかがし うつたうし すぐしい まめし えせわしい かたくなし そぞろはし

○かたくな【頑】（形動）①すなおでなく、心がねじけているさま。まちがった考えを固執しているさま。また、心がひねくれている、うちとけないさま。偏屈。片意地。②なかなか考えを変えないさま。いちずに思い込むさま。頑固。一徹。③愚かで物わかりの悪いさま。理解がにぶく、悟りが遅いさま。④教養がなく、見苦しいさま。情趣に欠け、ぶこつであるさま。不体裁なさま。無風流なさま。⑤手足などが欠けているさま。

○おろか【愚一・痴一・疎一】（名）（形動）（「か」は接尾語）ものごとの程度の不十分なさま、心、気持のゆるんでいるさまを表す。

○こまか【細】①非常に小さいさま。微細なさま。②繊細で美しいさま。上品でしとやかなさま。きめこまかで風情があるさま。こまやか。③くわしいさま。ことこ

まかであるさま。詳細。④念入りであるさま。こまごまと注意深くするさま。丁寧。綿密。また、ささいなことに、あれこれ気をとめるさま。⑤こまごまと親身に心の行き届いているさま。親切なさま。ねんごろなさま。

○あやか

①美しいさま。優雅なさま。②きやしやなさま。はかないさま。

○あわれ

【哀】「名」（形動）心の底からのしみじみとした感動や感情、また、そういう感情を起こさせる状況をいう。親愛、情趣、感激、哀憐、悲哀などの詠嘆的感情を広く表すが、近世以降は主として哀憐、悲哀の意に用いられる。

○いかが

【如何・奈何】（形動）どうかと思われるさま。考えものであること。↓

○うつたう

【鬱陶】（形動タリ）（一する）気がふさいではられしなさいこと。また、そのさま。

○すぐ

【直】（形動）まっすぐに曲がっていないさま。

○まめ

【忠実】（形動）まじめであるさま。誠実でうわついたところのないさま。

○えせ

【似非・似而非】（名）「形動」①見かけはそれらしく見えるが、実はそうではないこと。また、そのようなものにせ。②備えているはずの、また、備えていなければならぬ性質、才能、技量などが欠けている、あるいは劣っていること。

また、そのようなもの。とるにたりないこと。ばかなこと。また、そのようなもの。

○そぞろ

【漫】（形動）その人の思い（認識・意識・願望・良識・思慮・分別・関心な

ど）をはなれ、あるいは無視して、ある行為をしたり、ある状態になったりするさま。すずろ。

「かたくなし」は平安時代に現れ、この中で最も早いようである。「かたなし」の意味は「いすかし」などのような人の性質を表す語基と近く、この語だけシク活用となるのが早いのはそのような語義からの影響であると見られる。鎌倉時代に入つて、「おろか」「こまか」のような接尾語「か」による形容動詞がシク活用に用いられるようになったことも特徴的である。そして、室町時代に入ると、「まめし」「あやかしい」のような人の性質や接尾語「か」によるもの以外に、タリ活用形容動詞語幹の漢語「うつつう」など、形容動詞との混交はさらに広がりを見せていく。

4 その他の語基

それぞれの時代に新たに用いられるようになったと考えられるものは次のとおりである。

〔平安時代に新出した形容詞〕

あつし おびたし きびし けがし けはし せはし たけし ひすかし いかめ
しい かしまし むずかしい

〔鎌倉時代に新出した形容詞〕

いし はばし

〔室町時代に新出した形容詞〕

やかまし おそいし おそし おどろし けたまし さうざし さみし すくし つ
まし はつしい あやかしい むつかし すぐまし

次に、意味の上からは次のように分類される。

① 情意的意味を持つもの

〔心理状態〕

○むつかし【難・六借】機嫌が悪い。不快な表情や態度をあらわに見せている。

○はばし【憚・幅】はばかりられる。はばかりがある。気がおける。はばかりわし。

○おそいし 無気味で非常に恐ろしく感じられるさまである。

○おそし【恐】強烈でおそろしい。

○おどろし【恐】その物の様子が人間の理解の範囲を超えていて、無気味に感じられ、おびえる心地がする。

○さうざし 人気もなく、静かで、やるせないさまである。

〔評価〕

○けがし むさしくるしいさまである。歌語。

○ひすかし 愚かしくも片意地をはるさまである。

○いし【美】よい。好ましい。

○はつしい 危険なさまである。

〔感覚〕

○かしまし【喧】やかましい。さわがしい。そうぞうしい。耳障りである。かしがましい。

○まぶし【眩】明る過ぎて、目をあけていられない。明るく輝いていてまともに見られない。まばゆい。

○やかまし 音や声などが大きかったり、多く入り交じったりして、神経をいらだたせる。騒がしい。

○けたまし あまりにやかましくて、びっくりさせられるほどである。けたたましい。

② 状態的意味を持つもの

〔生活などの状況〕

○あつし【篤】病気がちである。病弱である。また、病気が重い。

○せはし【忙】煩わしく感じられるほど、息つく間もなく急ぎたてられたり、次々と用事が出来たりするさまである。

○すくし【健】心身ともに、何の障りもなく良好な状態である。

〔時間や量〕

○おびたし【夥】程度、数量が度をこえてはなはだしいさまを表す。

○つまし 余裕・ゆとりをいっさい認めず、支出などを最小限にとどめるさまである。

〔自然環境〕

○けはし【険】山や坂などの傾斜が急で、登るのに困難である。道が急峻である。

ほかに、「きびし（厳）」と「たけし（猛）」もあるが、ク活用形容詞からシク活用形容詞に転用したもので、ここで触れないことにする。また、「いかめし」「さみし」は上代の「いかし」「さびし」の語幹から転じた語である。

以上で示したように、平安時代以降、「語基＋し」の構造は激減した。特に、心理状態や評価などの情意的意味を持つものと、自然環境を表すものは、上代より少なくなつた。もう一つ注目されるのは、視覚・聴覚などの感覚を表す形容詞が平安時代から現れた点である。上代において、「おどろおどろし」「きらきらし」のような擬声語と考えられるものは疊語形容詞に見られるが、聴覚を表す語基をそのままシク活用にするのは見当たらないのである。

三―二 合成形式の語幹の性質

1 疊語形式の語幹

語幹が疊語形式を有する形態素には、名詞・形容詞・動詞・副詞・形容動詞などの性質に由来するものがある。そのそれぞれに相当するものを次に示す。

① 名詞の重複

「人を表す具体名詞」

○げすげすし 「げす（下衆）」（名）身分や素姓の卑しい人。下賤の人。

○かうがうし 「かみ（神）」（名）宗教的、民俗的信仰の対象。

○ひとびとし 「ひと（人）」生物中の一類としての人間。

○めめしい 「め（女）」（名）女。女性。

○ををこし 「をこ（痴）」愚かなこと。ばかげたこと。思慮の足りないことを行なうこと。また、そのさまや、その人。

○みこみこし 「みこ（神）」神に奉仕して、神楽（かぐら）などをする者。

人を表す名詞が形容詞を構成する場合、その名詞が情意的意味を持つ、あるいは、本来の意義から情意的意味が抽出できる。たとえば、「げす（下衆）」は「身分や素姓の卑しい人。下賤の人」の意味を表し、「品性が下劣である。下品である」のような評価的意味を持つため、疊語形容詞を構成することができる。「ひと（人）」「め（女）」の場合、本来の意味では、情意的意味を持っていないが、「人」と称する資格、「女」としての性質に相応しいかどうか、という評価的意味を加えることによって、疊語形容詞、ないし、そのままシク活用形容詞を構成することができる。

○げすげすし【下衆下衆】品格が劣り、いかにも下品な感じのするさまである。
○ひとひとし【人人】いかにも一人前らしいりっぱなさまである。

○めめし【女女】いかにも女のようなものである。女らしい。

また、「めめし」は、女の性質を十分に備えるという評価の意味を表す以外に、女を連想させる男にも用いられる。「かうがうし」「みこみこし」の意味は、この連想あるいは比喩な視点から見るのがわかりやすく、また、妥当であろう、

○めめし【女女】気持・態度などが柔弱である。未練がましい。いくじがない。ひきょうである。主に男性についていう。

* 栄花〔1028〕92頃〕玉の村菊「人中にかやうに物など聞ゆる、いとめめしくな
どある事なれど」

○かうがうし【神神】神聖で、おごそかに感じられるさまである。

○みこみこし【神子神子】いかにも神託を告げる神子を髣髴とさせる、神がかり的なさまである。また、そのようなことを信じこみやすいさまである。

もう一つ注目されるのは、他に対する評価だけでなく、自分に対する場合にも用いられる点である

○をこをこし【痴痴】甚だおろかしいさまである意で、自分の行為を面目ないものと卑下していうのに用いる。

* 花鳥余情〔1472〕五「をこになりぬ。おこおこしくなるなり。あなづらはしくなる心なり」

〔物や現象を表す具体名詞〕

- かどかどし 「かど（角）」（名）物のとがって突き出た部分。
- そばそばし 「そば（稜）」（名）物のかど。りょう。稜角。
- はなばなし 「はな（花）」（名）植物の器官の一つで、
- そらぞらし 「そら（空）」地上の上方で、神の世界と想像した天より下の空間。
- あわあわしい 「あわ（泡・沫）」液体の中に空気、ガスなどの気体を含んで、まるくふくれたもの。

○いぼいぼしい 「いぼ（疣）」皮膚にできる小さな突起物。

○どくどくし 「どく（毒）」毒薬。

○ほねほねし 「ほね（骨）」脊椎動物の内骨格を構成する、支持器官の一つ。

○ゆめゆめし 「ゆめ（夢）」睡眠中に、いろいろな物事を現実のことにように見たり聞いたり感じたりする現象。

物を表す名詞の場合、その名詞本来の意味と派生意味は両方ともシク活用するようで、前者は多く状態形容を表し、後者は一般的に評価の意味を表す。たとえば、

○かどかどし 【角角】①物がかどだっている。かどが多い。かどばっている。②性格が円満でなくかどだっている。とげとげしい。圭角が多い。

○そばそばし 【稜稜】①かどばっている。かどだつ。②よそよそしい。しっくりいかない。親しくない。

また、疊語形によって、評価など情意的意味のみを表すものがある。この場合、名詞の派生義から評価の意味が成り立つわけではなく、名詞のある特徴に注目し、それを疊語形で強調することによって、評価の意味が成り立つのである。たとえば、花の美しい色彩、

空の広く物がなさ、疣の小ささ、夢のはかなさを強調する。

○はなばなし【花花】はなやかである。はでやかである。みごとである。

○そらぞらし【空空】空虚である。うつろである。

○いぼいぼしい【疣疣】女性語。小さい。少ない。

○ゆめゆめし【夢夢】①夢のようである。夢のように当てにならない。②きわめてわずかである。はなはだ軽少である。(②は女性語である)

「ゆめゆめし」の意味①のように、物や現象を表す名詞も、比喩的な形容に用いられるものがある。

○あわあわしい【沫沫】(雪などが)あわのように、いかにもくずれやすく、消えやすい感じである。

○どくどくし 毒を含んで、いかにも恐ろしげに感じられるさまである。

○ほねほねし いかにも気骨があつて、かたくるしさが目立つさまである。

〔抽象概念を表す名詞〕

○うひうひし 「うひ(初)」(名)最初。初め。

○かひがひし 「かひ(甲斐)」(名)ある行為に値するだけのしるし。ききめ。効果。

○ことごとし 「こと(事)」(名)時間的事態一般を広く指す語。

○はかばかし 「はか(果)」(名)目あて。あてど。はかり。

○ものものし 「もの(物)」(名)なんらかの形をそなえた物体一般をいう。

○ゆゑゆゑし 「ゆゑ(故)」(名)深い理由や原因。また、由来。

○よしよしし 「よし(由)」(名)物事の起こった理由。由来。わけ。いわれ。

- よそよそし 「よそ（余所）」（名）自分とは別の世界に属すると認識される物事や人。
- しらしらし 「しろ（白）」色の名。雪、塩などの色。
- あいあいし 「あい（愛）」親子、兄弟などが互いにかわいがり、いつくしみあう心。
- いしいしい 「いし（以次）」官位地位などによる席順が、上席の人に次ぐこと。
- ふくふくし 「ふく（福）」さいわい。しあわせ。幸福。幸運。
- きはきはし 「きは（際）」物と物との接するところ。境目。端。仕切り。
- らうらうし 「らう（良）」よいこと。すぐれていること。また、そのもの。
- 抽象的概念を表す名詞の場合、名詞を重ねてそのまま状態の表現としたものが多い。つまり、多くの場合、単純に物事の状態はその抽象的概念であることを意味する。
- うひうひし 【初初】①その人にとって初めて経験することなので、そのことに馴れないさまである。②ある事柄が実現し始めて、その機能がまだ十分に軌道に乗らない状態である。特に、曆道関係に言う。
- かひがひし 【甲斐甲斐】物事を行なったり希望したりする張り合いのあるさまである。かいのあるさまである。期待の通りである。
- ことことし 【事事】何か特別な事情がありそうに思われるほど、事態の規模・程度などが並外れているさまである。
- はかばかし 期待されるだけの、目に見える進手・効果が認められるさまである。
- ものものし 【物物】その外観・装いなどに、相手を威圧するようないかめしさが感じられるさまである。
- ゆゑゆゑし 【故故】いかにも由緒ありげな格調の高さがみられるさまである。

- よしよしし【**由由**】いかにもいわくありげなさまである。
- よそよそし【**余所余所**】期待に反して、その言行が、隔てをおいた、他人行儀なさまである。
- しらしらし【**白白**】本当のところがあまにもあからさまに見えて気後れするばかりである。
- あいあいし【**愛愛**】顔つき・容姿などが愛らしく魅力的である。
- いしいしい【**以次以次**】物事が一定の順序に従って、次々と連なり続くさまである。
- ふくふくし【**福福**】見るからには贅をつくしていたり、でっぷりしていたりして、富んで豊かそうな印象を与えるさまである。
- きはきはし【**際際**】物事を水ぎわだつてあざやかに処理するさまである。
- らうらうし【**良良**】見るからに上品で美しいさまである。
- ちなみに、「ものものし」「はかばかし」「ことことし」など抽象的概念を表す名詞の場合、状態の形容から程度を表す意味を発生することもあるが、この点は後述することとして、ここで触れない。「かどまし」「げすし」「はかし」「ひとし」など、疊語形にたよらずにシク活用形容詞語幹になれるものもある。しかし、その多くの場合は、「かどかどし」「げすげすし」「はかばかし」「ひとびとし」のように、疊語形で形容詞の語幹に現れている。

② 形容詞語幹の重複

上代に「ながながし」「とほとほし」のようなく活用語幹を重ねたものは、平安時代に

入ると多用されるようになる。ク活用形容詞語幹の疊語形は基本的に強調を表すが、上記二語のように、主観的感覚を介入させるほかに、ク活用形容詞の持つ属性を強調した結果として、評価や程度の意味を帯びるものも多い。また、形容詞本来の意味を強調しないものもあり、たとえば「おもおもし」「かるかるし」は、新たに用いられるようになった当時においては「重さ」を強調する表現ではなかった。

〔評価や程度の付加〕

○あらあらし【**洪荒**】①動きや勢いが、度はずれて激しく強い状態である。特に、自然現象についていうことが多い。②人の性情が強烈で、人並はずれた乱暴な言動をするさまである。③言葉遣いなどが、適正さを欠いていて、粗野である。

○あらあらし【**粗粗**】①目がまばらであったり、物の形態が適正な細かさでなかったりして、品質がそのものとしてあるべき基準に達していないとみなされる状態である。②書札で、自分の送った品などについて、取るにたらない粗末なものであると謙遜しているのに用いる。

○あはあはし【**淡淡**】思慮が浅く、軽軽しい言動をとるさまである。軽薄である。

○うとうとし【**疎疎**】①人と人との音信・交際がとだえたり、間柄が親密でなかったりして、隔てをおいた感じがするさまである。②その事柄に対して深くは関心をもたず、ひとそれとの関係が縁遠い状態である。③気がふさいで、晴晴しない心情である。

○おもおもし【**重重**】①人の社会的地位や身分が高く、それ相応のどっしりとした威厳

○かるがるし 【**輕輕**】言行などが、そのものに期待される威厳や慎重さに欠けるさまである。あるさまである。②言動が軽率でなく、ゆったりと落ち着いてあるさまである。慎重である。③重大な意味をもっているさまである。重要である。

○せばせばし 【**狹狭**】「せませまし」とも。①その場が、いかにもせまいと感じられるさまである。②いかにも世間に身の置き所がないと感じられるさまである。

③その人の言行に、視野・度量の小ささが実感されるさまである。

○はやばやし 【**早早**】期待する以上に迅速に事がなされるさまである。

○わかわかしい 【**若若**】①たいそう子どもっぽい。おとなげない。若いゆえに未熟である。子どもらしい。②たいそう若い。また、いかにも若く見える。

○あさあさし 【**淺淺**】考えがあさはかである。輕輕しく、いかげんである。

○いたいたし 【**痛痛**】①他人の悲惨な状態に対して、ひどく同情され、心が痛むさまである。②いたましく思われるほど、手厳しく取扱うさまである。③事態の程度が、度を過ぎて甚だしいさまである。

○たけだけし 【**猛猛**】人を人とも思わない烈しい気性をもっているさまである。

○ちかぢかし 【**近近**】問題とする事態のあったのが、ごく最近のことである。

○にがにがし 【**苦苦**】①当面する事態が意に反したものであって、きわめて不快に、また、不本意に思われるさまである。②媚びたところがなく、とつつきの悪いさまである。

○よわよわし 【**弱弱**】いかにも力がないように見えるさまである。

○あかあかし【赤赤】物の色がきわめて赤く感じられるさまである。まっかである。

○うまうましい だれにでも好感を持たれるようにじょうずにものを言ったり、行なった
りする様子。

○くどくどし あることを言うのに、その表現が簡潔でなく、不費用に同じことを繰返す
さまである。

○こはごはし【強強】①事物の性質がいかにも硬そうで、弾力性・柔軟性に欠けていると
かんじられるさまである。②言葉づかいや振舞などが、いかにも無骨な感
じである。また、歌などの表現が粗野で、繊細さに欠ける感じである。③
勢いが強く、容易に屈伏しないさまである。

○ふかぶかし【深深】どこまでも深いさまである。

③ 動詞の重複

「存在状況と関係あるもの」

○ありありし【在在】①実際に目前にない事物について、言葉などで表現されたことが、
いかにもそのとおりに実在するように思われるさまである。②事物のあり
方・様子などが、そのものにあるべき、ふさわしいものとして是認される
さまである。

○はえばえし【映映】①ひときわはなやかで、人目をひくさまである。②盛んな勢いがある
たりを払わんばかりに、顕著なさまである。

○はればれし【晴晴】①少しの曇りやかげりもなく、ひときわ明るく感じられる雰囲気

ある。②心に何のわだかまりもなく、明るい気分である。③公の注目が集まる、おもてだったさまである。

○あてあてし

【当当】①対象となる物が直接目に入って、強い刺激を感じるさまである。

②当人なり事情を知る第三者なりにたやすく察せられるように、いかにもあてつけがましく人の欠点や弱点を指摘して言うさまである。

○ばけばけし

【化化】いかにもつくりものめいて、あやしく思われるさまである。

○うかうかし

①思慮・分別が十分でなく、軽率な言動にはしりがちな性情である。②人の言動などが、確固たる根拠もなく、いかげんになされるさまである。③ある事に心を奪われて、他のことを考慮する余裕もなく、放心した状態にある。

〔情意と関係あるもの〕

○おめおめし

①当面する事態に気おくれして、引下がるさまである。弱気な不甲斐ないさまである。②ある事態に対してあっさりと思いつき切ることができなくて、未練がましいさまである。

○なれなれし

【馴馴】いかにも親しげなふうに、無遠慮にふるまうさまである。

○ほれほれし

【惚惚】①意識がぼんやりとして、物事をきちんと認識できない状態である。②恋慕の情に冷静さをなくした状態である。

○いまいみし

大変りっぱである。すばらしい。「いまいましい（忌忌）」に同じ。

○いまいまし

【忌忌】①ある事を言ったりしたりすると、それが縁になって凶事が起こると言われているような、不吉なことを連想させる状態である。また、不吉

な感じがするので、それをさげたい気持である。②事物が人に不快感を与え、受入れられないものとして強く非難される状態にある。③「あな（あら）いまいまし」などの言い方で、物事にたいする嫌悪・反感の情を言い表す。

○いまいまはし 「いまいまし（忌忌）」に同じ。

動詞の意味から見ると、まず、動作性や意志性の強い動詞は見当たらない。状態を表す動詞の中で、表面化して察せられる存在状況と関係ある動詞は、畳語形容詞の語幹になりやすい。また、情意を表す動詞の中で、自分から他に対する感情や態度に関係する動詞（対他的感情動詞）も畳語形容詞の語幹に現れやすいようである。動詞連用形の重複は一般的に認められるが、ただ「うかうかし」「いまいまし」のような動詞未然形（被覆形）の重複は少ない。

④ 副詞の重複

○げにげにし【実実】①その人物や言動の実際に接してみて、それを信頼しうるものと評価できるさまである意を表す。②内実はどうであろうと、一見いかにも辻褄を合せてあるように思われるさまである。③行動の実際が、気概に裏打ちされている、他に批判をさしはさませる余地を与えないさまである意を表す。

○いよいよし【弥】事態の程度がある段階にいたってことさらに甚だしくなるさまである。○しかしかし【確確】これこれであるとはっきり言い立てることができるさまである。多

く打消の言い方に用いられ、事態が期待されるほどはかばかしくないさまである意を表す。

副詞の重複は上代になかったが、鎌倉時代になると、「げにげにし」が現れるようになる。意味の上から見ると、副詞「げに」は「実に」あるいは「現に」と考えられ、重ねて強調したものであるという点では「げにまこと」と同じ意味の語である。「しか」は副詞「しか（然）」から転じたものと考えられ、「げに（実）」と「しか（確）」は意味的に類似している。「いよ」は副詞「いや（弥）」の交替形で程度を表すものであり、「いよし」のように、直接シク活用形容詞の語幹に現れるものでもある。

⑤ 形容動詞語幹の重複

○あだあだし【徒徒】移り気で、浮気っぽい性質である。

○あだ【徒】（形動）表面だけで、実のないさま。

○うつうつし【鬱鬱】天気が曇っていて、陰気である。

○うつ【鬱】（形動タリ）草木の茂っていること。また、そのさま。転じて、物事の盛んなこと。また、そのさま。

○ぎやうぎやうし おおげさである。ぎょうさんである。たいそうである。

○ぎょう【仰】程度のはなはだしいさま。おおげさなさま。仰山。

○こまごまし【細細】①ひとところに集まっている物の一つ一つが、ごく小さな形状を呈しているさまである。②物事のしかたが微に入り細にわたっているさまである。

- こま【細】（形動）小さいさま。こまかいさま。
- けけし 他人行儀で堅苦しく、親しみにくいさまである。
- け【異】（形動）普通、一般とは違っているさま。他のものとは異なっているさま。
- すぐすぐし【直直】いかにも正直である。
- すぐ【直】まっすぐで曲がっていないさま。
- せつせつし【切切】つらさや苦しさが、しきりに身にしみて実感されるさまである。
- せつ【切】心の状態や程度のはなはだしいさま。せち。
- ぞうぞうしい【雑雑】卑しく取るに足りない。身分が低く下品である。また、乱れている。
- ぞう【雑】（名）（形動）入りまじること。純粹でないこと。また、そのものやそのさま。ざつ。
- びびし【美美】装いなどが見た目に華麗で、あたりを払うばかりのさまである。
- び【美】（名）（形動）形、色彩が整ってきれいであること。うつくしいこと。また、そのさま。
- まがまがし 不吉な予感がするほどに、その言行が常軌を逸しているさまである。
- まが【禍】よくないこと。悪いこと。また、そのさま。わざわい。
- まめまめし 少しも怠ることなく、こまごまと、きまじめにとめるさまである。
- まめ【忠実・実】まじめであるさま。誠実でうわついたところのないさま。

⑥ その他の語基の重複

〔語素類〕

○いらいらし 【苛苛】 (語素「いら(苛)」)

○くせぐせし 【曲曲】 (語素「くせ(曲)」)

○あざあざし 【鮮鮮】 (アザは「あざけり」「あざむき」と同根で、心情に関わりなく強烈にあらわれることをいうか。)

○うらうらし (名詞「うら(心)」か)

○せきせきし 【戚戚】

○てふてふし 【喋喋】

○ままし 【継】

〔シク活用形容詞の語幹に成り得るもの〕

○なまなまし 【生生】

○いかいかし 【巖巖】

○くやくやし (「悔し」の「くや」か)

○さびさびし 【寂寂】

○さかさかし 【賢賢】

○せはせはし 【忙忙】

○ひさひさしい 【久久】

〔変形類〕

○おぼおぼしい (形動「おぼろ(朧)」)

○とがとがし (名詞「とげ(棘)」)

- のろのろし【呪呪】（動詞「呪う」）
 - やつやつし【婁婁】（動詞の名詞形「やつれ（婁）」）
 - 「その他」
 - りりし【凜凜・律律】（不明、「りり」はタリ形容動詞）
 - わわし（大声で騒ぐ意の動詞「わわる」とあるいは同根で、擬声語か）
 - あたたし（副詞の「あた」か）
 - あたたし（前項の略で、副詞の「あた」か）
 - くれぐれし【呉呉】（動詞「くれる」の「くれ」か）
 - そうぞうし【忿忿】（擬声語か）
 - つべつべし（不明、擬態語か）
 - てばてばし（不明、擬態語か）
 - にぎにぎし【賑賑】（「賑やか」の同根）
- 疊語形式の語幹の場合、「動詞未然形（被覆形）の重複」「副詞の重複」「形容動詞語幹の重複」は上代には見当たらなかった。「動詞未然形（被覆形）の重複」と「形容動詞語幹の重複」は平安時代から、「副詞の重複」は鎌倉時代から現れたようである。
- 名詞の場合、性質の抽出以外に、類似性からの連想で比喩的に疊語形を用いることが見られるようになった。形容詞語幹の場合は、主観性の介入だけでなく、評価と程度の意味を帯びることが多く、動詞の場合は、存在状況や対他的感情動詞が疊語形になりやすい。また、動詞未然形（被覆形）の重複も認められる。ほかに副詞と形容動詞語幹の重複も見られ、さらにさまざまな語素類が疊語形容詞の語幹に現れている。要するに、平安時代以

降、疊語形容詞の形成は非常に盛んであつて、その重複要素の範囲はかなりの広がりを見せたと言える。

この中で、注目すべきことは、漢語の介入である。たとえば、「愛愛し」「福福し」「毒毒し」「良良し」「戚戚し」「喋喋し」「美美し」「雑雑し」などである。このうち、「美美し」だけは早くも平安時代に現れ、「愛愛し」と「福福し」の二語は鎌倉時代に現れる。ちなみに、『日本国語大辞典』（二〇〇一）では、「びびし（美美）」と名詞「び（美）」の最も古い挙例は次のとおりである。

*蜻蛉〔974頃〕下・天延二年「八月まつほどは、そこにひひしうもてなし給ふとか、世にいふめる」

*今昔〔1120頃か〕一・六「形美也と云へども、心に无常を念（おもは）ず、死て必ず三悪道の中に可墮し」

つまり、「び（美）」を認める時期は「びびし（美）」よりも遅れているようである。そして、一音節語「美」に対する漢語としての認識もさらに深い検討が必要であるが、平安時代以降、遅くとも鎌倉時代以降に、形容詞の語幹に漢語として現れることは間違いない。ちなみに、「愛」「福」「良」のように、漢語自体の出現時期は平安時代前に遡れるものもあるが、形容詞語幹に用いられるのは平安時代以降である。たとえば、「愛」は、『日本国語大辞典』（二〇〇一）の「語誌」に述べられているように、古くから用いられている仏教語としての用法を除くと、ふつうには「うるはし」「めぐし」「うつくし」などのように訓読されることが多く、それらの語の意味するところは、主として親子・夫婦などの身近な人への愛情を表している。中古以降は音読みの「愛」が漢語として定着し、

「愛する」の動詞用法とともに、人に好感を与える魅力を表す用法なども生じた。この点では、動詞の用法は形容詞に先立つようである。室町時代になると、漢語が一般的に形容詞語幹にも用いられるが、ただ疊語形容詞や接尾語による派生形容詞の語幹に限られるようである。

2 その他の合成形式の語幹

平安時代以降、合成形容詞は発展し、疊語形容詞以外に、複合形容詞や派生形容詞も大量に形成されるようになる。上代の「名詞＋形容詞」と「動詞連用形＋形容詞」はより広い範囲で用いられる一方、「副詞＋形容詞」と「形容詞語幹＋形容詞」の形式が現れ始め、接辞による派生が著しく発展した

① 複合形式の語幹

名詞＋形容詞

〔体の部位〕

うらさびし	【心寂】	こころさわがしい	【心騒】	こころやましい	【心疾】	こころ
ゆかしい	【心床】	みみがしまし	【耳喧】	こころすずし	【心涼】	めはづかし
恥	【こころめづらし】	【心珍】	おもきらはし	【面嫌】	おもはづかし	【面恥】
こらいそがはし	【心忙】	こころうれし	【心嬉】	こころさびしい	【心寂】	こころ
むつかし	【心難】	みすぼらし	【身窄】	みみかしましい	【耳聾】	

〔主語／対象〕

ことよろし	【事宜し】	さまあし	【様悪】	としひさしい	【年久】	なかむつまじい
-------	-------	------	------	--------	------	---------

【仲睦】 はらあし【腹悪】 ひとさわがしい【人騒】 ことあたらし【事新】 こ
 めめづらしい【声珍】 ことあし【事悪】 ことさびし【事寂】 ことすさまじ【事
 凄】 ことそうぞうし【事忿忿】 ことばさかし【言葉賢】 ことむつかし【事難】
 ことめづらし【事珍】 はなめづらし【花珍】 ひとおそろし【人恐】 ひとこひし
 【人恋】

〔場所・時間〕

おくゆかし【奥床】 あさすさまじ【朝冷】 おくだのもし【奥頼】 かたはらさび
 し【傍寂】

〔原因・理由〕

くしをし【口惜】 くちはづかし【口恥】 こといそがはし【事忙】
 〔程度〕

ほどひさしい【程久】

複合語の語構成から見ると、「名詞＋形容詞」は主に「が」格で結ばれる統語構造である。複合形容詞の前項は、体の部分を表す名詞である場合、基本的に意味に影響が及ばない。影響があるのは、「こころいそがはし」のように、形容詞の表現範囲を内面化する働きがある場合だけであろう。また、前項に形容詞の主語あるいは対象を限定する名詞が用いられる場合が多い。上記の前項を分けた場合、「体の部位」「主語／対象」は基本

「が」格で結ばれると考えられるが、「場所・時間」「原因・理由」「程度」は基本「に」格で結ばれると考えてよいだろう。

ちなみに、「くちをし」と「くちはづかし」の場合、「くち（口）」は体の部位である

が、「みみかしましい（耳齧）」など感覚部位を表すものと異なり、「うわさ」などの抽象的な意味を表すのであるから、「原因・理由」に分けた方は妥当であると思われる。

○こといそがはし【口惜】は「原因・理由」でよいだろう。

○くちをし【口惜】 相手から不当な仕打ちを受けて、屈辱感を覚え、無念に思う気持ちである。

○くちはづかし【口恥し】 他の人に、自分のことをあれこれうわさされて、きまり悪く思われるさまである。

○こといそがはし【事忙】何かと用事があってその処理に追われる状態である。

「名詞＋形容詞」は上代と比べて平安時代以降増加し、また、副詞と形容詞の複合、形容詞同士の複合も見られるようになった。副詞との複合では「いち」「いや」を用い、程度を表し、形容詞との複合では類義あるいは対義の並列関係を表すものが現れた。「動詞連用形＋形容詞」は主語を表す統語関係で、「語基＋形容詞」の二語は同じ意味の語基を重ねた並列関係である。

【動詞連用形＋形容詞】

のこりをしい【残惜】 まちどほし【待遠】 まちひさし【待久】

【副詞＋形容詞】

いちしるし【著】 いやけし【弥怪】 いやめづらし【弥珍】

【形容詞語幹＋形容詞】

うれしがなし【嬉悲】 おもしろをかし【面白をかし】

【語基＋形容詞】

かしかまし かまびすし【喧】

② 派生形式の語幹

上代において、シク活用形容詞と接辞の結合は極めて少なかった。平安時代に入ると、まず、上代に見られた「もの」は接頭語として定着し、優れた生産性を見せた。また、室町時代に入って、程度を表す接頭語「こ」もシク活用形容詞に多く用いられるようになった。このほか、生産性はないが、「あひ(相)」「うそ」など多くの接頭語がシク活用形容詞と結合する例が見られる。「なんとなくその感じが生じること」と「程度」を表すものが多いようである。前述した副詞「いち」「いや」と名詞「ほど」は自立性があるが、基本的に同じく程度を強調するものである。

〔原因・理由（「なんとなく／どこか」などの意）〕

もの+形容詞 ものおそろしい【物恐】 ものおもわしい【物思】 ものぐるはし

【物狂】 ものさびし【物淋】 ものさわがし【物騒】 ものすさま

じい【物凄】 ものなつかしい【物懐】 ものほしい【物欲】 も

のわびしい【物侘】 ものめずらしい【物珍】

うそ+形容詞 うそがなし【うそ悲】 うそすさまし【うそ凄】 うそはづかし【う

そ恥】

そら+形容詞 そらおそろしい【空恐】 そらはづかし【空恥】

なま+形容詞 なまはずかしい【生恥】

うつ+形容詞 うつぱづかし【打恥】

そこ＋形容詞　そこすさまじ

〔程度を表すもの〕

こ＋形容詞

こざかし【小賢】　こさびし【小寂】　こすさまじ【小凄】　こすず
し【小涼】　こたのし【小楽】　こむずかしい【小難】　こむつかし
こやさし

いく＋形容詞

いくひさし【幾久】

いら＋形容詞

いらひどし【苛酷】

うす＋形容詞

うすかうばし【薄香】

おほ＋形容詞

おほひさし【大久】

ま＋形容詞

まあたあらしい【真新】

〔関係・時間〕

あい＋形容詞

あいたしい【相親】　あひおなじ【相同】

すえ＋形容詞

すえたのもしい【末頼】

〔美化するもの〕

お＋形容詞

おいぼいぼしい

以上、平安時代から合成シク活用形容詞が大量に造られ、語幹は多様性を見せるようになる。疊語形式を含む複合形式の語幹や、接頭語の添加による派生形式の語幹のほか、「がまし」「らし」などの接尾語の添加によるものも注目される。次の節では、接尾語「がまし」「らし」とその派生語について考察を行うこととする。

第四節 室町時代シク活用形容詞の接尾語の性質

四―一 接尾語「がまし」とその派生語

1 接尾語「がまし」の辞書記述

接尾語「がまし」は『日本国語大辞典』（二〇〇一）には次のように記されている。動詞の連用形、体言、副詞などに付いて、その状態や物に似ている意を表す。：らしい。：のきらいがある。：の傾向がある。

*枕〔100終〕一三三・頭の弁の御もとより「女のすこし我はと思ひたるは、歌よみがましくぞある。さらぬこそ語らひよけれ」

【語誌】

（1）和文系の文脈に限って現われ、古代から近代に至るまで造語能力を保持し続けている。一方、類義語のガハシは、和文・漢文訓読両系の文脈に現われるが、造語能力を十分に發揮せず、早く衰退する。

（2）中世以降、「望ましくない。不快である」といった否定的な評価の意味を示す方向へ傾いてゆくが、中古には「はれがまし」「ひとがまし」のように、肯定的な意味を表す語もあり、否定的な評価の意味に偏っているものではなかった。

次に、『時代別国語大辞典 室町時代編』（一九八五―二〇〇〇）の「がまし」〔接尾〕の項目には次のような意味記述が見られる。

- ① いかにもそれらしい様子が、言動に反映されているさまである。
- ② 形式的にはそれらしく整えられているさまである。
- ③ どのような観点からしても、そうである虞れが感じられる

現代語の「いかにも：のようすだ」「：らしい」という意味に当たる接尾語である。

2 接尾語「がまし」の出現時期

接尾語「がまし」は次のように平安中期から用例が見え始める。『日本国語大辞典』(二〇〇一)に立項された次の八語の最も古い挙例を示す。

〔名詞＋がまし〕

○をこがまし【痴・烏澁】ばかばかしくて、笑いを誘うようなさま。ばかげている。みつともない。いい物笑いになりそうだ。

*落窪〔100C後〕一「形うちふくれて、いとをこがましと、少将つくづくとかいばみ臥したり」

○かごとがましい【託言】何かのことよせて恨みごとを言っているようだ。嘆き悲しんでいるようだ。恨みがましい。

*源氏〔1001〜14頃〕松風「昔物語に、みこの住み給ひけるありさまなど語らせ給ふに、つくろはれたる水の音なひ、かごとがましう聞こゆ」

○はちがまし【恥】外聞が悪い。恥さらしだ。恥ずかしい。

*落窪〔100C後〕二「北の方、此度の御婿取のはちがましき事、宿世にやおはしけん」

○ひとがまし【人】相当の人物らしい。人にしられるほどである。

*栄花〔1028〜92頃〕かがやく藤壺「世の中に少し人に知られ、人がましき名僧などは」

〔動詞連用形＋がまし〕

○しれがまし【痴】おろかな様子である。ばかげている。ばからしい。

*落窪〔100後〕一「ともかくも御心、さてつかひよしとはしもの給ひそ。いとしれがまし」

○はれがまし【晴】表だっている。公である。表だつて派手である。

*夜の寢覚〔1045〕二「髪、かたちきよらにて、君にぐし奉りて、はれがましからんに」

○へだてがましい【隔】うちとけない様子である。心にへだてのある様子である。

*源氏〔1001〕14頃「若菜上「たはぶれにてもかやうにへだてがましき事なさかしがり聞えさせ給ひそ」

〔副詞＋がまし〕

○わざとがまし【態】ことさらめいて大げさである。いかにも意識的な感じである。

*源氏〔1001〕14頃「梅枝「唐の本などの、いとわざとがましき、沈の箱に入れて」

最も成立の古い資料は『落窪物語』で、接尾語「がまし」は十世紀頃に使用が始まったと考えられる。また、同じ頃に成立した『大和物語』には「ことがまし」の使用が見える。

*大和〔947〕957頃「いとことがましき物なりければ、かかる文通はしける気色ありと見て、はては文をだにえ通はさず、責めまもりつつ」（御巫本附載）

「ことがまし」は「口やかましい」の意で、「がまし」は形容詞「かまし」（囁）であるが、意味が形式化して、程度のはなはだしさを表す接尾語となったとも考えられる。

3 接尾語「がまし」の意味特徴

『日本古典文学全集』（小学館・ジャッパンレレッジデータベース）から平安時代に現れた接尾語「がまし」を用いる語例を集め、その上接部分の品詞性によってまとめると、次の通りである。

〔名詞＋がまし〕

をこがまし／盗人がまし／恥がまし／歌がまし／塵がまし／かごとがまし／猿樂がまし／事がまし／人がまし／懸想がまし

* 「うちふくれて、いとをこがまし」と、少将つくづくとかいばみ臥したり。（落窪物語）

【現代語訳】「身体つきはぶくぶく超え（子）えていて、ひどく愚劣だ」と少将はつくづく、機長の隙間から覗き見している。

* 盗人がましき童にて、くやつが「よくなさむ」とて、したるにこそあめれ。（落窪物語）

【現代語訳】盗人根性の女の童で、あいつが「落窪の君をよい身分にしよう」と思っていたことのようにだ。

* 北の方、この度の御婿どりの恥がましきこと、宿世にやおはしけむ、いつしかといふやうに孕みたまへれば、心地よげに見えたまひし北の方も、思ひまつはれてなむおはすめる。（落窪物語）

【現代語訳】北の方がこのたびの四の君と面白の駒（こま）との結婚は、外聞の悪いことと思っていらいっしやったのですが、前世の因縁があったのでございましょうか、いつ

の間にやらご懐妊なされたので、以前は得意げにみえていらつしやった北の方も思案にくれていらつしやるようです

* つゆとりわきたる方もなくて、さすがに歌がましう、われはと思へるさまに、最初によりみ出ではべらむ、亡き人のためにもいとほしうはべる。(枕草子)

【現代語訳】少しもこれといった点もなく、それでもいかにも歌らしく、自分こそはと思っているふうに、得意然として真つ先に詠み出したりいたしましては、亡き人のためにも気の毒でございます

* はかなきことを聞こえ慰め、泣きみ笑ひみ紛らはしつる人さへなくて、夜も塵がましき御帳の中もかたはらさびしくもの悲しく思さる。(源氏物語)

【現代語訳】たわいのない話をお聞かせしてお慰め申し、泣いたり笑ったりしてお気を紛らわしてくれた侍従までが今はいなくなつたのだから、夜も、塵の積る御帳の中の独り寝の寂しさに、ただ何かと悲しい思いでいらつしやる。

* 昔物語に、親王の住みたまひけるありさまなど語らせたまふに、繕はれたる水の音なひかごとがましう聞こゆ。(源氏物語)

【現代語訳】昔の思い出話として、このお邸(やしき)に中務宮(なかつかさのみや)がお住まいになつておられたころの様子などを尼君に語らせていらつしやると、手入れの終つた遣水の音が、まるで訴えでもするかのように聞えてくる。

* 影がましようののしりをる顔どもも、夜に入りては、なかなか、いますこし掲焉なる灯影に、猿樂がましくわびしげ二人わろげなるなど、さまざまに、げにいとなべてならず、さまざま異なるわざなりけり。(源氏物語)

【現代語訳】やかましく大声を立てている博士たちの顔も、夜になつては、かえつて昼よりも一段と明るい灯の光を受けて、道化じみていたり、みすぼらしげだったり、不体裁であつたりなど、さまざまのていたらくで、なるほど常とは異なつて、いかにも異様な有様なのであつた。

*さがなく、事がましきも、しばしはなまむつかしう、わづらはしきやうに憚らることあれど、それにしも従ひはつまじきわざなれば、事の乱れ出で來ぬる後、我も人も憎げにあきたしや。(源氏物語)

【現代語訳】口やかましくて事を荒だてがちなものも、しばらくの間は何やらうるさく面倒なものですから、つい遠慮されるものですが、いつまでも言いなりになつてゐるわけにもいかなないことですから、何か一悶着でも起るとなると、こちらも相手もお互いに憎らしく、愛想も尽きるものです。

*ただ御祈りの事をのみぞいそがせたまへど、いさや、世の中にすこし人に知られ、人がましき名僧などは、このわたりに親しきさまなることはわづらはしきことに思ひて、召し遣はせたまへど、(下略)(栄花物語)

【現代語訳】ひたすら御祈禱のことばかりをお支度になるけれど、さて何としたことか、世間に多少とも人に知られ、一人前に名の通つた僧などは、この一門と親密な様子を見せるのを厄介なことに思い、お呼び寄せに使者をお出しになるけれど、

*また、懸想がましくゆき戯れたる気色、はたゆめになく、大殿、内裏の御遊びなどよりはことなる夜離れなどもしたまはぬを、(下略)(とりかへばや物語)

【現代語訳】それに、女性に言い寄つて遊び歩くとといった気配はまた、まったくなく、

関白邸か宮中での管絃の御遊びの折以外は、とくに外泊などもなさらないのだが、

〔動詞連用形＋がまし〕

痴れがまし／歌よみがまし／すきがまし／ねぢけがまし／くつろぎがまし／罪得がまし／焦られがまし／あざれがまし／隔てがまし／胸つぶれがまし／晴れがまし／乱れがまし／見えきこえがまし／隔たりがまし／紛れがまし／かこちがまし／文書きがまし

*痴れがましうをかしうて、「やや、起きたまへ。聞こゆべきことありてなむ、申してき」とのたまへば、足手あはせて、いとよくのびのびして、からうじて起き出で、手洗ひひたり。(落窪物語)

【現代語訳】ばかばかしくおかしい気がして、少将は、「おいおい、起きなさい。お話し申しあげなければならぬことがあって、あなたの父君に先ほどご挨拶申しました」とおっしゃると、少輔は手足を揃えてうんと気持よくのびをして、やっと起き上がって手を洗っていた。

*女の、すこしわれはと思ひたるは、歌よみがましくぞある。(枕草子)

【現代語訳】女で、少し自分こそはと思っている人は、歌詠みめいたふるまいをするものです。そうでないのこそつきあいやすい。

*右大臣のいたはりかしづきたまふ住み処は、この君もいともものうくして、すきがましきあだ人なり。(源氏物語)

【現代語訳】舅の右大臣が大事にしてお世話申しあげられる北の方のもとには、この中将の君もおつくうがって寄りつこうともせず、どうも色恋事に熱心な好き人である。

*今は、ただ、品にもよらじ、容貌をばさらにも言はじ、いと口惜しくねぢけがましきおぼえだになくは、ただひとへにもそのままやかに静かなる心のおもむきならむよるべをぞ、つひの頼みどころには思ひおくべかりける。(源氏物語)

【現代語訳】こうなつてはもう、身分のよしあしにもよりますまいし、顔かたちなどはなおさら論外でしょうし、どうにもお話にならぬひねくれ者という感じさえしないのでしたら、ただ一途に実直で、落ち着いたところのある女をこそ、生涯の伴侶と決めておくのがよいというものです。

*くつろぎがましく歌誦じがちにもあるかな、なほ見劣りはしなむかしと思す。(源氏物語)

【現代語訳】のんびりと気楽そうに構えて、何かといえはすぐ歌語りを口にするではないか、女主人とて、やはり逢つてみればがっかりするのかもしれない、とお思ひになる。

*いとうつくしげにて、明け暮れ見たてまつる人だに、飽かず思ひきこゆる御ありさまを、今までおぼつかなき年月の隔たりけるも、罪得がましく心苦しと思す。(源氏物語)

【現代語訳】姫君はいかにもおかわいらしく、朝晩拝見している人でさえ、いつまでもお見あげしてたいくらいのご容姿なのだから、実の母君が今まで別れ別れのまま年月がたつてしまつたのも、君は、罪つくりなことと、おいたわしくお思ひになる。

*兵部卿宮の、ほどなく焦られがましきわび言どもを書き集めたまへる御文を御覧じついで、こまやかに笑ひたまふ。(源氏物語)

【現代語訳】兵部卿宮が、まだ間もないのに、あせり気味の訴え言をたくさん書いていらつしやる、そのお手紙をお見つけになつて、大臣はにこやかにお笑いになる。

*すきずきしうあざれがましき今様の人の、便ないことし出でなどする、男の咎にしもあらぬことなり。(源氏物語)

【現代語訳】色めかしく浮ついている当世の新し好きな女が不都合をしでかしたりなどするのは、何も男のほうの責任と限ったことではない。

*現の人にもあまりけ遠く、もの隔てがましきなど、気高きやうとても、人憎く心うつくしくはあらぬわざなり。(源氏物語)

【現代語訳】現に付き合っている人に対しても、あまりよそよそしくして、何か仕切りをおいているようなのも、それが上品な様子だといったところで、どうもこ憎らしくてかわいげのないやりかたです。

*心のうちはゆるびなく、胸つぶれがましき折々多かるに、さすがまた、さらばと心をはいて、ひとつ心にならざらむかぎりは、せめて押しやぶり、心よりほかに乱さむとは思ひたらず。(浜松中納言物語)

【現代語訳】だから中納言の心の中は気の休まる時がなく、胸が締めつけられるような折々は多いが、そうは言ってもまた、それならばとしめし合わせて、姫君が自分に気を許してくれるようにならない限りは、無理に力づくで犯し、意向に逆らつて乱暴しようとは思っていない。

*髪、かたちきよらにて、君に具したてまつりて晴れがましからむに、恥なく目やすきさましたり。(夜の寝覚)

【現代語訳】娘は、髪といい、器量といい、整っていて、姫君にお付きして晴れがましい場所に出たとしても、恥ずかしいところがないくらい感じのよい様子をしている。

*我さへかき絶えむも、さはいへど、乱れがましき心のままにやあらむ。(夜の寢覚)

【現代語訳】そうかといつて、こちらまでまるで遠のくというのも、分別のないわがままということになるうか

*隔てなき心を知らせむとて、「これなむ御文」とてたてまつらむも、いと便なく見えきこえがましければ、いかにも、そのことはかけず、(下略)(夜の寢覚)

【現代語訳】いかに異心のない気持を知らせようと思うからといつても、「これが帝のお手紙です」といつてさしあげるのも、人の目や耳に入つた時、いかにも不都合なことに受け取られそうなので、その点には一言も触れず、

*あまたのこの世の契りながら、我は隔たりがましく、よそよそなる折がちなる、あやしかりける宿世なりや。(夜の寢覚)

【現代語訳】まさこと姫君と、二人まで子供をもうけたほどの深い契りなのに、私とはかくあの人に隔りがちで別々に分れている折が多いとは、自分でも訳のわからない宿世(すくせ)というほかはない。

*暁に召せと言ひしかば、心安くて、行ひも紛れがまし、人目もいかなど、のどかに思ひしも悔しう、いみじとも世の常なり。(狭衣物語)

【現代語訳】あの僧が暁にお召しになるようにと言つたので、安心して、勤行の妨げにもなりそうだ、傍目(はため)もどうかなどと、のんびり構えていたのが悔まれ、無念と言うのもありふれている。

*ほろほろとこぼし初めたまへる涙は、かちがましういみじきに、御送りの人々帰り参りぬれば、さりげなくて、眺め出だしたまへり。(狭衣物語)

【現代語訳】はらはらとこぼし始めなされた涙は、いかにも恨みがましくとめどもなく溢れ出ているところに、堀川の上をお見送りした女房たちが帰参したので、君は、素知らぬふりをして、外を眺めやっておられた。

*いとあさからずおぼつかかなげに思ひやりげにて静心なく、文書きがましく、さらにも劣るまじげなるを、(下略)(とりかへばや物語)

【現代語訳】大将には、並々ならず心配そうに四の君を思つて落ちつかず、早く手紙を書きたげな様子で、自分への愛情と比べても決して劣つていそうもなく見えるので、

〔副詞+がまし〕

わざとがまし

*また内々にもわざとしたまひて、こまやかにをかきさまなる櫛、扇多くして、幣などわざとがましく、かの小桂も遣はず。(源氏物語)

【現代語訳】また、内密にも特別に贈物をなさつて、それも細工の美しい櫛(くし)や扇(おうぎ)などをたくさん用意し、幣(ぬさ)なども特別にこしらえたと分るようにして、それに例の小桂(こうちき)もお遣わしになる。

収集できた平安時代の例文二〇一例の中で、「盗人がまし」はわずか一例、「痴れがまし」は三例というように使用が少ないのに対して、「恥がまし」は一例、そして「をこがまし」は実に一二例にも上る。「をこがまし」は「ばかのように見える、愚劣だ」の意味で、自分自身のことについて、他人から「ばかばかしい」「なまいきだ」と思われそ

うだと意識する場合と、他人の行為、状態などについて批評する場合とがある。この点については、「恥がまし」も同じく他人からどう思われそうであるかという他者からの視線を意識する意味が強い。飛田・浅田（一九九一）は「くがましい」について、「第三者の視点を中心にすえた、日本文化に特徴的な語ということが出来る」と述べている。もちろん、「がまし」の意味は複雑で、「人の目を意識する」のはその意味特徴の一つに過ぎないとも言えるが、「かまし」（囂）が語源であるとすれば、他者の口、他者の見る目が甚だしく感じられるという点で共通していると考えられる。

現代語では、「がましい」は「はれがましい」「わざとがましい」のようによく評価に用いられ、情意より属性を表す場合が多い。しかし、平安時代において「がまし」はかなり主観的な表現であり、「胸つぶれがまし」「罪得がまし」のように、直接に主体の感情を表すことができる語である。辞書記述では、共通して「その状態や物に似ている」と解釈しているが、それぞれの語幹の性質を吟味して接尾語「がまし」の意味を分析する必要がある。

4 接尾語「がまし」の語幹と意味

接尾語「がまし」は主に名詞と動詞連用形に付く。次に、平安時代の用例を中心に、接尾語「がまし」の語幹の性質と意味特徴を考察することにする。

まず、名詞に付く場合について考える。

① 傾向の意：塵がまし／事がまし

塵が積っている御帳の状態を「塵がまし」で表現し、塵が多いという感じを伝える非常

に直感的な表現である。「事がまし」は、事を荒だてがちという傾向を表し、「事ありげである、おおげさだ」の意である。

② 類似の意：：かごとがまし／猿樂がまし

「かごと」は、それにかこつけて言うことの意で、例文では、自分も親王御在世の折のことを知っているのに、話の仲間に入れてくれないと文句をつける意を表す。「水の音なひかごとがましう聞こゆ」は擬人法である。ほかに、「影見ても憂きわが涙落ちそひてかごとがましき滝の音かな」（紫式部集）など、「かごとがまし」は多く擬人法として用いられる。

「猿樂」は、当時の滑稽な物まねを主とする演芸で、「猿樂がまし」は「こっけいな言動をする、おかしなかつこうをする」という意である。

③ 性質の意：：盗人がまし／歌がまし／人がまし

その物の性質を持っている、あるいは、その物としての必要な条件を備えている意を表す。「盗人がましき童」は、盗人の性質を持っている、盗人根性の女の童の意である。「歌がましう」と「人がましき名僧」は、「いかにも歌らしく、自分こそはと思っているふうに、得意然として真つ先に詠み出したりする」ようす、「一人前に名の通った」僧侶というように用いられ、「立派な、完成した、とりたてて言うに値する」という意味合いが含まれる。

④ 感情の意：：をこがまし／恥がまし

「恥がまし」は、外聞が悪いの意を表し、自分以外の人の感情表現に用いるほかに、一般的に「恥ずかしい」という感情を引き起こせる事柄や、自分自身の感情の表現にも用い

られる。ただし、心の動きを表す「恥ずかしい」と比べて、「恥がまし」は自分自身のことについても、他人からどう思われそうであるかという意識が強い。この点で、前述したように「をこがまし」も同じである。

*後にもなほ、「人に恥ぢがましき事言ひつれたり」とうらみて、（下略）（枕草子）

【現代語訳】そのあとでもやはり、「人に恥になるようなことを、事実を曲げてこじつけて言った」と恨んで、

*あやしき古人にこそあれ。かくものづつみしたる人は、ひき入り沈み入りたるこそよけれ。さすがに恥ぢがましや」（源氏物語）

【現代語訳】「並はずれて昔気質（かたぎ）の人なのです。ああした遠慮深い人は、おとなしく引つ込んでいるのがよいのです。さすがにこのわたしまでが恥さらしというものだ。」

⑤ 言動の意：：懸想がまし

「懸想」は「思いをかけること、恋すること」という意を表し、動作性を有する名詞である。「懸想がまし」は恋しているようすを表す。

次に、動詞連用形に付く場合について考える。

① 傾向の意：：隔たりがまし／見え聞こえがまし／紛れがまし

② 類似の意：：隔てがまし／胸つぶれがまし

③ 性質の意：：歌よみがまし／すきがまし／ねぢけがまし／あざれがまし／乱れがまし／晴れがまし

④感情の意……痴れがまし／罪得がまし／焦られがまし／かこちがまし
⑤言動の意……くつろきがまし／文書きがまし

この分類は、厳密なものとはいえないが、これによって、ある程度「がまし」の意味特徴が理解しやすくなると思われる。発話者個人の主観性を加えるのは「がまし」の意味特徴の一つで、具体的には傾向・類似・性質・感情・言動の五つの方面に現れる。しかし、接尾語「がまし」を有する形容詞の使用は『日本古典文学全集』（小学館・ジャッパン・レズジデータベース）における平安時代の文献から集めた例文二〇一例のうち、「盗人」「歌」「塵」「猿楽」「事」「人」「懸想」「歌よみ」「くつろぎ」「焦られ」「胸つぶれ」「乱れ」「見え聞こえ」「隔たり」「紛れ」「かこち」「文書き」「晴れ」に上接する語は一例のみである。また、「あざれ」「隔て」は二例、「痴れ」は三例にすぎない。このことから、発話者は、自分にとって身近な具体的な名詞や動詞を用いつつ、真新しい表現を好んで使ったというように考えられる。それ以外の、用例数が比較的多い形容詞は以下の通りである。

恥がまし（一一例） かごとがまし（一〇例） すきがまし（九例） ねぢけがまし（九例） 罪得がまし（一二例） わざとがまし（一三例） をこがまし（一一二例）
平安時代における接尾語「がまし」は発話者の主観的な心理状態を表す場合に用いられるようである。

*はかなきことを聞こえ慰め、泣きみ笑ひみ紛らはしつる人さへなくて、夜も塵がましき御帳の中もかたはらさびしくもの悲しく思さる。
（源氏物語）
ここでは、「塵の積る」とは言わず、「塵がましき」という語を用いたのは、その後

続く独り寝の寂しさをいう「かたはらさびしくもの悲しく思さる」とともに、発話者の主観的な感想を表す。また、前文では、「塵は積もれど、紛ることなきうるはしき御住まひ」と書かれていて、その時より状況が進んだこと、独り寝の寂しさに悲しく思っているという心境の変化が「塵がまし」によって表現されていると解される。

「がまし」の意味は傾向・類似・性質・感情・言動など、様々な方面から解釈できるが、発話者個人の主観性を中心にした表現であるのに変わりがない。これは接尾語「がまし」の根本的な意味特徴であると思われる。また、『日本国語大辞典』（二〇〇一）の「語誌」に述べられているように、中古には「はれがまし」「ひとがまし」のように、肯定的な意味を表す語もあり、否定的な評価の意味に偏るものではなかった。この点も含めて、時代が下って、接尾語「がまし」の語幹と意味特徴には、変化が見られる。

5 接尾語「がまし」の派生語

接尾語「がまし」は平安時代に現れ、鎌倉時代と室町時代においても優れた生産力を発揮する。次には鎌倉時代以降の接尾語「がまし」の派生語を示す。

「鎌倉時代に現れる派生語」

- ① 名詞＋がまし 口がまし 才覚がまし 物がまし 夢がまし 様さまがまし 余所がましい
 - ② 動詞連用形＋がまし 限がまし
 - ③ 形容動詞語幹＋がまし すすろがまし
- 「室町時代に現れる派生語」
- ① 名詞＋がまし

愛敬がまし 汗がまし 意見がまし いたかがまし 嘘がまし 大人がまし 思出がまし
 角がまし 狐がまし 隔心きやくしんがまし 故実がまし 骨こつがまし 事がまし 細工がまし
 造作がまし 沙汰がまし 俗がまし 手がまし 外様がまし 殿がましい 情なさけがまし
 秘事がまし 分別がまし 骨ほねがまし 実まことがまし 目垂めだれがまし 女郎めろちうがまし 面目がまし
 し 油断がましい

② 動詞連用形＋がまし

恐がまし 懸がまし 差出がまし ねだりがまし

③ その他の語基＋がまし

幼がまし 哀がまし あしあらがまし

調査した範囲では、鎌倉時代以降も接尾語「がまし」の語幹に名詞が多用されており、平安時代と比べて、抽象名詞や漢語も多く用いられるようになっていく。「幼がまし」「すずろがまし」のような形容詞語幹や形容動詞語幹に付くものも現れる一方、室町時代末までは、否定的評価に偏るといふ傾向はまだ見られない。

四―二 接尾語「らし」とその派生語

1 接尾語「らし」の辞書記述

接尾語「らし」は『日本国語大辞典』（二〇〇一）には次のように記されている。

形容詞や形容動詞の語幹、名詞などに付いて、形容詞をつくる。近代では「わざとらしい」「…と感ぜられる、などの意を表す。「あほうらしい」「いとらしい」「男ら

しい」「にくらしい」など。

* 史記抄「1477」一七・游侠列伝「上はなんとない様で内心が毒らしうて人を傷害するぞ」

【補注】「ロドリゲス日本大文典（土井忠生訳）」には、「助辞の *Mequi, mequ*（めき、めく）、*Gamaxij*（がましい）、又 *Yona*（様な）によって言ひ換へられる。例へば、*Zocuraxij*（俗らしい）、*Zocuno yona*（俗のやうな）、*Zocugamaxij*（俗がましい）及び *Zocumeita*（俗めいた）は同じである」とある。なお、ラシイに終わる語としてロドリゲスは「アサカラシイ、ヨカラシイ、ウスカラシイ、ヲトコラシイ、ワラベラシイ」などをあげている。

次に、『時代別国語大辞典 室町時代編』（一九八五～二〇〇〇）の「らし」「接尾」の項目には次のような意味記述が見られる。

口語として用いられる。体言・形容動詞語幹などに付き、シク活用の形容詞を作る。終止形「らし」とも。問題とする事物や事態に付けて、いかにもそれにふさわしい性質・形態をそなえているさまである意を表す。近世に入って、助動詞「らし」の用法を吸収し助動詞化する。

現代語の「いかにも：のようすである、：にふさわしい」「という気持ちを起こさせる、：と感じられる」などに相当する。

2 接尾語「らし」の出現時期

村上昭子「接尾語ラシイの成立」（一九八一）で、接尾語「らし」の成立について、

① 推量の助動詞ラシに由来した。

② 異分析の結果、接尾辞ラシイが成立した。

③ 名詞にラがつき、それに形容詞をつくる接尾辞シイがついたものから成立した。

の三つの見通しを検討した結果、接尾語「らし」は、名詞の非反復形を語基とし、それに、情態言の形成に関わるラがつき、さらに、形容詞をつくる接尾辞シがついた、名詞ⅡラⅡシイから成立したと推定している。

上代において存在した接尾語「ら」は、たとえば、形容詞「ものがなし」に接続した副詞「ものがなしらに」に見られる。接尾語「らし」の成立には、このような上代から存在した接尾語「ら」に影響されたように思われる。

* 小金門に物悲良尔思へりし吾が児の刀自を（万七二三）

また、接尾語「らし」の用例は基本的には室町時代に入ってから見られ、唯一鎌倉時代に遡れるのは「愛らし」である。「：と感じられる」という感情的意味は、「いかにも：：のようすである」という状態的意味よりも早くに派生したと考えられ、この点から見ても、接尾語「らし」の成立は接尾語「ら」に影響されていることは疑いない。

* わらはが養ひ姫は、御みめのうつくしくおはして、御目は細々として、あいらしくおはするぞや」（米沢本沙石集 一・一〇）

3 接尾語「らし」の派生語

その上接部分の品詞性によってまとめると、次の通りである。

① 名詞＋らし

〔人を表す名詞〕

あほうらしい【阿呆】 おほせらしい【仰】 をとこらし【男】 をなごらし【女】
しゆつけらし【出家】 ひとらし【人】 わらべらし【童】
〔その他の名詞〕

あいそうらし【愛】 あくらし【悪】 かいしようらしい【甲斐性】 しおらしい じ
ちらし【実】 しゃうねらし【性根】 じんとうらしい【実頭】 ぞくらし【俗】 て
うはふらし【調法】 どくらし【毒】 なさけらしい【情】 はからし ぶんべつらし
【分別】 まことらし【実】 めんぼくらし【面目】

② 動詞連用形＋らし ばけらしい【化】

③ 形容動詞語幹＋らし
いたいけらし【幼気】 ぎようらし ごたいそうらしい【御大層】 じんじようらしい
【尋常】 すぐらしい【直】

④ 形容詞語幹＋らし
おさならしい【幼】 かはゆらし むごらしい【慘・酷】 むさらし

⑤ 副詞＋ラシ
げにもらし【実】さもとらし

⑥ その他の語基＋ラシ
あさからし【浅】せからしい つべらし

室町時代において、接尾語「らし」は優れた造語力を持っている。平安時代に現れた「おとなし（大人）」「まことし（実）」などに類する場合の、「し」に代わって用いら

れるようになった口語的接尾語として考えてもよいであろう。なお、名詞や形容動詞語幹などの語基は直接「し」を付き、シク活用形容詞になるのは困難であり、疊語形を介してシク活用する場合も、「おおしい」「めめしい」「げにげにし」のように、基本的に二音節以下のものに限られている。「をとこらし」「をなごらし」「げにもらし」など長音節の語基が多く存在することから見ると、接尾語「らし」と疊語形によって、疊語形の音節数の制約から解放されることも考えられる。接尾語「し」と疊語形によってシク活用形容詞を形成する場合、前者は語基にある程度情意的意味を要求され、後者には音節数という形態的制限がある。接尾語「らし」は、両者の厳密な要求を緩め、また補う働きがあると考えてもよいであろう。

四―三 その他の接尾語について

室町時代において、接尾語はシク活用形容詞の造語に大きな役割を果たした。「がまし」「らし」のような生産力を持っていないが、「がはし」「かまし」「めかし」「らかし」「かはし」「くまし」「くらし」「くろし」などの接尾語による造語も見られた。

1 接尾語「めかし」

接尾語「めかし」は『日本国語大辞典』（二〇〇一）には次のように記述されている。

めかし・い〔接尾〕（接尾語「めく」から）

名詞・形容詞語幹などに付いて形容詞をつくり、そのような状態を呈している意を表す。：らしい。：のようである。「人めかしい」「じょうず（上衆）めかしい」

「なまめかしい」「ふるめかしい」など。

*源氏〔1001〜14頃〕宿木「子めかしく言少ななるものから、をかしかりける人の御心ばえかな」

一方、接尾語「めく」の意味記述は次の通りである。

名詞や形容詞・形容動詞の語幹、副詞、擬声語、語根などに付いて動詞をつくる。そのような状態になる、それに似たようすを示す、などの意を表す。「春めく」「人めく」「罪人めく」「なまめく」「ことさらめく」「わざとめく」「ざわめく」「ほめく」など。

*土左〔935頃〕承平五年二月一六日「池めいてくぼまり、水つける所あり」

『時代別国語大辞典 室町時代編』（一九八五〜二〇〇〇）に次のように記されている。名詞などに付いて、いかにもそれに似せた体裁をつくろうさまである意を表す形容詞をつくる。「さやうめかし」「なまめかし」など。

接尾語「めかし」は接尾語「めく」から変化したもので、その派生語は「動詞未然形（被覆形）＋し」相当と考えられる。動詞型接尾語「めく」は多様な語基に接続できるが、「ことさらめく」「わざとめく」のような副詞の場合は、形容詞化しにくいようである。また、「あるめかし」「さるめかし」のように、接尾語「めかし」は直接動詞に付くことができる。平安時代には、動詞から形容詞の派生が多く見られ、当時は接尾語「めかし」が多用されたのであろう。調査した中では、次のような派生語が挙げられる。

〔接尾語「めかし」の派生語〕

いまめかし【今】 いろめかし【色】 なまめかし【生】 ふるめかし【古】 さや

うめかし【然様】 あるめかし【有】 さるめかし【然】

2 接尾語「らかし」

接尾語「らかしい」は『日本国語大辞典』（二〇〇一）には次のように記述されている。名詞に付いて、いかにも：の様子である、：の風であるの意にいう。らしい。「性（しよう）らかしい」「情（じょう）らかしい」など。

調査した語彙の中で、接尾語「らかし」の派生語は三語で、その最も古い挙例は室町時代のものである。その由来は不明であるが、「じちらし（実）」「しやうねらし（性根）」「ばけらし（化）」のような接尾語「らし」の派生語もほぼ同じ時期に存在しており、「らかし」の「ら」は前述した情態言を形成する接尾語「ら」であると考えてよいであろう。

〔接尾語「らかし」の派生語〕

じちらかし【実】 しやうらかしい【性】 ばけらかしい【化】

3 接尾語「くろし」

接尾語「くろしい」の『日本国語大辞典』（二〇〇一）の意味記述を次に記す。
名詞に付いて、そのような様子である、そのものらしいの意を表す。

* 浄瑠璃・最明寺殿百人上臈（1699）女勢揃へ「息女お百の姫（略）よめりざかりの花づくし袖の重ねににはほはせておとなくろしきかけゑぼし」

接尾語「くろし」の由来について確かな記述は見当たらなかった。語例から見ると、

「くるし(苦)」と関係があるかと思われる。『日本国語大辞典』(二〇〇一)の用例などから考えると、「あつくるし」は『天元四年斉敏君達謎合』(九八一年)に用例があり、平安時代から用いられている。この非常に暑くて苦しい意を表す語には「あつかはし」(『宇津保物語』『源氏物語』)もあつた。これらに次いで『僻連抄』(一三四五年)に「あつくらはし」、『連理秘抄』(一三四九年)に「あつくろし」が見える。さらに、「あつくらうし」が『兩足院本山谷抄』(一五〇〇年頃)に見え、江戸時代の「あつくろし」となる。このことから、「あつくろし」は「あつくろし」から転じたものと見られ、『日本国語大辞典』(二〇〇一)の接尾語「くるしい」の用例には『連理秘抄』(一三四九年)「細やかなるところなく、あつくろしき物にきこゆる也」をまずは示すべきで、接尾語「くるし」は一四世紀には認められる。そして、おそらくは「くるし」と「かはし」とが混交するなどして接尾語「くらはし」という強調形が新たに作られ、それが接尾語「くらうし」に転じたように考えられる。「へたくらうし」は『史記抄』(一四七七)、「こぢくらうす」は『三体詩幻雲抄』(一五二七年)、「むさくらうし」は『玉塵抄』(一五六三年)にそれぞれ見え、接尾語「くらうし」は口頭語的な性質を持つ語であつたと見られる。

〔接尾語「くるし」の派生語〕

あつくろしい【暑】むさくろしい

〔接尾語「くらはし／くらうし」の派生語〕

あせぐらうし【汗】あつくらはし【暑】あつくあうし【暑】へたくらうし【下手】むさくらうしこぢくらうし

4 その他の接尾語

〔接尾語「かはし」の派生語〕 あつかはし【暑】 せせかはし
〔接尾語「がはし」の派生語〕 みだれがはし【乱】 はぢがはし【恥】
〔接尾語「かまし」の派生語〕 あつかまし【厚】 あらかまし【荒】
〔接尾語「くまし」の派生語〕 あらくまし【荒】 せせかまし

「がわしい」は『日本国語大辞典』（二〇〇一）に次のように記述されている。

体言、動詞連用形などに付いて、そのような傾向がある、…の嫌いがある、の意をあらわす。批難、嫌悪の気持を含む。がましい。

* 靈異記〔810〕824〕中・一「時に一（ひとり）の沙彌有り、濫（みだれカハシク）供養を盤（も）る処に就きて、鉢を捧げて飯を受く（国会図書館本訓積 濫ミタレカハシ）」

『時代別国語大辞典 室町時代編』（一九八五～二〇〇〇）にも接尾語「がはし」の項目がある。

用言の連用形に付いて、まさにそのような状態を呈するさまである、の意を添える。主として、よくないことにいう。

接尾語「がはし」は上代から存在したかとも見られ、よい評価として用いられる語例は、「甲斐がはし」が挙げられる。ただし、『日本国語大辞典』（二〇〇一）ではこの語を「かいがいしい（甲斐甲斐）」の変化した語としており、接尾語「がはし」の派生語として扱ってよいかどうかは疑問が残る。

接尾語「かはし」「かまし」「くまし」は辞書に立項がないが、語幹の部分から見ると、

三者はほぼ同じ意味を表すようである。接尾語「がはし」と同じく、主としてよくない評価を伴うようである。

以上、上代以降、接尾語によるシク活用派生形容詞の発展は著しい。

第五節 室町時代形容詞活用の変化

『時代別国語大辞典 上代編』（一九六七）によれば、ク活用・シク活用の両方に活用する痕跡がある形容詞として「うまし」が挙げられる。上代においては、基本的にク活用形容詞とシク活用形容詞の間には整然とした対立構造が保たれていた。「ながながし」「とほとほし」のように、ク活用形容詞に用いる語基を重ねて、疊語形容詞という形でシク活用形容詞に転じることがあるが、直接同一の語基をク活用にもシク活用にもまたがつて用いることは一般的にはない。ところが、中世に入ると、こうした秩序ある対立構造の緊張は次第に緩んでくる。鎌倉時代からク活用からシク活用に變化した語、あるいは一時的に両方の活用をする語が現れた。『時代別国語大辞典 室町時代編』（一九八五）二〇〇〇）で明確に活用をク活用とシク活用に分けて記述されているのは、次の十一語である。

いちしるし　うたてし　かまびすし　きびし　げすし　しかるべし　たけし
ちかし　ふかし　ふるし　をさなし

〇いちしるし【著し】

「いち」は、程度副詞イトと母音交替の関係にあつたもの、勢いの盛んな意を表し、「しるし」は、はっきりしている意を表す。「いちしろし」が古い形とされる。シク活用した例が見られるのは、おおむね鎌倉時代頃からである。

*書紀〔720〕孝徳即位前（北野本訓）「皎（イチシル）きこと日月の如し」
*源平盛衰記〔14C前〕三・左右大将事「入道もいちじるしき人にて、思ひ直さるる事も有りなん」

意味は次のように大きく二つに分けられる。

- ① そのものが、他よりもいちだんときわだっているさまである。また、曖昧なところがなく、明確なさまである。この意味を表す場合、ク活用も用いられる。
 - ② それとははっきりわかるほど事態の程度が甚だしいさまである。
- ①の意味を表す場合は、ク活用も用いられるが、②の「事態の程度が甚だしいさま」を表すのはシク活用特有のものである。

○うたてし【**転し**】

副詞「うたて」の形容詞化したもので、平安時代に入って「うたてあり」にやや後れてク活用形容詞として発生した。

*宇津保〔970〕999頃「蔵開上「宮づかへにとて出し立てたれど（略）常に思なげくと聞き侍れば、いとうたてくなん」

そして、中世に入って、シク活用が現れるようになる。

*撰集抄〔1250頃〕九・八「女は殊に罪深きとうけ給はるに此の振舞をさへし侍る事、げに前（さき）の世の宿習の程思ひ知られ侍りて、うたてしく侍りしが」
ただし、シク活用とク活用の意味上の違いはあまり見られない。

- ① 事態の程度やある傾向が異常なまで甚だしくて、同感できない状態である。
- ② 事態が自分の意に反していて、嫌悪の情を催させる状態である。また、それによって

不愉快でいやだと思う心情である。

③ 事態が社会通念として穏当・適正とされるところに反して、嘆かわしく非難したくなる状態である。また、そのような心情である。

○かまびすし【喧し】

音や声がかましい、さわがしいという意で、鎌倉初期ごろからシク活用が現れた。本来のク活用は漢文訓読資料に用いられていた。

* 為相本曾丹集〔11C初か〕「かまびすくすだきし虫も声やみていまは嵐の音ぞはげしき」

* 方丈記〔1212〕「波の音、常にかまびすしく、しほ風ことにはげし」
なお、中古の和文では「かしがまし」が用いられた。

意味はク活用とほぼ同じであるが、シク活用は多少主観性を帯びているようである。

① 声や物音が、騒騒しく入り乱れて響き、耳ざわりである。

② それについて、世間に喧伝されるさまである。

○きびし【密し・厳し】

平安初期にク活用の例が見えるが、中期以降はシク活用が現れた。

* 西大寺本金光明最勝王経平安初期点〔830頃〕六「齒は白きこと齊しく密（キヒク）して珂と雪との猶（ごと）し」

* 枕〔10C終〕九二・内裏は五節の頃こそ「帳台の夜、行事の蔵人のいときびしうもてなして」

活用が変化するものななかで、平安時代にすでに変化が見えるのは「きびし」だけであ

る。その他の語はすべて中世以降に変化が起こっている。この語だけが変化の時期が早いのは、従来から史的があるように、中古においてク活用の語幹末にはイ列音が立ちにくいということがあって、それを回避する策としてシク活用に転じたというように考えられる。したがって、後世シク活用に転じた「いちじるし」「かまびすし」や「まちどほし」とは変化を起こした理由が異なるようである。

○げすし【下衆し】

「下衆」の形容詞化下語で、品格が劣り、いかにも下品な感じのするさまを表す。

*塵袋「1264く88頃」六「双六は下臈のしわざにてかみつかたにはせぬことのおうにおもへるはゆへありや、これらを思ふにはさしも、げすしきゆへあるべしともおぼえず」

*時秀郷聞書「歌合などの時も、いづれにも道理はありとも、歌の姿やさしくして下すからぬを、よくよくみて方人になるべき也」

この語は鎌倉時代に現れ、ほかの語より出現時期が遅れている。語構成と意味から考えると、シク活用の方が本来のものではないかと思われる。疊語形容詞「げすげすし」の使用例は平安時代に見え、鎌倉時代に「げすし」を用いる際には、両方の活用が一時混乱して用いられたのではないかと推測される。

○しかるべし【然べし】

動詞「然る」に助動詞「べし」が接して一語化したもので、本来はク活用である。平安時代にすでにシク活用にも用いられたことが、『日葡辞書』の立項に「シカルベイ」とともに「シカルベシイ」が見られることでわかる。

〔シク活用の意味〕

① 提示された事柄の内容が、その場の状況に照らして妥当だと判断されるさまである。

② 求められる一定の水準や資格を、十分に備えたものと認められるさまである。

この語は助動詞「べし」と関係あり、一応考察の対象外にする。

○たけし【猛し】

上代からク活用であるが、鎌倉時代になるとシク活用の「ただけし」が用いられるようになった。その影響で、「たけし」もシク活用を取るようになったように思われる。

*三百則抄七「ヨツコヨツコトダダヨイ回タ者ヲ、猛将トハ何ントテ云タゾ。是レハ霍去病ト云者、始ハタケシイ將軍デアツタガ、ヲトコエタヲ霍―へ嫖姚ト云タゾ」

意味はク活用と同じく「何ものをも恐れない烈しい気性をもっているさま」を表す。

○ちかし【近し】

本来はク活用であるが、江戸時代になると、シク活用が用いられるようになる。

*浮世草子・好色五人女〔1686〕二・三「烏丸のほとりへちかしき人有て見舞しうち」

シク活用の意味は、ク活用が客観的な近さを表すのに対して、主観的に、空間的・時間的な隔りが小さいと感じるさまを表す。現代語でも「親しい人」などというように、ク活用とは別の意味で用いられている。

○ふかし【深し】

本来はク活用であるが、室町時代以降シク活用が用いられるようになる。シク活用は多く打消の言い方を伴って用いられ、事態の程度がたいしたことではない、とりたてて問題

とするほど重大ではないと判断するようすを表す。色の濃淡や、時間の経過について用いられることはなく、限定された用法しかない。

① 奥深い。また、くわしい。

* 浄瑠璃・兼好法師物見車〔1710頃〕中「此又五郎年寄つて、ふかしい事は存ぜぬが」

② 格別であるさま。たいしたことである。重大だ。

* 虎明本狂言・鼻取相撲〔室町末く近世初〕「芸能と申てふかしひ事もござなひ、弓ま
り鉋丁ご双六、馬のふせおこし」

③ たくさんであるさま。多い。多量だ。

* 謡曲・吉野静〔1423頃〕「『十二騎とこそ承つて候へ』『いやそれは深しからぬ
ことぢやほどにへ略へ』」

○ ふるし【古し】

上代からク活用で用いられるが、「いかにも古い感じのするさま」の意でシク活用され
た例が見える。

* 中華若木詩抄〔1520頃〕上「詩は意を新しく、語をふるしく云ことがよき也」
○ をさなし【幼し】

ク活用に対して、シク活用は「子どもじみている」の意で用いられている。

* 日葡辞書〔1603く04〕「Vosanaxi」（ヲサナシイ） ヌトヲユウ」

主観性の強い語であると考えられる。

この中で、鎌倉時代以前にシク活用に変わるのには「きびし」だけで、その他の語はすべて中世以降に変化が起こっている。

シク活用が出現した後、「いちしるし」「かまびすし」「げすし」はシク活用の方に定着したが、結局ク活用へ戻ってしまふものが多い。ただし、「ちかい」「ちかしい」のように活用によって意味が分化している場合もある。

意味から考えると、普通シク活用するものはある程度の主観性を持っている。「いちじるし」は程度、「うたてし」「かまびすし」は心情、「げすし」「たけし」「をさなし」は評価、「ちかし」「ふかし」「ふるし」は主観的判断を表している。また、評価と主観的判断を表す六語の中で、語基が二音節である五語のうち四語は、疊語形容詞にも用いられる。唯一疊語形容詞を持っていない「ふるし」は、「詩は意を新しく、語をふるしく云」というように臨時的にシク活用で用いられたように考えられる。

ク活用からシク活用に転じる経緯は、個別にいくつか挙げられるが、評価や主観的判断を表すためにシク活用したものが多くのように思われる。これは中世以前に個別的に見られ、鎌倉時代に入って多く用いられるようになり、ク活用・シク活用の区別が消滅する室町時代になるとさらに盛んになっている。この中で、特に注目されるのは、「たけし」「ちかし」「ふかし」「ふるし」「をさなし」のように、従来ク活用したものを意図的にシク活用とするものである。この点は、ク活用・シク活用の区別が消滅する過程で、かえって「し」の情意性が意識されるようになったためであると見られる。

そこで、ここで接辞「し」の意味を改めて考えてみたい。前述したように、語幹の用法

からみると、ク活用形容詞の方は独立性が強く、シク活用の方は独立性に乏しいと言われている。形容詞で語幹が独立して用いられるのは一般にはク活用であるが、「むなし」「あらたし」など、シク活用でも語幹ムナ・アラタが独立しうる例もある。次は、川端善明（一九九七）が挙げた、語幹の用法が「単独、あるいは語尾ニ・トを伴って副詞乃至形容動詞である場合」のシク活用形容詞である。

あやし・あたらし・いかし・いまだし・おだひし・おほほし・けし・こきだし・ただし・なまし・にたし・はなはだし・ひさし・ほかし・まさし

ここで注目されるのは、語幹が情意的意味を表すのが「あやし・あたらし・おほほし」の三語だけである点である。橋本四郎（一九五七）は、形容詞語幹を独立性の強弱によって十四項目に分類し、「赤・白・高」など単独で名詞を構成するような独立性の強い位置にシク活用語幹には立たず、「速さ・清ら・憎む（苦しみ・楽しさ・怪しむ）」のように接尾語を伴うような独立性の弱い位置にはシク活用語幹も介入することができるとして、「意義の独立性が高い程、その意義には客観性が強い」という結論を述べている。

他方、情意性の高いものは独立性に乏しいように考えられる。山本俊英（一九五五）は、ク活用形容詞とシク活用形容詞の意味的相違を見いだしたものの、いかなる原因によって生じたものであるかについては言及していない。この点については、山崎馨（一九九二）による形容詞の派生分析では、「うらやむ + as.i.（情意を表す接辞）↓うらやまし」の場合、強い情意性意味は接辞「アシ」が担っていると分析している。ただし、古代語の文献に「アシ」という語は見えないが、中期朝鮮語の「asy」（物足りなさを感じながら欲しさを感じる意）の存在が確認されているなど、シク活用の「し」がク活用の「し」とは性質

が異なることは確かであるが、その根拠はいまだ明確にしがたい。ただ、シク活用は語幹に「し」を含んでいる点を見ると、その「し」は本来的には情意性の形態素ではなく、「し」と結合することによって、ク活用語幹と同等の独立性を持つことができたと見るのが穏当である。そうすると、情意を表す語基は「し」との結合はク活用語幹のそれよりもさらに緊密であったとも言える。

「し」が本来的に「強い情意性意味を表す接辞」ではないと推測すると、両活用形容詞から見て、「し」もしくは「しい」を「情意性意味を表す接辞」と明確に意識するのは中世以降とも考えられる。例外的に、ク活用・シク活用の両方があった「うまし」も実はシク活用の確例も『竹取物語』で、諸本によって異なるがある。

*なでふ心地すればかく物を思ひたるさまに月を見給ふぞ、うましき世に……(下略)
上代の例は語幹の用法しか見え、活用された例がまれである点を見ると、後世のシク活用に転じるものとは区別すべきである。もちろん、語幹「うまし」、およびその活用では対象に対する「すばらしい」という主観的な情意を表すもので、ク活用の場合と意味上で区別された結果であることは言うまでもない。

以上、室町時代において、形容詞を派生する接尾辞が「い」に一本化され、ク活用とシク活用の区別が消滅する一方、「し」の情意的意味が改めて意識されるようになったと考えられる。したがって、室町時代から近世にかけて、直接「し」によって臨時的あるいは意図的にシク活用することが見られるようになり、次のような形容詞が中世の一時に両活用されたのである。

あつし　あたたかし　あはし　うとし　おほし　おもし　かはいし　こまかし　さと

し さむし しげし せばし なめし ねたし ふとし あくどし あやふし うる
さし おさなし あきらけし むくつけし まちどほし など

第六節 まとめ

室町時代には、ク活用形容詞では「名詞＋形容詞」が増加し、シク活用形容詞では疊語形容詞が増加するとともに、派生形容詞が発展したことが注目される。中古から中世にかけて、形容詞語構成の特徴として現れるのは、複合と派生によつて、合成形容詞が大量に産み出されたことである。平安時代から室町時代末までに現れたシク活用形容詞はおよそ四九二語であり、そのうち、接頭語や接尾語による派生形容詞は一五〇語を超える（上代は四語のみ）。また、「名詞＋形容詞」の構造をとる複合形容詞と、「あらあらし」のような特殊複合法による疊語形容詞の語数も、それぞれ上代の三倍と五倍になっている。要するに、合成形容詞の発展がとりわけ注目されるのである。

具体的に見ると、平安時代以降「語基＋し」の構造は優勢を失った。特に、心理状態や評価などの情意的意味を表す語基が激減した。ほかに、自然環境を表すものも上代より少なくなつた。一方、「かしまし」「まぶし」「やかまし」「けたまし」などの「感覚」を表すものが平安時代から現れ始めた。「動詞未然形（被覆形）＋し」は依然として優勢を保ち、また、名詞、副詞乃至ク活用形容詞からシク活用形容詞に転じるものが多くなつた。疊語形容詞はそのまま命脈を保ち、上代よりも広い範囲で使われ、名詞・形容詞語幹・動詞連用形をはじめ、副詞にまで用いられた。上代には限られた語彙にしか用いられなかつた「名詞＋形容詞」も、より多くの語彙の複合が見られるようになり、室町時代には

「うれしがなし」「おもしろをかし」のような「形容詞語幹＋形容詞」も生じた。

上代以降、接辞による派生形容詞が大量に形成された。平安時代に入って、接頭語「もの」が定着され、接尾語「がまし」も現れ、そして終始優れた造語力を発揮した。室町時代になって、「こ」などの程度を表す接頭語がシク活用形容詞に多用されるようになり、また接尾語「らし」が現れ、「がまし」に劣らない造語力を発揮した。「かまし」「がはし」「くまし」「めかし」「らかし」「くるし」「くらうし／くらはし」「くろし」など造語力はそれほどでない接尾語も多く用いられ、合成形容詞は著しく発展した。

上代において、基本的にク活用形容詞とシク活用形容詞の間には整然とした対立構造が保たれている。ク活用形容詞に用いる語基を重ねて、疊語形容詞という形でシク活用形容詞に転じることがあるが、直接同一の語基をク活用にもシク活用にもまたがって用いることは基本的にはなかった。名詞なども同様に、疊語形によってシク活用形容詞の語幹になれるが、直接「し」を付きシク活用形容詞となるものは少なかった。ところが、中世に入ると、こうした厳密な語構造は緩んでくる。名詞・動詞・副詞・形容詞・形容動詞など、多くの語基が直接にシク活用形容詞の語幹に現れるようになった。疊語形容詞は一層使用範囲を広げる一方、「がまし」「らし」などの接尾語によって、「名詞＋し」などの語基の情意性に対する要求や疊語形の音節数の制約から解放され、更なる多様な語基がシク活用形容詞の語幹に現れることが可能となった。

そこで、情意的意味を表す語基の減少、その他の多様な語基の発展、合成形容詞の大量出現という事態に伴って、形容詞の活用において変化が生じることとなった。上代におけるク活用形容詞とシク活用形容詞の秩序ある対立関係の緊張は次第に緩んでくる。鎌倉時

代以降、ク活用からシク活用に變化した語、あるいは一時的に両方の活用をする語が現れた。さらに、室町時代において、連体形のイ音便形が終止形の機能を兼ねるようになり、ク活用・シク活用の区別が消滅したのである。

もう一つ注目されるのは、主に鎌倉時代から漢語もシク活用形容詞の造語に用いられるようになった点である。直接にシク活用形容詞の語幹には現れないが、疊語形容詞や接尾語「がまし」「らし」による派生形容詞に多用されるようになった。

第三章 近代語「しい」型形容詞について

本章では、『日本国語大辞典』（二〇〇一）に収録されている「しい」型形容詞八九七語の中で、出現時期が江戸時代以前に遡れるものを除いた五二一語を対象として、近代語、すなわち江戸時代以降のシク活用形容詞について考察する。

第一節 近代語「しい」型形容詞の語構成

研究対象とする五二一語について、『日本国語大辞典』（二〇〇一）の最も古い挙例によつて、出現時期を確定すると、江戸時代が二八九語、明治時代が一二八語、大正時代以降が九〇語となる。なお、残り一四語は用例の記載がないため、出現時期が断定できない。本節は、この一四語を別にして、考察することにする。ちなみに、その関連語の出現時期を調べてみると、次のようである。

- まどしい 「まどしさ」一七二二（江戸）
- せせかしい 「せせかまし」一六〇三、〇四（江戸）
「せせかしげ」一三〇初（鎌倉）
- 黒黒しい 「くろぐろしさ」一九二九、三〇（大正以降）
- 焦焦しい 「じれじれ」一九一〇（明治） 「じれじれしさ」一九一六（明治）
- 口寂しい 「くちさびしい」一七七九（江戸）
- 小汚らしい 「こぎたならしさ」一九四九（大正以降）

- 煌めかしい 「きらめく」 九七〇〜九九九頃（平安）
- げんざらしい 「げんざ」 九七〇〜九九九頃 「らしい」 一四七七（室町）
- 似付^{にづく}らしい 「につこらしい」 一六五五（江戸）
- 自慢^{じまん}たらしい 「じまんだらたら」 一七一〇（江戸）
- 息どおしい 「いきどうしい」 室町末／一六五九〜六一頃（江戸）
- いやこしい 「ややくしい」 一八六三〜六五頃（江戸）
- 似合^{にやわ}しい 「にあわしい」 室町末
- むつがかしい 「むづがかしい」 一八〇九〜一三（江戸）

一―一 近代語「しい」型形容詞の語構成の変化

『日本国語大辞典』（二〇〇一）に用例の記載がない上記の一四語を除いて、近代語において新出「しい」型形容詞五〇七語（江戸時代二九〇語、明治時代一二八語、大正時代以降九〇語）の語構成について考察を行うことにする（表12・表13・表14・表15参照）。室町時代に新出した形容詞が四九二語、近代以降新出の形容詞が五〇七語で、それほど大きな差はなく、都合よく比較しやすい語数である。

単純形容詞は僅か五三語であり、室町時代の一二三語に比べて半分以下になっている。特に「動詞未然形（被覆形）＋し」の激減は注目される。室町時代には四七語もあったのに対して、近代語では僅か一〇語である。

複合形容詞を見ると、まず、疊語形容詞は五六語あり、室町時代の一〇二語に比べて半

分近くになっている。「名詞の重複」と「形容詞語幹の重複」が少なくなつた。「名詞＋形容詞」などの複合形容詞は七七語あり、室町時代の五五語より約二〇語増えた。最も増加したのは「名詞＋形容詞」であり、室町時代の四二語より三〇語も多い七二語で、近代疊語形容詞以外の複合形容詞の九割以上を占めている。

派生形容詞は、室町時代と比べてさらに大量に造られた。まず、接頭語による派生形容詞を見ると、数多くの新出の接頭語や、既存の接頭語「こ」などによって、室町時代より約二〇語増えた。また、接尾語による派生形容詞は二一二語であり、室町時代の一一八語より約一〇〇語も増えた。接尾語「がまし」は造語力を維持し、「らし」「くろし」「くるし」「は室町時代よりさらに多用されるようになり、また新出の接尾語「らし」も優れた造語力を発揮した。

割合から見ると、室町時代は単純形容詞二五%、複合形容詞三二%、派生形容詞三一%であり、これに対して、近代語ではそれぞれ一〇%、二六%、五二%になっている。「動詞未然形（被覆形）＋し」と疊語形容詞の減少、「名詞＋形容詞」と派生形容詞の増加が注目される。

一―二 各時代の新出「しい」型形容詞の語構成

江戸時代、明治時代、大正時代以降のそれぞれの語構成は、次のようである。

まず、江戸時代において、「動詞未然形（被覆形）＋し」はわずか二語であり、室町時代と比べて激減した。「名詞の重複」は四語であり、疊語形容詞も減少した。なお、「名詞＋形容詞」は三四語もあり、多用されている。「いけ」などの新出接頭語はいくつか現

れ、接頭語による派生形容詞が発展した。「がまし」「らし」「くるし」「くるし」などの接尾語による派生形容詞も多く造られ、特に「らし」は六七語もあり、室町時代より一層優れた造語力を発揮した。否定的評価を表す接尾語「たらし」も生じた。

次に、明治時代においては、単純形容詞はわずか八語であり、名詞・副詞・動詞・ク活用形容詞などからシク活用形容詞に転成するものは見えなくなった。疊語形容詞は依然少なく、その他の複合形容詞は「悪賢し」以外、すべて「名詞＋形容詞」の構造である。江戸時代と比べて、接頭語による派生形容詞と、「がまし」「らし」などの接尾語による派生形容詞は依然として優勢を持っているが、造語力は低下したようである。特に「名詞＋らし」は江戸時代三一語もあつたが、明治時代はわずか二語にまで激減した。そのほか、江戸時代に増加した「形容詞／形容動詞語幹＋し」も明治時代に入って減少した。大正時代以降では、単純形容詞は依然として少ない。疊語形容詞も多くなく、それ以外の複合形容詞は「名詞＋形容詞」だけが見られた。接頭語と接尾語による派生形容詞は優勢を保っている。しかし、接尾語「くるし」「くろし」「らし」はほぼ造語力を失い、「がまし」も造語力が低下した。その代わりに接尾語「たらし」が多用されるようになった。

第二節 近代語の新出「しい」型形容詞語幹の性質

本節では、近代語において新たに用いられるようになった「しい」型形容詞の語幹について考察する。

二―一 単純形式の語幹の性質

1 名詞と副詞

〔名詞の場合〕

あじやらしい ちようじようしい てくだしい よくどうしい よくどしい わらべ
しい しらしい らんがしい いじましい あいそしい まがしい

この中で、人を表す名詞は「ちようじよう（長上）」「わらべ（童）」の二語のみである。この語構成は室町時代にすでに「わらべらしい」が見られた。「ちようじよう」は「年長、目上」の意を表し、室町時代に生じた語であるが、「目上らしいさまである」というように形容詞語幹に用いられるのは江戸時代である。

「しら」と「まが」の場合、疊語形容詞「白々しい」「まがまがしい」は平安時代にすでに現れている。江戸時代になって、直接形容詞化したものである。また、他の名詞を見ると、具体名詞は見当たらず、抽象名詞の中でも、評価などの情意的意味を伴うものがほとんどである。そのため、形容詞語幹に現れやすいとも言える。

○あじやれ【戯】（名）ふざけること。冗談。あじやら。

○てくだ【手管】（名）人を操り動かす技術。巧みにだます手段、術策。

○よく【欲】（名）欲すること。願うこと。ほしがること。むさぼり求めること。

○らん【乱】（名）みだれること。弁別のなくなること。秩序を失うこと。

○いじ【意地】（名）物欲。食欲。

○あいそ【愛想】（名）人当たりのよいさまをいう。

この類の名詞が形容詞化した場合、基本的にその名詞が表す情意的概念に相応しい性質

を持つているという意を表す。つまり、名詞と形容詞とはほぼ同じ意味を表すのである。ただし、「よく(欲)」「いじ(意地)」のような願望を表す名詞が形容詞化した場合、多少は程度性を帯びることがある。

○よくどうしい【欲】欲が深い。欲ばりである。よくどしい。

*談義本・檠下雑談(1755)二・実名応身「何事にても欲(ヨク)どうしき事をいはず」

○いじましい【意地】意地きたない。けちくさい。せせこましい。

*随筆・皇都午睡(1850)三・中「銭湯(略)上方の湯は上り湯は夕方ならではなくいぢましく思わる」

〔副詞の場合〕

あんまりしい どうやらしい

副詞の形容詞化は江戸時代に現れた二語だけであった。この二語がシク活用形容詞化したのは、室町時代にすでに「あまりしい(余)」「なにとやらしい(何)」というようにシク活用化した形容詞があったことに影響されたかと考えられる。

ちなみに、上記の名詞と副詞を用いる形容詞の中で、明治時代や大正時代以降に現れたのは「あいそしい」「まがしい」「まがしい」の二語だけである。この二語の「愛想らしい」「まがまがしい」からの影響を考えると、接尾語「し」による名詞と副詞の形容詞化は江戸時代以降には衰退していると言えよう。

2 動詞

〔動詞未然形（被覆形）の場合〕

いましい めだたわしい きづましい そぐわしい なかしい くるわしい さげす
ましい のろわしい はじらわしい ほほえましい

この中で、動作動詞はあるにしても、すべて感情や評価などの情意に関係あるものである。「いましい（忌）」と「めだたわしい（目立）」の二語は江戸時代の出現であるが、鎌倉時代頃に「いまわしい」「めだたしい」はすでに存在している。その他の語も、江戸時代まで、その類義や対義のシク活用形容詞が多く見られた。つまり、動詞未然形（被覆形）の場合、これまでの語構造を継承したままであると言える。「きづむ（気詰）」「さげすむ（蔑）」は江戸時代に現れ、明治時代になって形容詞化している。なお、「のろう（呪）」「なく（泣）」「くるう（狂）」は上代に、「ほほえむ（微笑）」「はじらう（恥）」は平安時代に現れた動詞である。動詞の出現時期と比べて、その形容詞化がかなり遅れているように思われる。ちなみに、その形容詞化は江戸時代ではなく、明治・大正時代になるのは、西洋から言語・文化の移入と関係あるかと考えられる。

〔動詞連用形の場合〕

あけしい いいしい

動詞連用形を用いる二語は、江戸時代に現れている。その形容詞化は動詞本来の意味と違いが生じている点から見ると、この場合「シ」の情意性は強いようである。

○あけしい【明】（形口）（多く「あけしい間（隙・事）がない」の形で用いる）晴れ晴れとした気分である。ゆとりのある気持になる。晴れ晴れとすがすがしい。

*洒落本・契情買虎之巻（1778）一「どふらくな夫の身のうへ、ほんにあけしい間はござりませぬ」

○いいしい【言】（形口）言いたい。

*狂言記・八句連歌（1660）「字さへあまりて大事ござらずは、御めんの字は百も二百もいひしいところござる」

3 形容詞語幹と形容動詞語幹

〔形容詞語幹〕

あわしい あわれっぽい しなっこしい ながしい まどろしい めんどしい おぞましい あぶなかしい まどろかしい いたしい

室町時代には形容詞のク活用とシク活用の区別が完全になくなり、両活用形容詞が現れるようになる。江戸時代に入ると、形容詞における語基と接辞の結合法則に緩みが見えるようである。すなわち、一つの語基が同時に異なる接尾語を伴うことも多く見られ、たとえば、「あわい、あわれっぽい、しなっこい、ながい、まどろい、めんどい、おぞい、あぶない、いたい」のように、接尾語「い」による形容詞がある一方、上記のように接尾語「しい」をとるものも生じることとなった。この中で、明治時代に現れたのは「あぶなかしい」「まどろかしい」の二語であり、「か」を介して「しい」型形容詞になっている。大正時代以降に現れたのは「いたしい」であり、これは方言に由来する臨時的な用法かと思われる。

○いたしい（形口）からだに苦痛を感じる。苦しく、つらい。

* 夢声半代記〔1929〕（徳川夢声）祖母の死「『暑いでのう：、いたしいでのう』と云ったまま、またもウツラウツラとそれこそ文字通り、いたし気であった」〔形容動詞語幹〕

にぎやしい むやくしい めんどろしい にぎやかしい
形容動詞語幹の語数は明らかに少なくなった。

4 その他の語基

さむしい すばらしい せつらしい せつろしい まどしい まぼしい あぶかしい
せせかしい つらめしい うざかしい まどかしい こわっぱしい
これらの語幹は、主に既存の語基から変化したものである。「すばらしい」は動詞に由来するものかどうかは不明である。

以上、江戸時代において、単純形式の形容詞は多少形成されたが、明治以降に動詞未然形（被覆形）以外には、あまり用いられなくなるようである。

二―二 合成形式の語幹の性質

① 1 疊語形式の語幹 名詞の重複

ぎりぎりしい【義理】 つやつやしい【艶】 ねばねばしい【粘】 はっはっしい
初【うぶうぶしい【生】 とげとげしい【棘】 ふさふさしい【総・房】 みずみ
ずしい【瑞・水】 いたずらいたずらしい ぎぎしい【儀】 こどもこどもしい【子

供】せじせじしい【世辞】

この中で、多くは二音節のものである。注目されるのは、二音節ではないにもかかわらず、「ををし(雄)」「めめし(女)」から類推されたと見られる三音節の「こども」と、意味的に関係ある四音節の「いたずら」まで用いられていることである。『日本国語大辞典』(二〇〇一)の挙例のうち最古の用例を見ると、「こどもこどもしい」は一九二八年、「いたずらいたずらしい」は一九一九年、ほかに形容動詞の「おぼろおぼろしい」は一九一四年、「ふだんふだんしい」は一九二六年というように、ほぼ同じ時期に現れている。当時、疊語形容詞の音節に対する制約が緩んできたかと思われる。

また、「義理」「初」「儀」など漢語(或いは漢音)を用いるものがある。

② 形容詞語幹の重複

うすうすしい【薄】 くるくろしい【黒】 にくにくしい【憎】 あおあおしい

【青】 やすやすい【安】 あまあましい【甘】 さむざむしい【寒】 ほそぼそ

しい【細】 まるまるしい【丸】

形容詞語幹の重複は、基本的に強調を表している。この中で、「やすやすい」「ほそぼそしい」など、多少評価性を帯びるようになるものもある。

③ 形容動詞語幹の重複

げげしい【異】 ばかばかしい【馬鹿】 りこりこしい【利口】 だいだいしい

【大】 よぼよぼしい れいれいしい【麗】 おぼろおぼろしい【朧】 はではでし

い【派手】 ふだんふだんしい【不断】

形容動詞語幹の重複の場合、「異」「利口」「大」「麗」「不断」など、漢語(或いは

漢音)が多用されるようになった。

④ 動詞連用形の重複

さえざえしい【冴】 じれじれしい【焦】 ひえびえしい【冷】 いきいきしい

【生】 ぬけぬけしい【抜】

動詞連用形の語数は少ない。重複した場合、基本的に動詞本来の意味を強調するが、「ぬけぬけし」は評価的な意味がより強い。

○ぬける【抜】(自力下) (二) ⑦知恵がたりないさまである。間抜けである。

○ぬけぬけしい【抜抜】(形口)あつかましいさま、知っていながら知らないふりをするさまである。しらじらしい。

*ガトフ・フセグダア(1928) (岩藤雪夫)二「『何んぢやとぬけぬけしい』と又キャプテンは頭と同じ太さの首を鸚鵡(あうむ)のやうに下げた」

⑤ その他の語基の重複

うだうだしい きよときよとしい けばけばしい ずうずうしい【囧】 ちゃわちやわしい つまづましい ふさぶさしい ふてぶてしい ふとぶとしい まざまざしい もやもやしい したじたしい【親】 ずずしい【囧】 ずぶずぶしい【囧分】 せかせかしい そわそわしい にやにやしい おどおどしい だらだらしい

「したじたしい(親)」のようなシク活用形容詞語幹の重複があるが、主に擬声語や擬態語に集中している。

以上、疊語形式の語幹には、漢語(あるいは漢字音)や擬声語・擬態語の多用と、擬声語「おどろおどろし」以外の三音節以上の重複が現れたなどの特徴が見られた。

2 その他の合成形式の語幹

① 複合形式の語幹

まず、「名詞＋形容詞」について記す。後項形容詞の性質によって、次のようにまとめられる。

〔後項形容詞が感情・感覚を表すもの〕

「鬱陶しい」 みみうつとうしい【耳鬱陶】

「惜しい」 なごりおしい【名残惜】

「恋しい」 おとここいしい【男恋】

「寂しい」 くちさびしい【口寂】 くちさみしい【口寂】 くちさむしい【口

寂】 こころさみしい【心寂・心淋】 こころざむしい【心寂・心

淋】 ねやさびしい【閨寂】 うらさみしい【心寂】 はださびし

い【肌寂】 ふところざみしい【懷寂】

「忙しい」 きぜわしい【氣忙】 いきぜわしい【息忙】 こころせわしい【心

忙】

「楽しい」 こころたのしい【心楽】

「頼もしい」 こころだのもしい【心頼】

「懐かしい」 そとなつかしい【外懐】 ひとなつかしい【人懐】 むかしなつかし

い【昔懐】

「恥ずかしい」 うらはずかしい【心恥】 きはずかしい【氣恥】 はなはずかしい

【花恥】 おとこはずかしい【男恥】

「もどかしい」 したもどかしい【舌―】
「やかましい」 くちやかましい【口喧】 みみやかましい【耳喧】 くちかしがまし

「ゆかしい」 むかしゆかしい【昔床】

〔後項形容詞が評価を表すもの〕

「麗しい」 みめうるわしい【眉目麗・見目麗】

「おかしい」 ちゃんちゃらおかしい

「厳しい」 てきびしい【手厳】

「賢しい」 くちさかしい【口賢】

「正しい」 おりめただしい【折目正】 ぎょうぎただしい【行儀正】 すじめた

だしい【筋目正】 ゆいしよただしい【由緒正】 れいぎただしい

【礼儀正】 おりみただしい【折身正】 きそくただしい【規則正】

きりつただしい【規律正】 じゅんじよただしい【順序正】 かくち

ようただしい【格調正】 ぎしきただしい【儀式正】 さほうただし

い【作法正】 じよれつただしい【序列正】 ちつじよただしい【秩

序正】

「珍しい」 いなかめずあしい【田舎珍】 おとこめずらしい【男珍】 おんなめ

ずらしい【女珍】 そとめずらしい【外珍】 ひなめずらしい【鄙

珍】 こどもめずらしい【子供珍】 みみめずらしい【耳珍】

「優しい」 こころやさしい【心優】 きやさしい【気優】

〔その他の後項形容詞〕

「新しい」 みみあたらしい【耳新】 くちあたらしい【口新】 めあたらしい

【目新】 いみあたらしい【意味新】

「狂わしい」 ころぐるわしい【心狂】

「汚らわしい」 みみけがらわしい【耳汚・耳穢】

「しるし」 げんじらしい【験著】 げんじるしい【験著】

「高い」 ひとだかしい【人高】

「賑わしい」 ころにぎわしい【心賑】

「紛らわしい」 めまぎらしい（めまぐらしい・めまぐろしい）【目紛】

「難しい」 きむずかしい【気難】

「名詞＋形容詞」の場合、「寂しい」「懐かしい」「恥ずかしい」「やかましい」「正

しい」「珍しい」「優しい」「新しい」などの形容詞に集中している。特に、江戸時代か

ら「漢語名詞＋正しい」の多用が注目される。

江戸時代に入って、「名詞＋形容詞」の構造の複合形容詞は大量に造られたが、その他

の複合形容詞の語数は極めて少ない。動詞連用形、形容詞・形容動詞語幹や副詞などはあ

まり複合形容詞の造語に用いられなくなった。

動詞連用形＋形容詞 まけおしい【負け】 まちわびしい【待侘】

形容詞語幹＋形容詞 わるざかしい【悪賢】

形容動詞語幹＋形容詞 ぎようたくましい【仰逞】

副詞＋形容詞 そぞろおそろしい

② 派生形式の語幹

江戸時代に入つて、シク活用形容詞はさらに数多くの接頭語と接続するようになった。『日本国語大辞典』（二〇〇一）の記述から見ると、これらの新出の接頭語は、形容詞に程度の強調や主観を込めて評価するなどの意味要素を加えるものが多いようである。また、唯一、否定の接頭語による派生形容詞「ぶたのもしい（不頼）」は江戸時代に現れた。

〔新出の接頭語による派生〕

「江戸時代に現れたもの」

「いけ」 近世語。多く好ましくない意味を含む名詞、形容詞、形容動詞などの上に付い

て、卑しめ、非難する気持を表す。

例 いけあつかましい【―厚】 いけずうずうしい【―凶凶】 いけそうぞ

うしい【―忿忿・―騷騷】 いけばかばかしい【―馬鹿馬鹿】 いけふさ

ふさしい いけやかましい【―喧】

「け」 動詞、形容詞の上に付いて、何となく、漠然とした、などの意を表す。

例 けいまいましい【―忌忌】

「けち」 語頭に付けていまいましい気持を表す。

例 けちいまいましい

「しち」 形容詞や形容動詞の上に付いて、程度を強めるとともに、煩わしくていやだと

いう気持を表す。

例 しちむずかしい【―難】 しちやかましい【―喧】

「しゃ」 多く、体や衣服、調度などに関する名詞、および、副詞や動詞、形容詞の上に

付いて、侮蔑の気持をこめていう。しゃつ。

例　しゃござかしい【小賢】

「しょ」

動詞、形容詞などに付いて、その意味を強めるのに用いる。

例　しょむずかしい【難】

「ひち」

主として形容詞・形容動詞の上に付いて、程度がはなはだしくて気に入らない、の意を添える。

例　ひちむずかしい【難】

「明治時代に現れたもの」

「くそ」

卑しめののしる意を添える語。また、程度のはなはだしいことをのしる意。

例　くそいましい【糞忌忌】　くそやかましい【糞喧】

「す」

状態や様子を示す語の上に付けて、そのさまを強調する意を添える。

例　すなつかしい【懐】

「大正時代以降に現れたもの」

「ど」 名詞・形容詞・形容動詞、時には動詞の上にも付いて、ののしる気持をこめる。

例　どいやらしい【嫌・厭】

「その他の新出接頭語による派生」

例　あぐるしい　うすらかなしい【薄悲】　　うすらさびしい【薄寂】　　へらおかしい

ぶたのもしい【不頼】

「既存の接頭語による派生」

「あい」　あいひとしい【相等】

「うす」	うすさびしい【薄寂】
「うそ」	うそさびしい【薄寂】
「お」	おいしい【美味・旨味】
「こ」	こいまいましい【小忌忌】
	こじおらしい【こっぱずかしい】
	むさらしい【こむやくしい】
	【小忙】 こにくらしい【小憎】
	【小新】 こうれしい【小嬉】
「すえ」	すえおそろしい【末恐】
「そこ」	そこおそろしい【底恐】
「そら」	そらうつくしい【空美】
「なま」	なまいやらしい【生嫌】
	【新】 なまやさしい【生易・生優】
「もの」	ものさみしい【物寂・物淋】
	ものあたらしい【物新】
	ものあたましい【物惱】
	ものせわしい【物忙】
	ものおしい【物惜】
	ものやすしい【物優】
	ものすずしい【物涼】
	ものおしい【物惜】
	ものやさしい【物優】

以上のように、江戸時代に入って、「名詞＋形容詞」の複合形容詞と接頭語による派生形容詞は大量に産み出された。接尾語による派生形容詞については、次の節で論述する。

第三節 近代語「しい」型形容詞接尾語の性質

三―一 既存の接尾語の発展について

1 接尾語「がましい」の発展

古代語の形容詞接尾語「がまし」は、近代語においては「がましい」という形で以下、記すことにする。

① 名詞+がましい

「江戸時代」

いいわけがましい【言訳】 いろがましい【色】 えんりよがましい【遠慮】 おんがましい【恩】 くぜつがましい【口舌】 げんぎんがましい【現銀】 たにんがましい【他人】 ついでがましい【序】 つらあてがましい【面当】 りくつがましい【理屈】 りんきがましい【恪気】

「明治時代」

あつせいがましい【压制】 おやがましい【親】 おんぎがましい【恩義・恩誼】 くじょうがましい【苦情】 げいがましい【芸】 さいそくがましい【催促】 さしづがましい【指図】 せんさくがましい【穿鑿・詮索】 なんだいがましい【難題】 ようきゆうがましい【要求】

「大正時代以降」

きょうはくがましい【脅迫】 そうだんがましい【相談】 ひなんがましい【非難】 ひはんがましい【批判】 ひひょうがましい【批評】 べんかいがましい【弁解】 平安時代において、接尾語「がまし」は傾向・類似・性質・感情・言動など多様な意味

範囲に用いられていた。しかし、近代において、「恥がましい」のような感情や「猿がましい」のような類似を表すものが見えなくなった。そして、「親がましい」のような性質を表すものも少なくなった。これに対して、「理屈」「恪気」「苦情」「難題」のような判断や評価を表す名詞や、言語や動作を表すサ変動詞類の漢語名詞が多用されるようになった。つまり、接尾語「がまし」の意味範囲は「傾向」と「言動」に縮小したと言える。

② 動詞連用形＋がましい
「江戸時代」

あてつけがましい【当付】 あなずりがましい【侮】 いつわりがましい【偽】 う
ちつけがましい【打付】 うらみがましい【恨】 おごりがましい【驕・奢】 おし
つけがましい【押付】 なたてがましい【名立】

「明治時代」

みだりがましい【濫・猥】 ゆすりがましい【揺・強請】

「大正時代以降」

おんきせがましい【恩着】 ほこりがましい【誇】

江戸時代において、「動詞連用形＋がまし」は多少造られたが、それ以降はあまり用いられなくなったようである。江戸時代以降の四語の出現には、「濫がわしい」「強請がましい」「恩義がましい」「驕りがましい」の影響があると考えられる。

③ 形容動詞語幹＋がましい

いかつがましい【蔽】 じゆうがましい【自由】 すいがましい【粹】 ふぎがまし
い【不義】 ふしぎがましい【不思議】 ふしんがましい【不審】 かってがましい

【勝手】 きずいがましい 【氣随】 ぶしつけがましい 【不躰】 ふそくがましい
【不足】 ふふくがましい 【不服】 ふへいがましい 【不平】 みれんがましい 【未
練】 みだらがましい 【淫】

④ その他の語基+がまし

しかつがましい さわがましい 【騒】 そうがましい 【騒】 そうぞうがましい 【忿
忿・騒騒】

接尾語「がましい」は従来、名詞と動詞連用形に接続するのが一般的であり、江戸時代までに形容動詞語幹に接続するのは「あわれがまし」と「すずろがまし」の二語だけであった。しかし、江戸時代・明治時代において、「形容動詞語幹+がましい」が多用されるようになった。特に、明治時代において、不満などの意を表す「不躰」「不足」「不服」「不平」などの語が多く見られた。形容動詞語幹だけでなく、名詞や動詞連用形の場合でも否定的意味を表すものが多い。これは、近代において、接尾語「がましい」の意味範囲の縮小とサ変漢語名詞の大量出現に関係あるように思われる。

2 接尾語「らしい」の発展

古代語の形容詞接尾語「らし」は、近代語においては「らしい」という形で以下、記すことにする。

① 名詞+らしい

「江戸時代」

「人を表す名詞」

あほらしい【阿呆】 おんならしい【女】 げんざらしい こだもらしい【子供】
じんたいらしい【人体・仁体】 じんてらしい【人体・仁体】 じんぶつらしい【人
物】 にんげんらしい【人間】 はなげらしい【鼻毛】 べらぼうらしい【便乱坊・
箆棒】

〔その他の名詞〕

あいきょうらしい【愛敬】 いじらしい いやみらしい【厭味】 うそらしい【嘘】
うわきらしい【浮気】 えようらしい【栄耀】 かいしよらしい【甲斐性】 けんぺ
いらしい【権柄】 ことらしい【事】 じまんらしい【自慢】 しろえらしい【白
絵】 せいらしい【勢】 ぜいらしい【贅】 せんしよらしい【僭上】 てんごう
らしい にくていらしい【憎体】 にくてらしい【憎体】 ひとがらしい【人柄】
もったいらしい【勿体】 ようたいらしい【容体】 ようらくらしい【瓔珞】 りく
つらしい【理屈】 りようけんらしい【料簡・了簡】

「明治時代」

いんきらしい【陰気】 しょうしらしい【笑止】

「大正時代以降」

けんつくらしい【剣突】

接尾語「らしい」は室町時代に現れ、江戸時代に入っても優れた造語力を発揮した。人
を表す名詞や、「権柄」「自慢」「人柄」「容体」「瓔珞」など人の性質に関する名詞が
多く用いられる。また、語数は少ないが、接尾語「らし」は「僭上」「料簡」のようなサ
変動詞類の名詞に付くことがある。江戸時代以降、「名詞＋しい」はあまり用いられなく

なるようである。

② 動詞＋らしい

うぬぼれらしい【自惚】 すいたらしい【好】 すかんらしい【好】 につくらしい

(につこらしい・にやつこらしい)【似付】

接尾語「らしい」は従来動詞に付く場合は極めて少ない。江戸時代以降も同様である。そして、「すきらしい」のような動詞連用形ではなく、「すいたらしい」「すかんらしい」「につくらしい」のような「タ形」、否定形、辞書形が現れる。この点から、接尾語「らしい」の口語的な性質が伺える。

③ 形容動詞語幹＋らしい

「江戸時代」

いやらしい【嫌・厭】 えようらしい【榮耀】 うさんらしい【胡散】 きつしくら

しい きのどくらしい【気毒】 けいはくらしい【軽薄】 しさいらしい【子細】

じゃまらしい【邪魔】 すいらしい【粹】 ぜいらしい【贅】 そこつらしい【粗

忽】 たいそうらしい【大層・大造】 ばからしい【馬鹿】 ひがらしい【僻】 ま

んらしい【慢】 みようもんらしい【名聞】 みれんらしい【未練】 めんどうらし

い【面倒】 やぼらしい【野暮】

「明治時代」

いかがりしい【如何】 いかつめらしい【嚴】 おおぎょうらしい【大仰】 ぎよう

さんらしい【仰山】 けっこうらしい【結構】 しぜんらしい【自然】 そんだいら

しい【尊大】 まじめらしい【真面目】

江戸時代に入って、「形容動詞語幹＋らしい」は多用されるようになった。そして、「子細らしい」以外に、すべて否定的な評価に傾く。「栄耀」「粹」「名聞」のような語も、接尾語「らしい」と接続する場合、形容動詞の否定的意味で用いられている。

○えようらしい【栄耀】（形口）いかにもぜいたくなさまである。わがまま勝手である。
*浄瑠璃・出世景清（1685）二「ゑゑ、ゑようらしい、かく浪人の憂き身といひことさらかたきを持ったる身が、せめて一年に一度のたよりをもし給はず」

○すいらしい【粹】（形口）いかにも芸事や花柳界に精通している様子である。わけ知りらしい。粹人らしい。

*浮世草子・好色一代男（1682）六・五「しめやかになれば笑はせ、すいらしき男ははまらせ、初心なる人には泪こぼさせてよるこぼし」

○みようもんらしい【名聞】（形口）世間の評判を気にするさまである。名誉をてらうようである。

*雑俳・柳多留・初（1765）「草津の湯めうもんらしい人はなし」

なお、明治時代においては、「結構らしい」「自然らしい」「真面目らしい」のような肯定的評価に用いる語も見られた。これも近代小説の発展に伴い、江戸時代と違いが生じたのではないかと思われる。大正時代以降において、「形容動詞語幹＋らしい」の造語は見当たらない。

④ 形容動詞語幹＋らしい
「江戸時代」

いしこらしい いとしぼらしい いとしらしい 【愛】 おかしらしい かわいらしい

【可愛】 きたならしい 【汚】 くらしい すばらしい にくらしい
「明治時代」

いそがしらしい 【忙】 こわらしい 【強】 たのしらしい 【楽】 まずっぱらしい
【不味】 やさしらしい 【優】

「形容詞語幹＋らしい」も多用されるようになった。一つ注目されるのは、ク活用形容詞の語幹だけでなく、「いとらしい」「おかしらしい」「いそがしらしい」「たのしらしい」「やさしらしい」などのシク活用形容詞の語幹にも接続している点である。形容詞語幹の多用は、接尾語「らしい」と推量の助動詞「らしい」の混用に関係があるかと思われる。大正時代以降に「形容詞＋らしい」の造語は見当たらない。

⑤ 副詞＋らしい

どうやららしい もっともらしい いまさららしい 【今更】 すこしらしい 【少】 わざとらしい 【態】 ことさららしい 【殊更】

「副詞＋らしい」も多用されるようになった。ただ、「少しらしい」のような数量を表す副詞に接続するのは少し違和感がある。これも助動詞「らしい」の影響ではないかと考えられる。

3 その他の接尾語について

① 接尾語「くろしい」の派生語

あいくろしい 【愛】 かじくろしい ねばくろしい 【粘】 くんじくろしい かたく

ろしい【堅】　せまくろしい【狭】　へたくろしい【下手】　すねくろしい【拗】
ほてくろしい　おもくろしい【重苦】

②接尾語「くるしい」の派生語

あいくろしい【愛】　せぐるしい　むねぐるしい（むなぐるしい）【胸】　あやくろしい　おもくろしい【重苦】　かたくろしい【堅苦】　むさくるしい　ねぐるしい【寝苦】　ほてくるしい　ませくるしい　いきくるしい【息苦】　ごらんぐるしい【御覽苦】　みみぐるしい【耳】　あつくるしい【厚苦】　せばくるしい（せばくるしい）【狭】　むしくろしい【蒸苦】

③その他の接尾語による派生語

じょうらかしい【情】　せせこましい　ややこしい　へたくあしい【下手】　まだるこしい【間怠】　ざわめかしい　ふゆめかしい【冬】　まだろこしい

接尾語「くろしい」は室町時代に現れ、主に江戸時代に用いられた。「あいくろしい（愛）、あつくろしい（暑）、おもくろしい（重）、かたくろしい（堅）、せまくろしい（狭）」など、対応の「ーくるしい」も存在している点から見ると、語源的には同じであると考えられる。『日本国語大辞典』では「名詞に付いて、そのような様子である、そのものらしいの意を表す」と記述されているが、名詞以外にも形容詞語幹や動詞連用形に付くものもあるので、「くるしい」の変形と考えた方は妥当であろう。接尾語「くるしい」は、平安時代から現れ、明治時代にも用いられたが、大正時代以降に入って新出語はあまり見られない。ちなみに、「くろし」「くらはし・くらうし」との関係を考慮し、接尾語として扱うが、「苦しい」という本来の意味が残っているため、複合形容詞と見てもよい。

その他の接尾語による派生語は少ない。近代において、既存の接尾語「がましい」「らし」「くろしい」「くるしい」は引き続き造語力を發揮しているが、時代につれて変化し、消滅しつつある。大正時代以降は、「脅迫がましい」「批判がましい」のような「サ変漢語名詞＋がましい」だけがある程度量産が見える。次は、近代唯一の生産性持つ新出接尾語「たらしい」について考察する。

三―二 新出の接尾語「たらしい」について

1 接尾語「たらしい」の辞書記述

形容詞接尾語「たらしい」は『日本国語大辞典』（二〇〇一）に次のように意味が記述されている

たらし・い〔接尾〕（形容詞型活用。「態（てい）らしい」の変化したものか）

名詞や形容詞・形容動詞の語幹に付いて、形容詞化し、いかにもそのような感じがする、その性質が強い、の意を表す。感じのよくない場合にいう。「貧乏たらしい」「嫌味（いやみ）たらしい」「憎たらしい」「好かんたらしい」など。

次は『大辞林』（第二版・二〇〇六）の意味記述である

たらしい（接尾）〔形容詞型活用。「つたらしい」の形でも用いる〕

名詞や形容詞・形容動詞の語幹に付いて形容詞をつくる。いかにもそのように感ぜられる、そのような性質が強いなどの意を表す。好ましくない場合に用いる。「未

練―・い」「いやみっ―・い」「憎―・い」「長っ―・い」

2 接尾語「たらしい」の派生語

江戸時代以降の接尾語「たらしい」

「江戸時代」

〔形容詞語幹＋たらしい〕

あまたらしい【甘】 えぐたらしい ながたらしい むごたらしい【惨・酷】

〔形容動詞語幹＋たらしい〕

なめたらしい【無好】

〔名詞／動詞＋たらしい〕

いやみたらしい【厭味】 じまんだらしい【自慢】 すかんだらしい【好】

「明治時代」

にくたらしい【憎】 すけべえたらしい【助兵衛】 うらみたらしい【恨】

〔形容動詞語幹＋たらしい〕

いやったらしい【嫌】 きざったらしい【気障】 きのどくったらしい【気毒】 ぎ

ようさんたらしい【仰山】 びんぼうたらしい【貧乏】 ふけったらしい【不潔】

ふじゆうたらしい【不自由】 ぶしょうたらしい【不精・無精】 ふそくたらしい

【不足】 みじめたらしい【惨】 みれんだらしい【未練】 やぼったらしい【野

暮】

〔形容詞語幹＋たらしい〕

はがゆたらしい【齒痒】

接尾語「たらしい」は江戸時代から用例が見え始める。『日本国語大辞典』（二〇〇一）に収録されている語例の中で、挙例が最も古いのは「長たらしい」である。江戸時代

の語例から見ても、形容詞語幹に接続する場合が多い。「たらしい」は「態(てい)らしい」から変化したものと見られ、対応する「らしい」型が多く見られること、「つたらしい」のような促音の形が多いことなどから、接尾語「たらしい」は「らしい」の俗語的な言い方として発達したのではないかと思われる。ただ、「らしい」と比べて、「たらしい」は名詞に付くのが極めて少なく、主に形容詞と形容動詞語幹に付いている。この点は、「らしい」が近代に入って、形容詞と形容動詞に付く語が多くなるという変化に一致している。大正時代以降、接尾語「がましい」「らしい」の衰弱に伴い、形容詞語幹に多用されるようになった。

第四節 漢語形容詞について

形容詞は従来漢語訓読に用いられるものがあるが、平安時代から、個別であるが漢語は形容詞の語幹に現れ始めた。直接にシク活用形容詞の語幹に現れるのは少ないが、二音節の漢語が疊語形容詞の語幹に現れやすい。そして、時代につれて、疊語形容詞以外に、接尾語「がましい」「らしい」などの派生語に多用されるようになった。次に、漢語(仏語、漢字音、和製漢語などを含む)の形容詞についてまとめておく。

「平安時代」

「疊語形容詞の語幹」

げすげすし【下衆下衆】 びびし【美美】

「鎌倉時代」

「単純形容詞の語幹」

げすし【下衆】

〔疊語形容詞の語幹〕

あいあいし【愛愛】　　ふくふくし【福】

〔派生形容詞の語幹〕

やうがまし【様】　　あいらし【愛】

〔室町時代〕

〔單純形容詞の語幹〕

じやうらふし【上臍】　　さうざし【寂寞】　　うったうし【鬱陶】

〔疊語形容詞の語幹〕

いしいしし【以次以次】　　どくどくし【毒毒】　　らうらうし【良良】　　うつうつし

【鬱鬱】　　せきせきし【戚戚】　　せつせつし【切切】　　てふてふし【喋喋】　　ぞうぞう

しい【雑雑】

〔派生形容詞の語幹〕

あいぎやうがまし【愛敬】　　いけんがましい【意見・異見】　　きやくしんがまし【隔

心】　　こつがまし【骨】　　さいくがまし【細工】　　ざうさがまし【造作】　　ぞくがま

し【俗】　　ひじがまし【秘事】　　めらうがまし【女郎】　　めんぼくがまし【面目】

ゆだんがましい【油断】　　あいそうらし【愛想】　　あくらし【悪】　　あはうらし【阿

房】　　かいしようらしい【甲斐性】　　じちらし（じつらし）【実】　　しゆつけらし

【出家】　　しやうねらし【性根】　　じんとうらしい【実頭】　　ぞくらし【俗】　　てう

はふらし【調法】　　どくらし【毒】　　めんぼくらし【面目】　　ごたいそうらしい【御

大層【じんじょうらしい】【尋常】じちからし【実】しやうらかしい【性】
〔江戸時代〕

〔單純形容詞の語幹〕

ちようじょうし【長上】よくどうしい（よくどしい）【欲】らんがしい【乱】
ばかりしい【馬鹿】むやくしい【無益】

〔疊語形容詞〕

ぎりぎりしい【義理義理】はつはつしい【初初】げげしい【異異】ばかばかし
い【馬鹿馬鹿】

〔派生形容詞〕

こむやくしい【小無益】ぶたのもししい【不頼】えんりよがましい【遠慮】おん
がましい【恩】くぜつがましい【口舌】げんぎんがましい【現銀】たにんがま
しい【他人】りくつがましい【理屈】りんきがましい【愷気】そうがましい
【騒】じゆうがましい【自由】すいがましい【粹】ふぎがましい【不義】ふ
しぎがましい【不思議】ふしんがましい【不審】あいきようらしい【愛敬】え
ようらしい【榮耀】けいはくらしい【輕薄】けんぺいらしい【権柄】じまんな
しい【自慢】じんたいらしい（じんていらしい）【人体・仁体】じんぶつらしい
【人物】せいらしい【勢】ぜいらしい【贅】せんしようらしい【僭上】にん
げんらしい【人間】ようだいらしい【容体】ようらくらしい【瓔珞】りくつら
しい【理屈】りょうけんらしい【料簡】うさんらしい【胡散】しらいらしい
【子細】じゃまらしい【邪魔】すいらしい【粹】そこつらしい【粗忽】たい

そうらしい【大層・大造】 まんらしい【慢】 みょうもんらしい【名聞】 みれんらしい【未練】 めんどうらしい【面倒】 じょうらかしい【情】 あいくろしい（あいくろしい）【愛】 じまंतरらしい【自慢】

〔明治時代〕

〔單純形容詞の語幹〕

あいそしい【愛想】

〔疊語形容詞の語幹〕

だいだいしい【大大】 れいれいしい【麗麗】

〔その他の複合形容詞の語幹〕

おりみただしい【折身正】 きそくただしい【規則正】 きりつただしい【規律正】
じゅんじょただしい【順序正】 みみうつとうしい【耳鬱陶】

〔派生形容詞の語幹〕

あつせいがましい【压制】 おんぎがましい【恩義・恩誼】 くじょうがましい【苦情】 げいがましい【芸】 さいそくがましい【催促】 せんさくがましい【穿鑿・詮索】 なんだいがましい【難題】 ようきゆうがましい【要求】 きずいがましい【氣随】 ぶしつけがましい【不躒】 ふそくがましい【不足】 ふふくがましい【不服】 ふへいがましい【不平】 みれんがましい【未練】 しんせつがましい【親切】 あだめかしい【婀娜】 いんきらしい【陰氣】 しょうしらしい【笑止】 ぎょうさんらしい【仰山】 けっこうらしい【結構】 しぜんらしい【自然】 そんなだいらしい【尊大】

「大正時代以降」

〔疊語形容詞の語幹〕

ぎぎしい【儀儀】　せじせじしい【世辞世辞】　ふだんふさんしい【不断不断】

〔その他の複合形容詞の語幹〕

いみあたらしい【意味新】　かくちようただしい【格調正】　ぎしきただしい【儀式

正】　さほうただしい【作法正】　じょれつただしい【序列正】　ちつじよただしい

【秩序正】

〔派生形容詞の語幹〕

きようはくがましい【脅迫】　そうだんがましい【相談】　ひなんがましい【非難】

ひはんがましい【批判】　ひひようがましい【批評】　べんかいがましい【弁解】

おんきせがましい【恩着】　けんつくらしい【剣突】　ぎようさんらしい【仰山】

びんぼうらしい【貧乏】　ふけつたらしい【不潔】　ふじゆうたらしい【不自

由】　ぶしょうたらしい【不精・無精】　ふそくたらしい【不足】　みれんたらしい

【未練】

漢語形容詞は平安時代に現れ、鎌倉時代末までは主に疊語形容詞に用いられ、語数はそれほど多くなかった。平安時代に接尾語「がまし」がすでに現れたが、漢語との結合は少なかった。室町時代に入って、接尾語「らし」の形成に伴い、接尾語「がまし」と「らし」による漢語形容詞が大量に産み出された。この勢いは江戸時代に入っても維持されている。明治時代に入ってから、漢語の性質は少し変化が見え、「穿鑿」「批評」のような

サ変動詞類の漢語や、「不服」「不自由」のような否定形式の漢語も多用されるようになった。また、「格調正しい」「儀式正しい」のような「漢語＋正しい」の形容詞も現れた。大正時代以降、接尾語「がましい」「らしい」「衰弱するようになったが、「漢語＋がましい」だけは命脈を保ち、「漢語＋たらしい」が現れ始めた。漢語形容詞は、合成シク活用形容詞の発展の中で、重要な役割を果たしている。

第五節 まとめ

近代において、「動詞未然形（被覆形）＋し」を含み、接尾語「し」による単純形容詞の造語は明らかに衰えを見せた。そして、新出の単純形容詞があると言っても、既存の語基を変化するものが多く、新しい語基は少ない。特に、明治時代から、「名詞＋し」「副詞＋し」「形容詞語幹＋し」の造語はあまり見られなくなった。「動詞未然形（被覆形）＋し」は多少用いられるが、上代や平安時代に現れた動詞から派生したものがあり、小説の発展に伴い突発的に出現したかと考えられる。つまり、新出語基と他品詞からの転成のいずれにも用いられなくなった。近代において、単純形容詞の造語はある程度安定し、新出語基や動詞が減少したため、大量的な造語は生じにくい。これに対して、既存の語基を用いる合成形容詞は発展しやすい。

疊語形容詞は減少し、「名詞＋形容詞」は多用された。また、「いけ」「くそ」など数多くの新出の接頭語と、「こ」「もの」などの既存の接頭語によって、大量の派生形容詞も造られた。江戸時代において、接尾語「がましい」「らしい」「くろしい」「くるしい」と新出の接尾語「たらしい」などが優れた造語力を発揮した。なお、明治時代以降、

「たらしい」以外、接尾語の造語力は大幅に低下した。

近代語においては、新出の形容詞接尾語は少なく、既存の接尾語による派生形容詞が多い。また、室町時代と比べて、意味的には否定的評価に傾く傾向があるようである。その原因は、派生形容詞の量産に伴い、接尾語の意味が単純化したことと関係があるように思われる。従来「がまし」と「らし」はそれぞれ広い意味範囲を持ち、その語幹に様々な語基が現れる。しかし、近代に入ってから、「がましい」の意味範囲が縮小し、接尾語「らしい」は助動詞の「らしい」と混同され、「がましい」「らしい」「たらしい」の意味的な違いがあまり意識されなくなったようである。たとえば、明治時代から、名詞は「がましい」、形容動詞は「らしい」「たらしい」が多用される傾向が見られる。近代語の派生形容詞の中で、漢語名詞・漢語形容動詞が大量に現れ、形容詞化した場合、「批判」や「批評」、「不平」「不服」「不自由」など同義的な漢語が多用され、マイナスの意味傾向の漢語が使用されがちであるように思われる。近代においては、漢語が新たに造語されたり、新たな意味を付与されたりして多用されるようになり、それと調和する接尾語「がましい」が用いられるとともに、新たに接尾語「たらしい」が出現した。これによって、近代語「しい」型形容詞の造語は、さらに合成形容詞に傾き、漢語形容詞が多くなるとともに形容詞語彙全体を豊かにしていったのである。

第四章 シク活用形容詞の意味分類

本章は、シク活用形容詞の意味について考察を行う。シク活用形容詞の意味による分類を試み、シク活用形容詞の意味特徴と意味変化の傾向を把握したいと思う。

第一節 『分類語彙表』に基づく意味分類

一―一 『分類語彙表』に基づく意味分類

『日本国語大辞典』（二〇〇一）に収録されている「しい」型形容詞は八七九語である。国立国語研究所編集した『分類語彙表』（一九六四）の分類基準に従い、この八七九語を『日本国語大辞典』の意味記述によって分類してみた。

次の分類項目・番号表記は『分類語彙表』（一九六四）による。

1 抽象的關係

1 0 真偽

1 0 1 0 こそあど・他

1 0 3 0 真偽・是非

0 4 じちゝらしい【実一】 じつゝらしい【実一】 まことゝしい【真・実】

0 6 えせわしい【似非】

0 7 むなしい【空・虚】 ゆめゆめゝしい【夢夢】

0 8 まざまざゝしい

	0 7	あつたらしい【羨】	かなしい【羨】	悲・哀・愛【羨】	けっこう・らしい【羨】	結構【羨】	うら・やましい	
	0 4	すがすがしい【羨】	【羨】	【羨】	【羨】	【羨】	【羨】	
	0 3	おいしい【美味・旨味】	くるしい【苦】					
	0 2	趣・調子						
1 3	0 2	様相						
1 2	3 0	必然性						
1 2	1 0	出沒						
	0 6	むなしい【空・虚】						
1 2	0 0	存在						
1 2	0 8	ひとしい【等・均・斉】						
	0 5	おぼしい【思・覚】	おもわしい【思】	おや・がましい【親】			じち・ら	
	0 3	につこ・らしい【似】	まぎらわしい【紛】					
	0 1	おなじい【同】						
1 1	3 0	異同・類似						
	0 4	あい・ひとしい【相等】						

1 3 3
0 1 1
【香・芳】 すつ、ばらしい【素晴】 す、ばらしい【素晴】 すん、ばらし
い【素晴】 はかばか、しい【捗捗・果果】 め、ざましい【目覚】

特徴

1 3 3
0 1 1
よろしい【宜】

0 3 1
じんじょう、らしい【尋常】 なま、やさしい【生易・生優】 ひさしい

【久・尚】 ひとしい【等・均・斉】 ふだんふだん、しい【不断不断】

0 8
あや、しい【怪・妖・奇】 いなか、めずらしい【田舎珍】 おとこ、めずら

しい【男珍】 おんな、めずらしい【女珍】 こえ、めずらしい【声珍】 こ

ども、めずらしい【子供珍】 そと、めずらしい【外珍】 ともしい【乏・

羨】 はな、めずらしい【花珍】 ひと、めずらしい【人珍】 みみ、めずら

しい【耳珍】 めずらしい【珍】 もの、めずらしい【物珍】

0 9
おそろしい【恐】

1 3 3
あたらしい【新】

1 4 4
いま、めかしい【今一】 おかしい げげ、しい【異異】

1 5 5
め、ざましい【目覚】

1 6 6
ふかしい【深】

1 3 3
0 3 2
良不良・適不適

0 1 1
いしい【美】 よろしい【宜】

0 4 4
おもわしい【思】 このましい【好】 にく、らしい【憎一】

0 5 5
あしい【悪】 いかかが、しい【如何】 いかかが、らしい【如何一】 いかかわ

0 8 しい【如何】 いしい【美】 おろしい
0 8 おだしい【穩】 みみ、うっとうしい【耳鬱陶】
1 0 いったう、しい【甚】

1 4 そぐわしい なつかしい【懐】 にあわしい【似合】 に、つかしい【似付】
1 4 に、つかわしい【似付】 につく、らしい【似付一】 につこ、らしい【似
一】 にやつこらしい【邪魔一】 にやわしい【似合】 ふさわしい【相応】
1 8 じゃま、らしい【邪魔一】 め、ざましい【目覚】

1 3 4 0 調和・混乱

0 2 きそく、ただししい【規則正】
0 3 うるわしい【美・麗】 きりつ、ただししい【規律正】 じゅんじよ、ただししい
【順序正】 ただししい【正】 ちつじよ、ただししい【秩序正】
0 5 さわがしい【騒】 ぞうぞう、しい【雑雑】 みだり、がわしい【濫一・猥
一】 みだり、がわしい【濫一・猥一】

1 3 4 1 弛緩・粗密・繁簡

0 1 だらだら、しい ゆるかかしい【緩】
0 4 きびしい【厳】
0 7 こまか、しい【細】 こまごま、しい【細細】 こまつか、しい【細】
0 8 くだくだ、しい こまごま、しい【細細】 ややくこしい ややくこしい わず
らわしい【煩】

1 3 4 5 美醜

0	1	うつくしい【美・愛】	うるわしい【美・麗】	おかしい	そら、うつくしい
【空美】	びび、しい	【美美】	みずみず、しい	【瑞瑞・水水】	ゆゆしい
【由由・忌忌】					
0	2	しお、らしい			
0	3	くわしい【美・細・妙・詳・委・精】	みめ、うるわしい	【眉目麗・見目麗】	
0	4	つやつや、しい【艶艶】	におわしい【匂】	はではで、しい	【派手派手】
		はなばな、しい【花花・華華】	はな、めずらしい	【花珍】	はればれ、しい
		【晴晴】	まぶしい【眩】	まぼしい【眩】	れいれい、しい
		【麗麗】			
0	5	あだ、めかしい【婀娜】	なま、めかしい	【艶】	
0	7	すずしい【涼】			
0	9	ごらん、ぐるしい	【御覽苦】	み、ぐるしい	【見苦】
1	0	きたな、らしい	【汚】	くさ、らしい	【臭】
		けがらわしい	【汚・穢】		
		こ、ぎたならしい	【小汚】	こ、むさらしい	ふけつつ、たらしい
		【不潔】			
		むさ、くるしい	むさ、くろうしい	むさ、くろしい	むさ、らしい
		むずかしい			
		【難・六借】			
1	3	難易・安危			
0	4	なんだい、がましい	【難題】		
0	2	くるしい	【苦】	しち、むずかしい	【一難】
0	3	さまじい	【凄】	ひち、むずかしい	【一難】
		【難・六借】	むつがかしい	むつかしい	【難】
			むつかしい	むずかしい	

1 5 1 0	1 5 0 4	0 8	1 5 0 0	1 5 作用	0 9	0 7	0 5	0 4	0 2	1 4 0 0	1 4 力	1 2	1 0	0 7	0 6	
動き	いそがしい【忙・急】	連続・反復	あわあわしい【沫沫】 め・まぐるしい【目紛】 め・まぎらしい【目紛】 め・まぐらしい【目紛】	作用・変化	すさまじい【凄】 もの・すさまじい【物凄】	あらあらしい【荒荒】	いかめしい【厳】 けわしい【険・嶮】 はげしい【激・烈・劇】	よわよわしい【弱弱】	たくましい【逞】	力	力	【危】 あぶなっかしい【危】 あやうしい【危】 きびしい 【厳】 けわしい	あぶかしい【危】 あぶかわしい【危】 あぶつかしい【危】 あぶなかしい	おだしい【穏】	なま・やさしい【生易・生優】	やさしい【優・易】

		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
		6	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	
		0	8	7	6	5	4	3	2	2	2	2	2	2	2	
		0	4	1	0	3	1									
		2	6													
	時間	時間	時間	時間	時間	時間	時間	時間	時間	時間	時間	時間	時間	時間	時間	
【久久】	久く、ひさしい【幾久】	すぼ、らしい	限定・優劣	切断	接近・接触・隔離	開閉・封	分割・分裂・分散	統一・組み合わせ	乗り降り・浮き沈み	包み・覆いなど	入り・入れ	走り・飛び・流れなど	なすましい【泥】	進行・過程・経由	固定・傾き・転倒など	動揺・回転
	【久久】	ふさしい【久】										はかばか、しい【捗、捗・果、果】				
	お、とおどおしい【御遠、遠】	ほど、ひさしい【程、久】														
	とし、ひさしい【年、年】															
	ひさびさ、しい															

1	1						1	1					1			1							
9	9						8	8					7										
1	量	1	0	0	0	0	0	形					3										
0		1	9	8	6	3	0	形					0	0									
多								形				方	空	1									
少								形				向	間	7									
								形				所	・	7									
								い				場	空	0									
								か				所	間	0									
								つ				所	間	0									
								ぐ				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0									
								ら				所	間	0									
								し				所	間	0									
								い				所	間	0</									

0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	0		
1	3	9	6		4	2	2	9	8	7	6		1	1	1	8	5	0	3
はやばや・しい【早早】	速度	いぼいぼ・しい【疣疣】	いかめしい【厳】 おびただしい【夥】	【狭苦】 せま・くるしい【狭一】 せまっ・くるしい【狭苦】	せせこましい せせこましい せば・くるしい【狭苦】 せま・くるしい	はればれ・しい【晴晴】	広狭・大小	ちかぢか・しい【近近】	とおどお・しい【遠遠】	あつ・くるしい【厚苦】 うすうす・しい【薄薄一】	あさからしい【浅】 ふかぶか・しい【深深】	なが・しい【長長・永永】	ながしい【長】 なが・たらしい【長一】 ながっ・たらしい【長一】 なが	長短・高低・深淺・厚薄・遠近	あわあわ・しい【淡淡】 あわしい【淡】	い【貧】 ゆめ・がましい【夢一】 ゆめゆめ・しい【夢夢】	いぼいぼ・しい【疣疣】 おいぼいぼしい すこし・らしい【少一】 まずし	ふくぶく・しい【福福】	おおしい【多】 おびただしい【夥】 ふかしい【深】

0 6 まだるゝこしい【間怠】 　　まだるっゝこしい【間怠】 　　まどろゝこしい

まどろっゝこしい 　　まどしい 　　まどろゝかしい 　　まどろゝこしい 　　まどろゝし

い 　　まどろっゝこしい

0 8 あわただしい【慌・遽】 　　いそがしい【忙・急】 　　けわしい【陰・嶮】 　　せか

せかゝしいせわしい【忙】 　　めゝまぎらしい【目紛】 　　めゝまぐらしい【目

紛】 　　めゝまぐるしい【目紛】 　　めゝまぐるしい【目紛】

1 9 1 4 **軽重**

おもおもゝしい【重重】

かろがろゝしい【輕輕】

1 9 1 5 **寒暖**

あつゝくるしい【暑苦・熱苦】 　　あつゝくろうしい【暑苦】 　　あつゝくろしい

【暑苦・熱苦】 　　あつっゝくるしい【暑苦・熱苦】 　　むしゝぐるしい【蒸苦】

こゝすずしい【小涼】 　　すずしい【涼】

こゝすさまじい【小凄】 　　さむざむゝしい【寒寒】 　　すさまじい【凄】 　　ひえ

びえゝしい【冷冷】

程度

1 9 2 0 よろしい【宜】

いよしい【彌】

2 6 あさましい【浅】 　　あたたしい 　　いたいたゝしい【痛痛・傷傷】 　　いちゝじる

しい【著】 　　おおしい【多】 　　おそろしい【恐】 　　おっそろしい【恐】 　　おっ

とろしい【恐】 おびただしい【夥】 きびしい【嚴】 けわしい【險・嶮】
 さまじい すさまじい【凄】 すっばらしい【素晴】 すばらしい【素
 晴】 すんばらしい【素晴】 ばかばかしい【馬鹿馬鹿】 ばからしい
 【馬鹿】 はげしい【激・烈・劇】 はなはだしい【甚】 べらぼうら
 しい【便乱坊一・籠棒（ボウ）一】 ゆゆしい【由由・忌忌】
 あまり、しい【余】 あんまり、しい おびただしい【夥】

1 9 2 1 限度

2 8 たっぷり、しい【湛】

1 9 3 1 過不足

1 9 4 0 3 とぼしい【乏】 ともしい【乏・羨】 まどしい【貧】

1 9 4 0 0 一般・全体・部分

3 精神及び行為

3 0 心

3 0 0 心

3 0 0 1 感覚

0 0 1 なやましい【悩】

0 0 6 まぶしい【眩】 まぼしい【眩】

3 0 0 2 感動・興奮

0 0 1 かなしい【悲・哀・愛】 しおらしい なみだぐましい【涙一】 やさし

3 0 1 2 恐れ・怒り・悔しさ

0 1 いびしいうとましい【疎】 うやうやしい【恭】 おぞましい【悍】 おそ

ろしい【恐】 おっそろしい【恐】 おつとろしい【恐】 おどおどしいお

とろしい【恐】 おとろつしい【恐】 こわらしい【怖】 すえ、おそ

ろしい【末恐】 すさまじい【凄】 そこ、おそろしい【底恐】 そぞろ、おそ

ろしい【漫恐】 そら、おそろしい【空恐】 むずかしい【難・六借】 もの

、おそろしい【物恐】

0 2 いまいま、しい【忌忌】 いましい【忌】 いめいめしい いめえましいい

めましい くそ、いまましい【糞忌忌】 くやしい【悔・口惜】 け、いま

いましい【一忌忌】 けち、いまましい こ、いまましい【小忌忌】 こ

ころ、やましい【心疾】 にがにが、しい【苦苦】 はらだたしい【腹立】

むやく、しい【無益】

0 3 むやく、しい【無益】

0 4 あつたらしい【惜】 いまいま、しい【忌忌】 いましい【忌】 おしい

【惜・愛】 かごと、がましい【託言】 かなしい【悲・哀・愛】 くいし

い くち、おしい【口惜】 くやしい【悔・口惜】 なごり、おしい【名残

惜】 のこり、おしい【残惜】 まけ、おしい【負惜】 みれん、がましい

【未練一】 みれん、たらしい【未練一】 みれん、らしい【未練一】 もの

、おしい【物惜】

3 0 1 3 安心・焦燥・満足

0 0 0 0
1 1 3 5
3 1 0 1
0 4 0 7

かいがい、しい【甲斐甲斐】 すえ、たのもしい【末頼】 たのもしい【頼】
こ、たのしい【小楽】
うだしい【穏】 ゆるかしい【緩】
いたわしい【勞・痛】 ういうい、しい【初初】 おぼおぼ、しい かじ、く
ろしい かた、くるしい【堅苦】 かた、くろしい【堅苦】 かたっ、くるし
い【堅苦】 ぎぎ、しい【儀儀】 き、ぜわしい【氣忙】 き、づかわしい
【氣遣】 き、づましい【氣詰】 くるしい【苦】 ころ、さわがしい【心
騒】 ころ、せわしい【心忙】 さわがしい【騒】 せつらしい せつろ
しい せわしい【忙】 せわせわ、しい【忙忙】 そぞろ、おそろしい【漫
恐】 そわそわ、しい て、がましい【手】 ぶ、たのもしい【不頼】 ほ
そぼそ、しい【細細】 みだり、がわしい【濫一・猥一】 みだれ、がわしい
【濫一・猥一】 もの、おもわしい【物思】 ゆゆしい【由由・忌忌】 わび
しい【侘】
いらいら、しい【苛苛】 いらだたしい【苛立】 ころ、やましい【心疾】
した、もどかしい【舌一】 じれじれ、しい【焦焦】 はがゆ、たらしい【齒
痒一】 まどかしい もどかしい【擬】 やましい【疾・疚】
ふそく、がましい【不足一】 ふそく、たらしい【不足一】

苦悩・悲哀

あぐるしい いき、ぐるしい【息苦】 いきだわしい【息】 いきどうしい
【息】 いきどおしい【息】 いたましい【痛・傷】 いたわしい【勞・痛】

いと優しい いと美しい うつとう・しい【鬱陶】 うつとしい【鬱陶】 おも
 おも、しい【重重】 おも、くるしい【重苦】 おも、くるしい【重苦】
 おもつ、くるしい【重苦】 き、むずかしい【気難】 くるしい【苦】 ここ
 ろ、ぐるしい【心苦】 このましい【好】 むな、ぐるしい【胸苦】 むね、
 ぐるしい【胸苦】

あつ、くろしい【暑苦・熱苦】 うざかしい うざつかしい うつとう、しい
 【鬱陶】 うつとしい【鬱陶】 こと、むずかしい【事難】 こ、むずかしい
 【小難】 むずかしい【難・六借】 めんどう、しい【面倒一】 めんどう、
 らしい【面倒一】 めんど、しい【面倒】 やかましい【喧】 よう、がまし
 い【様一】 わずらわしい【煩】 わずろうしい【煩】 わびしい【侘】
 いとわしい【厭】 くるおしい【狂】 くるしい【苦】 くるわしい【狂】

こころ、ぐるわしい【心狂】 つらめしい なやましい【悩】 み、ぐるしい
 【見苦】 みみ、ぐるしい【耳苦】 もの、ぐるおしい【物狂】 もの、ぐる
 わしい【物狂】 もの、なやましい【物悩】 もやもや、しい わびしい
 【侘】

うす、さびしい【薄寂】 うすら、さびしい【薄寂】 うそ、さびしい【薄
 寂】 うそ、さみしい【薄寂】 うら、さびしい【心寂・心淋】 うら、さみ
 しい【心寂】 こころ、さびしい【心寂・心淋】 こころ、さみしい【心寂・
 心淋】 こころ、さむしい【心寂・心淋】 こ、さびしい【小寂・小淋】 さ
 びしい【寂・淋】 さぶしい【寂・淋】 さみしい【寂・淋】 さむしい

【寂・淋】　そこ、さびしい【底寂】　ねや、さびしい【閨寂】　はだ、さびしい【肌寂】　ひと、こいしい【人恋】　もの、さびしい【物寂・物淋】　もの、さみしい【物寂・物淋】　もの、わびしい【物侘】　わびしい【侘】　あさましい【浅】　うすら、かなしい【薄悲】　うら、がなしい【心悲】　うれし、がなしい【嬉悲】　おとな、しい【大人】　おとましい【疎】　かなしい【悲・哀・愛】　かなしましい【悲】　き、ぐるしい【気苦】　こころ、がなしい【心悲】　そこ、がなしい【底悲】　なかしい【泣】　なげかしい【嘆】　なげかわしい【嘆】　みじめ、たらしい【惨一】　みじめつ、たらしい【惨一】　もの、がなしい【物悲】

3
0
2
0

好悪・愛憎

0
1

うつくしい【美・愛】　このもしい【好】　すいた、らしい【好一】　ひな、めずらしい【鄙珍】

0
3

いまいま、しい【忌忌】　いや、らしい【嫌一・厭一】　うとましい【疎】

おとな、しい【大人】　おとましい【疎】　けがらわしい【汚・穢】　こ、いやらしい【小嫌】　すかん、たらしい【好一】　すかん、らしい【好一】　ど

、いやらしい【一嫌・一厭】　どうやら、しい　どうやら、らしい　なま、いやらしい【生嫌】　みみ、けがらわしい【耳汚・耳穢】　もどかしい【擬】

0
5

ものもの、しい【物物】　ゆゆしい【由由・忌忌】　おとろしい【恐】　おとろつしい【恐】　のろわしい【呪】

い【恐】　のろわしい【呪】

1 2	1 1	1 0	0 8	0 6
おく、ゆかしい【奥床】 したわしい【慕】	あいあい、しい【愛愛】 しい【愛敬一】 くるしい【愛一】 れっ、ぼしい【哀一】 らしい【可愛一】	いとうしい【憎憎】 【惜・愛】 しい【悲・哀・愛】 い【慕】	えぐ、たらしい【蔽一】 憎【どくどく、しい【毒毒】】 【憎一】	したしい【親】 【遠遠】 にく、たらしい【小憎体】 【憎一】
おく、ゆかしい【奥床】 したわしい【慕】	あいぎよう、がましい【愛敬一】 あい、くるしい【愛一】 あい、らっしい【愛一】 いたいけ、らしい【幼気一】 うつくしい【美・愛】	いとおしい【いとしい】 【男恋】 こころ、ぐるしい【心苦】 なつかしい【泥】	こ、にくてらしい【憎一】 にく、たらしい【憎一】 にく、たらしい【憎一】 にく、たらしい【憎一】	したしましい【親】 【睦】 ちかしい【近・親】 とおどお、しい

つかしい【懐】 ひと、なつかしい【人懐】 ほほえましい【微笑・頬笑】
 むかし、なつかしい【昔懐】 むかし、ゆかしい【昔床】 もの、なつかしい
 【物懐】 ゆかしい【床・懐】
 1 4 うるわしい【美・麗】 ところ、やさしい【心優】 しなっこ、しい しなつ
 こ、らしい なさけ、らしい【情一】 なま、やさしい【生易・生優】 にん
 げん、らしい【人間一】 ひと、がましい【人一】 ひと、らしい【人一】
 やさしい【優・易】 やさし、らしい【優一】
 1 5 しんせつ、めかしい【親切一】
 1 6 あわれ、がましい【哀一】 いたいた、しい【痛痛・傷傷】 いたましい
 【痛・傷】 いたわしい【労・痛】 いたうしい いたおしい いたましい
 【愛】 いとしば、らしい きのどくつ、たらしい【気毒一】 きのどく、ら
 しい【気毒一】 さま、うしい【様憂】 しようしい【笑止】 しようし、ら
 しい【笑止一】 ようらく、らしい【瓔珞一】
 1 8 うら、いましい【羨】 うらましい【恨】 うらめしい【恨・怨】 うら、や
 ましい【羨】 ともししい【乏・羨】 ねたましい【妬・嫉】 りんき、がまし
 い【愷気一】
 1 9 あじやらしい【戯】 あなずり、がましい【侮一】 あほう、らしい【阿呆
 一】 あほ、らしい【阿呆一】 いけ、ばかばかしい【一馬鹿馬鹿】 おかし
 い おこ、がましい【痴一・烏澁一】 さげすましい【蔑】 しお、らしい
 しようしい【笑止】 しようし、らしい【笑止一】 ちゃんちゃら、おかしい

3																			
0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
4	0	0	8	7	6	5	4	3	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0																	

ばかばか、らしい【馬鹿馬鹿】 ばか、らしい【馬鹿】 へら、おかしい べ
 らぼう、らしい【便乱坊】・篋棒（ボウ）――
敬意・感謝・信頼
 うれしい【嬉・快・歓】 ところ、ぐるしい【心苦】
表情・態度
 あいそう、らしい【愛想】 あいそしい【愛想】 あいそ、らしい【愛想】
 ー【あまあま、しい【甘甘】 せじせじ、しい【世辞世辞】
 こわ、らしい【強】 しら、しい【白】 しらじら、しい【白白】
 にぎやか、しい【賑】
 いまいま、しい【忌忌】 いんき、らしい【陰気】 すね、くろしい【拗
 ー】
 くじょう、がましい【苦情】 くぜつ、がましい【口舌】 けわしい
 【険・嶮】 にがにが、しい【苦苦】 むずかしい【難・六借】
 うらみ、がましい【恨】
 なみだ、ぐましい【涙】
 にやにや、しい
信念・努力・忍耐
 せんさく、がましい【穿鑿】・詮索 みるん、がましい【未練】 みる
 ん、たらしい【未練】 みるん、らしい【未練】
 かいがい、しい【甲斐甲斐】 かいがわしい かいしよう、らしい【甲斐性

							3 0 4 1		
							0 2	1 4	
									—
									【かいしよ、らしい【甲斐性—】 つまづましい まめ、しい【忠実—】
									まめまめ、しい【忠実忠実・実実—】
									ばばしい ぶしよう、たらしい【不精—・無精—】 ぶしようつ、たらしい
									【不精—・無精—】
									自信・誇り・恥・反省
									おごり、がましい【驕—・奢—】 じまん、たらしい【自慢—】 じまん、ら
									しい【自慢—】 すい、がましい【粹—】 すい、らしい【粹—】 ぜい、ら
									しい【贅—】 はれ、がましい【晴—】 ほこらしい【誇—】 ほこり、がまし
									い【誇—】
							0 3		あつ、かましい【厚—】 あつ、かわしい【厚—】 いけ、あつかましい【—
									厚—】 いけ、ずうずうしい【—凶凶—】 いけ、ふさふさしい おこ、がましい
									【痴—・烏滸—】 かつて、がましい【勝手—】 ずうずうしい【凶凶—】 ず
									ずしい【凶凶—】 ずぶずぶ、しい【凶分凶分—】 たけだけ、しい【猛猛—】
									はかばか、しい【抄抄・果果—】 ふさぶさ、しい ふてぶて、しい ふとぶと
									、しい【太太—】
	0 5	0 4							こころ、やましい【心疾—】 やましい【疾・疚—】
									ういうい、しい【初初—】 うそ、はずかしい【薄恥—】 うら、はずかしい【心
									恥—】 おとこ、はずかしい【男恥—】 おはもじい【御は文字—】 ががやかしい
									【輝・耀—】 き、はずかしい【気恥—】 こつ、ばずか、しい【小恥—】 こ、は
									ずかしい【小恥—】 つつましい【慎—】 なま、はずかしい【生恥—】 はじ、が

ましい【恥一】 はじ、がわしい【恥一】 はじらわしい【恥】 はずかしい
 【恥・羞・辱】 はな、はずかしい【花恥】 はもじい【は文字】 はれ、が
 ましい【晴一】 ほて、くるしい ほて、くるしい め、はずかしい【目恥】
 やさしい【優・易】
 みようもん、らしい【名聞一】
 欲望・期待・失望

3
0
4
1

いい、しい【言一】 いぶかしい【訝】 うら、やましい【羨】 おく、ゆか
 しい【奥床】 おしい【惜・愛】 おぼしい【思・覚】 おもわしい【思】
 かんばしい【芳・香・馨】 このもしい【好】 さいそく、がましい【催促
 一】 ねがわしい【願】 のぞましい【望】 ほしい【欲】 もの、ほしい
 【物欲】 ゆかしい【床・懐】 よく、どうしい【欲一】 よく、どしい【欲
 一】

げんぎん、がましい【現銀一】 げん、じらしい【驗著】 げん、じるしい
 【驗著】

0
0
6

いじましい いやしい【賤・卑・鄙】
 かいがい、しい【甲斐甲斐】 ひと、まちどおしい【人待遠】 まちどお、し
 【待遠一】 まちど、しい【待遠一】 まち、ひさしい【待久】 まち、わび
 しい【待侘】

1
0

わびしい【侘】
 意志

3
0
4
5

0 1	きずい、がましい【氣随一】 したしい【親】
0 2	すがすが、しい【清清】 たくましい【逞】
0 5	しぜん、らしい【自然一】
0 6	くち、あたらしい【口新】 こと、あたらしい【事新】 ことさら、らしい
	【殊更一】 なたて、がましい【名立一】 わざと、がましい【態一】 わざ
0 9	と、らしい【態一】
1 0	ふじゆうつ、たらしい【不自由一】
3 0 6 6	じゆう、がましい【自由一】
3 0 6 1	判断・推測・評価
0 1	まさ、しい【正一】
3 0 6 8	詳細・正確・不思議
0 1	くわしい【美・細・妙・詳・委・精】 こまごま、しい【細細】 ふかしい
	【深一】
0 3	いたわしい【労・痛】
0 4	まぎらわしい【紛一】
0 7	たどたど、しい とぼ、かしい はかばか、しい【捗捗・果果】 まさ、しい
	【正一】
1 1	あやかしい しらじら、しい【白白】 むずかしい【難・六借】 やさしい
	【優・易一】
1 3	あや、しい【怪・妖・奇】 いかが、しい【如何一】 いかがわしい【如何一】

うさん、らしい【胡散一】	うたがわしい【疑】	おかしい	おかし、らしい
ふしん、がましい【不審一】			
いぶかしい【訝】	くしい【奇】	こうごう、しい【神神】	
ふしぎ、がましい【不思議一】			
意味・問題・趣旨など			
ふかしい【深】			
ふかしい【深】	ふかぶか、しい【深深】		
説・論・主義			
見聞き	きき、ぐるしい【聞苦】	たどたど、しい	み、ぐるしい【見苦】
3 1 1 言語			
3 1 0 0 言語活動			
0 1	くち、がましい【口喧】	くち、さかしい【口賢】	そうだん、がましい【相
0 6	談一】 ちゃわちやわ、しい		
0 8	ちようちよう、しい【喋喋】		
0 9	くだくだ、しい	くどくど、しい	
	いしこ、らしい	いや、こしい	いやつ、たらしい【嫌一】
	い【厭味一】	いやみっ、たらしい【厭味一】	いやみ、たらし
	うらみ、たらしい【恨一】	じまん、たらしい【自慢一】	ふふく、がましい
	【不服一】	ふへい、がましい【不平一】	りくつ、がましい【理屈一】

0 1	かんばしい【芳・香・馨】	ひと、がましい【人】	やかましい【喧】
3 3	生活		
3 3 0 0	文化・歴史・風俗		
0 4	あたらしい【新】		
0 7	ぞく、たしい【俗一】	ぞく、らしい【俗一】	
0 8	いや、らしい【嫌一・厭一】	うらめしい【恨・怨】	けがらわしい【汚・穢】
1 1	たくましい【逞】	ゆゆしい【由由・忌忌】	
1 2	いま、めかしい【今一】	かがやかしい【輝・耀】	けばけば、しい
1 4	おく、ゆかしい【奥床】	やさしい【優・易】	ゆかしい【床・懐】
1 6	なま、めかしい【艶一】		
1 7	いま、めかしい【今一】	いやみ、たらしい【厭味一】	いやみつ、たらしい
1 8	うざかしい【きざつ、たらしい】	【気障一】	
	むさ、くろうしい	うらめしい【恨・怨】	ひが、らしい【僻一】
	むさ、くろうしい	むさ、くろしい	むさ、くるしい
	やぼつ、たらしい【野暮一】	やぼ、らしい【野暮一】	むずかしい【難・六借】
1 9	あや、しい【怪・妖・奇】	さもしい	すぼ、らしい
	み、すぼらしい		
2 1	おとな、しい【大人】	かるがる、しい【輕輕】	けばけば、しい
	【儉】	てばてば、しい	つましい
	【化化】	ばけ、らしい	【化一】
	【化一】	ばけ、らしい	【化一】

3 3 1
0 6 0
ばけ、らしい【化一】
人生・禍福

いまいま、しい【忌忌】 いましい【忌】 いまわしい【忌】 まがしい

【凶】 ゆゆしい【由由・忌忌】

0 7 さわがしい【騒】 そうぞう、しい【忿忿・騒騒】 もの、さわがしい【物

騒】

0 8 こうごう、しい【神神】 ゆゆしい【由由・忌忌】

0 9 いかつ、がましい【厳一】 いかめしい【厳】 きびしい【厳】 すずしい

【涼】 たたわしい【湛】 もの、もの、しい【物物】

3 3 2
0 1 0
労働・作業・休暇

あわただしい【慌・遽】 いそがしい【忙・急】 いそがし、らしい【忙一】

いそがわしい【忙】 こ、ぜわしい【小忙】 さわがしい【騒】 せわしい

【忙】 せわせわ、しい【忙忙】 まぎらわしい【紛】 もの、せわしい【物

忙】

3 3 3
3 3 0
生活・起臥

3 3 9
0 0
身振り・立ち居・動作（手足・口・鼻・目）

3 4
行為

3 4 1
0 0
身上

0 1 あさましい【浅】 あや、しい【怪・妖・奇】 いやしい【賤・卑・鄙】

くち、おしい【口惜】 さもしい しょう、らかなしい しょう、ろうがしい

3
4
2
0

				0 4	すじめ、ただしい【筋目正】　ぞうぞう、しい【雑雑】　ちようじよう、しい【長上】
					おく、だのもししい【奥頼】　こころ、だのもししい【心頼】　すえ、おそろしい【末恐】　すえ、たのもししい【末頼】　たのもししい【頼】　はかばか、しい【抄抄・果果】
人柄					
			0 3		こどもこども、しい【子供子供】　こども、らしい【子供】
			0 5		すぐしい【涼】
			0 6		すぐしい【直】　すぐすぐしい【直直】
		0 7			かた、くるしい【堅苦】　まじめ、らしい【真面目】
		0 8			かどかど、しい【角角】　ぎりぎり、しい【義理義理】　しようね、らしい
					【性根】　まこと、しい【真・実】　まさ、しい【正】　しょうね、らしい
	1 0				あわあわ、しい【淡淡】　かど、がましい　かるがる、しい【輕輕】　かるがる、しい【輕輕】　かるがる、しい【輕輕】　かるがる、しい【輕輕】　かるがる、しい【輕輕】
					そこつ、らしい【粗忽】　そそかしい【輕輕】　けいはく、らしい【輕薄】
					かしい　ちようちよう、しい【喋喋】　やさしい【優・易】　ゆだん、がましい
					い【油断】
	1 1				おとな、しい【大人】　おもおも、しい【重重】　ものの、しい【物物】
	1 6				いらいら、しい【苛苛】　き、ぜわしい【気忙】　せか、らしい　せせかしい
					せせかましい　せせかわしい　せせこましい　もの、さわがしい【物騒】

0 9	0 8	0 7		0 4	0 2	0 1	0 2	2 9	2 7		2 4	2 3	2 0	1 9	1 4	1 3	1 0	
あさましい【浅】	ふぎ、がましい【不義】	かるがる、しい【軽軽】	じんたい、らしい【人体・仁体】	い【儀式正】ぎようぎ、ただしい【行儀正】さほう、ただしい【作法正】	おりみ、ただしい【折身正】おりめ、ただしい【折目正】ぎしき、ただし	がら、らしい【人柄】	おおせ、らしい【仰】しお、らしいじんぶつ、らしい【人物】ひと	威厳・行儀・品行	たどたど、しいねば、くろしい【粘】	てくだ、しい【手管】はかばか、しい【捗捗・果果】	【下手】へた、くろしい【下手】	うまうま、しいおかしいへた、くろしい【下手】へた、くろしい	げい、がましい【芸】	みだり、がわしい【濫・猥一】みだれ、がわしい【濫一・猥一】	いやしい【賤・卑・鄙】	くわしい【美・細・妙・詳・委・精】	め、はずかしい【目恥】	そそかしいそそこうしいそそこしいそそつかしい

	1	0	かだましい【奸・姦】	こゝざかしい【小賢】
	1	3	あじゃらしい【戯】	いかかわしい【如何】
			いろゝがましい【色一】	みだらゝがましい【淫一】
			みだりゝがましい【濫一・猥一】	みだれゝがわしい【濫一・猥一】
			みだりゝがわしい【濫一・猥一】	みだれゝがわしい【濫一・猥一】
	1	4	うわきゝらしい【浮氣一】	このましい【好】
			すけべえゝらしい【助兵衛一】	はなげゝらしい【鼻毛一】
	3	0	行為・活動	
	0	2	せいゝらしい【勢一】	
	0	3	いかつゝがましい【嚴一】	いさましい【勇】
			おぞいしい おぞましい【悍】	おとこゝらしい【男一】
			おなごゝらしい	おおゝしい【雄雄・男男】
			【女子一】	おんなゝらしい【女一】
			めめゝしい【女女】	りりゝしい【凜
			凜・律律】	
	0	5	あらあらゝしい【荒荒】	あらゝくましい【荒一】
			あらゝこましい【荒一】	あらゝくもしい【荒一】
			おびただしい【夥】	たけだけゝしい【猛猛】
			はげしい【激・烈・劇】	
	0	6	あつせいゝがましい【压制一】	おしつけゝがましい【押付一】
			おんぎゝがましい【恩義一・恩誼一】	おんきせゝがましい
			【恩着一】	きょうはくゝがましい【脅迫一】
			さしでゝがましい【差出一】	ねだりゝがましい【強請一】
				ゆすりゝがまし

3 5 い【揺一・強請一】 ようきゆう、がましい【要求一】
3 5 交わり

3 5 0 0 交わり

0 1 あいあい、しい【愛愛】 あい、したしい【相親】 あや、しい【怪・妖・奇】 うるわしい【美・麗】 おとどしい、したしい【親】 したじた、しい【親親】 じよう、らかしい【情一】 ちかしい【近・親】 ちかぢか、しい【近近】 なか、むつまじい【仲睦・中睦】 なれなれ、しい【馴馴】 ひさしい【久・尚】 ふゆ、めかしい【冬一】 むつまじい【睦】
へだて、がましい【隔一】

3 6 待遇

3 6 1 0 公式・公平

0 1 はかばか、しい【抄抄・果果】 はれ、がましい【晴一】 はればれ、しい

【晴晴】

0 7 ひとしい【等・均・斉】

3 6 8 0 待遇・礼など

0 1 うやうや、しい【恭】 うやまわしい【敬】 おもおも、しい【重重】 こまごま、しい【細細】 しかつ、がましい しかつべしい しかつべらしい し
かつめらしい【鹿爪】 れいぎ、ただしい【礼儀正】
あや、しい【怪・妖・奇】 せんしょう、らしい【僭上一】 なめ、たらしい
【無礼一】 なれなれ、しい【馴馴】 ぶしつけ、がましい【不躙一】 みだ

り、がわしい【濫一・猥一】 みだり、がわしい【濫一・猥一】
 けんぺい、らしい【権柄一】 さかしい【賢一】 そんだい、らしい【尊大一】
 まん、らしい【慢一】 もったい、らしい【勿体一】 ようだい、らしい【容
 体一】
 えんりよ、がましい【遠慮一】
 かやましい きっと、しい【急度】 きびしい【厳】 たたわしい【湛】 て
 、きびしい【手厳】 やかましい【喧】
 うとうと、しい【疎疎】 おぼおぼ、しい きやくしん、がましい【隔心一】
 たにん、がましい【他人一】 よそ、がましい【余所一】 よそよそ、しい
 【余所余所】
 かどかど、しい【角角】 かど、がましい かど、ましい けんけん、しい
 けんつく、らしい【剣突一】 せわしい【忙】 とがとが、しい とげとげ、
 しい【刺刺】
 むご、たらしい【惨一・酷一】 むごっ、たらしい【惨一】 むご、らしい
 【惨一・酷一】
 3 7 3 7 経済
 3 7 1 0 経済・収支
 0 4 おしい【惜・愛】
 0 5 こ、むやくしい【小無益】 まめまめ、しい【忠実忠実・実実】
 0 6 くち、おしい【口惜】

0 8 0 8
 つづましい【約】 つましい【儉】

貧富

3 7 9 0 0 1
 あさましい【浅】 いやしい【賤・卑・鄙】 かなしい【悲・哀・愛】 さも

らしい【貧乏一】 びんぼうっ、たらしい【貧乏一】 ふところ、ざみしい

【懐寂】 まずしい【貧】 まどしい【貧】

0 3 おびただしい【夥】 さびしい【寂・淋】 さぶしい【寂・淋】 さみしい

【寂・淋】 さわがしい【騒】 にぎにぎ、しい【賑賑】 にぎやしい【賑】

にぎわしい【賑】 ひと、だかしい【人高】

0 4 たのしい【楽】 たのし、らしい【楽一】 たのもしい【頼】 ふくぶく、し

い【福福】

0 5 えよう、らしい【栄耀一】 おごり、がましい【驕一・奢一】

5 自然現象

5 0 自然

5 0 0 0 自然

はる、めかしい【春一】 ふゆ、めかしい【冬一】

5 0 1 0 光

かがやかしい【輝・耀】 まぎらわしい【紛】 まぶしい【眩】 まぼしい

0 3

【眩】

いち、じるしい【著】

さえぎえ、しい【牙牙・互互】すずしい【涼】

おぼおぼ、しいおぼろおぼろ、しい【朧朧】たどたど、しい

つやつや、しい【艶艶】におわしい【匂】

きら、めかしい【煌一】

色

しらじら、しい【白白】しろえ、らしい【白絵一】すさまじい【凄】

くろぐろ、しい【黒黒一】

あおお、しい【青青一】

どくどく、しい【毒毒一】

音

けたたましいけたましいけばたたしい

あまつ、たらしい【甘一】たどたど、しい

ふとぶと、しい【太太一】

いけ、そうぞうしい【一忿忿・一騒騒】いけ、ふさふさしいおびただしい

【夥】かしがましい【囂・喧】かしましい【囂・姦・喧】かま、びすし

い【囂・喧】けたたましい【騒】さわがしい【騒】さわがましい【騒一】

ざわ、めかしいしち、やかましい【一喧】そう、がましい【騒一】そう

ぞう、がましい【忿忿一・騒騒一】そうぞう、しい【忿忿・騒騒】ひと、

5
0
2
00
1
1
00
0
0
00
0
0
00
3
0
00
0
0
00
0
0
00
0
0
00
0
0
00
0
0
00
0
0
00
0
0
00
0
0
00
0
0
0

0 7	ほね、がましい【骨一】	ほねぼね、しい【骨骨】
0 6	ふとぶと、しい【太太】	まるまる、しい【丸丸】
0 1	たいだい、しい【大大】	なま、めかしい【艶一】
5 6 0 0	けがらわしい【汚・穢】	ふくぶく、しい【福福】
5 6	身体	
5 3 0 0	どくどく、しい【毒毒】	
5 3	生物	
0 5	けわしい【陰・嶮】	はげしい【激・烈・劇】
	淋一	もの、さびしい【物寂・物淋】
0 2	さびしい【寂・淋】	さぶしい【寂・淋】
	さむざむ、しい【寒寒】	もの、さみしい【物寂・物淋】
5 2 3 0	地	さみしい【寂・淋】
5 2	天地	
5 1 7 0	熱	
5 1 6 1	火	
0 4	うつとう、しい【鬱陶】	うつとしい【鬱陶】
0 3	すがすが、しい【清清】	すずしい【涼】
5 1 5 0	気象	はればれ、しい【晴晴】
		きびしい【嚴】

5 7 生命

5 7 0 1 生

0 1 あおあお、しい【青青】 ういうい、しい【初初】 うぶうぶ、しい【生生】

なま、しい【生】 みずみず、しい【瑞瑞・水水】 わかわか、しい【若若】

0 2 あたらしい【新】 いきいき、しい【生生】 なま、しい【生】 なまなま、

しい【生生】 みずみず、しい【瑞瑞・水水】

5 7 1 0 生理・病氣など

0 6 さかしい【賢】 たくたくましい【逞】

0 8 あやかしい よぼよぼ、しい よわよわ、しい【弱弱】

0 9 あや、くるしい いき、ぐるしい【息苦】 いき、ぜわしい【息忙】 いきだ

わしい【息】 いきどうしい【息】 いきどおしい【息】 いきどしい【息】

いたしいいたわしい【労・痛】 せ、ぐる、しい【一苦】 なやましい【惱】

むずかしい【難・六借】 やましい【疾・疚】 わずらわしい【煩】

1 2 あさましい【浅】 むなしい【空・虚】

一―二 分類から見るシク活用形容詞の意味傾向

『分類語彙表』(一九六四)に基づき分類した結果、『日本国語大辞典』(二〇〇一)に収録されている「しい」型形容詞の意味については、次のような傾向が見られる(表20参照)。

1 抽象的關係を表すもの

(1) 「真偽」「類」「存在」「様相」「力」「作用」「時間」「空間」「形」「量」などの抽象的関係を表す場合、シク活用形容詞は「様相」(一四七語)と「量」(九五語)に多く見られる。「存在」「力」「作用」「空間」「形」はシク活用形容詞が用いられにくく、それぞれ十語以下である。

(2) 「趣・調子」「特徴」「良不良・適不適」「調和・混乱」「弛緩・粗密・繁簡」「美醜」「難易・安危」などの「様相」を表す場合、基本的に主観的判断の介入が必要であるため、シク活用形容詞が現れやすい。

(3) 「多少」「長短・高低・深浅・厚薄・遠近」「広狭・大小」「速度」「軽重」「寒暖」「程度」「限度」「過不足」などの「量」を表す場合、基本的に客観的な基準があり、ク活用形容詞が多くあるが、「量」の把握は客観的基準の上に主観的感覚が介入し得るため、シク活用形容詞も多く見られる。「真偽」「類」「時間」なども同様である。

(4) 「存在」「力」「作用」「空間」「形」の場合、主観の介入が難しいため、シク活用形容詞は現れにくい。

2 精神及び行為を表すもの

(1) 精神及び行為を表す場合、「好悪・愛憎」(一四七語)と「苦悩・悲哀」(九〇語)に多用される。次に、「恐れ・怒り・悔しさ」(四八語)、「自信・誇り・恥・反省」(四九語)、「安心・焦燥・満足」(四六語)などの感情にも多く見られる。「苦悩・悲哀」が九〇語であるのに対して、「快・喜び」がその三分の一の三一語で

あることが注目される。

(2) 喜怒哀楽などの感情のほか、「言語活動」(六三語)「人柄」(五五語)「文化・歴史・風俗」(四七語)「才能」(四四語)「待遇・礼など」(四六語)などの評価にも多用される。

3 自然現象を表すもの

(1) 自然現象を表す場合、「音」(二八語)と「生理・病気」(二〇語)に多用される。

以上、『語彙分類表』(一九六四)の分類基準によって、「しい」型形容詞を分類した。これによって、シク活用形容詞が「抽象的關係」「精神及び行為」「自然現象」に用いられる時、どのような意味に多用されるかについて、ある程度の認識ができたと思う。しかし、それぞれの意味分野に偏向するのはいつごろのことかで、そして、どのように変化してきたかについては依然として疑問が残る。そこで、意味が変化するパターンならびに時代の傾向を考察するため、シク活用形容詞の意味分類を再検討する。

第二節 シク活用形容詞の意味分類の再検討

二―一 シク活用形容詞の意味分類の試案

先行研究を踏まえて、シク活用形容詞の意味分類について、次の一三分類を試案した。
意味分類の試み(一三分類)

- ① 存在形容詞 実在、真偽、是非
- ② 関係形容詞 異同、類似、因果

- ③ 時空形容詞 時間（新旧、遅速）、空間（遠近、広狭）
- ④ 量的形容詞 多少、程度
- ⑤ 属性形容詞 大小、形、色、長短、高低、厚薄、材質、自然現象 など
- ⑥ 様相形容詞 常態・異常、調和・混乱、確かさ、弛緩、粗密、繁簡、難易・安危、調子、表情、新鮮さなど
- ⑦ 境遇形容詞 立場、身上、貴賤、貧富、運命、禍福、安否、忙閑、生老病死
- ⑧ 感覚形容詞 視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚、痛痒、温湿、飢渴・満腹、疲労 など
- ⑨ 対自形容詞 興奮・鎮静、苦楽、悲喜、怒り、驚き、恐れ、安心・心配、満足・不満（悔い／反省）、焦燥・つくろぎ、狼狽・落ち着き、自尊（自信）・卑下（自棄）、虚栄、驕り・慎み、栄辱（名誉・恥）など
- ⑩ 対他形容詞 人情、好悪、愛憎、親疎、善意・悪意、同情・嫉妬、恩・恨み、尊敬・輕蔑、尊重・愛惜・無視、感謝 など
- ⑪ 意向形容詞 意志、決心、欲、願望・失望、奮起・落胆、執着・諦め など
- ⑫ 思考形容詞 不審・不思議、信疑、推測 など
- ⑬ 評価形容詞 価値（良不良・適不適、優劣、重要・無益）、人の性質（人柄・性格・品行・才能など）、礼儀・態度、美醜・情趣 など
- 『大辞林』（第二版・二〇〇六）によると、「形容詞」とは、「そのものの性質・状態・属性などを表す言葉」である。まず、物の存在を前提としている。その存在には、実在や真偽を表す存在形容詞、その他の存在物との関わりを表す関係形容詞、時間性や空間性などを表す時空形容詞が含まれているはずである。そして、物の性質について、属性形

容詞と量的形容詞が含まれる。この五種類は物の存在に関係するものである。

次に、事物は不変なものではない。その変化している中で、ある時点の状態を形容することがある。事物の進展状況などを表す様相形容詞は主に物の状態に関係するものである。境遇形容詞は人の状態を表すものだと理解できる。

そして、人が存在や状態を認識する場合、五感による感覚形容詞と事物の性質に対する評価形容詞が成り立つ。また、外部の刺激があるかどうかにかかわらず、人間は喜怒哀楽の感情を生じる。その感情は、大体「喜怒哀楽」などの対自的な感情と、「愛憎好悪」などの対他的な感情に分けられる。感情のほかに、意志・願望や思考などの能動的精神活動を表すものもある。この十三分類の中で、①⑦は状態的意味が強く、⑧⑬は情意的意味が強いと言える。

勿論、形容詞の意味は絡み合って複雑で、完全に切り離れて分類するのはむずかしい。属性形容詞と感情形容詞の二分類の上で、さらに細かく意味分類を検討するため、この三分類を試案した。

二―二 各時代シク活用形容詞の意味分類

試案した一三分類の意味分類法で、上代語シク活用形容詞一四八語、室町時代語（中古・中世）シク活用形容詞四九二語、近代語シク活用形容詞五二一語について、『時代別国語大辞典 上代編』（一九六七）『時代別国語大辞典 室町時代編』（一九八五）二〇〇〇）『日本国語大辞典』（二〇〇一）の辞書記述の最初に記されている基本的意味によって分類を試みた（表21・表22参照）。各時代の意味分類からみる傾向は次のよう

ある。

1 上代語シク活用形容詞の意味分類

上代語シク活用形容詞の中で、対自形容詞、評価形容詞、対他形容詞の割合が大きい。最も多い対自形容詞三九語のうち、「喜楽」などプラスの意味を表すものは一四語あるのに対して、「苦悲」などのマイナス方向のものは二三語あり、マイナス方向に多用されている。なお、対他形容詞二二語のうち、「愛好」などのプラス方向のものは一七語で、「嫌悪」などのマイナス方向のものは四語で、プラス方向に多用されている。両者は逆の方向に用いられるため、合わせて感情形容詞の場合、プラス方向が三一語で、マイナス方向が二七語で、それほど差がない。

評価形容詞二三語のうち、プラス方向が一九語もあり、圧倒的プラス方向に多用されている。全体から見ると、上代語シク活用形容詞一四八語の中で、プラス方向は六四語で、マイナス方向は四五語であり、ややプラス方向に用いられる傾向があるようである。

2 室町時代（中古・中世）シク活用形容詞の意味分類

室町時代（中古・中世）シク活用形容詞の中では、評価形容詞、対自形容詞、様相形容詞の割合が大きい。最も多い評価形容詞一三七語のうち、プラスの意味を表すものは四九語で、マイナス方向のものは八三語で、上代と逆にマイナス方向に多用されるようになった。対自形容詞八九語のうち、マイナス方向のものは八一語もあり、上代よりさらにマイナス方向に傾く。なお、上代にプラス方向に多用されている対他形容詞四六語のうち、プラス方向とマイナス方向のものは二二語対二四語で、ほぼ同じである。

全体から見ると、室町時代シク活用形容詞は上代と比べて、明らかにマイナス方向に傾く傾向が伺える。そして、評価形容詞の割合は対自形容詞と対他形容詞を上回って第一位となり、様相形容詞は著しく増加し、対他形容詞を超えて第三位になった。

3 近代語シク活用形容詞の意味分類

近代語シク活用形容詞は室町時代と同様に、評価形容詞、対自形容詞、様相形容詞の割合が大きい。最も多い評価形容詞一四五語のうち、プラスの意味を表すものは四七語で、マイナス方向のものは九八語で、マイナス方向に多用されている。対自形容詞一〇九語のうち、マイナス方向のものは九一語もあり、それ以前と同じくマイナス方向に傾く。なお、対他形容詞六五語のうち、プラス方向とマイナス方向のものは二八語対三七語になり、ややマイナス方向に傾くようになった。

全体から見ると、近代語シク活用形容詞はさらにマイナス方向に傾く傾向が伺える。そして、室町時代と比べて、存在・関係・量的形容詞の語数が減り、その分、様相・対自・対他形容詞の語数が増えたようである。

第三節 まとめ

本章ではシク活用形容詞の意味分類について検討した。まず、国立国語研究所編『分類語彙表』（一九六四）に「形容詞の仲間」とした「相の類」の分類基準に従い、『日本国語大辞典』（二〇〇一）に収録されている「しい」型形容詞八九七語をその意味記述によって、分類した。これで、シク活用形容詞の同義類義の関係をより明確的に示すことがで

きた。また、「抽象的關係」「精神および行為」「自然現象」の三つの方面において、シク活用形容詞の使用傾向をある程度把握することができた。

具体的に見ると、「精神および行為」は圧倒的が多い。その中で、「好悪・愛憎」と「苦悩・悲哀」の類の語は最も多く見られる。喜怒哀楽などの感情のほかには、「言語活動」と「人柄」「才能」などの人の行為に関するものが多いのも注目される。「抽象的關係」の場合、「様相」と「量」に多用される。「自然現象」の場合、「音」と「生理・病氣」に多く用いられる。

この分類結果を踏まえて、シク活用形容詞の意味分類について再検討し、十三分類を試案した。上代・室町時代・近代の各時代のシク活用形容詞を分類して、各種類の形容詞の時代的消長を把握してみた。その結果、評価形容詞、様相形容詞の増加が注目される。これは、シク活用形容詞の語構成の時代的变化、つまり、疊語形容詞と派生形容詞の増加に關係あると考えられる。また、形容詞の意味方向から見ると、時代につれてマイナス方向に傾く傾向が伺える。特に、上代において明らかにプラス方向が優勢である評価形容詞と対他形容詞が、次第にマイナス方向へ変化するのが興味深い。

十三分類によって、各時代新出シク活用形容詞の原義の意味傾向について、ある程度把握することができた。しかし、形容詞の意味は不変なものではない。次は、この意味分類法を活かして、シク活用形容詞の意味変化について考察を行う。

第五章 シク活用形容詞の意味変化

本章は、主に『日本国語大辞典』（二〇〇一）の意味記述で二つ以上の項目が立っているシク活用形容詞を研究対象として、シク活用形容詞の意味変化について考察する。

第一節 状態シク活用形容詞の意味変化

一―一 分類からみるシク活用形容詞の意味変化

シク活用形容詞の意味変化を考察するために、まず、そのすべての意味記述によって、分類を試みた。たとえば、『日本国語大辞典』（二〇〇一）で「あさましい」の意味記述は次の八項目がある。

あさまし・い【浅】（動詞「あさむ（浅）」の形容詞化。

意外なことに驚いたり、あきれたりする意が原義。よい場合にも悪い場合にも用いたが、現代語では悪い意味にだけ使う）

① 意外である。驚くべきさまである。

* 竹取〔9C末〕10C初〕「取がたき物をかくあさましくもて来る事をねたく思ひ」

② 興ざめである。あまりのことにあきれかえる。

* 竹取〔9C末〕10C初〕「かくあさましき空ごとにてありければ、はや返し給

へ」

③ 「あさましくなる」の形で用い、思いもかけないことになる、何とも言いようのないさまになるの意から）死ぬことをいう。

* 海人刈藻物語「1271頃」二「御心もなきやうにておはしましけるが、夜に入りて、あさましくなり給ひぬ」

④ （程度、状態が驚きあきれられる程であるというところから）はなはだしい。ひどい。
* 古今著聞集「1254」七・二九一「浅猿（あさまし）くふるく成りたる寺あり」

⑤ 情けない。嘆かわしい。見苦しい。
* うたたね「1240頃」「とばかり来し方行く先を思ひ続けるに、さもあさましく

果無かりける契りの程を、など、かくしも思ひ入れけんと」

⑥ 生活がみじめである。貧乏でいたましい。
* 虎寛本狂言・鈍太郎「室町末く近世初」「『扱々浅ましい形（なり）で御ざる』
『誠にはかない体（てい）で御ざる』」

⑦ 品性がいやしい。がつがつしている。さもしい。
* 玉塵抄「1563」一六「人をにくみねたむ心がないぞ。一切人の心はよいをねた

みき

⑧ 地位や身分が低い。
* 曾我物語「南北朝頃」六・曾我にて虎が名残おしみし事「わらはは大磯の君、あさましき物の子なれば」

この八項目の意味記述によって、分類してみると、次のようである。

① 対自―驚き〔平安〕 ② 対自―不快〔平安〕 ③ 境遇―死〔鎌倉〕

④ 量的―程度〔鎌倉〕 ⑤ 対他―同情〔鎌倉〕 ⑥ 境遇―貧乏〔室町〕

⑦ 評価―品行〔室町〕 ⑧ 境遇―身上〔室町〕

つまり、「あさましい（浅）」は、平安時代に現れた時、その原義は驚きを表す対自形容詞であった。そして、驚きの感情から、興ざめの不快の感情まで、情意の変換が見られるのである。鎌倉時代においては、情意に含まれた程度性が抽出され、量的形容詞になった。また、特殊な用法として、死亡を表すようになった。さらに、善悪ともに用いられる情意的意味がマイナス方向に傾き、「情けない」という意味になった。時代が下るにつれて、マイナス方向の傾向が著しくなり、生活面の貧乏さと身分や地位の低さに用いられるようになる。それと関連して、「品性がいやしい」という評価にも用いられた。このように、情意の変換を別にして、対自形容詞「あさましい（浅）」は、境遇形容詞、量的形容詞、評価形容詞へと意味変化が見られるのである。つまり、情意から状態への変化が実現したことが認められる。

『日本国語大辞典』（二〇〇一）の意味記述で二つ以上の項目が立っているシク活用形容詞の中で、このような意味変化が見られるものは、およそ一六三語がある（表23・表24参照）。

厳密ではないが、十三分類の①～⑦を状態形容詞として扱い、⑧～⑬を情意形容詞として扱おうとすれば、「状態↓状態」の形容詞は四六語、「状態↓情意」の形容詞は七七語、「情意↓状態」の形容詞は七六語、「情意↓情意」の形容詞は八〇語である。次に、これ

らの形容詞の意味変化について考察する。

一―二 状態から状態へ変化する場合

「状態↓状態」の形容詞四六語の中で、最も多いのは「属性↓様相（九語）」である。次に、「様相↓属性（四語）」「様相↓境遇（四語）」「存在↓様相（三語）」「様相↓量的（三語）」などとなる。様相形容詞をめぐる変化が多いようである。

●存在↓様相（三語）

「ありありし」「存在」

意味変化（实在↓常態）「意味の進化」

実際にあつたとおりのさまである。ありのままである↓当然あるべきさまである。そのもののにのぞましい様子である。

「ただし」【正】

意味変化（是非↓調和）「意味の進化」

形や向きがまっすぐである。ゆがんだり曲がったりしていない。横向きになつたり、わき道にそれていない↓形が整っている。きちんとしている。

「まさし」【正】

意味変化（是非↓確かさ）「意味の転用」

事柄の本性にかなっているさま。正当である。真正正銘である。ただし。まちがっていない↓占いなどが当たってその通りに実現するさま。見込み通りである。また、よく言い当てるさま。予想が確かである。

● 関係↓様相（二語）

「ひとし」【等】

意味変化（異同↓調和）〔意味の具体化〕

形状、性質、状態、程度、数値などを対比して、同じであるさま。非常によく似ている↓大勢の行動が同じであるさま。誰も彼も一斉である。

やうがまし【様】

意味変化（理由↓困難）〔意味の転用〕

様子ありげである。わけがありそうだ。もったいぶった様子である↓問題がありそうである。注文や条件などがむずかしい。面倒である。

● 時空↓様相（二語）

「あらたし」【新】

意味変化（新旧↓新鮮）〔意味の転用〕

初めてである。ある状態になったばかりである。また以前のものに代わったばかりである↓（魚、肉、野菜、また、空気などが）新鮮である。生き生きとしている。濁っていない。

「ひさし」【久】

意味変化（時間―常態・陳腐）〔意味の連想〕

時が長くたっている。また、行く末長い。永遠である↓（いつも見たり聞い

たり、接したりしてあるさまを表わす)いつもの通りである。あたりまえで陳腐である。ありふれている。

●量的―境遇(二語)

「とぼし」【乏】

意味変化 (欠け↓貧乏)〔意味の特殊化〕

足りない。十分でない。ともしい↓まずしい。ともしい。

「ともし」【乏】

意味変化 (欠け↓貧乏)〔意味の特殊化〕

物事が不足している。不十分である。少ない。とぼしい↓財物が少ない。貧しい。貧乏である。とぼしい。

●属性↓様相(九語)

「あおあおしい」【青青】

意味変化 (色彩↓未熟/新鮮)〔比喻〕

いちじるしく青い↓(まだ熟していない果実などが青いところから)未熟である。また、新鮮である。

「いかし」【厳】

意味変化 (自然状況↓嚴重壮大)〔意味の一般化〕

穀物の稔りや、樹木の繁茂や世の繁栄している状態↓いかめしい。おごそかで

ある。

「くまぐまし」【限限】

意味変化 (自然状況↓不明瞭)〔比喻・転用〕

隈が多い。深く入りこんで隠れてよく見えない↓心に隠しだてが多い。心に秘密を持っているようだ。

「けはし」【険】

意味変化 (自然状況↓困難・危険)〔意味の一般化・抽象化〕

山や坂などの傾斜が急で、登るのに困難である。道が急峻である↓克服するのが困難である。てきびしい。また、危険である。

「こまごまし」【細細】

意味変化 (形状↓明瞭)〔意味の抽象化〕

非常にこまかい↓非常にくわしい。詳細である。

「さがし」【険】

意味変化 (自然状況↓危険)〔意味の抽象化〕

山や坂がけわしい。平坦でない。険阻である↓危険なさまである。あぶない。

「しららし」【白白】

意味変化 (色彩↓明瞭)〔意味の抽象化〕

白く見える。しろじろとしている。明らかである↓はっきりとわかる、明白である。

「たぎたぎし」

意味変化 (自然状況↓不安定) 「意味の特殊化」

道路などに、でこぼこや高低のあるさま↓足がよくきかず、たどたどしい。

「はればれし」【晴晴】

意味変化 (自然状況↓表立つ) 「意味の抽象化」

よく晴れわたって明るい↓格別に改まった状況である。表立っている。

●様相―属性 (四語)

「いかめしい」【厳】

意味変化 (厳然↓大小) 「意味の具体化」

威勢があつておごそかである。規模が大きく勢いが盛んである。荘重である。壮大である↓姿や形が普通より大きく、がっしりしている。いかつい。

「おびたし」【夥】

意味変化 (繁盛↓規模) 「意味の具体化」

非常に盛んである。にぎやかに繁昌している。立派である↓(建物などの)規模が大きい。たいへん大がかりで、ものものしい。

「きびし」【厳】

意味変化 (厳然↓自然状況) 「意味の具体化」

いかめしい。おごそかである。厳重である↓自然の力などが強くて、簡単には対応できないさまである。山がけわしい、寒暑の程度がひどいなど。

「はげし」【烈】

意味変化 (猛烈↓自然状況) 「意味の転用」

勢いが強い。あらあらしい↓地形がけわしい。険阻である。

● 様相―境遇 (四語)

「さもし」

意味変化 (様態↓身上・貧乏) 「意味の特殊化」

態度や様子などがみすぼらしい↓身分や地位が低く、いやしい。貧しい。見苦しい。

「せはし」

【忙】

意味変化 (連続↓多忙↓貧乏) 「意味の転用・連想」

速度や調子などが速く、次から次へと間断なく続いている。ゆったりしていない↓しなければならぬことなどが多く重なったりして暇がない。いそがしい。多忙である。↓経済的に切迫している。苦しい。世の中をわたつていくことがむずかしい。

「せばせばし」 【狭狭・約】

意味変化 (繁簡↓広狭・貧乏) 「意味の特殊化」

簡略である。短くつまると非常に狭い。幅がせまく窮屈である。また、貧しいさまである。

「ひとびとし」 【人人】

意味変化 (普通↓身上) 「意味の進化」

人なみである。世間一般の人と同じである。人間らしい↓かなりの身分である。一かどの人らしい。身分、または人格がすぐれている。立派である。

●様相―量的（三語）

「おびたし」【夥】

意味変化（繁盛↓程度・多量）「意味の抽象化」

非常に盛んである。にぎやかに繁昌している。立派である↓（一般に）程度が普通でない。（病氣、苦痛などの程度が）ひどい。↓数量が非常に多い。

「きびし」【嚴】

意味変化（嚴然↓程度）「意味の抽象化」

いかめしい。おごそかである。嚴重である↓程度のはなはだしいさま。ひどく。

「はげし」【激】

意味変化（猛烈↓程度）「意味の抽象化」

勢いが強い。あらあらしい↓程度がはなはだしい。また、ことごとしい。

●様相↓時空（二語）

「なまなまし」【生々】

意味変化（新鮮↓時間）「意味の抽象化」

なま身である。生きている↓死んだばかりである↓今できたばかりである。

真新しい。

「はげし」【激】

意味変化（猛烈↓時機）「意味の抽象化」

勢いが強い。あらあらしい↓頻繁である。

●境遇↓量的（二語）

「まづし」【貧】

意味変化（貧乏↓不足）「意味の抽象化」

財産や金銭に乏しい。貧乏である。ともししい↓豊かでない。みたされていな
い。乏しい。少ない。貧弱である。

「まどし」【貧】

意味変化（貧乏↓不十分）「意味の抽象化」

貧乏である。まずしい↓十分に行なえない。おろそかになる。不十分である。

「状態から状態へ変化する場合のまとめ」

「状態↓状態」へ変化する場合、様相形容詞に変化するパターンが最も多く見られる。特に、自然状況や形状などの属性から「困難・危ない」や「明瞭・確かさ」などの意味を抽出するものが多い。その逆に、様相を表す形容詞は、「規模」や「自然状況」に用いられることもある。様相と属性のほかに、様相と時空、境遇と量的も同じく緊密的な意味関係をもち、互いに意味変化が生じやすいようである。

また、存在↓様相、様相↓量的、様相↓境遇などのパターンは一方的に変化しがちである。存在形容詞は、存在の状態と関係ある様相（常態、調和、確かさなど）に変化しやすい。「繁盛・厳然・猛烈」などの意味を表す様相形容詞は程度性を派生しやすい。物の状態を表す様相から「多忙・貧乏」などの人の状態にも連想しがちである。

一―三 状態から情意へ変化する場合

「状態↓情意」の形容詞七七語の中で、最も多いのは「様相↓評価（二二語）」である。次に、「様相↓対自（八語）」「属性↓評価（六語）」「様相↓対他（五語）」「存在↓評価（五語）」となっている。評価形容詞に変化するものが多い。

●存在↓評価（五語） 「うつし」【現】

意味変化（実在↓人柄・良性）（「意味の転用」）

姿が見えている。実在する。この世に生きている↓正気である。理性がある。真実である。

「ただし」【正】

意味変化（是非↓規範・良性）（「意味の抽象化」）

形や向きがまっすぐである。ゆがんだり曲がったりしていない。横向きになつたり、わき道にそれていない。↓道徳、規則、道理、作法、約束の時間など規範とされているものにかなっている。また、事実合っている。まちがっていない。正統である。

「まことし」【実】

意味変化 (真実↓人柄・良性) (意味の転用)

まことであるさま↓実直であるさま。まじめであるさま。

「まさし」【正】

意味変化 (是非↓人柄・良性) (意味の転用)

事柄の本性になつてゐるさま。正当である。正真正銘である。ただし。まぢがつてゐない↓実直である。忠実である。

「むなし」【空】

意味変化 (空虚↓価値・無益) (意味の抽象化)

中に物がな。そこにあるべきものがな。空虚である。内容がない↓いたずらに経過する。ある行為や事柄の効果が現われない。かゝがない。

●存在↓意向(二語)

「ありありし」【在在】

意味変化 (实在↓意志) (意味の連想)

実際にあつたとおりのさまである↓さもほんとうらしい。もつともらしい。

「そらぞらしい」

意味変化 (空虚↓意志) (意味の連想)

空虚である。うつろである↓知らないふりをしてゐるさまである。そらとぼけてゐる。また、そのような態度がみえすゐてゐる。わざとらしい。

●時空↓評価（二語）

「あられたし」【新】

意味変化（新旧↓風格・良性）〔意味の転用〕

初めてである。ある状態になったばかりである。また以前のものに代わったばかりである。↓今までの物事とは違っている。今まではなかったものがある。現代的、進歩的などの意を含めても用いる。

「ふるめかしい」【古】

意味変化（新旧↓風格・やや悪性）〔意味の転用〕

いかにも時代がたったことである。昔のことである。また、昔からのことである。古びている↓様式・性格などが古いように感じられる。古風である。昔かたぎである↓いかにも年寄りじみている。老人くさい↓清新な魅力がない。陳腐である。

●量的↓評価（三語）

「たたはし」【偉】

意味変化（満ち↓性格・悪性）〔意味の悪化〕

（満月のように）満ちているさまである。欠けたところのないさまである↓性格がきつい。また、口やかましい。

「ばかばかしい」【馬鹿馬鹿】

意味変化（程度↓才能）〔語源影響〕

はなはだしい。程度を越えている。ばからしい↓ひどくばかげている。非常にくだらない。はなはだつまらない。ばからしい。

「ふかし」【深】

意味変化（多量↓価値・重要／意味深い）〔意味の抽象化〕

たくさんであるさま。多い。多量だ。↓格別であるさま。たいしたことである。重大だ↓奥深い。また、くわしい。

●属性↓評価（六語）

「いかし」【蔽】

意味変化（自然状況↓価値・重大）〔意味の抽象化〕

勢いが盛んである。穀物の稔りや、樹木の繁茂や世の繁栄している状態↓重大である。

「かどかどし」【角角】

意味変化（形状↓性格・悪性／品行・良性／威厳・良性）〔意味の転用〕

物がかどだっている。かどが多い。かどばっている↓性格が円満でなくかどだっている。とげとげしい。圭角が多い↓善悪をはっきりさせ、それに対する態度がきつぱりしている↓堂々としている。威厳がある。

「けはし」【険】

意味変化 (自然状況↓心や性格・悪性) 「意味の転用」

山や坂などの傾斜が急で、登るのに困難である。道が急峻である↓人が他を受け入れないさま。ついている余地のないさま。(イ)きびしい。きつい。(ロ)性格や目つきや口調などがとげとげしい。

「こまごまし」【細細】

意味変化 (形状↓価値・不重要) 「意味の抽象化」

非常に小さい。いかにも細かい↓本筋に関係なく、さして重要でない。細かく雑多である。くだくだしい。わずらわしい。

「はればれし」【晴晴】

意味変化 (自然状況↓美的・良性) 「共感性の転移」

よく晴れわたって明るい↓はなやかで明るい。はでやかである。

「ふとぶとし」【太太】

意味変化 (身体↓品行・悪性) 「比喻」

非常に太い。いかにも太い↓大胆でずうずうしい。非常に凶太い。ふてぶてしい。

●属性↓対自(二語)

「しらしらし」【白白】

意味変化 (色彩↓興ざめ) 「共感性の転移」

白く見える。しろじろとしている。明らかである↓興ざめの感じである。

「はればれし」【晴晴】

意味変化 (自然状況↓愉快) (共感性の転移)

よく晴れわたって明るい↓心がはればれしている。なやみがなく明るい。はれやかである。

●属性↓対他(二語)

「こまごまし」【細細】

意味変化 (形状↓丁重) (意味の転用)

非常に小さい。いかにも細かい↓非常に丁寧である。ねんごろである。

「そばそばし」【稜稜】

意味変化 (形状↓疎遠) (比喩・転用)

かどばっている。かどだつ↓よそよそしい。しっくりいかない。親しくない。

●属性↓意向(二語)

「しらしらし」【白白】

意味変化 (色彩↓意図) (比喩・転用)

白く見える。しろじろとしている。明らかである↓知っていながら知らないふりをするさまである。しらばくれている。そらぞらしい。また、はっきりいつわりとわかる様子である。

「はればれし」【晴晴】

意味変化 (自然状況↓奮起) 「共感性の転移・情意の進化」
よく晴れわたって明るい↓はばかるところがない。大っぴらである。

● 様相↓評価 (二二語)

「あらあらし」【荒唐】

意味変化 (猛烈↓性格・やや悪性) 「意味の転用」

物の動きや人の心、行動などが、あたりかまわず、はげしい。いかにも荒っぽい。ひどく乱暴だ。猛烈だ↓こまやかな心づかいがない。粗野だ。ぶこつだ。

「あらまし」【荒】「意味の転用」

意味変化 (猛烈↓態度・やや悪性)

波や風などが荒々しい。激しい↓言動、態度などが荒々しい。乱暴だ。粗野だ。

「いかめしい」【厳】

意味変化 (厳然↓態度・やや良性) 「意味の転用」

威勢があつておごそかである。規模が大きく勢いが盛んである。荘重である。壮大である↓改まった態度やしかたである。

「いつくし」【厳】

意味変化 (厳然↓美的・良性) 「意味の特殊化・一般化」

靈妙である。威力に満ちている。荘嚴である。神や現人神(あらひとがみ)

としての天皇および仏などに関していう↓気品や威厳のある美しさである。もとは天皇家の血筋の人にいうことが多い↓人や事物が美しい。美麗だ。

「をかし」【可笑】

意味変化 (滑稽↓美的・良性) 「意味の良化・特殊化・転用」

滑稽なさまである。おもしろおかしい↓普通と違って格別な趣があるさま。賞すべきさまである。魅力のあるさまである。①感興をおぼえる。興味深い。②物、景色などが美しく、趣がある。風情がある。③容姿などが、美しく魅力的である。可愛く、愛すべきである。④音楽、絵、字、歌、ことばのやりとりなどが、上手で趣がある。気がきいている。風流である。⑤人物、態度などが、立派で魅力的である。

「をこがまし」【痴】

意味変化 (滑稽↓態度・悪性) 「情意の進化」

ばかばかしくて、笑いを誘うようなさま。ばかげている。みつともない。いい物笑いになりそうだ↓さしでがましい。なまいきである。思い上がっている。しやくにさわる。

「おびたし」【夥】

意味変化 (繁盛↓基準・悪性) 「意味の抽象化」

非常に盛んである。にぎやかに繁昌している。立派である。↓大げさすぎる。はなはだしすぎてよくない。

「おほほし」

意味変化 (不明瞭↓才能・悪性) 「共感性の転移」

対象の形、様子がはつきりしない。ぼんやりして明らかでない↓愚鈍である。

「きびし」【厳密】

意味変化 (厳然↓人柄・やや悪性／一般・善悪両方) 「意味の転用・抽象化」

いかめしい。おごそかである。厳重である。↓人に対する要求などが激しく容赦がない。簡単に許すことをしないさまである。苛酷である↓ある行為や状況、言葉などに対して、それが普通でないことをあきれたり感心したりする気持をこめていう。たいしたものだ。ひどいものだ。

「けいはくらしい」【軽薄】

意味変化 (粗末↓態度・悪性) 「意味の転用」

手軽で粗末な様子である。いかにもかるがるしい↓いかにもおせじを言っていると感じられるさま。こびへつらっているようである。

「けばけばしい」

意味変化 (際立つ↓美的・悪性) 「意味の転用・悪化」

きわだっている。たいそうきらびやかである。ひどく人目に立つさまである。けわけわし↓どぎついまでに派手である。品がなく派手である。

「ことよろし」【事宜】

意味変化 (常態↓一般・良性) 「意味の良化」

たいしたことではない。普通どおりだ。ありふれている。さしつかえない↓かなり良い。相応である。

「さもし」

意味変化 (様態↓品行・悪性) 「意味の特殊化・連想」

態度や様子などがみすぼらしい。また、身分や地位が低く、いやしい。貧しい。見苦しい↓心が卑しい。品性が下劣である。あさましい。

「せはし」 【忙】

意味変化 (連続↓態度・悪性) 「共感性の転移」

速度や調子などが速く、次から次へと間断なく続いている。ゆったりしていない。せわしない↓とげとげしくきびしい。小さなことにこだわり、ゆとりがない。

「せばせばし」 【狭狭・約】

意味変化 (繁簡↓性格・悪性) 「意味の転用」

簡略である。短くつまる↓(狭い) ↓小さなことにこだわり、心が狭い。度量が狭い。

「たくまし」 【逞】

意味変化 (豪勢↓才能・良性) 「意味の転用・連想」

力が満ちあふれている。勢いが盛んである。また、豪勢である。立派である↓(意志や考えがしっかりしていて多少のことでもくじけない) ↓知謀、術策にすぐれている。

「なまやさし」 【生易・生優】

意味変化 (容易↓態度・やや悪性) 「語源影響」

なみひととおりである。たやすい↓中途はんぱにやさしい。

「ひとがまし」【人】

意味変化 (普通↓評判・良性) 「意味の抽象化」

一人前らしい。人並みらしい。人らしい↓相当の人物らしい。人にしられるほどである。

「ひとびとし」【人人】

意味変化 (普通↓評判・良性) 「意味の抽象化」

人なみである。世間一般の人と同じである。人間らしい↓かなりの身分である。一かどの人らしい。身分、または人格がすぐれている。立派である。

「ふさぶさしい」

意味変化 (誇張↓品行・悪性) 「意味の進化」

大げさである。仰々しい↓ふてぶてしい。凶々しい。あつかましい。凶太い。横着である。

「みだりかはし」【妄】

意味変化 (混乱↓才能・悪性) 「意味の転用」

秩序や規律、作法に反するさま↓思慮、分別 がないさま。乱暴なさま。

「ものものし」【物物】

意味変化 (厳然↓態度・やや悪性) 「意味の転用」

おごそかである。堂々としている。立派である↓物事への対応が大げさでおおもしろい。

●様相↓対自（八語）

「をかし」【可笑】

意味変化（滑稽↓満足）「意味の良化」

滑稽なさまである。おもしろおかしい↓（賞すべきさま）↓満足である。

「おぼおぼしい」

意味変化（不明瞭↓不安）「共感性の転移」

あたりが薄暗くてはつきりと見えないさま。ぼうつとしていゝたよりなく不安なさま。たどたどしい。しっかりしていない。

「おほほし」【鬱】

意味変化（不明瞭↓不愉快）「共感性の転移」

対象の形、様子がはつきりしない。ぼんやりして明らかでない↓心が悲しみに沈んで晴れない。うつとうしい。

「さえざえし」【訝】

意味変化（明瞭↓愉快）「共感性の転移」

さえている上にもさえている。ひじょうによくさえている。澄み切っている↓気持がはればれとしている。また、活気がある。生き生きとしている。

「せはし」【忙】

意味変化（連続↓焦燥）「共感性の転移」

速度や調子などが速く、次から次へと間断なく続いている。ゆったりしていない。せわしない↓（忙しい）↓せかれることがあって落ち着きがない。せ

かせかしている。気ぜわしい。せわしない。

「はれがまし」【晴】

意味変化 (表立つ↓愉快/恥) (語源影響で共感性の転移・情意の進化)

表だっている。公である。表だって派手である↓気持がたいそう晴れやかである。表だって得意げである。いかにもはればれしい。はえばえしい↓大勢の前へ出てきまりがわるい。おもはゆい。恥ずかしい。

「ほれほれし」【惚惚】

意味変化 (様態↓放心状態) (語源影響)

年をとってぼけている。老いぼれている。ほけほけし↓何かに心を奪われて、ぼんやりしている。放心状態である。ほけほけし。

「みだりかはし」【妄】

意味変化 (混乱↓焦燥) (共感性の転移)

秩序や規律、作法に反するさま。みだれがまし。みだれがわし↓心の平静を失っているさま。とり乱しているさま。

●様相↓対他 (五語)

「いなかめずらしい」【田舎珍】

意味変化 (普通でない↓珍重) (意味の連想)

都会ではあたりまえだが、田舎にあるにしては珍しい↓田舎を珍しいと感じる。田舎が珍しい。

「おぼおぼしい」

意味変化 (不明瞭↓疎遠) (共感性の転移)

あたりが薄暗くてはつきりと見えないさま。ぼうつとしている↓他人行儀に感じられるさま。よそよそしい。隔てがましい。

「けがらはし」【汚】

意味変化 (不潔↓不愉快) (共感性の影響)

けがれている。きたならしい↓いやな感じのするさま。不愉快である。いとわしい。

「なざましい」【泥】

意味変化 (難渋↓愛) (比喻)

物事がはかばかしく進行しないさまである。難渋している状態である↓ほれぼれするようなさまである。

「ものものし」【物物】

意味変化 (巖然↓嫌悪) (意味の悪化)

おごそかである。堂々としている。立派である↓大げさで気にくわない。ぎょうぎょうしい。こしやくである。

●境遇↓対自 (三語)

「いそがし」【忙】

意味変化 (多忙↓焦燥) (共感性の転移)

早くしなければならぬ用事に追われるさまである。また、用事が多く重なったりして暇がない。多忙である↓せかさされるような感じで落ち着かない心持ちである。落ち着いてはいられない気持である。気がせく、あわただしい。せわしい。

「おもおもし」【**重**重】

意味変化 (身上↓不愉快) 「語源影響で比喩・転用」

地位身分が高くて威厳がある。かんろくがある↓気分が浮き立たず、暗く沈んだ感じである。

「せはせはし」【**忙**忙】

意味変化 (多忙↓焦燥・不愉快) 「共感性の転移」

しなければならぬことが多く重なって、きわめていそがしい。非常にせわしい。また、せきたてられるような感じである↓せせこましくてうるさい。こせこせしてわずらわしい。不愉快である。

「状態から情意へ変化する場合のまとめ」

「状態↓情意」へ変化する場合、評価形容詞に変化するパターンが最も多く見られる。特に、「猛烈」や「厳然」などの様相を表す形容詞は評価的意味を派生しやすい。そして、この場合、やや悪性的な傾向が見られる。また、属性形容詞と存在形容詞も評価形容詞に変化するものが多い。存在形容詞の場合、その存在を肯定的に受け入れ、良性的な評価になりやすい。状態から価値や美意識、人の性格・品行・態度などに関係づけられ、「状態

↓評価」への変化は最も成立しやすいようである。

また、対自形容詞と対他形容詞に変化するものも少なくない。感情は状態の変化に影響されやすい。様相・境遇・属性などの状態から、同じ雰囲気な感情を引き起こす。たとえば、「不明瞭」「混乱」「不潔」「多忙」などの様相・境遇形容詞から、不愉快や焦燥などのマイナスの感情を引き起こすものが多く見られる。全体から見ると、ややマイナスの感情に傾く。

以上、状態形容詞の意味変化のパターンについて考察した。「状態↓状態」へ変化する場合、「属性↓様相」のパターンが最も多く、様相・量的・境遇形容詞に変化する傾向が見られる。「状態↓情意」へ変化する場合、「様相↓評価」のパターンが最も多く、評価・対自・対他形容詞に変化し、ややマイナス的な傾向があるようである。次に、情意形容詞の意味変化パターンについて考察する。

第二節 情意シク活用形容詞の意味変化

二―一 情意から状態へ変化する場合

「情意↓状態」へ変化する形容詞七六語の中で、「対自↓様相（一三語）」「評価↓様相（一二語）」などの様相形容詞に変化するものが最も多い。また、「対自↓様相（七語）」「評価↓境遇（六語）」などの境遇形容詞に変化するものも多い。次いで、「対自↓量的（四語）」「対他↓様相（四語）」「感覚↓様相（三語）」「感覚↓境遇（三語）」「評価↓属性（三語）」などとなっている。

● 感覚↓様相（三語）

「さわがし」【騒】

意味変化（聴覚↓混乱／不安定／乱雑）〔共感性の転移〕

声や物音などが大きくてうるさい。やかましい。そうぞうしい↓人の出入りなどがはげしく、にぎわっている。たてこんでいる。混雑している↓穏やかでない。不安である。不吉である↓（戦争や疫病または天変地異などで）社会の情勢が不安定である。世情が落ち着かない↓乱雑である。整っていない。

「すさまじ」【寒・冷】

意味変化（寒暖↓不調和）〔意味の連想〕

風などが寒い。白々とした冷たさである。身が寒くなるほどである。「冷まじ」の表記で秋の季語とされる↓不調和から起こる荒涼とした感じを表わす。興がさめるようだ。情趣がない。面白くない。

「すずし」【冷】

意味変化（温度↓表情／清潔／厳然）〔意味の転用〕

つめたい。また、寒い↓目もとがはっきりしている。目にけがれがない↓いさぎよい↓厳然としている。いかめしい。

● 感覚↓境遇（三語）

「さわがし」【騒】

意味変化（聴覚↓多忙）〔共感性の転移〕

声や物音などが大きくなってうるさい。やかましい。そうぞうしい↓忙しい。あわただしい。事が多い。また、忙しくて心が奪われる。

「すさまじ」【寒・冷】

意味変化（寒暖↓生活状態）〔意味の連想〕

風などが寒い。白々とした冷たさである。身が寒くなるほどである。「冷まじ」の表記で秋の季語とされる↓生活などが苦しい。

まぎらはし【紛】

意味変化（視覚↓多忙）〔共感性の転移〕

まばゆい。まぶしい↓ともすると雑事にかまけ、大事なことを忘れがちである。また、多忙で大事なことをおろそかにしがちである。↓（とりまぎれるほどに）めまぐるしく多忙である。

● 対自↓様相（十三語）

「あわたたし」【慌】

意味変化（焦燥↓不安定）〔共感性の転移〕

物事を急いでしようとして慌てるさまである。心がせわしなく落ち着かない↓変化がはげしい。状況が不安定で流動的である。

「おどろおどろし」

意味変化（驚き↓厳然／猛烈）〔意味の転用〕

耳目を驚かすようなさまである↓いかめしい。莊重だ↓（音、声などが）人

を驚かすように大きい。騒々しい。(雨、風などが) 激しくすさまじい。

「くるし」
【苦】

意味変化 (苦しみ↓困難／妨害／様態) 「共感性の転移」

身体の状態や生活などが思わしくなく、身に苦痛を感じている。難儀である。↓物事をするのがむずかしい。困難である↓差支えがある。はばかりがある。都合が悪い。また、そう感じさせるような怪しきがある。多く否定的表現を伴って用いる↓人に不愉快な気持を起こさせるさまである。見ぐるしい。聞きぐるしい。

「けたたましい」

意味変化 (驚き↓誇張) 「意味の進化」

人をびっくりさせるくらいにあわただしく、騒々しい。さわがしい↓ことごとしい。ぎょうぎょうしい。大げさである。

「さびし」
【寂】

意味変化 (不満・不快↓荒涼) 「共感性の転移」

本来あるべき状態になく、また、本来備わっているはずのものが欠けていて、満たされない気持を表わす。物足りない。不満足、不景気、憂鬱、物悲しさなどを表わす↓人の気配がなく心細い。ひっそりしている。静かで心細いほどである。また、人が住まずに荒れている。さみしい。

「さみし」
【寂】

意味変化 (不満・不快↓荒涼) 「「さびし(寂)」に同じ」

「すがすがし」

意味変化 (愉快↓順調) 「共感性の転移」

さわやかで気持がよい。さっぱりとしている↓物事の進行がすらすらと滞ることのないさまである。

「にががし」【苦苦】

意味変化 (不愉快↓表情) 「情意の外面化」

心の中で、そのことをおもしろくなく感じる。非常に不愉快だ。たまらなくいやだ↓にがみばしっている。

「みぐるし」【見苦】

意味変化 (苦しみ↓困難) 「語源影響」

外から見るのがつらい気持である。見るにたえない↓見づらい。見るのに困難する。

「むつかし」【難・六借】

意味変化 (不愉快↓表情/困難) 「情意の外面化/意味の連想・抽象化」

気に入らず不愉快である。気持が晴れないでうつとうしい。むしゃくしやする↓機嫌が悪い。不快な表情や態度をあらわに見せている↓理屈や論理が複雑で理解しにくい。解きほぐしがたく入りこんでいる↓困難でおぼつかない。まったく不可能というわけではないが、それに近い状態である。

「ものさわがし」【物騒】

意味変化 (焦燥↓不安定) 「共感性の転移」

物事が何となく騒々しい。心が何となく落ち着かない。何となくあわただし
い↓様子・状態が、穏やかでない。不穩（ふおん）である。物騒（ぶつそ
う）である。

「ものすさまじい」【物凄】〔語源影響〕
意味変化（興ざめ↓勢い）

何となく感興がさめてしまい、気落ちしたりものたりなかつたりする様子で
ある。どことなく、殺風景である。何となく趣がない↓物の勢いが、何とも
いえず激しい。

「わづらはし」【煩】
意味変化（困惑↓繁雜／困難）〔共感性の轉移〕

めんどろなことなどにかかずらっていやだという感じである。いとわしい。
うるさい。めんどろである。厄介である↓物事が入りくんでいる。繁雜であ
る。こみ入っていて複雑である↓手数がかかっている。手がこんで念入りで
ある。

●対自↓境遇（七語）
「あさまし」【浅】

意味変化（驚き↓死亡／貧乏／身上）〔意味の特殊化・連想〕

意外である。驚くべきさまである↓（「あさましくなる」の形で用い、思い
もかけないことになる、何とも言いようのないさまになるの意から）死ぬこ

とをいう↓生活がみじめである。貧乏でいたましい↓地位や身分が低い。
「おどろおどろし」

意味変化 (驚き↓病気) 「意味の特殊化」

耳目を驚かすようなさまである↓(病気が)重い。(気分などが)ひどく悪い。

「かなし」 【悲】

意味変化 (悲しみ↓貧乏) 「意味の連想」

死、別離など、人の願いにそむくような事態に直面して心が強くいたむ。なげかわしい。いたましい↓貧苦が身にこたえるさま。貧しくてつらい。

「たのし」 【楽】

意味変化 (満足・愉快↓裕福) 「意味の連想」

精神的・身体的に満ち足りて快適である。愉快である↓物質的に満たされて豊かであるさま。裕福である。金持である。

「むっかし」 【難・六借】

意味変化 (不愉快↓病気) 「意味の抽象化・特殊化」

気に入らず不愉快である。気持が晴れないでうつとうしい。むしゃくしゃする↓(困難) ↓回復しにくいほど病気が重い。

「やまし」 【病】

意味変化 (不満・焦燥↓病気) 「語源影響」

思い通りにならなくて、不満・もどかしさ・あせりなどが感じられる。気に

「わづらはし」【煩】
やんでいるさまである↓病気にかかっている感じである。気分がすぐれない。

意味変化（困惑↓病気）〔意味の連想・特殊化〕

めんどろなことなどにかかづらうていやだという感じである。いとわしい。うるさい。めんどろである。厄介である↓体の具合が悪い。病気である。また、病状が重い。

● 対自↓量的（四語）

「あさまし」【浅】

意味変化（驚き↓程度）〔意味の抽象化〕

意外である。驚くべきさまである↓（程度、状態が驚きあきれ程であるというところから）はなはだしい。ひどい。

「おそろし」【恐・畏】

意味変化（恐れ↓程度）〔意味の抽象化〕

身に危険が感じられて、不気味である、不安である。こわい。おっかない↓物事の程度がはなはだしい。

「たのし」【楽】

意味変化（満足・愉快↓多量）〔意味の連想〕

精神的・身体的に満ち足りて快適である。愉快である↓作物などが豊富である。

「まがまがし」

意味変化 (不安↓程度) 「意味の抽象化」

災いを招くようである。いかにも災厄を招きそうである。不吉である。いまわしい。縁起が悪い。不祥である↓いまましい。けしからぬ。とんでもない。

● 対他↓様相 (四語)

「うつくし」 【愛】

意味変化 (愛↓調和・清潔／新鮮) 「意味の一般化・連想」

妻、子、孫、老母などの肉親に対するいつくしみをこめた愛情↓(愛らしくて美しい) ↓(不足や欠点、残余や汚れ、心残りなどのないの) にいう) ちやんとしている。きちんとしている↓新しい。新鮮である。

「うらめし」 【恨】

意味変化 (恨み・不満↓不潔) 「共感性の転移」

相手の心や処置が期待に反するものであったり、望ましくない事態が自力でどうにもならないような場合、それに対する不満、嘆きなどが心の内にわだかまっている。残念で悲しい↓きたない。

「なつかし」 【懐】

意味変化 (愛↓常態) 「語源影響」

心がひかれ、離れたくないさま。愛着を覚えるさま。魅力的だ。慕わしい↓

衣服が、着馴れて程よくのり気がとれて、からだになじんでいるさま。

「めづらし」【珍】

意味変化 (愛↓異常) 「意味の連想」

賞美する価値がある。珍重に価する。好ましい。すばらしい。結構である↓
(見ることがまれである。めったにない) あまり例がない。見なれない

● 対他↓関係 (二語)

「かごとがましい」【託言】

意味変化 (恨み・不満↓理由) 「意味の連想」

何かにことよせて恨みごとを言っているようだ。嘆き悲しんでいるようだ。
恨みがましい↓他のことにかこつけている様子である。他のことに関係づける様子である。もつともらしい理由としている

「したし」【親】

意味変化 (親近↓血縁/直接) 「意味の特殊化・抽象化」

一般的に、気持、交わりなどが近い関係にあるさま。むつまじい。仲がよい。
交わりに隔てがない。関係が深い。懇意である。昵懇である↓血筋が近い。
血縁が近い↓直接自分で事を行なうさま。多く、天皇など高貴の人が直接物
事をする場合についていう。特に、「したしく…する」の形で、連用形が副
詞的に用いられる。

● 对他↓時空（二語）

「ちかぢかし」【近近】

意味変化（親近↓遠近）〔語源影響〕

親しい。むつまじい。昵懇である↓距離・時間などがごく近い。近くにある。すぐである。

「めづらし」【珍】

意味変化（愛↓久し振り）〔意味の連想〕

賞美する価値がある。珍重に価値する。好ましい。すばらしい。結構である↓（めつたにない）↓久しぶりである。長い間見ることがない。

● 对他↓量的（二語）

「いたいたし」【痛痛】

意味変化（同情↓程度）〔意味の抽象化〕

非常にかわいそうだと感じられるさまである。見ていて気の毒に思う状態である。たいへん哀れである↓程度のはなはだしいさま。大層。

「ゆゆし」【齋忌】

意味変化（畏敬↓程度）〔意味の抽象化〕

神聖であるので触れてはならない。恐れつつしむべきである。恐れ多い。恐ろしい↓程度がはなはだしい。一通りでない。大変である。容易でない。大層である。すっきりである。

●意向↓境遇（二語）

「くちをし」【口惜】

意味変化（失望・落胆↓身上）「意味の特殊化」

思う事ができなかつたり、思うようにいかなかつたり、または、大切なものを失つたりして、失望、落胆した気持を表わす。がっかりだ。残念だ。いまましい↓（期待はずれ、不十分で、満足できないさま）↓官位・身分が低くて言うに足りない。

「わびし」

意味変化（落胆↓貧乏）「意味の特殊化」

気落ちして力が抜けてしまう感じである↓（当惑、困った、物足りない）↓みすぼらしい。貧しい。

●思考↓様相（二語）

「あやし」【怪】

意味変化（不思議↓異常／不明瞭／乱雑）「意味の抽象化・連想・特殊化」

人の知恵でははかれないような不思議さである。神秘的な感じである。靈妙である↓普通と違ふところがある。変わっている。珍しい。↓物の正体、物の真相、原因、理由などがはつきりとつかめない状態である。いぶかしい変だ。↓（貴族の目から見て理解しがたく、奇異なさまである意から）乱雑だつたり、粗末だつたりして見苦しい。みすぼらしい。

「くらべぐるし」【比苦】

意味変化（知的判断↓困難・不調和）〔語源影響〕

比較して判定を下すことがむずかしい。判断や決断が困難だ↓むつまじく相並ぶことがむずかしい。互いに調子を合わせたり、心をかよわせたりするのが困難だ。つき合いにくい。

●評価↓様相（十二語）

「あはあはし」【淡淡】

意味変化（才能↓不明瞭）〔語源影響〕

思慮もなく浅はかである。かるがるしい。うわついている↓色などが非常に薄い。また明瞭でなく、ほのかな感じである。

「うるはし」【愛】

意味変化（美↓調和・公的）〔意味の連想〕

整った感じ。きちんとしていて美しいさまにいう↓乱れたところがなく、完全に整ったさまをいう↓本格的であるさまをいう。正式だ。公的だ。

「おぞまし」【悍】

意味変化（性格↓勢い）〔意味範囲の拡大化〕

我が強い。強情である。気があらい。おぞい。おぞまし↓ただけだけしく激しい。恐ろしい。また、大きく立派である。おぞい。おぞまし

「おだし」【穩】

意味変化 (人柄↓安定) 「意味範囲の拡大化」

人の心や性質、作品の内容などが落ち着いていいる。安心である。穏和、穏健である↓物事の状態が落ち着いて静かである。平穩である。

「きらきらし」【端正】
意味変化 (美↓目立つ) 「意味の連想」

容姿、態度などが整っていて立派である。端正である。清らかである↓目立っている。はっきりしている。

「くはし」【妙・細】
意味変化 (美・優↓詳細) 「意味の抽象化」

(美・細・妙) こまやかで美しい。精妙である。うるわしい↓(詳・委・精細) 細かい点にまでゆきわたっているさま。詳細である。つまびらかである。つぶさである。

「さかし」【賢】
意味変化 (才能↓頑健) 「意味の連想」

才知、分別があつて、しっかりしている↓(判断力がしっかりしていて、強気である。気丈である) ↓丈夫である。頑健である。壮健である。

「たどたどし」
意味変化 (才能↓不確定/不明瞭/進展状況) 「意味範囲の拡大化」

学問・技芸などに十分に習熟していない。その道に精通していない。未熟である。あぶなげである。不安定である↓機能などを十分に發揮していない。

おぼつかない。不確かである。はっきりしない↓土地、場所の様子がよくわからない。地理的に不案内である↓直接に、はっきりそれと知ることができない状態になっている。霞などがかかってぼんやりとしている。薄暗くてはつきり見えない。音や声などがかすかで、はっきり聞こえない↓未熟なために進行などが、なめらかにいかない。のろのろしてはかどらない。

「はかばかし」

意味変化

（才能・価値↓順調／際立つ・明確／表向き・公的）「意味の連想」

動作、処置などが機敏である。とどこおりがなく、しつかりしている。てきぱきと如才がない↓思わしい状態である。また、思わしい状態に事が運ぶ。順調である。効果的である。首尾よい↓際立っている。目覚ましい。立派である。また、はつきりしている。明確である↓重要である。表向きである。身分が高く、しつかりしている。また、私的生活に対して公である。正式だ。本格的だ。

「ひとがまし」【人】

意味変化

（評判↓普通）「語源影響」

相当の人物らしい。人にしられるほどである↓一人前らしい。人並みらしい。人らしい。

「やさし」

【易】

意味変化

（性格↓難易）「意味の抽象化」

行き届いた心配りをしないさま。不用意である↓わかりやすい。平易である。

理解しやすい↓簡単である。容易である。たやすい。

「よろし」【宜】

意味変化 (良・適↓普通/静まる) 「意味の抽象化・連想」

好ましい。心になう。満足できる↓(まずまずの程度)↓平凡である。なみ一通りである↓静まるようである。おさまりそうである。

●評価↓境遇(六語)

「いそし」【勤】

意味変化 (勤勉↓多忙) 「意味の連想」

よく勤め励んでいる。勤勉だ↓忙しい。せわしい。

「かるがるし」【軽軽】

意味変化 (才能↓身上) 「語源影響」

思慮分別が十分でない。かるはずみである。軽率である。また、うわついている。軽薄である↓身分が低いように見える。貫禄が足りない。また、堂々としていないで粗末なさまである。

「かるがるし」【軽軽】

意味変化 (才能↓身上) 「語源影響」

思慮分別が十分でない。かるはずみである。軽率である。うわついている。軽薄である↓身分が低いように見える。貫禄が足りない。

「たのもし」【頼】

意味変化 (才能↓裕福) 「意味の連想」

他をみて、それが頼みにできるさまである。たよれるさまである↓(心強い、
楽しみなさま) ↓裕福である。金銭などに恵まれていたのしいさまである。

「よろし」 【宜】

意味変化 (良・適↓身上・経済状況) 「意味の抽象化・特殊化」

好ましい。心になう。満足できる↓(まずまずの程度) ↓特に、身分・家
柄・経済状態・教養などがま ずまずの程度である。

「わかわかし」 【若若】

意味変化 (人柄↓若い) 「語源影響」

たいそう子どもっぽい。おとなげない。若いがゆえに未熟である。子どもら
しい↓たいそう若い。また、いかにも若く見える。

● 評価↓属性 (三語)

「かろがろし」 【輕輕】

意味変化 (才能↓軽重) 「語源影響」

思慮分別が十分でない。かるはずみである。軽率である。うわついている。
軽薄である↓目方がきわめて軽い感じである。かるやかである。

「きらきらし」 【端正】

意味変化 (美↓光) 「語源影響」

容姿、態度などが整っていて立派である。端正である。清らかである↓光を

発したり、また光を受けたりして輝いている。

「とげとげし」【刺刺】

意味変化（性格↓形状）〔語源影響〕

口調・目つきなどが、荒々しい、意地悪そうである。かどだっている。険を含んでいる↓とげ立っている。とげ立ってちくちくとささるようである。

●評価↓量的（二語）

「ばからしい」【馬鹿】

意味変化（才能↓程度）〔意味の抽象化〕

まじめにしたり考えたりする気にならないようなさまである。ばかげている。無意味でくだらない。ばかばかしい↓不必要にはなはだしいさまである。程度を越えている。ばかばかしい。

「よろし」【宜】

意味変化（良・適↓程度）〔意味の抽象化〕

好ましい。心になかう。満足できる↓まずまずの程度である。十分ではないが、まあよい。悪くない。

「情意から状態へ変化する場合のまとめ」

「情意↓状態」へ変化する場合、様相形容詞に変化するパターンが最も多く見られる。特に、「驚き」やマイナス意味を表す「焦燥・苦悩・不愉快・不満」などの対自形容詞は、

様々な様相形容詞に変化することができる。そして、評価形容詞も様相形容詞に変化するものが多い。

また、境遇形容詞に変化するものが多く存在していることが注目される。「聴覚・視覚・寒暖」などの感覚形容詞は「多忙」などの生活状況に関係づけられ、「驚き・悲しみ・不愉快・不満・苦悩・落胆」などの感情状態は「身上・貧乏・病氣・死亡」などに関係づけられやすいようである。「勤勉・才能」などの評価形容詞も「多忙・身上」などに連想されがちである。ほかに、「驚き・恐れる」などの極端な感情や「才能・価値」などの評価から、程度を表す意に転じる現象も興味深い。全体から見ると、マイナスの情意を表す形容詞からの変化が多いようである。

ちなみに、「かろがろし(輕輕)」のような「評価↓属性」などの語源影響による変化の場合、その多くは疊語形容詞である。最初に評価に用いられ、やがて語本来の意味を表す属性や状態に用いられるようになったわけである。したがって、時代的変遷から見ると「評価↓属性」になるが、意味変化過程はその逆の「属性↓評価」である。

二―二 情意から情意へ変化する場合

「情意↓情意」へ変化する八〇語の中で、「対自↓評価(一四語)」 「對他↓評価(一三語)」 「感覚↓評価(九語)」 「思考↓評価(五語)」 「意向↓評価(四語)」 などの評価形容詞に変化するものが圧倒的に多い。次いで「感覚↓対自(七語)」 「評価↓対自(三語)」 などの対自形容詞に変化するものや、「対自↓意向(三語)」 「對他↓意向(三語)」 などの意向形容詞に変化するものがある。

● 感覚↓評価（九語）

「かがやかしい」【輝・耀】

意味変化（視覚↓賞賛・良性）〔共感性の転移〕

四方に光を発してまぶしいほどである。美しくきらきら光っている↓希望などがあって明るさがいっぱいである。名誉などを得てはなばなしい。思わず頭が下がるほど立派である。

「かしこまし」【喧】

意味変化（聴覚↓性格・悪性／内容・悪性）〔意味の連想・共感性の転移〕

声や音が、耳ざわりなほど騒々しい。やかましい。かしこましい。かまびすしい↓ちよつとしたことにもとやかと言う。口うるさい↓いろいろ入りまじつて煩わしい。

「かんばし」【香・香】

意味変化（嗅覚↓評判・良性／基準・良性）〔共感性の転移〕

かおりが高い。においがよい↓ほまれが高い。評判がよい。りっぱである。現代では下に打消の語を伴うことが多い↓好ましい。望ましい。思わしい。現代では下に打消の語を伴うことが多い。

「かうばし」【香】

意味変化（嗅覚↓基準・良性）〔共感性の転移〕

かおりがよい。においがよい。かぐわしい↓見た目や心に受ける感じなどが、すばらしい。魅力的である。美しい。好ましい。りっぱである。徳が高い。

「すさまじ」 【寒・冷】

意味変化 (寒暖↓基準・善悪両方) 「意味の抽象化」

風などが寒い。白々とした冷たさである。身が寒くなるほどである。「冷まじ」の表記で秋の季語とされる↓あきれかえるほどである。とんでもないことである。もつてのほかである。

「すずし」 【涼】

意味変化 (温度↓風格・行動力) 「共感性の転移」

つめたい。また、寒い↓物のさまがすつきりとしていて、さわやかである。いかにもすがすがしく感じられる。見た目にあざやかである↓ことばや動作がはつきりしていてもすがすがしい。

「まぶしい」 【眩】

意味変化 (視覚↓賞賛・良性) 「共感性の転移」

明る過ぎて、目をあけていられない。明るく輝いていてまともに見られない。まばゆい↓(比喩的に) 見えてまばゆく感じるほどに美しい。あまりにも美しい。目がくらむほどすばらしい。

「やかまし」

意味変化 (聴覚↓態度・やや悪性/評判・やや良性) 「意味の抽象化・良化」

音や声などが大きかったり、多く入り交じったりして、神経をいらだたせる。騒がしい↓形式にとらわれている。理屈っぽい↓厳しい。厳格である↓盛んに話題にされる。評判が高い。

「わわし」

意味変化 (聴覚↓態度・悪性) (共感性の転移)

人や動物の声がさわがしい。やかましい。うるさい↓人の言動が、かるがるしくて騒がしい。にぎやかで、かるはずみである↓(男の立場から見ても)女性が口やかましい。口うるさい。口さがない。

● 感覚↓対自 (七語)

「かがやかしい」【輝・耀】

意味変化 (聴覚↓恥) (共感性の転移)

四方に光を發してまぶしいほどである。美しくきらきら光っている↓顔が赤くなるほど恥ずかしい。おもはゆい。てれくさい。

「かしかまし」【喧】

意味変化 (聴覚↓迷惑) (共感性の転移)

声や音が、耳ざわりなほど騒々しい。やかましい。かしましい。かまびすしい↓声や音が、耳ざわりなほど騒々しい。やかましい。かしましい。かまびすしい。

「さわがし」【騒】

意味変化 (聴覚↓焦燥) (共感性の転移)

声や物音などが大きくてうるさい。やかましい。そうぞうしい↓心が落ち着かない。

「すさまじ」【寒・冷】

意味変化 (寒暖↓恐れ／興ざめ) 「共感性の転移」

風などが寒い。白々とした冷たさである。身が寒くなるほどである。「冷まじ」の表記で秋の季語とされる↓恐怖を感じさせるほどだ。恐ろしい。ものすごい↓気持や興味が薄く顧みられない。冷淡である。

「すずし」【涼】

意味変化 (温度↓愉快／興ざめ) 「共感性の転移」

つめたい。また、寒い↓心がさわやかである。心中にわだかまるところがなく快い。わずらいがない↓つめたくさめている。興のないさま。

「まぎらはし」【紛】

意味変化 (視覚↓不安) 「共感性の転移・意味の転用」

まばゆい。まぶしい↓(とりまぎれるほどに、めまぐるしく多忙である)↓物思わしさに、気苦労などが、他のことにとりまぎれて 慰むようである。気がまぎれるようである。

「やかまし」【喧】

意味変化 (聴覚↓焦燥／迷惑) 「共感性の転移」

音や声などが大きかったり、多く入り交じったりして、神経をいらだたせる。騒がしい↓こまごまとした感じで、煩わしい。めんどろである↓小言や無駄口などが多く、聞いて煩わしく感じる。

● 対自↓評価（一四語）

「あさまし」【浅】

意味変化（驚き↓品性・悪性）「意味の悪化」

意外である。驚くべきさまである↓品性がいやしい。がつがつしている。さ
もしい。

「おそろし」【恐・畏】

意味変化（恐れ↓基準・やや良性）「意味の抽象化」

身に危険が感じられて、不気味である、不安である。こわい。おっかない↓
たいしたものだ。えらい↓驚きあきれることである。ひどい。

「おもだたし」【面立】

意味変化（栄辱↓賞賛・良性）「意味の連想」

身の光栄に思う。名誉である。面目が立つ。はれがましい↓立派である。れ
つきとした。大したものである。

「かなし」【悲・哀・愛】

意味変化（愛↓賞賛・良性）「意味の連想」

（愛）男女、親子などの間での切ない愛情を表わす。身にしみていとおいしい。
かわいくてたまらない。いとしい↓（関心や興味を深くそそられて、感慨を
催す）↓（連用形を副詞的に用いることが多い）みごとだ。あっぱれだ。

「きぜわしい」【気忙】

意味変化（焦燥↓性格・悪性）「意味の転用」

心にせかれることがあつて落ち着かない。気分的に落ち着かない。きぜわしない↓性格に落ち着きがなく、事を急いで進めたがる。性急である。気短である。きぜわしない。

「きむずかしい」【気難】

意味変化 (不快↓性格・やや悪性) 「意味の連想」

気分がすぐれない。うっとうしい。また、何かをするのがわずらわしい↓自我が強くと神経質で、容易に人に同調しない。

「さみし」【寂】

意味変化 (不満・不快↓品性・悪性) 「意味の転用」

本来あるべき状態になく、また、本来備わっているはずのものが欠けていて、満たされない気持を表わす。物足りない。不満足、不景気、憂鬱、物悲しさなどを表わす↓見ていてあさましい感じである。さびしい。さもしい。

「さびし」【寂】

意味変化 (不満・不快↓品性・悪性) 「「さみし(寂)」に同じ」

「つつまし」【慎】

意味変化 (恥↓風格・やや良性) 「意味の連想」

他に対して心が置かれ気恥ずかしい。気がひける感じである。きまりが悪い↓贅沢でない。地味で質素である。つましい。つつましい。

「はづかし」【恥】

意味変化 (恥↓賞賛・良性) 「意味の連想」

過ち、欠点、罪などを悟って面目なく感じるさま。きまりが悪い↓こちらが
気おくれするほど、相手が優れているさま。立派である。感心である。美し
い。

「みぐるし」【見苦】

意味変化（苦しみ↓美的・悪性）「意味の連想」

外から見るのがつらい気持である。見るにたえない↓みっともない。みにく
い。

「むつかし」【難・六借】

意味変化（不愉快↓風情・悪性／性格・悪性）「意味の連想・転用」

気に入らず不愉快である。気持が晴れないでうつとうしい。むしゃくしやす
る↓風情がなくてむさくるしい。よごれてきたない↓意地が悪いなど、性格
が素直でなくてとりつきにくい。理屈がちであったりして気軽に接しにくい。

「ものさわがし」【物騒】

意味変化（焦燥↓性格・悪性）「意味の転用」

物事が何となく騒々しい。心が何となく落ち着かない。何となくあわただし
い↓物事のやりかたなどが、せっかちである。あわて騒いだ様子である。気
がはやい。

「やさし」

意味変化（恥↓風情／歌合／人柄／態度／性格など・良性）「意味の連想」

自分の行為や状態などにひげ目を感じる。人や世間のおもわくに対して気恥

ずかしい↓姿や言語、振舞いなどに、こまやかな心づかいや、たしなみの深さなどが感じられるさま。また、それを優れたものとして評価すること。

● 対自↓感覚（三語）

「おどろおどろし」

意味変化（驚き↓聴覚）〔語源影響〕

耳目を驚かすようなさまである↓（音、声などが）人を驚かすように大きい。騒々しい。（雨、風などが）激しくすさまじい。

「けたたましい」

意味変化（驚き↓聴覚）〔語源影響〕

人をびっくりさせるくらいにあわただしく、騒々しい。さわがしい↓静けさを破って突然、びっくりするようなさわがしい音がするさま。やかましい音や声をたてるさま。

「にががし」【苦苦】

意味変化（不愉快↓味覚）〔語源影響〕

心の中で、そのことをおもしろくなく感じる。非常に不愉快だ。たまらなくいやだ↓苦い味がする。

● 対自↓意向（三語）

「くるし」【苦】

意味変化 (苦しみ↓意志) 「情意の進化」

身体の状態や生活などが思わしくなく、身に苦痛を感じている。難儀である
↓無理にととのえるさまである。無理にこじつけるさまである。

「すがすがし」

意味変化 (愉快↓決心) 「情意の進化」

さわやかで気持がよい。さっぱりとしている↓みれんやためらいなしに思い
立つさま。抵抗や障害を感じないさま。思いきりがよい。

「まがまがし」

意味変化 (不安↓意図) 「情意の進化」

災いを招くようである。いかにも災厄を招きそうである。不吉である。いま
わしい。縁起が悪い。不祥である↓さももつともらしい。いかにも本当らし
い。しらじらしい。

● 対他↓評価 (一三語)

「いまいまし」 【忌忌】

意味変化 (憚る↓性格・悪性) 「意味の連想」

けがれに触れたり、または出家などの身分がらのため、齋み慎まなければな
らない。遠慮すべきである。はばかりすべきである。(不吉なので) 避けなけ
ればいけない↓陰気である。暗くうち沈んでいて活気がない

「いやし」 【賤】

意味変化

（軽蔑↓下品／吝嗇／無学／人格・悪性）〔意味の連想〕

蔑視、卑下すべきである。とるに足りない↓下品である。劣っている↓吝嗇である。けちである↓無教養である。無学である↓特に飲食物や金銭などに對して、人前でも欲望を隠そうとせず、慎みがない。意地きたない。

「いやらしい」【嫌・厭】

意味変化

（嫌悪↓品行・悪性）〔意味の特殊化〕

様子、態度、行為、状態などが、好ましくない。いやみな感じである。いとわしい↓性に関して節度がなく、嫌悪感をそそる。下品、好色な感じである。みだらである。

「うつくし」【愛】

意味変化

（愛↓美一般／抽象的な美・良性）〔意味の一般化・特殊化〕

妻、子、孫、老母などの肉親に對するいつくしみをこめた愛情↓（美一般を表わし、自然物などにもいう。室町期の「いつくし」に近い）美麗である。きれいだ。みごとである。立派だ↓人の行為や態度、また、文章、音色などが好ましい感じである。

「うらめし」【恨】

意味変化

（恨み↓品行・悪性）〔意味の連想〕

相手の心や処置が期待に反するものであったり、望ましくない事態が自力ではどうにもならないような場合、それに対する不満、嘆きなどが心の内にわだかまっている。残念で悲しい↓いやらしい。

「けけし」

意味変化 (疎遠↓態度・やや悪性／才能・良性) 「意味の進化・良化」

きっぱりとけじめをつけている。改まった態度である。とりすましている。よそよそしい↓さかしらな態度をとるさま。ことごとしく区別をつけなければいけないさま↓てきぱきとしたさまである。

「このまし」【好】

意味変化 (好き↓品行・悪性) 「意味の特殊化」

好きである。気に入っている。このもしい↓好色らしい。すきがまし。すきずきし。

「このもし」【好】

意味変化 (好き↓品行・悪性) 「「このまし(好)」に同じ」

「なれなれし」【馴馴】

意味変化 (親近↓態度・悪性) 「意味の悪化」

たいへんに親しいさまである。なれて心やすそうなさまである↓ぶしつけである。無遠慮である。

「はし」【愛】

意味変化 (愛↓美) 「意味の連想」

いとおいしい。かわいらしい。慕わしい↓美しい。

「めざまし」【目覚】

意味変化 (驚き・嫌悪↓価値・良性) 「意味の良化」

物事が心外であり目もさめる思いがする。驚きあきれたり、不快に思ったりするほどである。目ざわりである。気にくわぬ↓物事がすばらしく目もさめるほどである。驚くほどすばらしいさま、立派であるさま、など。また一般に、評価すべき状態がきわだっている。

「めづらし」【珍】

意味変化（愛↓珍奇／新奇）

賞美する価値がある。珍重に価値する。好ましい。すばらしい。結構である↓風変わりである。珍奇である↓目新しい。新鮮である。新奇である。

「ゆゆし」【齋忌】

意味変化（畏敬↓優れる／立派）「意味の良化」

神聖であるので触れてはならない。恐れつつしむべきである。恐れ多い。恐ろしい↓不吉なことが思われるほどすぐれている。そら恐ろしいほど美しい↓非常に立派である。非凡である。豪勢である。

● 对他↓意向（三語）

「うらやまし」【妬忌】

意味変化（嫉妬↓願望）「情意の進化」

他人のようす、状態などが自分より恵まれているように見えて、憎らしく思われる。ねたましい↓他人や他の事物のようす、状態などが自分よりすぐれているように見えて、そうありたいと願われる。

「このまし」【好】

意味変化 (好き↓願望) (情意の進化)

好きである。気に入っている。このもしい↓望ましい。そうすべきである。

「このもし」【好】

意味変化 (好き↓願望) (情意の進化)

好きである。気に入っている。このもしい↓うらやましい。欲しいと思う。

●意向↓対他 (二語)

「おくゆかし」【奥床】

意味変化 (意志↓愛好) (情意の進化)

その奥にあるものに心がひかれる。その先が見たい。その先を聞きたい。その先を知りたい↓深い心づかいが見えて、なんとなく慕わしい。深い思慮があるように見える。上品で深みがあり、心ひかれる。

「ゆかし」【床】

意味変化 (意志↓愛好) (情意の進化)

それに心がひかれ、実際に自分で接してみたいという気持を表わす↓なつかしい。恋しい。慕わしい。

●意向↓評価 (四語)

「いさまし」【勇】

意味変化 (奮起↓行動方式・良性／行動方式・悪性) 「意味の連想・悪化」

気乗りがしている。気が進んでいる↓勢いが強く、しりごみしない。勇敢である↓様子が活気に満ちている。勇壮である↓女性の、不良性を帯びていたり、つつましさに欠け、大胆な行動をとったりするさま。

「おくゆかし」【奥床】

意味変化 (意志↓美的・良性) 「意味の連想」

その奥にあるものに心がひかれる。その先が見たい。その先を聞きたい。その先を知りたい↓深い心づかいが見えて、なんとなく慕わしい。深い思慮があるように見える。上品で深みがあり、心ひかれる。

「くちをし」【口惜】

意味変化 (落胆↓価値・悪性) 「意味の連想」

思う事ができなかつたり、思うようにいかなかつたり、または、大切なものを失つたりして、失望、落胆した気持を表わす。がっかりだ。残念だ。いまのまま↓(対象が、期待はずれ、不十分で、満足できないさまである)↓つまらない。くだらない。取柄がない。情けない。遺憾だ。

「ゆかし」【床】

意味変化 (意志↓美的・良性) 「意味の連想」

それに心がひかれ、実際に自分で接してみたいという気持を表わす↓情趣や気品、優美さなどがあつて何となく心がひかれる。上品で深みがある。

● 思考↓評価（五語）

「あやし」【怪】

意味変化（不思議↓基準・悪性）「意味の連想」

人の知恵でははかれないような不思議さである。神秘的な感じである。霊妙である↓普通であればしないような、道理や礼儀にはずれたことをして、非難されるべきである。けしからん。よくない。

「いかがわしい」【如何】

意味変化（疑問↓一般・悪性／社会基準・悪性）「意味の抽象化・特殊化」

疑問に思われる。疑わしい。また、正体はつきりしない。信用できない。あやしい↓よくない。よろしくない。下品である。いagaraしい↓道徳上、風紀上好ましくない。「いかがわしい写真」

「くすし」【奇】

意味変化（不思議↓態度・やや悪性）「意味の連想」

超自然的な霊異をつつしみやまう気持でいい表わす語。不可思議である。神秘的である。霊妙である↓宗教的な霊異や禁忌などを、まじめに信仰し固く従っている。態度が神妙である。奇特である。また、一風変わった、かたくるしくまじめな態度についてもいう。

「げにげにし」【実実】

意味変化（知的判断↓人柄・良性）「意味の連想」

肯定し納得できるさまである。道理にかなっている。はかばかしい↓人の心

の誠実なさま。実直である。まじめである。信頼できる。

「ものおもわしい」【物思】

意味変化（思考↓賞賛・良性）「意味の良化」

もの思いをする様子である。何かと気がかりでふさぎこんだ状態である↓趣が深い。

● 評価↓対自（三語）

「うひうひし」【初初】

意味変化「人柄↓不安」「意味の連想」

ひとの言動や態度、物の状態などが、世間ずれしていないで、若々しくけがれのないさまである。ものなれていないで初心な様子である↓はじめてなので、気持が落ち着かない。事あたらしく、きまりがわるい。

「ただけし」【猛猛】

意味変化（気性↓恥）「意味の悪化」

気性・行動などが、たいそういさましく強い。ひじょうに勇猛である。気性・行動などが荒々しく激しい↓悪事をすることに対する反省心などもちあわせないで平気である。ずうずうしい。しぶとい。ずぶとい。

「たのもし」【頼】

意味変化（才能↓安心）「意味の連想」

他をみて、それが頼みにできるさまである。たよれるさまである。↓頼みに
思うことからくる主観的な気持や判断を示して、心強い。気強い。

● 評価↓対他（二語）

「うるはし」【愛】

意味変化（美↓人情）「意味の特殊化」

整った感じ。きちんとしていて美しいさまにいう↓心情や人と人との間柄が
しつとりとじていて美しい。心があたたまるような感じである。

「しおらしい」

意味変化（性格↓愛）「情意の進化」

ひかえめで従順な様子である↓（上品で優美な様子）↓かわいらしい。可憐
である。

● 評価↓意向（二語）

「たのもし」【頼】

意味変化（才能↓期待）「意味の連想」

他をみて、それが頼みにできるさまである。たよれるさまである↓希望をも
って期待されるさまである。楽しみなさまである。

「につこらしい」【似】

意味変化（適切↓意図）「意味の連想」

いかにもふさわしい。よく似合う。似つかわしい。似あわしい↓いかにも本
当らしく見せかけるさま。まことしやかである。もつともらしい。

● 評価↓思考（二語）

「おだし」 【穩】

意味変化（人柄↓合理性）「意味の抽象化」

人の心や性質、作品の内容などが落ち着いている。安心である。穩和、穩健
である↓穩当である。道理にかなっている。

「よろし」 【宜】

意味変化（良・適↓是認／容認）「意味の連想・特殊化」

好ましい。心になう。満足できる↓是認できる。許可できる。さしつかえ
ない↓相手の言ったことを了解、了承した時、また、満足ではないが、それ
で仕方がないと容認、また、放任するという語。わかった。

「情意から情意へ変化する場合のまとめ」

「情意↓情意」へ変化する場合、評価形容詞に変化するものが圧倒的に多い。次いで、
対自形容詞と意向形容詞に変化するものがある。「視覚」「聴覚」「嗅覚」「温度感」な
どの感覚を表す形容詞は、「共感性の転移」によって、性格・態度・風格などの性質に対
する評価に用いられる。そして、音声や温度などの外部刺激は、「恥・不安・焦燥・困
惑・恐怖・興ざめ・愉快」などの心的状態に影響しがちである。

対自や対他形容詞から評価形容詞に変化する場合、基本的に情意の意味によって、悪性や良性の評価性を帯びるようになった。たとえば、「うつくし／はし」は「愛↓美」とよい評価性を生じ、「うらめし／いやらしい／いやし」のようなマイナスの対他的感情は「下品」のような悪性の評価につながる。「このまし／このまし」は「好色」のやや悪性の評価になるが、特殊な意味範疇に用いられただけで、本来の「好き」の意味方向を継承している。なお、意味方向が変化する場合もある。たとえば、驚きを表す「あさまし」は、本来善悪両方に用いられ、時代が下がるにつれて、「品性がいやしい」など悪性の評価に傾く。また、「おそろし／ゆゆし」のような「恐れ」を表す形容詞や、「おもだたし／つつまし／はづかし／やさし」のような「恥」を表す形容詞は、「恐ろしいほど美しい」「気おくれするほど相手が優れている」と良性の評価に導くことが興味深い。

ほかに、対他形容詞と意向形容詞との変化関係も見られた。たとえば、「うらやまし」「ゆかし」「このまし」などの形容詞は、「嫉妬・愛・好き」などの対他的感情を表すと同時に、「願望・欲望」の意味も持っている。

二―三 その他の意味変化について

一三分類によって、状態形容詞↓情意形容詞、情意形容詞↓状態形容詞など、主に意味記述が二つの分類に跨る形容詞の意味変化について考察した。なお、「対自↓対他」「対他↓対自」と、各分類の内部変化については言及しないことにする。

シク活用形容詞の意味変化においては、「意味の連想」「意味の悪化／良化」「意味の抽象化・一般化・特殊化」「比喻・転用・共感性の転移」などさまざまな現象を伴う。次

に、このような角度から、未分析の情意の意味変化について若干の考察を加えることにする。

○情意内容の悪化／良化

- 「あさまし」【浅】驚き↓興ざめ↓悲しみ（情けない）
「いとしぼらしい」愛（可愛らしい）↓同情（気の毒）
「うやうやし」【礼礼】尊重（礼儀正しい）↓恐れ（俗語、気味が悪い）
「にくらしい」【憎】憎悪（いかにも憎い、ずうずうしくかわいげがない）↓愛好（ねたましく感じるほど好ましい、心憎い）

○感情内容の変換

- 「あいあいし」【愛愛】愛（可愛らしい）↓親近（愛想がいい、なれなれしい）
「いたはし」【勞】苦しみ（骨折って苦しい）↓愛惜（大切にしたい）
「いとほし」【勞】苦しみ↓愛（弱小なものへの保護的な愛情）
「いまいまし」【忌忌】齋み慎む↓心配（不吉、演技が悪い）↓不満（心残り、後悔）
↓嫌悪（嫌な感じ、感心しない）↓（感動表現として）嫌悪（まあいやだ、まああきれた）↓怒り（腹立たしい）
「いまはし」【忌】憚る↓嫌悪（いやな感じ、好ましくない、不愉快である）
「おそろし」【恐】恐れ（こわい、不気味、不安）↓驚きあきれるさまである。
「おどろおどろし」驚き↓恐れ（異様だ、気味が悪い、恐ろしい）
「かなし」【悲】悲しみ（死、離別、旅や孤独の悲哀）／愛（いとしい）↓感動（関心

や興味を深くそそられて、感慨を催す。しみじみと心を打たれる) ↓残念
「くやし」【悔】残念(後悔) ↓悔しさ(腹立たしく思う気持)

「こころうつくし」【心愛】愛(可愛い) ↓人情味(やさしく暖かい心がある、人情味がある)

「こころくるし」苦しみ(思い苦しい) ↓愛(人の身の上を思って気遣わしい、いたわしい、いじらしい) ↓気がとがめる(相手にすまない気持)

「こころやまし」【心疾】不満(怒り、あせり、もどかしさなど) ↓気がとがめる(良心に恥じるところがある、気がとがめる、うしろめたい)

「さびし／さみし」【寂】不快(不満足、不景気、憂鬱、物悲しさ) ↓心配(人の気配がなく心細い)

「はづかし」【恥】恥ずかしい、きまりが悪い(過ち、欠点、罪などを悟って面目なく感じるさま) ↓慎み(自らひかえめになるようなさま。気詰まりである。遠慮される。気が許せない)

「むつかし」【難】不愉快(気に入らず不愉快である) ↓恐れ(正体の知れないもの、なじみのないものに対して、気味が悪い。不安で恐ろしい) ↓迷惑(ごたごたとして煩わしい。うるさい。面倒だ)

「もどかし」嫌悪(非難すべきである。気にくわない) ↓焦燥(思うようにならないで心がいらだっている)

「やさし」恥ずかしい(自分の行為や状態などにひけ目を感じる。人や世間のおもわくに対して気恥ずかしい) ↓慎み(周囲や相手に心づかいして、ひかえめに

ふるまうさま。つつましやかである) ↓人情味(他人に対して、心づかいがこまやかなさま。思いやりがある。情深い。暖かい心配りがある)

「やまし」 不満(思い通りにならなくて、不満・もどかしさ・あせりなど) ↓気がとがめる(良心に恥じるところがある。うしろぐらい気がする)

「ゆゆし」 【齋忌】畏敬(神聖であるので触れてはならない) ↓不安(不吉である。縁起が悪い。心配すべきさまである) ↓嫌悪(いやな感じである。うとましい。いまいましい) ↓心配(気がかりである。心配である)

「わびし」 落胆(気落ちして力が抜けてしまう感じである) ↓当惑(当惑の気持である。困ったことである) ↓悲しみ(つらく悲しい。身体的につらいことにもいう) ↓不安(心細く頼りない) ↓不満、不愉快(物足りない。面白くない。興ざめである)

○意味内容の拡大・縮小

「うつくし」 【愛】妻、子、孫、老母などの肉親的な愛情 ↓一般の慈愛 ↓幼少の者、小さい物などの可愛さ

「かなし」 【悲】悲しみ(死、離別、旅や孤独の悲哀) / 愛(いとしい) ↓次第に愛憐の意味がなくなった。

「こひし」 【恋】愛(男女) ↓愛(直接には見えない、離れたところにある事物や人が慕しく思う)

「なつかし」 【懐】愛着(人、人の心や姿をはじめ、音・香などを含め、広い対象につ

いていう)「上代」↓(中世以後に生じた意味)過去の思い出に心がひかれて慕わしいさま。離れている人や物に覚える慕情についていう。「後世、多く懐旧の思いをいうようになる」

「なまめかし」【生】美(人の容姿、態度)↓美(若い女性の魅力↓女性の性的魅力↓さらに性的魅力一般を表現する)↓優美(広く一般の物品)↓情趣のあるさま(人の性質・心柄や、情景・風物など)

○立場・対象の変換

「いたはし」【労】苦しみ(骨折って苦しい)↓同情(他人の状態に対して)

「いとほし」【労】苦しみ(自分によって)↓同情(他人に対する)

「うとまし」【疎】嫌悪(おもに世、人などに関して)↓恐れ、無気味(おもに異様な情景に関して)

「したはし」【慕】愛(なつかしく、恋しく思う)↓愛(まだあまり親しくない人に、あこがれる気持)

「なみだぐまし」悲しみ(涙ぐむようである、ひとりでに涙が出そうである)↓同情(聞いて涙がでるほどあわれである。また、感心である)

「むつまし」【親】親近(隔てなく親密である)↓特に、夫婦または恋人同士の男女の仲がよい。愛情が濃密である↓(主として人以外の事物に関して)心がひかれ、愛着を感じる。慕わしい。なつかしい。

「わづらはし」【煩】苦惱(めんどろな事などにかかずらうていやだという感じであ

る) ↓気がおかれる(なんとなく気をつかわせられるさまである。
はばかられるようである)

○評価内容の変換

「あだあだし」 【徒徒】人柄(不誠実、無責任) ↓品行(移り気・好色) ↓内容(空虚で浮薄だ)

「あはあはし」 【淡淡】才能(思慮もなく浅はかだ) ↓行動(扱い方などがあっさりとしている)

「いさをし」 【功・勤】人柄(勇敢) ↓人柄(勤勉) ↓価値(てがらがある)

「うるはし」 【愛】美(風景、容姿) ↓人柄(誠実) ↓外面的な立派さ ↓正しい ↓新鮮な美しさ ↓はればれとしている顔つき

「おとなし」 【大人】才能(思慮、分別がある) ↓成人している。おとなびている。一人前らしい ↓性格(従順、温和、落ち着いている) ↓地味(着物の柄などが地味で落ち着いている)

「かたくなし」 【頑】人柄(強情、意地っぱり) ↓才能(物事を理解してそれに応ずることができない) ↓教養がなくて見苦しい、情趣がなくてぶこつだ、不体裁。

「かたくるしい」 【堅苦】人柄(きまじめで厳格すぎる) ↓やわらかみが乏しい(文字・文章・話し方・考え方)

「かるがるし/かるがるし」 【輕輕】性格(思慮分別が十分でない、軽薄である) ↓態

度（物事のやり方が手軽である、軽く扱ったり、気軽に行動したりする）

「きらきらし」【端正】美（容姿）↓威厳（威厳があつて堂々として立派である）

「はかばかし」動作、処置などが機敏である↓有能である。役にたつ↓重要である↓したたかである。ずうずうしい（相手に呼びかける時などにいう）

「はらあし」【腹悪】性格（短気、おこりっぽい）↓性格（心がすなおでない。腹黒い。意地がわるい）

「まめまめし」性格（まじめ、誠実）↓価値（実生活に必要である、実用的である）↓行動力（身軽によく働くさま）

○評価の逆転現象

「いし」【美】よい。好ましい↓（本来の意味を逆に用いて）荒々しい。よくない。

「いまめかし」【今】現代風でりっぱだ↓現代風ではなやかだ↓現代風で軽薄である。はなやか過ぎて感心しない。

「こざかし」【小賢】才能（さしでがましく利口ぶっている）↓才能（浅薄な抜けめのなさ、卑劣なずるさ）↓才能（すばしこい、活気がある）

「さかし」【賢】才能（賢明）↓才能（知徳）↓才能（判断力がしっかりしていて、心がまどわれない、正気）↓才能（気がきいていて、とりえがある）↓才能（才知、分別だけあって、人間味が欠けている）↓口ぎたない、小うるさい。

「しおらしい」性格（ひかえめで従順）↓上品で優美↓けなげな様子である。感心である。殊勝である。相手を見くびっていうこともある。

「すばらしい」程度（ひどい、あきれる）「望ましくない有様をいう」↓程度（見事）

「めめしい」【女女】いかにも女のようなさまであることをいう

る。主に男性についていう。

情意形容詞は、立場や対象の変換、文脈と意味の関連、時代の使用傾向など、さまざまな要素によって変化する。その変化過程の中で、「意味内容の拡大・縮小」「評価の逆転現象」などの変遷現象は興味深い。

第三節 まとめ

シク活用形容詞は、情意的意味を表す傾向があると言われるが、実は状態的意味を表すものも少なくない。本章では、主に『日本国語大辞典』（二〇〇一）の意味記述で二つ以上の項目が立っているシク活用形容詞を研究対象として、状態と情意の意味関係を中心に、シク活用形容詞の意味変化について考察した。

その結果、「状態↓状態」へ変化する場合、様相形容詞をめぐる変化が最も多いことがわかった。特に、属性形容詞から「困難・危ない」「明瞭・確かさ」などの意味を派生するものが多く見られる。たとえば、「さかし」「けはし」は地形の急峻から、自然現象にとどまらず、抽象的に危ないという意味に用いられた。逆に、様相を表す形容詞は、「規

模」や「自然状況」に用いられることもある。また、「繁盛・巖然・猛烈」などの意味を表す様相形容詞は程度性を派生しやすい。物の状態を表す様相から「多忙・貧乏」などの人の状態にも関係づけられる。存在形容詞は存在の状態と関係する様相（常態、調和、確かさなど）に変化しやすい。ほかに、様相と時空、境遇と量的も同じく緊密的な意味関係を持ち、互いに意味変化が生じやすい。

「状態↓情意」へ変化する場合は、評価への変化が最も成立しやすいようである。「猛烈」「巖然」などの様相から評価に変化するものが圧倒的に多い。また、価値や美意識、人の性格・品行・態度などに関係づけられて、属性形容詞と存在形容詞も評価形容詞に変化するものが多い。そして、感情も状態に影響されやすい。様相・境遇・属性などの状態から、同じ傾向の感情が引き起こされる。たとえば、「不明瞭」「混乱」「不潔」「多忙」などの様相・境遇形容詞から、不愉快や焦燥などのマイナスの感情を引き起こすものも多く見られる。全体から見ると、「状態↓情意」への変化には、ややマイナスの情意に変化傾向があるようである。

「情意↓状態」へ変化する場合、様相形容詞に変化するものが最も多く見られる。特に、「驚き」やマイナスの意味を表す「焦燥・苦悩・不愉快・不満」などの対自形容詞や、評価形容詞は様相形容詞に変化するものが多い。また、境遇形容詞と程度形容詞への変化が注目される。「聴覚・視覚・寒暖」などの感覚形容詞は「多忙」などの生活状況に係るづけられ、「驚き・悲しみ・不愉快・不満・苦悩・落胆」などの感情状態は「身上・貧乏・病氣・死亡」などに関係づけられがちである。「驚き・恐れ」などの極端な感情から、程度を派生する現象がある。そして、全体から見ると、マイナスの情意を表す形容詞からの

変化が多いようである。

情意↓情意へ変化する場合、評価形容詞や対自形容詞に変化するものが多い。たとえば、「視覚」「聴覚」「嗅覚」「温度感」などの感覚形容詞の場合、「共感性の転移」によって、性格・態度・風格などの評価や、「恥・不安・焦燥・困惑・恐怖・興ざめ・愉快」などの心的状態に影響しがちである。情意変化過程の中で、「意味の良化・悪化」「評価の逆転現象」は特に興味深い。たとえば、時代変遷により、「あさまし」は「驚き」の原義から、「情けない、品性がいやしい」などの悪性評価に傾く。また、「恐ろしいほど美しい」の発想から、「おそろし・ゆゆし・おもだたし・つつまし・はづかし・やさし・にくらしい」のような「恐れ」「恥」「憎悪」を表す形容詞は、賞賛・愛好などのプラスの意味に用いられる。さらに、「いし(美)」のような、本来の意味と逆に用いられるという「評価の逆転現象」も注目される。

立場や対象の変換、意味範囲の拡大／縮小、意味の抽象化／一般化／特殊化、比喩／転用／共感性転移、時代の使用傾向などによって、シク活用形容詞の意味にはさまざま変化が生じる。個々の形容詞の意味変遷の時期については今後の考察に委ねることにするが、一三の意味分類によって、シク活用形容詞の意味変化のパターンを概略的に分析することができ、状態と情意をめぐる意味変化について、おおよその傾向を把握ができたように思う。

終章

古代日本語の形容詞は、形態的特徴によって「ク活用」と「シク活用」の二つのグループに分けられる。両者は、活用形式だけでなく、語構成と意味の上でも大きく異なっている。「ク活用」の形容詞には、客観的な属性を表すものが多いのに対して、「シク活用」の形容詞には、主観的な情意を表すものが多いと指摘される。それ故、現代日本語の感情・感覚を表す表現には、「しい」型の形容詞が多く存在している。本論文は、この古くから形態と意味に特徴ある「シク活用形容詞」に注目し、その語構成、活用、意味の歴史的变化について、より体系的に考察した。

まず、語構成から見ると、上代語形容詞は、語基の意味を重視し、接尾語「し」による単純構造の割合が大きく、ク活用の約五割、シク活用形容詞の約七割を占めている。また、「動詞未然形（被覆形）＋し」といった動詞から派生した形容詞と、「ながながし」「とほとほし」のような畳語形容詞の存在は、シク活用形容詞の特徴だと見られ、それ故、シク活用の発生・発達はク活用形容詞より遅れたと言われている。したがって、接辞との結合も遅れ、接辞による派生形容詞は極めて少なかった。複合形容詞に用いる語彙も、かなり限られている。

平安時代から近代語を生成する過渡期である室町時代まで、形容詞の語構成の特徴として現れるのは、「複合」と「派生」によって、「合成形容詞」が大量に産み出されたことである。ク活用形容詞では主に「名詞＋形容詞」が増加した。シク活用形容詞では畳語形

容詞が増加するとともに、派生形容詞が発展したことが注目される。

具体的な造語形式から見ると、「語基＋し」といった基本構造は優勢を失い、特に情意を表す語基は激減した。「動詞未然形（被覆形）＋し」は依然多く用いられ、また、名詞、副詞ないしく活用形容詞からシク活用形容詞に転じるものも多くなつた。豊語形容詞はそのまま命脈を保ち、上代よりも広い範囲で使われ、名詞・形容詞語幹・動詞連用形をはじめ、副詞にまで用いられた。上代には限られた語彙にしか用いられなかつた「名詞＋形容詞」も、より多くの語彙の複合が見られるようになり、室町時代には「うれしがなし」「おもしろをかし」のような「形容詞語幹＋形容詞」も生じた。

上代以降、情意を表す語基による単純形容詞の造語が少なくなる一方、複合や派生によつてシク活用形容詞の語彙を豊かにする傾向が見られる。この際、接辞による派生形容詞が大量に造られた。平安時代に入つて、接頭語「もの」が定着され、接尾語「がまし」も現れ、そして終始優れた造語力を發揮した。室町時代になつて、「こ」などの程度を表す接頭語がシク活用形容詞に多用されるようになり、また接尾語「らし」が現れ、「がまし」に劣らない造語力を發揮した。「かまし」「がはし」「くまし」「めかし」「らかし」「くるし」「くらはし／くろうし」「くろし」など造語力はそれほどでない接尾語が多く存在していることから、合成形容詞の發展した傾向が伺える。また、鎌倉時代から豊語形容詞や接尾語「がまし」「らし」による派生形容詞の造語に、漢語が多用されるようになった。

近代語において、「動詞未然形（被覆形）＋し」を含み、接尾語「し」による単純形容詞の造語は明らかに衰えを見せた。そして、新出の単純形容詞があると言っても、既存の

語基を変化するものが多く、新しい語基は少ない。新出語基と他品詞からの転成が減少する中、既存の語基を用いる合成形容詞が発達した。

疊語形容詞は減少し、「名詞＋形容詞」は多用された。また、「いけ」「くそ」など数多くの新出の接頭語と、従来の「こ」「もの」など既存の接頭語によって、大量の派生形容詞も造られた。江戸時代において接尾語「がまし」「らし」「くろし」「くるし」と新出の接尾語「たらし」などは優れた造語力を発揮した。なお、明治時代以降、「たらし」以外、接尾語の造語力は大幅に低下した。

近代では、新出の接尾語が少なく、既存の接尾語による派生形容詞が多い。そして、室町時代と比べると、意味的には否定的評価に傾く傾向があるようである。また、新しい漢語名詞や漢語形容動詞が大量に現れたこともあって、近代新出の形容詞接尾語が少ないにもかかわらず、合成形容詞が発達したのは、大量の漢語形容詞の出現によるものである。次に、活用から見ると、終止形以外の活用語尾に「し」が加えられる点がシク活用の特徴となる。ク活用形容詞は語幹の独立性が高く、「し」は付属的な存在である。これに対して、シク活用形容詞は、情意性を表す語基が多く、独立性に乏しいため、「し」との結合がより緊密的であり、「し」は語幹の一部と見るほうが妥当である。

上代語において、基本的にク活用形容詞とシク活用形容詞の間には整然とした対立構造が保たれている。ク活用形容詞に用いる語基を重ねて、疊語形容詞という形でシク活用形容詞に転じることがあるが、直接同一の語基をク活用にもシク活用にもまたがって用いることは基本的にはなかった。名詞なども同様に、疊語形によってシク活用形容詞の語幹になれるが、直接「し」を付きシク活用形容詞となるものは少なかった。ところが、中世に

入ると、こうした厳密な語構造は緩んでくる。名詞・動詞・副詞・形容詞・形容動詞など、多くの語基が直接にシク活用形容詞の語幹に現れるようになった。疊語形容詞は一層使用範囲を広げる一方、「がまし」「らし」などの接尾語によって、「名詞＋し」などの語基の情意性に対する要求や疊語形の音節数の制約から解放され、更なる多様な語基がシク活用形容詞の語幹に現れることが可能となった。

そこで、情意的意味を表す語基の減少、その他の多様な語基の発展、合成形容詞の大量出現という事態に伴って、形容詞の活用において変化が生じることとなった。上代語におけるク活用形容詞とシク活用形容詞の秩序ある対立関係の緊張は次第に緩んでくる。上代において、ク活用・シク活用の両方に活用する痕跡がある形容詞には、「うまし」の一語だけが挙げられるが、鎌倉時代以降、ク活用からシク活用に変化した語、あるいは一時的に両方の活用をする語が次々と現れた。室町時代において、連体形のイ音便形が終止形の機能を兼ねるようになり、ク活用・シク活用の区別が消滅したのである。ク活用↓シク活用に働いた経緯は、個別にいくつか挙げられるが、評価や主観的判断を表すためにシク活用したものが多く、ク活用とシク活用の区別が消滅する一方、「し」の情意的意味が改めて意識されるようになるとも考えられる。したがって、室町時代から江戸時代にかけて、直接に「し」によって臨時的あるいは意図的にシク活用することが多く見られる。

最後に、意味から見ると、シク活用形容詞には、情意的意味を持つ語基が多く存在している。これはク活用形容詞と比べた場合の、シク活用形容詞語幹の特徴の一つである。ク活用形容詞には属性を表すものが多く、シク活用形容詞には情意を表すものが多いという傾向が認められる。しかし、実際には状態的意味を持つ語基も少なくなかった。それは、

事物の属性というものは、一定の客観的な基準がある一方、個人による主観的な判断基準でも成り立つためである。時間や空間、事物の質や量の判断、人の行為に対する評価など、個人の主観が認識に影響を与えうる。したがって、シク活用することによって、この主観性がよく伝わるとも言える。たとえば、上代において、一つ注目するのは、自然環境は人の生活に大きく影響しているため、道の険しさなど、自然状況などの属性を表す語基は、シク活用する傾向が見られた。

シク活用形容詞の意味特徴を把握するには、意味による分類を検討した。国立国語研究所編『分類語彙表』（一九六四）の分類基準に従い分類し、シク活用形容詞の同義類義の関係より明確的に示すことができた。「抽象的關係」「精神および行為」「自然現象」の三つの方面において、シク活用形容詞の使用傾向をある程度把握することができた。

具体的に見ると、「精神および行為」が圧倒的に多い。その中で、「好悪・愛憎」と「苦悩・悲哀」の類の語が最も多く見られる。喜怒哀楽などの感情のほかに、「言語活動」と「人柄」「才能」などの人の行為に関するものが多いのも注目される。「抽象的關係」の場合、「様相」と「量」に多用される。「自然現象」の場合、「音」と「生理・病気」に多く用いられる。

この分類結果を踏まえて、シク活用形容詞の意味分類について再検討し、十三分類を試算した。上代・室町時代・近代の各時代のシク活用形容詞を分類して、各種類の形容詞の時代的消長を把握してみた。その結果、評価形容詞、様相形容詞の増加が注目される。これは、シク活用形容詞の語構成の時代的变化、つまり、疊語形容詞と派生形容詞の増加に關係あると考えられる。また、形容詞の意味方向から見ると、時代につれてマイナス方向

に傾く傾向が伺える。特に、上代において明らかにプラス方向が優勢である評価形容詞と対他形容詞が、次第にマイナス方向へ変化することは興味深い。

十三分類によつて、各時代新出シク活用形容詞の原義の意味傾向について、ある程度把握することができた。しかし、形容詞の意味は不変なものではない。この意味分類法を活かして、「シク活用形容詞の意味変化について考察を行い、十三分類を大きく状態と情意に分け、「状態↓状態」、「状態↓情意」、「情意↓状態」、「情意↓情意」と四つの方面から意味の変化パターンを分析した。

「状態↓状態」へ変化する場合、様相形容詞をめぐる変化が最も多い。特に、属性形容詞から「困難・危ない」「明瞭・確かさ」などの意味を抽象するものが多く見られる。たとえば、「さかし」「けはし」は地形の急峻から、自然現象にとどまらず、抽象的に危ないという意味に用いられた。逆に、様相を表す形容詞は、「規模」や「自然状況」に用いることもある。また、「繁盛・厳然・猛烈」などの意味を表す様相形容詞は程度性を抽象しやすい。物の状態を表す様相から「多忙・貧乏」などの人の状態にも関係づけられる。存在形容詞は存在の状態と関係ある様相（常態、調和、確かさなど）に変化しやすい。ほかに、様相と時空、境遇と量的も同じく緊密な意味関係を持ち、互いに意味変化が生じやすい。

「状態↓情意」へ変化する場合、評価への変化が最も成立しやすいようである。「猛烈」や「厳然」などの様相から評価に変化するものが圧倒的に多い。また、価値や美意識、人の性格・品行・態度などに関係づけられ、属性形容詞と存在形容詞も評価形容詞に変化するものが多い。次に、感情も状態に影響されやすい。様相・境遇・属性などの状態から、

同じ傾向の感情を引き起こされる。たとえば、「不明瞭」「混乱」「不潔」「多忙」などの様相・境遇形容詞から、不愉快や焦燥などマイナスの感情を引き起こすものが多く見られる。全体から見ると、「状態↓情意」への変化には、ややマイナスの情意に変化する傾向があるようである。

「情意↓状態」へ変化する場合、様相形容詞に変化するものが最も多く見られる。特に、「驚き」やマイナスの意味を表す「焦燥・苦悩・不愉快・不満」などの対自形容詞や、評価形容詞は様相形容詞に変化するものが多い。また、境遇形容詞と程度形容詞への変化が注目される。「聴覚・視覚・寒暖」などの感覚形容詞は「多忙」などの生活状況に関係づけられ、「驚き・悲しみ・不愉快・不満・苦悩・落胆」などの感情状態は「身上・貧乏・病気・死亡」などに関係づけられがちである。「驚き・恐れ」などの極端な感情から、程度を派生する現象がある。そして、全体から見ると、マイナスの情意を表す形容詞からの変化が多いようである。

「情意↓情意」へ変化する場合、評価形容詞や対自形容詞に変化するものが多い。たとえば、「視覚」「聴覚」「嗅覚」「温度感」などの感覚形容詞の場合、「共感性の転移」によって、性格・態度・風格などの評価や、「恥・不安・焦燥・困惑・恐怖・興ざめ・愉快」などの心的状態に影響しがちである。情意へ変化する過程の中で、「意味の良化・悪化」と「評価の逆転現象」は特に興味深い。たとえば、時代の変遷により、「あさまし」は「驚き」の原義から、「情けない、品性がいやしい」などの悪性評価に傾く。また、「恐ろしいほど美しい」の発想から、「おそろし／ゆゆし／おもだたし／つつまし／はづかし／やさし／にくらしい」のような「恐れ」「恥」「憎悪」を表す形容詞は、賞賛・愛

好などのプラスの意味に用いられる。さらに、「いし（美）」のように、本来の意味を逆に用いる「評価の逆転現象」も注目される。

シク活用形容詞の原義から、その意味にはさまざまな変化が生じる。個々の形容詞の意味変遷の時期については考察が及ばないが、一三の意味分類によって、シク活用形容詞の意味変化のパターンを考察し、状態と情意を巡る意味変化について、傾向としてある程度の把握ができたと思う。本論文は、上代、中古・中世、近代に現れたシク活用形容詞を中心に、その語構成、活用、意味を考察し、さらに意味分類を行い、状態と情意の視点から意味変化を分析した。全面的、体系的に考察することによって、シク活用形容詞の歴史的变化の全貌を一層明らかに示すことができたと思われる。

参考文献

- 荒正子「形容詞の意味的なタイプ」『ことばの科学3』言語学研究会　むぎ書房
一九八九年
- 岩淵悦太郎『現代日本語』筑摩書房　一九七〇年
- 于艶麗「感情形容詞と感情動詞に関する考察」『立教大学日本文学』(101号)二〇〇八年
- 于艶麗「上代シク活用形容詞に関する考察」『立教大学大学院日本文学論叢』(第9号)
二〇〇九年
- 于艶麗「室町時代におけるシク活用形容詞に関する考察―合成形容詞の語構成を中心に」
『立教大学大学院日本文学論叢』(第12号)二〇一二年
- 于艶麗「シク活用形容詞の語構成に関する考察―歴史的変化の観点から」『立教大学大学
院日本文学論叢』(第13号)二〇一三年
- 遠藤千依「形容詞『かはゆし』の歴史的意味展開」『言語表現研究』第二五号　兵庫教育
大学言語表現学会　二〇〇九年
- 大槻美智子「〈感情表出〉機能と感情動詞分類」『日本語の語義と文法』(初版)愛知大学
国語学研究会　二〇〇七年
- 冲森卓也「形容詞の成立」『日本語学』(4-3)　一九八五年
- 冲森卓也・木村義之・陳力衛・山本真吾『図解日本語』三省堂　二〇〇六年
- 勝田耕起「接尾辞ガマシの意味とその変化」『文藝研究』第一四五集　日本文芸研究会
一九九八年
- 川端善明「形容詞の活用」『国語国文』(46-2)　京都帝国大学国文学会　星野書店

- 一九七七年
- 川端善明『活用の研究Ⅱ』清文堂 一九九七年
- 川本崇雄「日本語の形容詞活用の起源―特に南島語と対比して―」『国語と国文学』(54-8) 東京大学国語国文学会 至文堂 一九七七年
- 北原保雄「形容詞の語音構造」『中田祝夫博士功績記念』国語学論集 勉誠社 一九七九年
- 北原保雄『日本語の形容詞』大修館書店 二〇一〇年
- 釘貫亨『古代日本語の形態変化』和泉書院 一九九六年
- 工藤力男「上代形容詞語幹の用法について」『国語国文』(42-7) 京都帝国大学国文学会 星野書店 一九七三年
- 小池清治『基礎古典文法』朝倉書店 一九九四年
- 黄其正『現代日本語の接尾語研究』溪水社 二〇〇四年
- 小林賢次「セハシ(忙)の成立とセバシ(狭)」『国語語彙史の研究』二十三『国語語彙史研究会』和泉書院 二〇〇四年
- 斉藤倫明「形容詞語幹から派生する動詞の意味」『山手国文論攷』第四号 神戸山手女子短期大学国文学科 一九八二年
- 斉藤倫明『語彙論的語構成論』ひつじ研究叢書(言語編)第30巻 ひつじ書房 二〇〇四年
- 佐藤喜代治編『中世の語彙』講座日本語の語彙4『明治書院』一九八一年
- 佐藤喜代治編『講座日本語の語彙』第10巻 語誌Ⅰ／語誌Ⅱ『明治書院』一九八三年

- 阪倉篤義『語構成の研究』角川書店 一九六六年初版 一九九六年第六版
- 島田昌彦「国語における形容詞」『国語と国文学』(50・8) 東京大学国語国文学会
至文堂 一九七三年
- 島田泰子「接尾辞タラシイの成立」『国語学』第一八〇号 国語学会編 一九九五年
- 鈴木一彦・林巨樹『品詞別日本文法講座4 形容詞・形容動詞』明治書院 一九七三年
- 鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文法 第3巻 用言編(二) 形容詞・形容動詞』
明治書院 一九八四年
- 玉村千恵子「形容詞接尾語の研究―造語力の観点から―」『龍谷大学大学院研究紀要：人文科学』第二一集 一九九九年
- 陳岡・吉田則夫『心情形容詞の歴史的研究―「ねたし」について―』岡山大学教育学部研究集録』第一三六号 岡山大学教育学部学術研究委員会 二〇〇七年
- 築島裕『平安時代語新論』(復刊学術書) 東京大学出版会 一九八二年
- 外崎淑子『日本語述語の統語構造と語構成』ひつじ書房 二〇〇五年
- 中川正美『源氏物語における「いとほし」と「心苦し」』『国語語彙史の研究』和泉書院 一九八〇年
- 西尾寅弥『形容詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所報告 秀英出版 一九七二年
- 西尾寅弥『「ぼくは悲しい」けれど「彼女は悲しがる」―感情・感覚形容詞の特色―』
『新・日本語講座2 日本文法の見えてくる本』大久保忠利・奥津敬一郎編 汐文社 一九七五年

- 野村雅昭「造語法」『岩波講座日本語9語彙と意味』岩波書店 一九七七年
- 萩原直美「『源氏物語』における動詞と形容詞の派生・対応についての一考察」『日本語の語義と文法』（初版）愛知大学国語学研究会 二〇〇七年
- 橋本四郎「ク活用形容詞とシク活用形容詞」『女子大國文』第五号 一九五七年
- 蜂矢真郷『国語重複語の語構成論的研究』塙書房 一九九八年
- 蜂矢真郷「語基を共通にする形容詞と形容動詞」『国語語彙史の研究』二十三『国語語彙史研究会 和泉書院 二〇〇四年
- 蜂矢真郷「重複形容詞の周辺」『国語語彙史の研究』二十五『国語語彙史研究会 和泉書院 二〇〇六年
- 蜂矢真郷「語の変容と類推―語形成における変形について―」『国語語彙史の研究』二十七『国語語彙史研究会 和泉書院 二〇〇八年
- 蜂矢真郷「二音節語基と形容詞語幹」『国語語彙史の研究』二十九『国語語彙史研究会 和泉書院 二〇一〇年
- 蜂矢真郷「上代の形容詞」『萬葉』第二一二号 萬葉学会 二〇一二年
- 蜂矢真郷「ク活用形容詞語幹の重複・並列から」『国語語彙史の研究』三十二『国語語彙史研究会 和泉書院 二〇一三年
- 濱田敦『古文化叢刊』24 古代日本語』大八州出版 一九四六年
- 林浩恵「上代・中古に見られる形容詞派生の動詞―形容詞における意味分類とその関連を中心に―」『国語語彙史の研究』二十三『国語語彙史研究会 和泉書院 二〇〇四年
- 樋口文彦「評価的な文」『ことばの科学』3 言語学研究会 むぎ書房 一九八九年

- 平林文雄『接尾語「げ+さ」覚書』『佐藤喜代治教授退官記念』国語学論集 桜楓社
一九七六年
- 深水洋子『形容詞の意味の変遷―「かなし」とその周辺』『国文白百合』第十号 白百合
女子大学国語国文学会 一九七九年
- 古田啓「ホフマンの〈形容詞〉論と「現在のシ」」『松村明教授古稀記念』国語研究論集
明治書院 一九八六年
- 古田啓「ホフマンの日本文法研究における〈形容詞〉―何を〈形容詞〉とし、その品詞を
いかに考えたか―」『築島裕博士還暦記念』国語学論集 明治書院 一九八六年
- 細川英雄「現代日本語の形容詞分類について」『国語学』一五八集 国語学会編 秋田屋
一九八九年
- 堀井令以知『日本語の意味変化辞典』東京堂出版 二〇〇三年
- 松浦照子「複合形容詞の形成と継承―平安時代散文作品における―」『国語語彙史の研究
六』和泉書院 一九八五年
- 村上昭子「接尾語ラシイの成立」『国語学』第一二四号 国語学会編 一九八一年
- 村田菜穂子「古代語形容詞の造語形式―中古散文の形容詞を中心に―」『帝塚山学院大学
日本文学研究』第三三号 二〇〇二年
- 村田菜穂子「上代形容詞の継承性と中古新出の形容詞」『滋賀大国文』第四一号滋賀大国
文会 二〇〇三年
- 村田菜穂子「中古形容詞の量的性格―既存の形容詞と新出の形容詞」『滋賀大国文』第四
二号 滋賀大国文会 二〇〇四年

- 村田菜穂子 『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』和泉書院 二〇〇五年
- 村田菜穂子 「改訂増補 古代語形容詞の語構成―上代・中世編―」『帝塚山学院大学日本文学研究』第四一号 二〇一〇年
- 村山実和子 『接尾語「クロシイ」考』『日本語の研究』第8巻4号（『国語学』通巻251号）日本語学会編 二〇一二年
- 森田良行 『動詞・形容詞・副詞の事典』東京堂 二〇〇八年
- 八亀裕美 「形容詞の評価的な意味と形容詞分類」『阪大日本語研究』（15）大阪大学文学部日本学科 二〇〇三年
- 八亀裕美 『日本語形容詞の記述的研究―類型論的視点から―』明治書院 二〇〇八年
- 安本真弓 「古代日本語における形容詞と動詞の対応形態とその史的変遷」『国語学研究』（49）東北大学文学部 二〇一〇年
- 安本真弓 「中古の状態形容詞における動詞との対応とその要因―形容詞から動詞が派生した対応を中心として―」『文藝研究』第一七〇集 日本文芸研究会 二〇一〇年
- 安本真弓 「中古和文における状態形容詞と対応動詞の機能差―動詞から形容詞が派生した対応を中心として―」『国語学研究』（51）東北大学文学部 二〇一二年
- 柳田征司 『室町時代の国語』東京堂 一九八五年
- 山口仲美 「感覚・感情語彙の歴史」『講座日本語学 四語彙史』森岡健二編 明治書院 一九八二年
- 山口佳紀 「形容詞活用の成立」『国語と国文学』（50-9）東京大学国語国文学会 至文堂 一九七三年

山口佳紀「形容詞より見たる漢文訓読語と和文語の性格」『中古語 論集日本語研究 12』
有精堂 一九八〇年

山崎馨「形容詞さかし・さがし考」『松村明教授還暦記念』国語学と国語史 明治書院
一九七七年

山本佐和子「新シク型形容詞の派生について―中世室町期におけるク活用形容詞からの派
生を中心に―」『国語語彙史の研究 二十七』国語語彙史研究会 和泉書院
二〇〇八年

山本俊英「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」『国語学』第二三号国語学
会編 一九五五年

『岩波古語辞典（補訂版）』岩波書店 一九九〇年

『角川全訳古語辞典』久保田淳・室伏信編 角川書店 二〇〇二年

『基礎日本語辞典』森田良行編 角川書店 一九八九年

『時代別国語大辞典 上代編』三省堂 一九六七年

『時代別国語大辞典 室町時代編』三省堂 一九八五（第一卷）～二〇〇〇年（第五卷）

『大辞林』（第二版）松村明 三省堂 二〇〇六年

『日本国語大辞典』（第二版）小学館 二〇〇〇年～二〇〇一年

『日本語語彙大系 「意味体系」』岩波書店 一九九七年

『分類語彙表』増補改訂版 国立国語研究所編 大日本図書 二〇〇四年

『邦訳日葡辞書』土井忠生・森田武・長南実編訳 岩波書店 一九八〇年

『邦訳日葡辞書索引』森田武編 岩波書店 一九八九年
『万葉集索引』古典索引刊行会 塙書房 二〇〇三年

日本国語大辞典 ジャパンナレッジ（オンラインデータベース）
日本古典文学全集 ジャパンナレッジ（オンラインデータベース）

凡例

1 項目

『万葉集総索引』（二〇〇三）、『時代別国語大辞典 上代編』（一九六七）、『邦訳日葡辞書索引』（一九八九）、『時代別国語大辞典 室町時代編』（一九八五〜二〇〇〇）、『大辞林（第二版）』（二〇〇六）、『日本国語大辞典（第二版）』（二〇〇一）の各資料に収載されているシク活用形容詞（見出項目異なり語数一一六六語）を対象とする。

2 見出し仮名・表記形

仮名遣い、漢字の当て方など、すべて収載辞書の見出し・表記形に拠った。漢字表記が複数ある場合、原則として成立年代の古い収載辞書に掲げられている形で記載し、紙幅の関係で一行に収まらない場合、割愛したことがある。

3 排列

- ① 基本見出しの仮名の五十音順に排列するが、表作成の目的によって、語構成順や逆綴り順によって排列したものもある。
- ② 濁音・半濁音は清音の後に置いた。
- ③ 古典語の場合、促音・拗音の仮名は直音の仮名と区別せずに読むことにした。
- ④ 収載辞書の表記を参考にして歴史的仮名遣いで表記したが、排列は現代五十音順の読み方に従う。

4 各表について

表 1 『時代別国語大辞典 上代編』(一九六七)に収載されている「ク活用形容詞」(見出項目一四二語)を、五十音順と語構成とによって排列し、上代ク活用形容詞の構造上のまとまりを一覧できるように作成したものである。また、形容詞と対応する動詞がある場合も示した。

表 2 『時代別国語大辞典 上代編』(一九六七)に収載されている「シク活用形容詞」(見出項目一五六語)を、五十音順と語構成とによって排列し、上代シク活用形容詞の構造上のまとまりを一覧できるように作成したものである。また、形容詞と対応する動詞がある場合も示した。

表 3 表 1 と表 2 を比較し、語構成によって語数を合計し、上代ク活用とシク活用形容詞の構造上の異同を一覧できるように作成したものである。

表 4 『邦訳日葡辞書索引』(一九八九)に収載されている「ク活用形容詞」(見出項目二七五語)を、五十音順によって排列し、その語構成を一覧できるように作成したものである。

表 5 表 1 と表 4 を比較し、語構成によって語数を合計し、『時代別国語大辞典 上代編』(一九六七)と『日葡辞書(邦訳)』(一九八〇)に収載されているク活用形容詞の

構造上の変化を一覧できるように作成したものである。「★」の印は、接尾語「なし」による派生形容詞の語構成の内訳である。

表 6 『邦訳日葡辞書索引』(一九八九)に収載されている「シク活用形容詞」(見出項目二二二語)を、五十音順によって排列し、その語構成を一覧できるように作成したものである。

表 7 表 2 と表 6 を比較し、語構成によって語数を合計し、『時代別国語大辞典 上代編』(一九六七)と『日葡辞書(邦訳)』(一九八〇)に収載されているシク活用形容詞の構造上の変化を一覧できるように作成したものである。「★」の印は、接尾語「がまし」「らし」による派生形容詞の語構成の内訳である。

表 8 『時代別国語大辞典 室町時代編』(一九八五～二〇〇〇)と『日本国語大辞典(第二版)』(二〇〇一)に収載されているシク活用形容詞(見出項目)の中で、後者の成立年代の最も古い挙例によって、出現時期が平安時代に遡れる一四七語を、五十音順と語構成とによって排列し、平安時代新出のシク活用形容詞の構造上のまとまりを一覧できるように作成したものである。また、『日本国語大辞典』(二〇〇一)に記載されている最も古い挙例の成立年代を示す。

表 9 『時代別国語大辞典 室町時代編』(一九八五～二〇〇〇)と『日本国語大辞典

(第二版)』(二〇〇一)に収載されているシク活用形容詞(見出項目)の中で、後者の成立年代の最も古い挙例によって、出現時期が鎌倉時代に遡れる四五語を、五十音順と語構成とによって排列し、鎌倉時代新出のシク活用形容詞の構造上のまとまりを一覧できるように作成したものである。また、『日本国語大辞典』(二〇〇一)に記載されている最も古い挙例の成立年代を示す。

表 10

『時代別国語大辞典 室町時代編』(一九八五～二〇〇〇)と『日本国語大辞典(第二版)』(二〇〇一)に収載されているシク活用形容詞(見出項目)の中で、後者の成立年代の最も古い挙例によって、出現時期が室町時代に遡れる一七九語と、用例の記載がない一二二語を、五十音順と語構成とによって排列し、室町時代新出のシク活用形容詞の構造上のまとまりを一覧できるように作成したものである。また、『日本国語大辞典』(二〇〇一)に記載されている最も古い挙例の成立年代を示す。用例がない場合、「記載なし」で示す。

表 11

表 8、表 9、表 10 を比較し、語構成によって語数を合計し、平安時代から、鎌倉時代、室町時代に至るまで、シク活用形容詞の構造上の変化を一覧できるように作成したものである。「★」の印は、接尾語「がまし」「らし」による派生形容詞の語構成の内訳である。

表 12

『日本国語大辞典(第二版)』(二〇〇一)に収載されている「しい」型形容詞(見

出項目)の中で、その成立年代の最も古い挙例によって、出現時期が江戸時代に遡れる二八九語と、用例の記載がない一四語を、五十音順と語構成とによって排列し、江戸時代新出のシク活用形容詞の構造上のまとまりを一覧できるように作成したものである。また、『日本国語大辞典』(二〇〇一)に記載されている最も古い挙例の成立年代を示す。用例がない場合、「記載なし」で示す。

表 13

『日本国語大辞典(第二版)』(二〇〇一)に収載されている「しい」型形容詞(見出項目)の中で、その成立年代の最も古い挙例によって、出現時期が明治時代に遡れる一二八語を、五十音順と語構成とによって排列し、明治時代新出のシク活用形容詞の構造上のまとまりを一覧できるように作成したものである。また、『日本国語大辞典』(二〇〇一)に記載されている最も古い挙例の成立年代を示す。

表 14

『日本国語大辞典(第二版)』(二〇〇一)に収載されている「しい」型形容詞(見出項目)の中で、その成立年代の最も古い挙例によって、出現時期が大正・昭和に遡れる九〇語を、五十音順と語構成とによって排列し、大正時代以降新出のシク活用形容詞の構造上のまとまりを一覧できるように作成したものである。また、『日本国語大辞典』(二〇〇一)に記載されている最も古い挙例の成立年代を示す。

表 15

表 12、表 13、表 14を比較し、語構成によって語数を合計し、江戸時代から、明治時代、大正・昭和に至るまで、シク活用形容詞の構造上の変化を一覧できるように作

成したものである。「★」の印は、接尾語「がまし」「らし」による派生形容詞の語構成の内訳である。

表 16

『時代別国語大辞典 上代編』(一九六七)、『時代別国語大辞典 室町時代編』(一九八五)二〇〇〇)、『日本国語大辞典(第二版)』(二〇〇一)に収載されているシク活用形容詞(見出項目異なり語数一六六語)を、五十音順と「上代」「中古・中世」「近代」の時代区分によって排列し、『日本国語大辞典(第二版)』(二〇〇一)の成立年代の最も古い挙例とその語の出現する時期を一覧できるように作成したものである。また、『日本国語大辞典』(二〇〇一)に記載されている最も古い挙例の成立年代と意味記述の項目数を示す。出現時期が確定できない場合は、「未詳」で示す。「*」の印は、『日本国語大辞典』の挙例が上代に遡れるものの、『時代別国語大辞典 上代編』にシク活用形容詞の見出し語に収録されていない六語である。

表 17

表2、表11、表15を比較し、語構成によって語数を合計し、「上代」「中古・中世」「近代」に分けて、シク活用形容詞の構造上の変化を一覧できるように作成したものである。「★」の印は、接尾語「がまし」「らし」による派生形容詞の語構成の内訳である。

表 18

『万葉集総索引』(二〇〇三)、『時代別国語大辞典 上代編』(一九六七)、『邦訳日葡辞書索引』(一九八九)、『時代別国語大辞典 室町時代編』(一九八五)二〇〇〇

表
19

○)、『大辞林(第二版)』(二〇〇六)、『日本国語大辞典(第二版)』(二〇〇一)の各資料に収載されているシク活用形容詞(見出項目)を、五十音順によって排列し、一覧できるように作成したものである。

『日本国語大辞典(第二版)』(二〇〇一)に収載されている「しい」型形容詞八九七語(見出項目)を、仮名を下から読んだ場合(逆音引き)の五十音順によって排列し、一覧できるように作成したものである。

表
20

『日本国語大辞典(第二版)』(二〇〇一)に収載されている「しい」型形容詞八九七語(見出項目)を、国立国語研究所編の『分類語彙表(増補改訂版)』(二〇〇四)の分類基準によって分類し、各意味分類の語数を一覧できるように作成したものである。

表
21

『万葉集総索引』(二〇〇三)、『時代別国語大辞典 上代編』(一九六七)、『邦訳日葡辞書索引』(一九八九)、『時代別国語大辞典 室町時代編』(一九八五)と二〇〇〇)、『大辞林(第二版)』(二〇〇六)、『日本国語大辞典(第二版)』(二〇〇一)の各資料に収載されているシク活用形容詞(見出項目異なり語数一一六六語)を、最初に用いられた時の意味(原義あるいは最も古い挙例の意味)によって、本論文で提案した一三の分類に分類し、「上代」「中古・中世」「近代」に分けて、意味分類と五十音順とによって排列し、一覧できるように作成したものである。

表 22

表 21 の分類結果を踏まえて、「上代」「中古・中世」「近代」の十三の各意味分類の語数を統計したものである。さらに、意味を「プラス」「マイナス」に分け、どちらとも言えない場合は「その他」と扱った。

表 23

『時代別国語大辞典 上代編』（一九六七）、『日本国語大辞典（第二版）』（二〇〇一）の意味記述を参照にして、二つ以上の項目があるシク活用形容詞一六三語を、各意味記述の分類によつて、異なる意味分類に分類できるものを一覧できるように作成したものである。「↓」の印の前にあるのは、最初に用いられた意味（原義あるいは最も古い挙例の意味）の分類であり、「↓」の印の後にあるのは、その他の意味の分類である。なお、その多くの場合が意味の変化関係があるため、「↓」で表記するが、前者から後者の意味に発生すると考えにくい場合もある。

表 24

表 23 の意味変化の分析結果を踏まえて、語数を統計し、一三の意味分類の相互変遷関係を簡潔に示したものである。語数は、右の分類から下の分類へ変化する場合の数字で、右と下の分類は同一である場合は「—」で示す。また、考察が及ばない感情を表す「対自」「対他」の両分類の相互変遷関係も「—」で示す。

表1 上代語ク活用形容詞の語構成

見出し語	漢字表記	語構成	対応動詞
あつし	熱	語基+シ	
あつし	厚・敦	語基+シ	
あまねし	洽・歴	語基+ネ+シ	
あをし	青	語基+シ	
いたし	痛	語基+シ	いたむ
いぶせし	鬱	語基+セ+シ	いぶせむ
うし	厭	語基+シ	
うすし	薄	語基+シ	
うとし	疎	語基+シ	うとぶ
うまし	味	語基+シ	
えし	宜	語基+シ	
おそし	遅	語基+シ	
おほし	多	語基+シ	
おもし	重	語基+シ	
かしこし	恐	語基+シ	かしこむ
かたし	堅	語基+シ	かたむ
かたし	難	語基+シ	
かゆし	癩・癢	語基+シ	
かるし	軽	語基+シ	
きよし	清	語基+シ	きよむ
くさし	臭	語基+シ	くさる
くし		語基+シ	
こはし	強	語基+シ	
さし	狭	語基+シ	
さとし	聡	語基+シ	
さむし	寒	語基+シ	
しげし	繁・茂	語基+シ	しげる
しこめし		語基+メ+シ	
しるし	知・灼	語基+シ	
しろし	白	語基+シ	
せばし	迫	語基+シ	せむ・せまる
たけし	武	語基+シ	
たはし	靡靡	語基+シ	
たゆし	懈	語基+シ	たゆむ
ちかし	近	語基+シ	
ちひさし	小	語基+シ	
つだし	怯	語基+シ	
つよし	強	語基+シ	
つらし	悪	語基+シ	
とし	利	語基+シ	
とほし	遠	語基+シ	
ながし	長	語基+シ	
なし	無	語基+シ	
なほし	直	語基+シ	なほす
なめし	無礼	語基+シ	
にくし	憎	語基+シ	にくむ
にこし	柔	語基+シ	
ぬるし	少熱	語基+シ	
ねたし	嫌	語基+シ	ねたむ
はやし	早	語基+シ	はやる
ひろし	広	語基+シ	ひろる・ひろむ・ひろぐ
ふとし	太	語基+シ	

ほそし	細	語基+シ	
まそし	雅	語基+シ	
まねし	数多	語基+ネ+シ	
みじかし	短	語基+シ	
みずし	髣	語基+シ	
もろし	脆	語基+シ	
やすし	安	語基+シ	やすむ
やひさし	悒	語基+シ	
ゆるし	緩	語基+シ	ゆるふ
ゆらし		語基+シ	
よし	吉	語基+シ	
よわし	弱	語基+シ	よわる
わかし	若	語基+シ	
あかし	明・赤	動詞未然形+シ	あく・あかす・あかる
あさし	浅	動詞未然形+シ	あす
あらし	荒	動詞未然形+シ	ある
くらし	闇	動詞未然形+シ	くる・くらす
くろし	黒	動詞未然形+シ	くる・くろむ
ふかし	深	動詞未然形+シ	ふく・ふかむ
ふるし	古	動詞未然形+シ	ふる
うしろかるし	後軽	名詞+形容詞	
うらわかし		名詞+形容詞	
うれたし	慨	名詞+形容詞	
おとだかし	音高	名詞+形容詞	
おもしろし		名詞+形容詞	
かほよし	端正	名詞+形容詞	
くさぶかし	草深	名詞+形容詞	
けながし		名詞+形容詞	
こころいたし	情哀	名詞+形容詞	
こころぐし		名詞+形容詞	
こころよし	快	名詞+形容詞	
こだかし	木高	名詞被覆形+形容詞	
こちたし	言痛	名詞+形容詞	
ことたし		名詞+形容詞	
こととし	言急	名詞+形容詞	
にぐるし		名詞+形容詞	
まちかし	間近	名詞+形容詞	
まとほし	間遠	名詞+形容詞	
めぐし	愍	名詞+形容詞	めぐむ
いさぎよし	清	語基+形容詞	
いちしろし	炯然	語基+形容詞	
いちしろし	灼然	語基+形容詞	
うちはやし	劇	語基+形容詞	
したがたし		語基+形容詞	
ほのくらし	昧旦	語基+形容詞	
とほしろし	大	形容詞語幹+形容詞	
とほながし	遠長	形容詞語幹+形容詞	
ありがたし		動詞連用形+形容詞	
ききよし	聞吉	動詞連用形+形容詞	
けやすし	消安	動詞連用形+形容詞	
こひたし	恋痛	動詞連用形+形容詞	
みにくし	醜	動詞連用形+形容詞	
かぐるし		カ+形容詞	
かやすし		カ+形容詞	
さどほし		サ+形容詞	

さまねし	数多	サ+形容詞	
たどほし		タ+形容詞	
たふとし	貴	タ+形容詞	たふとぶ・たふとむ
たやすし	輒	タ+形容詞	
たよわし	手弱	タ+形容詞	
うやなし	無礼	名詞+ナシ	
うらもとなし		名詞+ナシ	
こころなし	無心	名詞+ナシ	
ことなし	事無	名詞+ナシ	
すべなし		名詞+ナシ	
たづがなし		名詞+ナシ	
つつがなし	無恙	名詞+ナシ	
つねなし	無常	名詞+ナシ	
みやなし	無礼	名詞+ナシ	
をさなし	少	名詞+ナシ	
をめなし		名詞+ナシ	
あぢきなし	無道	語基+キ+ナシ	
あづきなし		語基+キ+ナシ	
いとけなし	幼	語基+ケ+ナシ	
いらなし	楚	語基+ナシ	
うつなし	必・定	語基+ナシ	
おぎろなし		語基+ナシ	
おほつかなし		語基+ツカ+ナシ	
かたじけなし	辱・羞	語基+ケ+ナシ	
かたなし	穢陋	語基+ナシ	
きたなし	汚穢	語基+ナシ	
さがなし	不祥・悪	語基+ナシ	
すかなし		語基+ナシ	
すくなし	少	語基+ナシ	
たしなし	窮・苦	語基+ナシ	たしなむ
つたなし	怯・拙	語基+ナシ	
みつなし	不才	語基+ナシ	
ゆくりなし	率爾	語基+ナシ	
をぢなし	劣	語基+ナシ	
あからけし		語基+ケシ	
あきらけし	明	語基+ケシ	
あざらけし	鮮	語基+ラ+ケシ	
あたたけし	暖・温	語基+ケシ	
いささけし	小	語基+ケシ	
かそけし		語基+ケシ	
けやけし	尤・異	語基+ケシ	
さやけし	清	語基+ケシ	
しづけし	静	語基+ケシ	
たしけし		語基+ケ+シ	
たひらけし	平	語基+ケシ	
つばひらけし	委曲	語基+ケシ	
やすらけし	安	語基+ケシ	
ゆたけし	寛	語基+ケシ	
すむやけし	急	動詞未然形+ヤケ+シ	
合計156語			

表2 上代語シク活用形容詞の語構成

見出し語	漢字表記	語構成	対応動詞
あからし	懇	語基+シ	あからしぶ
あし	悪	語基+シ	
あたらし	惜	語基+シ	あたらしぶ
あらたし	新	語基+シ	
あやし	怪	語基+シ	あやしぶ・あやしむ
いかし	嚴	語基+シ	
いすかし	傲假	語基+シ	
いそし	勤	語基+シ	いそぶ
いたはし	勞	語基+シ	いたはる
いふかし	不審	語基+カ+シ	いふかる
いやし	賤	語基+シ	
うつし	現	語基+シ	うつす
うむがし		語基+カ+シ	
うれし	敏	語基+シ	うれしぶ・うれしむ
おだひし	穩	語基+シ	
おなじ	同	語基+ジ	
おむがし	欣感	語基+カ+シ	
おやじ	同	語基+ジ	
かなし	悲	語基+シ	かなしぶ・かなしむ
くし	奇	語基+シ	くしぶ
くすし	奇	語基+シ	
くるし	苦	語基+シ	くるしぶ・くるしむ
くはし	妙・細	語基+シ	
けし	異	語基+シ	
さかし	賢	語基+シ	
さがし	陰	語基+シ	
さだし	貞	語基+シ	さだむ
さぶし	不樂・不	語基+シ	さぶ
しけし	穢・蕪	語基+シ	
したし	親	語基+シ	
すがし		語基+シ	
すずし	冷	語基+シ	すずむ
たくまし	快	語基+シ	たくましぶ
ただし	正	語基+シ	ただす
たのし	樂	語基+シ	たのしぶ
ともし	乏	語基+シ	
なまし	生	語基+シ	
にたし		語基+シ	
にはし		語基+シ	
にひし	新	語基+シ	
はげし	烈	語基+シ	はげむ
はし	愛	語基+シ	
ひさし	久	語基+シ	
ひとし	等	語基+シ	
ほし	欲	語基+シ	ほる
まさし	正	語基+シ	
まづし	貧	語基+シ	
むがし	幸	語基+シ	
むなし	空	語基+シ	
やはし	飢	語基+シ	やはす

をし	惜	語基+シ	をしむ
いさをし	功・勤	名詞+シ	
ときじ	不時	名詞+ジ	
ほかし	他	名詞+シ	
われじ		名詞+ジ	
こきだし		副詞+シ	
はなはだし	甚	副詞+シ	
まだし		副詞+シ	
あさまし		動詞未然形+シ	あさむ
いきづかし	気衝	動詞未然形+シ	いきづく
いきどほろし		動詞未然形+シ	いきどほる
いたぶらし		動詞未然形+シ	いたぶる
いつくし	嚴	動詞未然形+シ	いつく
いとはし	厭	動詞未然形+シ	いとふ
いとほし	勞	動詞未然形+シ	いとふ
うたがはし	疑	動詞未然形+シ	うたがふ
うつくし	愛	動詞未然形+シ	うつく
うらめし	恨	動詞未然形+シ	うらむ
うらやまし	妬忌	動詞未然形+シ	うらやむ
うるはし	愛	動詞未然形+シ	うるふ
おもほし		動詞未然形+シ	おもふ
およし		動詞未然形+シ	おゆ
かたまし	姦	動詞未然形+シ	かたむ
くすばし		動詞未然形+シ	くしぶ
くやし	悔	動詞未然形+シ	くゆ
こひし	恋	動詞未然形+シ	こふ
こほし		動詞未然形+シ	こふ
さびし		動詞未然形+シ	さぶ
したゑまし		動詞未然形+シ	したゑむ
たたはし	偉	動詞未然形+シ	たたふ
たのもし	頼	動詞未然形+シ	たのむ
つからし	疲	動詞未然形+シ	つかる
なぐし	和	動詞未然形+シ	なぐ
なつかし		動詞未然形+シ	なつく
なやまし	不平・阻	動詞未然形+シ	なやむ
ねがはし	願	動詞未然形+シ	ねがふ
はづかし	恥	動詞未然形+カ+シ	はづ
むつまし	親	動詞未然形+シ	むつまむ
めづらし	珍	動詞未然形+ラ+シ	めづ
めだし		動詞未然形+シ	めづ
やさし		動詞未然形+シ	やす
ゆるほし	縦	動詞未然形+シ	ゆるふ
よらし		動詞未然形+シ	よる
よろこぼし	悦	動詞未然形+シ	よろこぶ
よろし	宜	動詞未然形+シ	よる
わびし		動詞未然形+シ	わぶ
ゑまはし		動詞未然形+シ	ゑまふ
かからはし		動詞未然形+ハシ	かかる
けがらはし	汗穢	動詞未然形+ハシ	けがる
うやうやし	恭	名詞の重複+シ	
くだくだし	細碎	名詞の重複+シ	
くまくまし		名詞の重複+シ	くしぶ
ひねひねし		名詞の重複+シ	

をさをさし	幹了・直・卓	名詞の重複+シ	
ををし	雄	名詞の重複+シ	
いつつし		語基の重複+シ	
おここし	沈毅	語基の重複+シ	
おどろおどろし		語基の重複+シ	
おほほし	鬱	語基の重複+シ	おほとる
きらきらし	端正	語基の重複+シ	
ごごし		語基の重複+シ	
すがすがし		語基の重複+シ	
そがそがし		語基の重複+シ	
たぎたぎし		語基の重複+シ	
たづたづし		語基の重複+シ	
ゆゆし	齋忌	語基の重複+シ	
とほとほし		形容詞語幹の重複+シ	
ながながし	長永	形容詞語幹の重複+シ	
わきわきし	分明	動詞連用形の重複+シ	
うらがなし		名詞+形容詞	
うらぐはし		名詞+形容詞	
うらごひし	裏恋	名詞+形容詞	うらごふ
うらごほし		名詞+形容詞	うらごふ
かぐはし		名詞+形容詞	
こころがなし	情悲	名詞+形容詞	
こころぐるし	情苦	名詞+形容詞	
こころこひし	心恋	名詞+形容詞	
なぐはし	名細	名詞+形容詞	
はなぐはし	花細	名詞+形容詞	
まぐはし	目細	名詞被覆形+形容詞	
うただぬし		語基+形容詞	
うただのし		語基+形容詞	
おもひがなし		動詞連用形+形容詞	
おもひぐるし		動詞連用形+形容詞	
きほし	欲服	動詞連用形+形容詞	
みがほし	欲見	動詞連用形+ガ+形容詞	
みほし	欲見	動詞連用形+形容詞	
ものかなし	物悲	モノ+形容詞	
ものこひし	物恋	モノ+形容詞	
なみだぐまし		名詞+グマシ	なみだぐむ
みだりかはし	妄	動詞連用形+カハシ	
しりひかし		名詞+動詞未然形+シ	しり+ひく
合計142語			

表3 上代語ク活用・シク活用形容詞の語構成比較

上代語ク活用		上代語シク活用	
	156		142
語基＋シ	67	語基＋シ	51
動詞未然形＋シ	7	動詞未然形＋シ	39
		動詞未然形＋ハシ	2
		名詞＋シ	4
		副詞＋シ	3
単純形容詞	74	単純形容詞	99
		名詞の重複＋シ	6
		語基の重複＋シ	11
		形容詞語幹の重複＋シ	2
		動詞連用形の重複＋シ	1
畳語形容詞	0	畳語形容詞	20
名詞＋形容詞	19	名詞＋形容詞	11
語基＋形容詞	6	語基＋形容詞	2
形容詞語幹＋形容詞	2		
動詞連用形＋形容詞	5	動詞連用形＋形容詞	5
複合形容詞（畳語を除く）	32	複合形容詞（畳語を除く）	18
接頭語による派生形容詞	[8]	接頭語による派生形容詞	[2]
カ＋形容詞	2	モノ＋形容詞	2
サ＋形容詞	2		
タ＋形容詞	4		
接尾語による派生形容詞	[42]	接尾語による派生形容詞	[2]
語基／名詞＋ナシ	29	名詞＋グマシ	1
語基＋ケン	13	動詞連用形＋カハシ	1
派生形容詞	50	派生形容詞	4
その他	0	その他	1

表4 『日葡辞書』ク活用形容詞の語構成

見出し語	漢字表記	語構成
あかぶかい	垢深い	名詞＋形容詞
うしろぐらい	後暗い	名詞＋形容詞
うしろめたい	後めたい	名詞＋形容詞
うまだけい	馬猛い	名詞＋形容詞
うらわかい	うら若い	名詞＋形容詞
おくふかい	奥深い	名詞＋形容詞
おもしろい	面白い	名詞＋形容詞
おもはゆい	面映ゆい	名詞＋形容詞
かいだるい	(かひだるい)	名詞＋形容詞
かたはらいたい	片腹痛い	名詞＋形容詞
かわいい	(かはいい)	名詞＋形容詞
きばやい	気早い	名詞＋形容詞
きむさい	気むさい	名詞＋形容詞
きょうとい	(けうとい)	名詞＋形容詞
くちおそい	口遅い	名詞＋形容詞
くちおもい	口重い	名詞＋形容詞
くちぎよい	口清い	名詞＋形容詞
くちばやい	口早い	名詞＋形容詞
くちひろい	口広い	名詞＋形容詞
くらづよい	鞍強い	名詞＋形容詞
けたかい	気高い	名詞＋形容詞
けむたい	煙たい	名詞＋形容詞
こころうい	心憂い	名詞＋形容詞
こころおおい	心多い	名詞＋形容詞
こころながい	心長い	名詞＋形容詞
こころにくい	心憎い	名詞＋形容詞
こころぶかい	心深い	名詞＋形容詞
こころぼそい	心細い	名詞＋形容詞
こころやすい	心安い	名詞＋形容詞
こだかい	小高い	名詞＋形容詞
ことしげい	事繁い	名詞＋形容詞
ことひろい	事広い	名詞＋形容詞
こぶかい	木深い	名詞＋形容詞
しおのからい	塩のからい	名詞＋形容詞
しおばゆい	塩はゆい	名詞＋形容詞
しつこい		名詞＋形容詞
じょうごわい	情強い	名詞＋形容詞
じょうのこわい	情の強い	名詞＋形容詞
しわはゆい		名詞＋形容詞
しわらくさい	しわら臭い	名詞＋形容詞
ておそい	手遅い	名詞＋形容詞
ておもい	手重い	名詞＋形容詞
てがたい	手堅い	名詞＋形容詞
てがるい	手軽い	名詞＋形容詞
てごわい	手強い	名詞＋形容詞
てせばい	手狭い	名詞＋形容詞
てちかい	手近い	名詞＋形容詞
てづよい	手強い	名詞＋形容詞
てどおい	手遠い	名詞＋形容詞

てぬるい	手緩い	名詞＋形容詞
てねばい	手粘い	名詞＋形容詞
てばしakai	手ばしakai	名詞＋形容詞
てばやい	手早い	名詞＋形容詞
てびろい		名詞＋形容詞
てたまい	手全い	名詞＋形容詞
てさむい	手むさい	名詞＋形容詞
てよわい	手弱い	名詞＋形容詞
なみだがたい	涙固い	名詞＋形容詞
なみだつよい	涙強い	名詞＋形容詞
なみだもろい	涙脆い	名詞＋形容詞
ねぶとい	音太い	名詞＋形容詞
はばやい	刃早い	名詞＋形容詞
はらくろい	腹黒い	名詞＋形容詞
ひだかい	日高い	名詞＋形容詞
ひとしげい	人繁い	名詞＋形容詞
みみちakai	耳近い	名詞＋形容詞
みみぢakai	耳近い	名詞＋形容詞
みみとい	聡い	名詞＋形容詞
みみどおい	耳遠い	名詞＋形容詞
ものうい	物憂い	名詞＋形容詞
ものすごい	物凄い	名詞＋形容詞
ものぶかい	物深い	名詞＋形容詞
やまいよわい	病弱い	名詞＋形容詞
よぎとい	夜聡い	名詞＋形容詞
あましげい	雨繁い	名詞被覆形＋形容詞
かなくさい	金臭い	名詞被覆形＋形容詞
まじakai	目近い	名詞被覆形＋形容詞
まばゆい	眩い	名詞被覆形＋形容詞
いらひどい		イラ＋形容詞
うそあまい	うそ甘い	ウソ＋形容詞
こぐろい	小黒い	コ＋形容詞
とうとい	尊い	タ＋形容詞
まじろい	真白い	マ＋形容詞
まっしろい	真白い	マ＋形容詞
よだるい		ヨ＋形容詞
いやたかい	弥高い	副詞＋形容詞
いさぎよい	潔い	語基＋形容詞
うずたかい	堆い	語基＋形容詞
こそばい	(こそばいい)	語基＋形容詞
すすどい	進疾い	語基＋形容詞
なまぐさい	腥い	語基＋形容詞
ほのぐらい	仄暗い	語基＋形容詞
あさぐろい	浅黒い	形容詞語幹＋形容詞
あまずい	甘酸い	形容詞語幹＋形容詞
うすぐろい	薄黒	形容詞語幹＋形容詞
おもたい	重い	形容詞語幹＋形容詞
しぶにがい	渋苦い	形容詞語幹＋形容詞
ねばがたい	粘固い	形容詞語幹＋形容詞
ほそながい	細長い	形容詞語幹＋形容詞
ありがたい	有難い	動詞連用形＋形容詞
えさがたい	え去り難い	動詞連用形＋形容詞
ききどおい	聞き遠い	動詞連用形＋形容詞

ききにくい	聞きにくい	動詞連用形＋形容詞
さがたい	避け難い・去り難い	動詞連用形＋形容詞
しがたい	為難い	動詞連用形＋形容詞
しにくい	為にくい	動詞連用形＋形容詞
たえがたい	堪へ難い	動詞連用形＋形容詞
なりがたい	成り難い	動詞連用形＋形容詞
ねごい	寝濃い	動詞連用形＋形容詞
ふすぼりくさい	燻ぼり臭い	動詞連用形＋形容詞
まちどおい	待ち遠い	動詞連用形＋形容詞
まちなが	待ち長い	動詞連用形＋形容詞
みにくい	醜い	動詞連用形＋形容詞
みやすい	見易い	動詞連用形＋形容詞
めでたい	目出たい	動詞連用形＋形容詞
もだしがたい	黙し難い	動詞連用形＋形容詞
くぼい	窪い	名詞＋シ
はしかい		名詞＋シ
うたてい		副詞＋シ
あおい	青い	語基＋シ
あつい	熱い	語基＋シ
あつい	厚い	語基＋シ
あまい	甘い	語基＋シ
あやうい	危い	語基＋シ
あわい	淡い	語基＋シ
いたい	痛い	語基＋シ
うすい	薄い	語基＋シ
うとい	疎い	語基＋シ
うまい		語基＋シ
えぐい	(急ぐい)	語基＋シ
えずい		語基＋シ
おおい	多い	語基＋シ
おそい	遅い	語基＋シ
おぞい		語基＋シ
おもい	重い	語基＋シ
かいい	痒い	語基＋シ
かしこい	賢い	語基＋シ
かたい	固・堅・難い	語基＋シ
からい	辛い	語基＋シ
かるい	軽い	語基＋シ
かろい	軽い	語基＋シ
きつい		語基＋シ
きぶい		語基＋シ
くさい	臭い	語基＋シ
くどい		語基＋シ
こい	濃い	語基＋シ
こまい	細い	語基＋シ
こわい	強い	語基＋シ
さとい	聡い	語基＋シ
さむい	寒い	語基＋シ
さらい		語基＋シ
しげい	繁い	語基＋シ
したるい		語基＋シ
しるい		語基＋シ
しろい	白い	語基＋シ

しろい	著い	語基+シ
しわい	吝い	語基+シ
すい	酸い	語基+シ
すごい	凄い	語基+シ
すばい	窄い	語基+シ
せばい	狭い	語基+シ
たかい	高い	語基+シ
たけい	猛い	語基+シ
だるい		語基+シ
ちかい	近い	語基+シ
つばい	窄い	語基+シ
つよい	強い	語基+シ
つらい	辛い	語基+シ
てこい		語基+シ
でこい		語基+シ
とい	利い	語基+シ
ない	無い	語基+シ
なおい	直い	語基+シ
ながい	長い	語基+シ
にがい	苦い	語基+シ
にくい	憎い	語基+シ
にぶい	鈍い	語基+シ
ぬくい	温い	語基+シ
ぬるい	温い	語基+シ
ねたい	妬い	語基+シ
ねばい	粘い	語基+シ
ねむい	眠い	語基+シ
はやい	早い	語基+シ
ひきい	低い	語基+シ
ひくい	低い	語基+シ
ひだるい		語基+シ
ひやい	冷い	語基+シ
ひらい	平い	語基+シ
ひろい	広い	語基+シ
ふとい	太い	語基+シ
ほそい	細い	語基+シ
またい	全い	語基+シ
まるい	丸・円い	語基+シ
みじかい	短い	語基+シ
むさい		語基+シ
もろい	脆い	語基+シ
やすい	安い	語基+シ
ゆるい	緩い	語基+シ
よい	善い・良い	語基+シ
よわい	弱い	語基+シ
わかい	若い	語基+シ
わるい	悪い	語基+シ
わろい	悪い	語基+シ
あまねい	遍い	語基+ネ+シ
うるさい		語基+サ+シ
おおきい	大きい	形容動詞語幹+シ
けなりい		形容動詞語幹+シ
ひどい		形容動詞語幹+シ

すねい	拗ねい	動詞連用形＋シ
あかい	赤い	動詞未然形＋シ
あかい	明い	動詞未然形＋シ
あさい	浅い	動詞未然形＋シ
あらい	粗い	動詞未然形＋シ
あらい	荒い	動詞未然形＋シ
くろい	黒い	動詞未然形＋シ
ふかい	深い	動詞未然形＋シ
ふるい	古い	動詞未然形＋シ
おさない	幼い	名詞＋ナシ
かいない	甲斐ない	名詞＋ナシ
こころもとない	心許ない	名詞＋ナシ
ごぎない	御座ない	名詞＋ナシ
ことない		名詞＋ナシ
しぶこころない	しづ心ない	名詞＋ナシ
せんかたない	為ん方無い	名詞＋ナシ
せんない		名詞＋ナシ
たよりない	(たよりもない)	名詞＋ナシ
つれない	難面い	名詞＋ナシ
なさけない	情無い	名詞＋ナシ
はかない	果敢ない	名詞＋ナシ
はかりない	量りない	名詞＋ナシ
ふがない	腑甲斐ない	名詞＋ナシ
ほいなく	本意ない	名詞＋ナシ
もったいない	勿体ない	名詞＋ナシ
やるかたない	遣る方ない	名詞＋ナシ
よぎない	余儀ない	名詞＋ナシ
おとなげない	大人げない	名詞＋ゲ＋ナシ
ひとげもない	人げもない	名詞＋ゲ＋ナシ
きよくもない	曲もない	名詞＋モ＋ナシ
けんよもない		名詞＋モ＋ナシ
へんもない		名詞＋モ＋ナシ
みもない	実もない	名詞＋モ＋ナシ
やるせもない	遣る瀬もない	名詞＋モ＋ナシ
あどなく		語基＋ナシ
あぶなく	危なく	語基＋ナシ
ぎこつなく		語基＋ナシ
きたなく	穢い	語基＋ナシ
すくなく	少ない	語基＋ナシ
すげなく		語基＋ナシ
ずなく	(づなく)	語基＋ナシ
つたなく	拙い	語基＋ナシ
なまづげなく	(なまづげなく)	語基＋ナシ
みぢれなく		語基＋ナシ
むげつけなく		語基＋ナシ
あじきなく	(あぢきなく)	語基＋キ＋ナシ
いとけなく	幼なく	語基＋ケ＋ナシ
かたじけなく	辱い・忝い	語基＋ケ＋ナシ
しどけなく		語基＋ケ＋ナシ
おぼつかなく	覚束なく	語基＋ツカ＋ナシ
うしろめたなく	後めたなく	形容詞語幹＋ナシ
せわしなく	忙しなく	形容詞語幹＋ナシ

あらけない	荒けない	形容詞語幹+ケ+ナシ
さりげない		形容動詞語幹+ナシ
さるげない		形容動詞語幹+ナシ
せつない	切ない	形容動詞語幹+ナシ
はしたない		形容動詞語幹+ナシ
あえない	(あへない)	動詞連用形+ナシ
おこのけない		動詞連用形+ナシ
つきない	付き無い	動詞連用形+ナシ
おもいがけもない	思ひ掛けもない	動詞連用形+モ+ナシ
なんでもない	何でもない	副詞+ナシ
けやけい		語基+ケシ
さやけい		語基+ケシ
しかるべい	(しかるべしい)	動詞+助動詞ベシ
たつとい	尊い	たふとしの転
まったい	全い	またしの転
合計275語		

表5 『時代別国語大辞典上代編』『日葡辞書』ク活用形容詞の語構成比較					
上代語ク活用		156	『日葡辞書』ク活用		275
語基+シ	67		語基+シ	86	
動詞未然形+シ	7		動詞未然形+シ	8	
			動詞連用形+シ	1	
			形容動詞語幹	3	
			名詞+シ	2	
			副詞+シ	1	
単純形容詞	74		単純形容詞	101	
名詞+形容詞	19		名詞+形容詞	78	
語基+形容詞	6		語基+形容詞	6	
形容詞語幹+形容詞	2		形容詞語幹+形容詞	7	
動詞連用形+形容詞	5		動詞連用形+形容詞	17	
			副詞+形容詞	1	
複合形容詞	32		複合形容詞	109	
接頭語による派生形容詞	[8]		接頭語による派生形容詞	[7]	
カ+形容詞	2		イラ+形容詞	1	
サ+形容詞	2		ウソ+形容詞	1	
タ+形容詞	4		コ+形容詞	1	
			タ+形容詞	1	
			マ+形容詞	2	
			ヨ+形容詞	1	
接尾語による派生形容詞	[42]		接尾語による派生形容詞	[55]	
ナシ	29		ナシ	53	
語基+ケシ	13		語基+ケシ	2	
派生形容詞	50		派生形容詞	62	
その他	0		その他	3	
★接尾語「ナシ」			★接尾語「ナシ」		
語基+ナシ	18		語基+ナシ	16	
名詞+ナシ	11		名詞+ナシ	25	
			形容詞語幹+ナシ	3	
			形容動詞語幹+ナシ	4	
			動詞連用形+ナシ	4	
			副詞+ナシ	1	

表6 『日葡辞書』シク活用形容詞の語構成

見出し語	漢字表記	語構成
ういういしい	初々しい	名詞の重複+シ
うやうやしい	恭しい	名詞の重複+シ
おさおさしい	長々しい	名詞の重複+シ
かいがいしい	甲斐甲斐しい	名詞の重複+シ
かどかどしい	角々しい	名詞の重複+シ
ことことしい	事々しい	名詞の重複+シ
はかばかしい		名詞の重複+シ
ひとびとしい	人々しい	名詞の重複+シ
ものものしい	物々しい	名詞の重複+シ
ゆめゆめしい	夢々しい	名詞の重複+シ
よそよそしい	余所余所しい	名詞の重複+シ
いらいらしい	苛々しい	語基の重複+シ
こまごましい	細々しい	語基の重複+シ
せわせわしい	忙々しい	語基の重複+シ
そうぞうしい	忿々しい	語基の重複+シ
ちょうちょうしい	(てうてうしい)	語基の重複+シ
てばてばしい		語基の重複+シ
なまなましい	生々しい	語基の重複+シ
にぎにぎしい	賑々しい	語基の重複+シ
ゆゆしい	由々しい	語基の重複+シ
りりしい	凜しい	語基の重複+シ
いたいたしい	痛々しい	形容詞語幹の重複+シ
うとうとしい		形容詞語幹の重複+シ
うまうましい		形容詞語幹の重複+シ
おもおもしろい	重々しい	形容詞語幹の重複+シ
かるがるしい	軽々しい	形容詞語幹の重複+シ
かろがるしい	軽々しい	形容詞語幹の重複+シ
ちかぢかしい	近々しい	形容詞語幹の重複+シ
とおどおしい	遠しい	形容詞語幹の重複+シ
ながながしい	長々しい	形容詞語幹の重複+シ
にがにがしい	苦々しい	形容詞語幹の重複+シ
はやばやしい	早々しい	形容詞語幹の重複+シ
びびしい	美々しい	形容詞語幹の重複+シ
ふかぶかしい	深々しい	形容詞語幹の重複+シ
ぎょうぎょうしい		形容動詞語幹の重複+シ
すぐずぐしい	直々しい	形容動詞語幹の重複+シ
あてあてしい	当て当てしい	動詞連用形の重複+シ
ありありしい	在り在りしい	動詞連用形の重複+シ
なれなれしい	馴々しい	動詞連用形の重複+シ
ばけばけしい	化け化けしい	動詞連用形の重複+シ
いまいまいしい	忌々しい	動詞未然形の重複+シ
うかうかしい		動詞未然形の重複+シ
あなあさましい	あな浅しい	アナ+形容詞
あなかましい	あな黯しい	アナ+形容詞
いくひさしい	幾久しい	イク+形容詞
こざかしい	小賢しい	コ+形容詞
ものがないしい	物悲しい	モノ+形容詞
ものぐるわしい	物狂はしい	モノ+形容詞
ものさびしい	物淋しい	モノ+形容詞

ものさわがしい	物騒がしい	モノ＋形容詞
あさすさまじい	朝冷まじい	名詞＋形容詞
おくだのもしい	奥頼もしい	名詞＋形容詞
きぐるしい	気苦しい	名詞＋形容詞
くちおしい	口惜しい	名詞＋形容詞
こころうれしい	心嬉しい	名詞＋形容詞
こころぐるしい	心苦しい	名詞＋形容詞
こころむつかしい	心むつかしい	名詞＋形容詞
ことそうぞうし	事忿々し	名詞＋形容詞
ことよりしい	事よりしい	名詞＋形容詞
としひさしい	年久しい	名詞＋形容詞
なごりおしい	名残惜しい	名詞＋形容詞
はなめずらしい	花珍らしい	名詞＋形容詞
みみがしましい	耳姦しい	名詞＋形容詞
かしかましい	囁しい	語基＋形容詞
かまびすしい	喧しい	語基＋形容詞
まちびさしい	待久しい	動詞連用形＋形容詞
みぐるしい	見苦しい	動詞連用形＋形容詞
いやめずらしい	弥珍しい	副詞＋形容詞
おとなしい	大人しい	名詞＋シ
まことしい	実しい	名詞＋シ
かどましい	角ましい	名詞＋マ＋シ
あしい	悪しい	語基＋シ
あたらしい	新しい	語基＋シ
あやしい	怪しい	語基＋シ
いしい		語基＋シ
いたわしい	痛はしい	語基＋シ
いみじい		動詞連用形＋ジ
いやしい	卑しい・賤しい	語基＋シ
うれしい	嬉しい	語基＋シ
おしい	惜しい	語基＋シ
おだしい	穏しい	語基＋シ
おなじい	同じい	語基＋ジ
おびただしい	夥しい	語基＋シ
かなしい	悲しい	語基＋シ
きびしい	厳しい	語基＋シ
くやしい	悔しい	語基＋シ
くるしい	苦しい	語基＋シ
くわしい	委しい	語基＋シ
けたましい		語基＋シ
けわしい	嶮しい	語基＋シ
さかしい	賢しい	語基＋シ
さがしい	陰しい	語基＋シ
したしい	親しい	語基＋シ
すずしい	涼しい	語基＋シ
せわしい	忙しい	語基＋シ
たくましい	逞しい	語基＋シ
ただしい	正しい	語基＋シ
たのしい	楽しい	語基＋シ
つましい		語基＋シ
ともしい	乏しい	語基＋シ
なましい	生しい	語基＋シ
はげしい	烈しい	語基＋シ

はつしい		語基+シ
ひさしい	久しい	語基+シ
ひとしい	等しい	語基+シ
ほしい	欲しい	語基+シ
まさしい	正しい	語基+シ
まずしい	貧しい	語基+シ
まほしい		語基+シ
まめしい		語基+シ
むなしい	空しい	語基+シ
いかめしい	厳めしい	語基+メ+シ
いぶかしい	訝しい	語基+カ+シ
むつかしい		語基+カ+シ
かしましい	姦しい	語基+マ+シ
おさなしい	幼しい	形容詞語幹+シ
かたくなしい	頑しい	形容動詞語幹+シ
すぐしい	直しい	形容動詞語幹+シ
うたてしい		副詞+シ
はなはだしい	甚だしい	副詞+シ
あさましい	浅ましい	動詞未然形+シ
あわたたしい	慌しい	動詞未然形+シ
いさましい	勇ましい	動詞未然形+シ
いそがしい	忙しい	動詞未然形+シ
いたましい	痛ましい	動詞未然形+シ
いつくしい	美しい	動詞未然形+シ
いとおしい	(いとほしい)	動詞未然形+シ
うたがわしい	疑はしい	動詞未然形+シ
うつくしい		動詞未然形+シ
うとましい	疎ましい	動詞未然形+シ
うやまわしい	敬わしい	動詞未然形+シ
うらましい		動詞未然形+シ
うらめしい	恨めしい	動詞未然形+シ
うらやましい	羨しい	動詞未然形+シ
うるわしい	麗はしい	動詞未然形+シ
おかしい	をかしい	動詞未然形+シ
おそろしい	恐ろしい	動詞未然形+シ
かだましい	しい	動詞未然形+シ
こいしい	恋しい	動詞未然形+シ
このましい	好ましい	動詞未然形+シ
さびしい	寂しい	動詞未然形+シ
さわがしい	騒がしい	動詞未然形+シ
すさましい	凄・冷・寒ましい	動詞未然形+シ
すさまじい	凄・冷・寒まじい	動詞未然形+ジ
たのもしい	頼もしい	動詞未然形+シ
つつましい	慎ましい	動詞未然形+シ
とぼかしい		動詞未然形+シ
なげかしい	歎かしい	動詞未然形+シ
なつかしい	懐かしい	動詞未然形+シ
ねがわしい	願はしい	動詞未然形+シ
ねたましい	妬ましい	動詞未然形+シ
のぞましい	望ましい	動詞未然形+シ
まぎらわしい	紛らはしい	動詞未然形+シ
むつましい	睦ましい	動詞未然形+シ
めさましい	目覚しい	動詞未然形+シ

めざましい	目覚しい	動詞未然形＋シ
めたたい	目立たしい	動詞未然形＋シ
やさしい	優しい	動詞未然形＋シ
ゆかしい		動詞未然形＋シ
よろこばしい	喜ばしい	動詞未然形＋シ
よろしい	宜しい	動詞未然形＋シ
わずらわしい	煩はしい	動詞未然形＋シ
わびしい	侘しい	動詞未然形＋シ
はずかしい	恥づかしい	動詞未然形＋カ＋シ
めずらしい	珍しい	動詞未然形＋ラ＋シ
いそがわしい	忙はしい	動詞未然形＋ハシ
いたずがわしい	労がはしい	動詞未然形＋ハシ
いまわしい	忌まはしい	動詞未然形＋ハシ
けがらわしい	穢らはしい	動詞未然形＋ハシ
につかわしい	似つかはしい	動詞未然形＋ハシ
せせかましい		語基＋カマシ
あらまほしい		動詞未然形＋助動詞
きかまほしい	聞かまほしい	動詞未然形＋助動詞マホシ
かどがましい	角がましい	名詞＋ガマシ
くちがましい	口がましい	名詞＋ガマシ
ぞくがましい	俗がましい	名詞＋ガマシ
てがましい	手がましい	名詞＋ガマシ
ひとがましい	人がましい	名詞＋ガマシ
ふんべつがましい	分別がましい	名詞＋ガマシ
ものがましい	物がましい	名詞＋ガマシ
ゆめがましい	夢がましい	名詞＋ガマシ
よそがましい	余所がましい	名詞＋ガマシ
おさながましい	幼がましい	形容詞語幹＋ガマシ
おそれがましい	恐・畏れがましい	動詞連用形＋ガマシ
さしでがましい	差し出がましい	動詞連用形＋ガマシ
はれがましい	晴れがましい	動詞連用形＋ガマシ
はじがわしい	恥ぢがはしい	名詞＋ガハシ
みだれがわしい	乱れがはしい	動詞連用形＋ガハシ
いまめかしい	今めかしい	名詞＋メカシ
なまめかしい		語基＋メカシ
あいそうらしい	愛崇らしい	名詞＋ラシ
あいらしい	愛らしい	名詞＋ラシ
あほうらしい	阿房らしい	名詞＋ラシ
おおせらしい	仰せらしい	名詞＋ラシ
おとこらしい	男らしい	名詞＋ラシ
おなごらしい	女らしい	名詞＋ラシ
しおらしい	(しほらしい)	名詞＋ラシ
じちらしい	実らしい	名詞＋ラシ
しゅっけらしい	出家らしい	名詞＋ラシ
しょうねらしい	性根らしい	名詞＋ラシ
じんとうらしい		名詞＋ラシ
ぞくらしい	俗らしい	名詞＋ラシ
ちょうほうらしい	調法らしい	名詞＋ラシ
ひとらしい	人らしい	名詞＋ラシ
まことらしい	実しい	名詞＋ラシ
わらべらしい	童らしい	名詞＋ラシ
せからしい		語基＋ラシ
ぎょうらしい	(げうらしい)	形容動詞語幹＋ラシ

しょうじらしい	正直らしい	形容動詞語幹+ラシ
ばけらしい	化けらしい	動詞連用形+ラシ
いきだわしい	息だはしい	息労(いた)はしの転
いきどうしい	息だうしい	いきだわしいの転
おぼしい	覚しい	おぼほし(思)の転か
こうばしい	香ばしい・芳ばしい	かぐはしの転
さつつべらしい		さありつべらしの転
ぞくたしい	俗たしい	ぞくらしの転か
そそこうしい	(そそかうしい)	そそかはしの転
たどたどしい		たづたづしの転か
とぼしい	乏しい	ともしの転
まどしい	貧しい	まづしの転
わずらうしい	煩うしい	わづらはしの転
ばばしい		はばしの濁音形
合計222語		

上代語シク活用	142	『日葡辞書』シク活用	222
名詞＋シ	4	名詞＋シ	3
語基＋シ	51	語基＋シ	43
動詞未然形＋シ	39	動詞未然形＋シ	45
動詞未然形＋ハシ	2	動詞未然形＋ハシ	5
副詞＋シ	3	副詞＋シ	2
		動詞連用形＋シ	1
		形容詞語幹＋シ	1
		形容動詞語幹＋シ	2
単純形容詞	99	単純形容詞	102
名詞の重複＋シ	6	名詞の重複＋シ	11
語基の重複＋シ	11	語基の重複＋シ	10
形容詞語幹の重複＋シ	2	形容詞語幹の重複＋シ	13
動詞連用形の重複＋シ	1	動詞連用形の重複＋シ	4
		形容動詞語幹の重複＋シ	2
		動詞未然形の重複＋シ	2
畳語形容詞	20	畳語形容詞	42
名詞＋形容詞	11	名詞＋形容詞	13
語基＋形容詞	2	語基＋形容詞	2
動詞連用形＋形容詞	5	動詞連用形＋形容詞	2
		副詞＋形容詞	1
複合形容詞（畳語を除く）	18	複合形容詞（畳語を除く）	18
接頭語による派生形容詞	[2]	接頭語による派生形容詞	[8]
モノ＋形容詞	2	モノ＋形容詞	4
		アナ＋形容詞	2
		イク＋形容詞	1
		コ＋形容詞	1
接尾語による派生形容詞	[2]	接尾語による派生形容詞	[38]
動詞連用形＋カハシ	1	ガハシ	2
名詞＋グマシ	1		
		語基＋カマシ	1
		ガマシ	13
		メカシ	2
		ラシ	20
派生形容詞	4	派生形容詞	46
その他	1	その他	14
		★接尾語「ガマシ」	
		名詞＋ガマシ	9
		形容詞語幹＋ガマシ	1
		動詞連用形＋ガマシ	3
		★接尾語「ラシ」	
		名詞＋ラシ	16
		語基＋ラシ	1
		形容動詞語幹＋ラシ	2
		動詞連用形＋ラシ	1

表8 平安時代新出シク活用形容詞の語構成

見出し語	漢字表記	語構成	『日国』初出例
おとなし	大人し	名詞+シ	974頃
まことし	実し	名詞+シ	10C終
あつし	篤し	語基+シ	850頃
おびたし	夥し	語基+シ	970-999頃
きびし	密し・厳し	語基+シ	10C終
けがし		語基+シ	1128頃
けはし	険し	語基+シ	898-901頃
せはし	忙し	語基+シ	1020
たけし	猛し	語基+シ	970-999頃
ひすかし		語基+シ	1032
いかめしい	厳一	語基+メ+シ	9C末-10C初
かしまし	喧し	語基+マ+シ	10C後
むずかしい	難・六借	語基+カ+シ	970-999頃
あわたし	慌し	動詞未然形+シ	974頃
いさまし	勇まし	動詞未然形+シ	1108頃
いそがし	忙し	動詞未然形+シ	850頃
いとおしい		動詞未然形+シ	9C末-10C初
うとまし	疎し	動詞未然形+シ	10C終
をかし	可笑し	動詞未然形+シ	898-901頃
おそろし	恐し・畏し	動詞未然形+シ	9C末-10C初
おもだし	面立し	動詞未然形+シ	970-999頃
おもはし	思し	動詞未然形+シ	990頃
かがやかしい	輝・耀	動詞未然形+シ	1108頃
くるおしい	狂	動詞未然形+シ	1079
このまし	好し	動詞未然形+シ	1001-14頃
このもし	好し	動詞未然形+シ	10C後
しのばし	偲し	動詞未然形+シ	1170
そそかしい		動詞未然形+シ	1001-14頃
そねまし	嫉し	動詞未然形+シ	1120頃か
つつまし	慎し	動詞未然形+シ	970-999頃
なずましい	泥	動詞未然形+シ	1069-77頃か
におわしい	匂	動詞未然形+シ	1001-14頃
ふさわしい	相応	動詞未然形+シ	10C後
ほこらしい	誇	動詞未然形+シ	905-914
めざまし	目覚まし	動詞未然形+シ	965頃
もどかし		動詞未然形+シ	970-999頃
ゆかし		動詞未然形+シ	9C末-10C初
わづらはし	煩し	動詞未然形+シ	9C末-10C初
いそがはし	忙し	動詞未然形+ハシ	1116
なげかはし	歎し	動詞未然形+ハシ	976-987頃
につかはし	似つかはし	動詞未然形+ハシ	935頃
いみじ		動詞連用形+ジ	9C末-10C初
いとどし		副詞+シ	947-957
いまだし	未し	副詞+シ	850頃
かたくなし	頑し	形容動詞語幹+シ	810頃
おぞまし	悍し	形容詞語幹+マ+シ	1001-14頃
あらまし	荒し	形容詞語幹+マ+シ	1001-14頃
うひうひし	初初し	名詞の重複+シ	10C終
かひがひし	甲斐甲斐し	名詞の重複+シ	1001-14頃

かどかどし	角角し	名詞の重複+シ	1001-14頃
くせぐせし	曲曲し	名詞の重複+シ	974頃
げすげすし	下衆下衆し	名詞の重複+シ	1001-14頃
かうがうし	神神し	名詞の重複+シ	10C終
ことことし	事事し	名詞の重複+シ	905-914
そばそばし	稜稜し	名詞の重複+シ	1001-14頃
はかばかし		名詞の重複+シ	970-999頃
はなばなし	花花し	名詞の重複+シ	12C後か
ひとびとし	人人し	名詞の重複+シ	970-999頃
まがまがし		名詞の重複+シ	10C中
めめしい	女女	名詞の重複+シ	10C後
ものものし	物物し	名詞の重複+シ	970-999頃
ゆゑゆゑし	故故し	名詞の重複+シ	970-999頃
よしよしし	由由し	名詞の重複+シ	970-999頃
よそよそし	余所余所し	名詞の重複+シ	1069-77頃か
しらしらし	白白し	名詞被覆形の重複+シ	965頃
いらいらし	苛苛し	語基の重複+シ	1177-81
おぼおぼしい		語基の重複+シ	1001-14頃
けけし		語基の重複+シ	1001-14頃
とがとがしい		語基の重複+シ	11C中-13C頃
なまなまし	生なまし	語基の重複+シ	947-957頃
のろのろし	呪呪し	語基の重複+シ	1045-68頃
まめめし		語基の重複+シ	970-999頃
やつやつし	窶窶し	語基の重複+シ	1177-81
あだあだし	徒徒し	形容詞語幹の重複+シ	970-999頃
あらあらし	荒荒し	形容詞語幹の重複+シ	970-999頃
あらあらし	粗粗し	形容詞語幹の重複+シ	1001-14頃
あはあはし	淡淡し	形容詞語幹の重複+シ	970-999頃
うとうとし	疎疎し	形容詞語幹の重複+シ	970-999頃
おもおもし	重重し	形容詞語幹の重複+シ	10C後
かるがるし	輕輕し	形容詞語幹の重複+シ	1001-14頃
せばせばし	狹狭し	形容詞語幹の重複+シ	1080-1110頃
はやばやし	早早し	形容詞語幹の重複+シ	9C末-10C初
びびし	美美し	形容詞語幹の重複+シ	974頃
わかわかしい	若若	形容詞語幹の重複+シ	970-999頃
ありありし	在在し	動詞連用形の重複+シ	970-999頃
おめおめし		動詞連用形の重複+シ	1028-92頃
なれなれし	馴馴し	動詞連用形の重複+シ	970-999頃
はえばえし	映映し	動詞連用形の重複+シ	10C終
はればれし	晴晴し	動詞連用形の重複+シ	10C終
ほれほれし	惚惚し	動詞連用形の重複+シ	970-999頃
いまいまし	忌忌し	動詞未然形の重複+シ	1001-14頃
うらさびし	心寂し	名詞+形容詞	905-914
おくゆかし	奥ゆかし	名詞+形容詞	1001-14頃
くちをし	口惜し	名詞+形容詞	9C末-10C初
こころさわがしい	心騒	名詞+形容詞	974頃
こころやましい	心疾	名詞+形容詞	974頃
こころゆかしい	心床	名詞+形容詞	1130頃か
ことよろし	事宜し	名詞+形容詞	1059頃
さまあし	様悪し	名詞+形容詞	10C終
としひさしい	年久	名詞+形容詞	984
なかむつまじい	仲睦・中睦	名詞+形容詞	9C末-10C初
はらあし	腹悪し	名詞+形容詞	1001-14頃

ひとさわがしい	人騒	名詞＋形容詞	970-999頃
みみがまし	耳喧し	名詞＋形容詞	1028-92頃
かしかまし		語基＋形容詞	905-914
ききぐるし	聞苦し	動詞連用形＋形容詞	1001-14頃
くらべぐるし	比苦し	動詞連用形＋形容詞	1001-14頃
みぐるし	見苦し	動詞連用形＋形容詞	947-957頃
こざかし	小賢し	コ＋形容詞	1115頃
そらおそろしい	空恐	ソラ＋形容詞	1001-14頃
なまはずかしい	生恥	ナマ＋形容詞	1069-77頃か
ものおそろしい	物恐	モノ＋形容詞	970-999頃
ものおもわしい	物思	モノ＋形容詞	970-999頃
ものぐるはし	物狂し	モノ＋形容詞	974頃
ものぐるわしい	物狂	モノ＋形容詞	1001-14頃
ものさびし	物淋し	モノ＋形容詞	11C初か
ものさわがし	物騒し	モノ＋形容詞	10C中
ものすさまじい	物凄	モノ＋形容詞	1001-14頃
ものなつかしい	物懐	モノ＋形容詞	1008
ものほしい	物欲	モノ＋形容詞	1120頃か
ものわびしい	物侘	モノ＋形容詞	10C前
をこがまし	痴がまし	名詞＋ガマシ	10C後
かごとがましい	託言一	名詞＋ガマシ	1001-14頃
ことがまし	言がまし	名詞＋ガマシ	947-957頃
はちがまし	恥がまし	名詞＋ガマシ	10C後
ひとがまし	人がまし	名詞＋ガマシ	1028-92頃
しれがまし	痴がまし	動詞連用形＋ガマシ	10C後
はれがまし	晴がまし	動詞連用形＋ガマシ	1045-68頃
へだてがましい	隔一	動詞連用形＋ガマシ	1001-14頃
わざとがまし	態とがまし	副詞＋ガマシ	1001-14頃
いまめかし	今めかし	名詞＋メカシ	970-999頃
いろめかし	色めかし	名詞＋メカシ	1001-14頃
なまめかし	生めかし	語基＋メカシ	970-999頃
ふるめかしい	古一	形容詞語幹＋メカシ	970-999頃
あつくるしい	暑苦・熱苦	形容詞語幹＋クルシ	981
あらくまし	荒くまし	形容詞語幹＋クマシ	10C終
みだれがはし	乱がはし	動詞連用形＋ガハシ	810-824
あらまほし		動詞未然形＋助動詞	974頃
しかるべし	然べし	動詞＋助動詞ベシ	984
いきだはし	息だはし	息労(いた)はしの転	1177-81
おずまし	倅し	おぞましの転	1001-14頃
おぼしい	思・覚	おぼほし(思)の変化した	9C末-10C初
かんばし	香し・芳し	かぐはしの転	909
たどたどし		たづたづしの転か	10C後
とぼし	乏し	ともしの転	1130頃か
にぎはし	賑し	にぎははしの転	1177-81
まどし	貧し	まづしの転	850頃
合計147語			

表9 鎌倉時代新出シク活用形容詞の語構成

見出し語	漢字表記	語構成	『日国』初出例
げすし	下衆し	名詞＋シ	1264-88頃
いし	美し	語基＋シ	1238
はばし	憚し・幅し	語基＋シ	1239頃
いたまし	痛し・傷し	動詞未然形＋シ	1238
いらだたしい	苛立	動詞未然形＋シ	1275
したはし	慕し	動詞未然形＋シ	13C前
すすまし	進し	動詞未然形＋シ	1211頃
なげかし	歎し	動詞未然形＋シ	1272
ねたまし	妬し	動詞未然形＋シ	1254
めたまし	目立し	動詞未然形＋シ	1216頃か
いまはし	忌し	動詞未然形＋ハシ	13C前
うたてし	転し	副詞＋シ	1250頃
おろかしい	愚	形容動詞語幹＋シ	13C前
こまかし	細し	形容詞語幹＋シ	1241
あいあいし	愛愛し	名詞の重複＋シ	14C前
そらぞらしい	空空	名詞の重複＋シ	1244頃
ふくふくし	福福し	名詞の重複＋シ	1264-88頃
りりし		語基の重複＋シ	1275
わわし		語基の重複＋シ	1241
あさあさし	浅浅し	形容詞語幹の重複＋シ	1254
いたいたし	痛痛し	形容詞語幹の重複＋シ	13C初
ただけし	猛猛し	形容詞語幹の重複＋シ	1283
ちかちかし	近近し	形容詞語幹の重複＋シ	1216頃か
にがにがし	苦苦し	形容詞語幹の重複＋シ	13C前
よわよわし	弱弱し	形容詞語幹の重複＋シ	1216頃か
うかうかし		動詞未然形の重複＋シ	1269
げにげにし	実実し	副詞の重複＋シ	1211頃
こころすずし	心涼し	名詞＋形容詞	1310頃
ことあたらし	事新し	名詞＋形容詞	12C後
めはづかし	目恥し	名詞＋形容詞	1220頃か
かまびすし	喧し	語基＋形容詞	1212
いちしるし	著し	副詞＋形容詞	14C前
ものめずらしい	物珍	モノ＋形容詞	12C末
すえたのもしい	末頼	スエ＋形容詞	13C前
くちがまし	口がまし	名詞＋ガマシ	1220
さいかくがまし	才覚がまし	名詞＋ガマシ	1283
ものがまし	物がまし	名詞＋ガマシ	1297-1350頃
ゆめがまし	夢がまし	名詞＋ガマシ	1216頃か
やうがまし	様がまし	名詞＋ガマシ	14C前
よそがましい	余所一	名詞＋ガマシ	14C前
かぎりがまし	限がまし	動詞連用形＋ガマシ	1283
すずろがまし		形容動詞語幹＋ガマシ	1310頃
あいらし	愛らし	名詞＋ラン	1283
いとうしい		いとおいしいの変化した語	1283
けたたましい		けたましいを強めた語	1275
合計45語			

表10 室町時代新出シク活用形容詞の語構成

見出し語	漢字表記	語構成	『日国』初出例
かたはし	片端し	名詞+シ	記載なし
じやうらふし	上臈し	名詞+シ	記載なし
はかし		名詞+シ	1467頃
ひとし	人し	名詞+シ	記載なし
またうどし	真人し	名詞+シ	記載なし
わらうべし		名詞+シ	記載なし
かどまし	角まし	名詞+マ+シ	1603-04
まぶしい	眩	語基+シ	1550頃
まめし		語基+シ	1368-76頃
やかまし		語基+シ	1678
おそいし		語基+シ	1630頃
おそし	恐し	語基+シ	記載なし
おどろし		語基+シ	1690
けたまし		語基+シ	1494頃
さうざし	寂寞し	語基+シ	記載なし
さみし	寂し	語基+シ	1590
すくし	健し	語基+シ	記載なし
つまし		語基+シ	1477
はつしい		語基+シ	1603-04
あやかしい		語基+カ+シ	1539
むつかし		語基+カ+シ	記載なし
すずまし	涼し	語基+マ+シ	記載なし
とぼかし	惚し	動詞未然形+シ	1603-04
にあはし	似合し	動詞未然形+シ	室町末
にぎははし	賑し	動詞未然形+シ	記載なし
のぞまし	望し	動詞未然形+シ	1593
はらだたし	腹立し	動詞未然形+シ	1896
やまし	病し	動詞未然形+シ	1475頃
ゆるかしい	緩	動詞未然形+シ	1565-66頃
あつかはし	扱し	動詞未然形+シ	記載なし
あやぶまし	危し	動詞未然形+シ	記載なし
うやまわしい	敬	動詞未然形+シ	1603-04
うらまし	恨し	動詞未然形+シ	1603-04
うれはし	憂し	動詞未然形+シ	記載なし
かなしましい	悲	動詞未然形+シ	1604-08
きづかはし	氣遣し	動詞未然形+シ	1602
きははし	嫌し	動詞未然形+シ	記載なし
そぞろはし		動詞未然形+シ	記載なし
ありつかはし	有付し	動詞未然形+ハシ	記載なし
いきづがはし	息づがはし	動詞未然形+ハシ	記載なし
いたづがはし	労し	動詞未然形+ハシ	記載なし
いまめかはし	今めかはし	動詞未然形+ハシ	記載なし
うけらうし	受らうし	動詞未然形+ハシ	記載なし
くもらはし	曇し	動詞未然形+ハシ	記載なし
そそかはし		動詞未然形+ハシ	記載なし
もどかはし		動詞未然形+ハシ	記載なし
いよし	弥し	副詞+シ	1563
きつとしい	急度	副詞+シ	室町末-近世初
なにとやらしい	何一	副詞+シ	1563
よたたし	夜多とし	副詞+シ	1603-04

あまりしい	余	動詞連用形＋シ	室町
おもぶせし	面伏し	名詞＋動詞連用形＋シ	記載なし
あやうしい	危	形容詞語幹＋シ	1420
おおい	多	形容詞語幹＋シ	室町末一近世初
をさなし	幼し	形容詞語幹＋シ	記載なし
をそなし	幼し	形容詞語幹＋シ	記載なし
ちかし	近し	形容詞語幹＋シ	1686
ふかし	深し	形容詞語幹＋シ	1423頃
ふるし	古し	形容詞語幹＋シ	1520頃
あはれし	哀し	形容動詞語幹＋シ	記載なし
いかがし	如何し	形容動詞語幹＋シ	記載なし
うつたうし	鬱陶し	形容動詞語幹＋シ	1500頃
すぐしい	直	形容動詞語幹＋シ	1603-04
えせわしい	似非	形容動詞語幹＋ハシ	1560頃
かたくなはし	頑し	形容動詞語幹＋ハシ	記載なし
あわあわしい	沫沫	名詞の重複＋シ	1475頃
いしいし	以次以次し	名詞の重複＋シ	記載なし
いぼいぼしい	疣疣	名詞の重複＋シ	1527
をこをこし	痴痴し	名詞の重複＋シ	記載なし
きはきはし	際際し	名詞の重複＋シ	記載なし
どくどくし	毒毒し	名詞の重複＋シ	1776-1801
ほねほねし	骨骨し	名詞の重複＋シ	1563
みこみこし	神子神子し	名詞の重複＋シ	1563
ゆめゆめし	夢夢し	名詞の重複＋シ	1708頃
らうらうし	良良し	名詞の重複＋シ	記載なし
あさあざし	鮮鮮し	語基の重複＋シ	記載なし
あたあたし		語基の重複＋シ	記載なし
あたたし		語基の重複＋シ	1458-60
いかいかし	厳厳し	語基の重複＋シ	1525-34
うつうつし	鬱鬱し	語基の重複＋シ	記載なし
うらうらし		語基の重複＋シ	記載なし
くやくやし		語基の重複＋シ	1529
くれぐれし	呉呉し	語基の重複＋シ	記載なし
こまごまし	細細し	語基の重複＋シ	1603-04
さかざかし	賢賢し	語基の重複＋シ	記載なし
さびさびし	寂寂し	語基の重複＋シ	記載なし
せきせきし	戚戚し	語基の重複＋シ	記載なし
せつせつし	切切し	語基の重複＋シ	記載なし
せはせはし	忙忙し	語基の重複＋シ	1520頃
そうぞうし	忿忿し	語基の重複＋シ	室町末
てふてふし	喋喋し	語基の重複＋シ	1638
つべつべし		語基の重複＋シ	1362頃
てばてばし		語基の重複＋シ	1430
にぎにぎし	賑賑し	語基の重複＋シ	1510-50
ひさびさしい	久久	語基の重複＋シ	1604-08
ままし	繼し	語基の重複＋シ	室町末
あかあかし	赤赤し	形容詞語幹の重複＋シ	記載なし
うまうましい		形容詞語幹の重複＋シ	1563
くどくどし		形容詞語幹の重複＋シ	1901
こはごはし	強強し	形容詞語幹の重複＋シ	記載なし
ふかぶかし	深深し	形容詞語幹の重複＋シ	1603-04
あてあてし	当當し	動詞連用形の重複＋シ	1603-04
いみいみし		動詞連用形の重複＋シ	室町

ばげばけし	化化し	動詞連用形の重複+シ	1477
ぎやうぎやうし		形容動詞語幹の重複+シ	1445-46
すぐすぐしい	直直	形容動詞語幹の重複+シ	1603-04
ぞうぞうしい	雑雑	形容動詞語幹の重複+シ	1467頃
いまいまはし	忌忌はし	動詞未然形の重複+ハシ	記載なし
いよいよし	弥し	副詞の重複+シ	記載なし
しかしかし	確確し	副詞の重複+シ	記載なし
あさすさまじ	朝冷まじ	名詞+形容詞	1603-04
うらめづらし	心珍し	名詞+形容詞	記載なし
おくだのもし	奥頼し	名詞+形容詞	1625
おもはづかし	面恥し	名詞+形容詞	記載なし
かたはらさびし	傍寂し	名詞+形容詞	記載なし
くちはづかし	口恥し	名詞+形容詞	記載なし
こえめずらしい	声珍	名詞+形容詞	15C頃
こころいそがはし	心忙し	名詞+形容詞	記載なし
こころうれし	心嬉し	名詞+形容詞	1592
こころさびしい	心寂・心淋	名詞+形容詞	1346
こころむつかし	心むつかし	名詞+形容詞	1603-04
ことあし	事悪し	名詞+形容詞	記載なし
こといそがはし	事忙し	名詞+形容詞	記載なし
ことさびし	事寂し	名詞+形容詞	記載なし
ことすさまじ	事凄し	名詞+形容詞	記載なし
ことそうぞうし	事忿忿し	名詞+形容詞	1603-04
ことばさかし	言葉賢し	名詞+形容詞	室町末
ことむつかし	事むつかし	名詞+形容詞	室町末一近世初
ことめづらし	事珍し	名詞+形容詞	記載なし
はなめづらし	花珍し	名詞+形容詞	1603-04
ひとおそろし	人恐し	名詞+形容詞	記載なし
ひとこひし	人恋し	名詞+形容詞	1500頃
ほどひさしい	程久	名詞+形容詞	室町末一近世初
みすぼらし	身窄し	名詞+形容詞	1477
みみかしましい	耳聾	名詞+形容詞	1436
のこりおしい	残惜	動詞連用形+形容詞	室町末一近世初
まちどほし	待遠し	動詞連用形+形容詞	1773
まちびさし	待久し	動詞連用形+形容詞	1603-04
いやけし	弥怪し	副詞+形容詞	記載なし
いやめづらし	弥珍し	副詞+形容詞	記載なし
うれしがなし	嬉悲し	形容詞語幹+形容詞	室町末一近世初
おもしろをかし	面白をかし	形容詞語幹+形容詞	室町末一近世初
いくひさし	幾久し	イク+形容詞	1563
こさびし	小寂し	コ+形容詞	1535頃
こすさまじ	小凄じ	コ+形容詞	1535頃
こすずし	小涼し	コ+形容詞	1919
こたのし	小楽し	コ+形容詞	1458-60
こむずかしい	小難	コ+形容詞	1535頃
こむつかし		コ+形容詞	記載なし
こやさし		コ+形容詞	記載なし
あいしたしい	相親一	アイ+形容詞	16C
あひおなじ	相同じ	アイ+形容詞	記載なし
いらひどし	苛酷し	イラ+形容詞	記載なし
うすかうばし	薄香し	ウス+形容詞	記載なし
うそがなし	うそ悲し	ウソ+形容詞	記載なし

うそすさまじ	うそ凄し	ウソ＋形容詞	記載なし
うそはづかし	うそ恥し	ウソ＋形容詞	1439頃
うつばづかし	打恥し	ウツ＋形容詞	記載なし
おいぼいぼしい		オ＋形容詞	記載なし
おほひさし	大久し	オホ＋形容詞	記載なし
そこすさまじ	底寒じ	ソコ＋形容詞	記載なし
そらはづかし	空恥し	ソラ＋形容詞	記載なし
まあたらしい	真新	マ＋形容詞	1563
はちがはし	恥がはし	名詞＋ガハシ	1435頃
あつかまし	厚かまし	語基＋カマシ	1667か
あらかまし	荒かまし	形容詞語幹＋カマシ	記載なし
せせかまし		語基＋カマシ	室町中
あいぎやうがまし	愛敬がまし	名詞＋ガマシ	室町末
あせがまし	汗がまし	名詞＋ガマシ	室町
いけんがましい	意見一・異見一	名詞＋ガマシ	1604-08
いたかがまし		名詞＋ガマシ	記載なし
うそがまし	嘘がまし	名詞＋ガマシ	記載なし
おとながましい	大人一	名詞＋ガマシ	1604-08
おもひでがまし	思出がまし	名詞＋ガマシ	記載なし
かどがまし	角がまし	名詞＋ガマシ	1477
きつねがまし	狐がまし	名詞＋ガマシ	1356
きやくしんがまし	隔心がまし	名詞＋ガマシ	1722
こしつがまし	故実がまし	名詞＋ガマシ	記載なし
こつがまし	骨がまし	名詞＋ガマシ	記載なし
ことがまし	事がまし	名詞＋ガマシ	南北朝頃
さいくがまし	細工がまし	名詞＋ガマシ	1466-70
ぎうさがまし	造作がまし	名詞＋ガマシ	記載なし
さたがまし	沙汰がまし	名詞＋ガマシ	1368-76頃
ぞくがまし	俗がまし	名詞＋ガマシ	記載なし
てがまし	手がまし	名詞＋ガマシ	1603-04
とざまがまし	外様がまし	名詞＋ガマシ	室町末一近世初
とのがましい	殿一	名詞＋ガマシ	1604-08
なさけがまし	情がまし	名詞＋ガマシ	記載なし
ひじがまし	秘事がまし	名詞＋ガマシ	記載なし
ふんべつがまし	分別がまし	名詞＋ガマシ	1603-04
ほねがまし	骨がまし	名詞＋ガマシ	1563
まことがまし	実がまし	名詞＋ガマシ	1535頃
めだれがまし	目垂がまし	名詞＋ガマシ	記載なし
めらうがまし	女郎がまし	名詞＋ガマシ	記載なし
めんぼくがまし	面目がまし	名詞＋ガマシ	記載なし
ゆだんがましい	油断一	名詞＋ガマシ	1603-04
をさながまし	幼がまし	形容詞語幹＋ガマシ	記載なし
おそれがまし	恐がまし	動詞連用形＋ガマシ	1497
かかりがまし	懸がまし	動詞連用形＋ガマシ	1633
さしいでがまし	差出がまし	動詞連用形＋ガマシ	記載なし
さしでがまし	差出がまし	動詞連用形＋ガマシ	1603-04
ねだりがまし		動詞連用形＋ガマシ	室町末一近世初
あしあらがまし		語基＋ガマシ	記載なし
あはれがまし	哀がまし	形容動詞語幹＋ガマシ	1477
あるめかし	有めかし	動詞＋メカシ	記載なし
さやうめかし	然様めかし	形容動詞語幹＋メカシ	記載なし
さるめかし	然めかし	動詞＋メカシ	記載なし

あいそうらし	愛そうらし	名詞+ラシ	1603-1604
あくらし	悪し	名詞+ラシ	記載なし
あほうらしい	阿呆一	名詞+ラシ	1603-04
あほうらし	阿房らし	名詞+ラシ	記載なし
おほせらしい	仰らしい	名詞+ラシ	1603-04
をどころし	男らし	名詞+ラシ	1603-04
をなごらし	女らし	名詞+ラシ	1603-04
かいしょうらしい	甲斐性一	名詞+ラシ	14C中か
しおらしい		名詞+ラシ	1420
じちらし	実らし	名詞+ラシ	1603-04
じつらし	実らし	名詞+ラシ	1686
しゆつけらし	出家らし	名詞+ラシ	記載なし
しやうねらし	性根らし	名詞+ラシ	1603-04
じんとうらしい	実頭らしい	名詞+ラシ	記載なし
ぞくらし	俗らし	名詞+ラシ	1603-04
てうはふらし	調法らし	名詞+ラシ	記載なし
どくらし	毒らし	名詞+ラシ	1477
なさけらしい	情一	名詞+ラシ	室町末一近世初
はからし		名詞+ラシ	記載なし
ひとらし	人らし	名詞+ラシ	1477
ふんべつらし	分別し	名詞+ラシ	室町末一近世初
まことらし	実らし	名詞+ラシ	1595
めんぼくらし	面目らし	名詞+ラシ	記載なし
わらべらし	童らし	名詞+ラシ	1595
あさからしい	浅	語基+カ+ラシ	1604-08
せからしい		語基+ラシ	1603-04
つべらし		語基+ラシ	1477頃
いたいけらし	幼気らし	形容動詞語幹+ラシ	1626頃
ぎようらし		形容動詞語幹+ラシ	1603-04
ごたいそうらしい	御大層一	形容動詞語幹+ラシ	1527
じんじょうらしい	尋常一	形容動詞語幹+ラシ	1563
すぐらしい	直一	形容動詞語幹+ラシ	1604-08
ばけらしい	化一	動詞連用形+ラシ	1477
おさならしい	幼一	形容詞語幹+ラシ	1604-08
かはゆらし		形容詞語幹+ラシ	1662
むごらしい	惨一・酷一	形容詞語幹+ラシ	室町末
むさらし		形容詞語幹+ラシ	1603-1604
げにもらし	実もらし	副詞+ラシ	1563
さもとらし		副詞+ラシ	1628
じちらかし	実らかし	名詞+ラカシ	記載なし
しやうらかしい	性らかしい	名詞+ラカシ	室町末一近世初
ばけらかしい	化一	動詞連用形+ラカシ	1563
あつかはし	暑かはし	語基+カハシ	記載なし
せせかはし		語基+カハシ	1439頃
へたくらうし	下手くらうし	形容動詞語幹+クラウシ	1477
むさくらうし		形容詞語幹+クラウシ	1563
あつくらはし	暑くらはし	形容詞語幹+クラハシ	記載なし
あつくろしい	暑苦	形容詞語幹+クロシ	1349
むさくろしい		形容詞語幹+クロシ	室町末一近世初
きぐるしい	気苦	名詞+クルシ	1596
しょうろうがしい		名詞+ラウガシ	室町末一近世初
おもきはし	面嫌し	名詞+動詞未然形+シ	記載なし
きかまほし	聞まほし	動詞未然形+助動詞マホシ	記載なし

さるべかし	然べかし	動詞+助動詞ベカリの形容詞化	記載なし
しかりつべし	然つべし	動詞連用形+助動詞ツ+助動詞ベ	記載なし
つづまし	約し	つづまやかの形容詞化	1563
はもじい	は文字	形容動詞はもじを形容詞化した語	1603-04
あいさうらし	愛そうらし	→あいそうらし	記載なし
あいそらし	愛そらし	あいそうらしの転	1563
あせぐらうし	汗ぐらうし	汗苦しの転	記載なし
あつくらうし	暑くらうし	あつくらはしの転	1500頃
あつたらし	可惜し	あたらしの強調形	1484
あらくもし	荒くもし	あらくましの転	室町末-近世初
ありつかうし	有付し	ありつかはしの転	記載なし
いきだうし	息だうし	いきだはしの転	記載なし
いきどうしい	息	いきだわしいの変化した語	室町末
いつたうし	甚し	いつたしの強調形	1527
いつたし	甚し	いたしの強調形	記載なし
いとしい	愛一	いとおいしいの変化した語	室町末-近世初
うつとし	鬱陶し	うったうしの転	1676
うらいまし	羨し	うらやましの転	1527
おおそれがまし	恐がまし	おそれがましの強調形	1497
おとまし	疎し	うとましの転	1660
おとろし		おそろしの転	1696
おろし	恐し	おそろしの転	記載なし
かひがはし	甲斐がはし	かひがひしの転	1626頃
かまびそし	喧し	かまびすしの転	14C後
げうげうし		→ぎょうぎょうし	記載なし
けがらうし	穢し	けがらはしの転	記載なし
げふげふし		→ぎょうぎょうし	記載なし
げふらし		→ぎょうらし	記載なし
ごちくらうし		ごちくらはしの転	記載なし
こめかうし	小目かうし	小目かはしの転	記載なし
さつつべらしい		さありつべらしの転	記載なし
さまうし		さまわしの転	1466頃
さまし		さまうしの転	記載なし
さもし		さまうしの転	1590
しかつべしい		しかつべらしいの変化した語	室町中-近世初
しかつべらしい		しかりつべくあらしの略語か	1661
しとし	等し	ひとしの音言化形	記載なし
ぞくたしい	俗たしい	ぞくらしの転か	1603-04
そそかうしい		そそかはしの転	1535頃
はづかはし	恥かはし	はづかしの強調形	記載なし
ばばし		はばしの濁音形	1603-04
まつおなじ	真同じ	同じの強調形	記載なし
まつぼなじ	真同じ	まつおなじの転	記載なし
わづらうし	煩し	わづらはしの転	1603-04
合計304語			

表11 中古・中世新出シク活用形容詞語構成の時代別比較（平安・鎌倉・室町）

語構成		平安時代	鎌倉時代	室町時代	時期未詳
	492	146	45	179	122
名詞＋シ	10	2	1	2	5
語基＋シ	24	11	2	8	3
動詞未然形＋シ	47	25	7	9	6
動詞未然形＋ハシ	12	3	1	0	8
副詞＋シ	7	2	1	4	0
動詞連用形＋シ	2	1	0	1	0
形容詞語幹＋シ	9	2	0	5	2
形容動詞語幹＋シ	12	1	2	6	3
単純形容詞	123	47	14	35	27
名詞の重複＋シ	29	16	3	6	4
語基の重複＋シ	27	7	2	11	7
形容詞語幹の重複＋シ	20	9	6	3	2
動詞連用形の重複＋シ	9	6	0	3	0
形容動詞語幹の重複＋シ	11	5	0	4	2
動詞未然形の重複＋シ	3	1	1	0	1
副詞の重複＋シ	3	0	1	0	2
疊語形容詞	102	44	13	27	18
名詞＋形容詞	42	13	3	14	12
語基＋形容詞	2	1	1	0	0
動詞連用形＋形容詞	6	3	0	3	0
副詞＋形容詞	3	0	1	0	2
形容詞語幹＋形容詞	2	0	0	2	0
複合形容詞（疊語を除く）	55	17	5	19	15
モノ＋形容詞	10	9	1	0	0
イク＋形容詞	1	0	0	1	0
コ＋形容詞	8	1	0	4	3
アイ＋形容詞	2	0	0	1	1
イラ＋形容詞	1	0	0	0	1
オ＋形容詞	1	0	0	0	1
オホ＋形容詞	1	0	0	0	1
ウツ＋形容詞	1	0	0	0	1
ウス＋形容詞	1	0	0	0	1
ウソ＋形容詞	3	0	0	1	2
スエ＋形容詞	1	0	1	0	0
ソコ＋形容詞	1	0	0	0	1
ソラ＋形容詞	2	1	0	0	1
ナマ＋形容詞	1	1	0	0	0
マ＋形容詞	1	0	0	1	0
接頭語による派生形容詞	[35]	12	2	8	13
ガハシ	2	1	0	1	0
カマシ	3	0	0	2	1
ガマシ	54	9	8	22	15
メカシ	7	4	0	0	3
ラシ	39	0	1	32	6
ラカシ	3	0	0	2	1

カハシ	2	0	0	1	1
クマシ	1	1	0	0	0
クラウシ/クラハシ	3	0	0	2	1
クルシ	2	1	0	1	0
クロシ	2	0	0	2	0
接尾語による派生形容詞	[118]	16	9	65	28
派生形容詞	153	28	11	73	41
その他	59	10	2	25	22
★接尾語「ガマシ」	54				
名詞+ガマシ	40	5	6	17	12
形容詞語幹+ガマシ	1	0	0	0	1
動詞連用形+ガマシ	9	3	1	4	1
語基+ガマシ	1	0	0	0	1
形容動詞語幹+ガマシ	2	0	1	1	0
副詞+ガマシ	1	1	0	0	0
★接尾語「ラシ」	39				
名詞+ラシ	24	0	1	17	6
語基+ラシ	3	0	0	3	0
形容動詞語幹+ラシ	5	0	0	5	0
形容詞語幹+ラシ	4	0	0	4	0
副詞+ラシ	2	0	0	2	0
動詞連用形+ラシ	1	0	0	1	0

表12 江戸時代新出「しい」型形容詞の語構成

見出し語	漢字表記	語構成	『日国』初出例
あじらしい	戯	名詞＋シ	1802-09
ちょうじょうしい	長上	名詞＋シ	1753
てくだしい	手管	名詞＋シ	1799
よくどうしい	欲一	名詞＋シ	1755
よくだしい	欲一	名詞＋シ	1660
わらべしい	童一	名詞＋シ	1711頃
しらしい	白	名詞被覆形＋シ	1785
らんがしい	乱	名詞＋カ＋シ	1772
いじましい		名詞＋マシ	1850
さむしい	寂・淋	語基＋シ	1800
すばらしい	素晴	語基＋シ	1763
せつらしい		語基＋シ	1690
せつろしい		語基＋シ	1693
まぼしい	眩	語基＋シ	1775
あぶかしい	危	語基＋カ＋シ	1818
あぶかわしい	危	語基＋カ＋ハシ	1804
つらめしい		語基＋メ＋シ	17C前
いましい	忌	動詞未然形＋シ	1659
めだたわしい	目立	動詞未然形＋ハシ	1867
あんまりしい		副詞＋シ	1773
どうやらしい		副詞＋シ	1727
あけしい	明	動詞連用形＋シ	1778
いいしい	言一	動詞連用形＋シ	1660
あわしい	淡	形容詞語幹＋シ	1688-1710
あわれっぽしい	哀一	形容詞語幹＋シ	1801
しなっこしい		形容詞語幹＋シ	1734
ながしい	長	形容詞語幹＋シ	1783
まどろしい		形容詞語幹＋シ	1750頃
めんどしい	面倒	形容詞語幹＋シ	1779
おぞましい	鈍	形容詞語幹＋マシ	1807-11
にぎやしい	賑	形容動詞語幹＋シ	1831-34
むやくしい	無益	形容動詞語幹＋シ	1655
めんどろしい	面倒一	形容動詞語幹＋シ	1789-1801頃
ぎりぎりしい	義理義理	名詞の重複＋シ	1744
つやつやしい	艶艶	名詞の重複＋シ	1818
ねばねばしい	粘粘	名詞の重複＋シ	1677
はつはつしい	初初	名詞の重複＋シ	1780
うだうだしい		語基の重複＋シ	1744
きよときよとしい		語基の重複＋シ	1732
けばけばしい		語基の重複＋シ	1686
ずうずうしい	凶凶	語基の重複＋シ	1811-15
ちゃわちゃわしい		語基の重複＋シ	1725
つまづましい		語基の重複＋シ	1774
ふさぶさしい		語基の重複＋シ	1763
ふてぶてしい		語基の重複＋シ	1737
ふとぶとしい	太太	語基の重複＋シ	1724頃
まざまざしい		語基の重複＋シ	1683
もやもやしい		語基の重複＋シ	19C中
うすうすしい	薄薄一	形容詞語幹の重複＋シ	1791
にくにくしい	憎憎	形容詞語幹の重複＋シ	1755
さえさえしい	冴冴・冴冴	動詞連用形の重複＋シ	1809
ひえひえしい	冷冷	動詞連用形の重複＋シ	1775

けげしい	異異	形容動詞語幹の重複+シ	1806
ばかばかしい	馬鹿馬鹿	形容動詞語幹の重複+シ	1772
りこりこしい	利口利口	形容動詞語幹の重複+シ	1823-44
いなかめずらしい	田舎珍	名詞+形容詞	1795
うらはずかしい	心恥	名詞+形容詞	1838
おとこめずらしい	男珍	名詞+形容詞	1698
おりめたらしい	折目正	名詞+形容詞	1672
おんなめずらしい	女珍	名詞+形容詞	1809-13
きぜわしい	気忙	名詞+形容詞	1694
きはずかしい	気恥	名詞+形容詞	1778
きむずかしい	気難	名詞+形容詞	1675
ぎょうぎたらしい	行儀正	名詞+形容詞	1715
くちさかしい	口賢	名詞+形容詞	1776
くちさみしい	口寂	名詞+形容詞	1779
くちやかましい	口喧	名詞+形容詞	1791
げんじらしい	験著	名詞+形容詞	1776-1801
げんじるしい	験著	名詞+形容詞	1814
こころぐるわしい	心狂	名詞+形容詞	1793
こころさみしい	心寂・心淋	名詞+形容詞	1841-42頃
こころやさしい	心優	名詞+形容詞	1631
すじめたらしい	筋目正	名詞+形容詞	1686
そとめずらしい	外珍	名詞+形容詞	1734
ちゃんちゃらおかしい		名詞+形容詞	1853頃
てきびしい	手厳	名詞+形容詞	1785
なごりおしい	名残惜	名詞+形容詞	1780
ねやさびしい	闇寂	名詞+形容詞	1780
はなはずかしい	花恥	名詞+形容詞	1766
ひとだかしい	人高	名詞+形容詞	1866
ひなめずらしい	鄙珍	名詞+形容詞	1821-24
みみあたらしい	耳新	名詞+形容詞	1834-48頃
みみけがらわしい	耳汚・耳穢	名詞+形容詞	1834-48頃
みみやかましい	耳喧	名詞+形容詞	1753
めまぎらしい	目紛	名詞+形容詞	1813-23
めまぐらしい	目紛	名詞+形容詞	1841
めまぐるしい	目紛	名詞+形容詞	1818
ゆいしょたらしい	由緒正	名詞+形容詞	1863
れいぎたらしい	礼儀正	名詞+形容詞	1770
まけおしい	負け	動詞連用形+形容詞	1792
まちわびしい	待侘	動詞連用形+形容詞	1834-48頃
そぞろおそろしい	漫恐	副詞+形容詞	1691
ぎょうたくましい	仰逞	形容動詞語幹+形容詞	1706頃
あぐるしい		ア+形容詞	1792
いけあつかましい	一厚	イケ+形容詞	1773
いけずうずうしい	一凶凶	イケ+形容詞	1799
いけそうぞうしい	一忿忿・一騒騒	イケ+形容詞	1790
いけばかばかしい	一馬鹿馬鹿	イケ+形容詞	1814
いけふさふさしい		イケ+形容詞	1809-13
いけやかましい	一喧	イケ+形容詞	1802
うそさびしい	薄寂	ウソ+形容詞	1665
うそさみしい	薄寂	ウソ+形容詞	1790
おいしい	美味・旨味	オ+形容詞	1775
おとどおしい	御遠遠	オ+形容詞	1782
けいまいましい	一忌忌	ケ+形容詞	1777
けちまいましい		ケチ+形容詞	1754
こいまいましい	小忌忌	コ+形容詞	1731頃か

こいやらしい	小嫌	コ+形容詞	1769
こじおらしい		コ+形容詞	1724
こっばずかしい	小恥	コ+形容詞	1779
こにくてらしい	小憎体	コ+形容詞	1809
こむさらしい		コ+形容詞	1630頃
こむやくしい	小無益	コ+形容詞	1712頃
こやかましい	小喧	コ+形容詞	1682
しちむずかしい	一難	シチ+形容詞	1779
しちやかましい	一喧	シチ+形容詞	1853頃
しゃこざかしい	一小賢	シャ+形容詞	1782
しょむずかしい	一難	ショ+形容詞	1813-23
そらうつくしい	空美	ソラ+形容詞	1821-24
なまいやらしい	生嫌	ナマ+形容詞	1823-44
なまやさしい	生易・生優	ナマ+形容詞	1794
ひちむずかしい	一難	ヒチ+形容詞	1820-49
ぶたのもしい	不頼	ブ+形容詞	1752
ものさみしい	物寂・物淋	モノ+形容詞	1838
ものせわしい	物忙	モノ+形容詞	1655
ものやさしい	物優	モノ+形容詞	1653
いいわけがましい	言訳	名詞+ガマシ	1801
いろがましい	色一	名詞+ガマシ	1791
えんりょがましい	遠慮一	名詞+ガマシ	18C中か
おんがましい	恩	名詞+ガマシ	1710
くぜつがましい	口舌一	名詞+ガマシ	1665頃
げんぎんがましい	現銀一	名詞+ガマシ	1710
たにんがましい	他人一	名詞+ガマシ	1790
ついでがましい	序一	名詞+ガマシ	1717
つらあてがましい	面当一	名詞+ガマシ	1833-35
りくつがましい	理屈一	名詞+ガマシ	1680
りんきがましい	愷気一	名詞+ガマシ	1830
しかつがましい		形容詞語幹+ガマシ	1780
あてつけがましい	当付一	動詞連用形+ガマシ	1804
あなずりがましい	侮一	動詞連用形+ガマシ	1792
いつわりがましい	偽一	動詞連用形+ガマシ	1813-23
うちつけがましい	打付一	動詞連用形+ガマシ	1789
うらみがましい	恨一	動詞連用形+ガマシ	1819-21
おごりがましい	驕一・奢一	動詞連用形+ガマシ	1780
おしつけがましい	押付一	動詞連用形+ガマシ	1718
なたてがましい	名立一	動詞連用形+ガマシ	1706頃
さわがましい	騒一	語基+ガマシ	1776
そうがましい	騒一	語基+ガマシ	1753
いかつがましい	蔽一	形容動詞語幹+ガマシ	1686
じゆうがましい	自由一	形容動詞語幹+ガマシ	1797
すいがましい	粹一	形容動詞語幹+ガマシ	1711
ふぎがましい	不義一	形容動詞語幹+ガマシ	1750頃か
ふしぎがましい	不思議一	形容動詞語幹+ガマシ	1688
ふしんがましい	不審一	形容動詞語幹+ガマシ	1685頃
そうぞうがましい	忿忿一・騒騒一	語基の重複+ガマシ	1794
はるめかしい	春一	名詞+メカシ	1735
あいきょうらしい	愛敬一	名詞+ラシ	1753
あほらしい	阿呆一	名詞+ラシ	1706
いじらしい		名詞+ラシ	1694
いやみらしい	厭味一	名詞+ラシ	1832-33
うそらしい	嘘	名詞+ラシ	1780

うわきらしい	浮気一	名詞+ラシ	1656
おんならしい	女一	名詞+ラシ	1867
かいしょらしい	甲斐性一	名詞+ラシ	1776
けんべいらしい	権柄一	名詞+ラシ	1681
こどもらしい	子供一	名詞+ラシ	1792
ことらしい	事一	名詞+ラシ	1791-22
じまんらしい	自慢一	名詞+ラシ	1666頃
しろえらしい	白絵一	名詞+ラシ	1777
じんたいらしい	人体一・仁体一	名詞+ラシ	1686
じんていらしい	人体一・仁体一	名詞+ラシ	1789
じんぶつらしい	人物一	名詞+ラシ	1628
せいらしい	勢一	名詞+ラシ	1772
ぜいらしい	贅一	名詞+ラシ	1759
せんしょうらしい	僭上一	名詞+ラシ	1745
てんごうらしい		名詞+ラシ	1792
にくていらしい	憎体一	名詞+ラシ	1655
にくてらしい	憎体一	名詞+ラシ	1693
にんげんらしい	人間	名詞+ラシ	1789
はなげらしい	鼻毛一	名詞+ラシ	1748
ひとがららしい	人柄一	名詞+ラシ	1769-71
べらぼうらしい	便乱坊一・篋棒一	名詞+ラシ	1791
もったいらしい	勿体一	名詞+ラシ	1671
ようだいらしい	容体一	名詞+ラシ	1843
ようらくらしい	瓔珞	名詞+ラシ	1798
りくつらしい	理屈一	名詞+ラシ	1777
りょうけんらしい	料簡一・了簡一	名詞+ラシ	1746
いやらしい	嫌一・厭一	形容動詞語幹+ラシ	1682
うさんらしい	胡散一	形容動詞語幹+ラシ	1712
えようらしい	栄耀一	形容動詞語幹+ラシ	1685
きっくらしい		形容動詞語幹+ラシ	1713
きのどくらしい	気毒一	形容動詞語幹+ラシ	1754
けいはくらしい	軽薄	形容動詞語幹+ラシ	1692
しさいらしい	子細一	形容動詞語幹+ラシ	1655
じゃまらしい	邪魔一	形容動詞語幹+ラシ	1715
すいらしい	粹一	形容動詞語幹+ラシ	1682
そこつらしい	粗忽一	形容動詞語幹+ラシ	1841
たいそうらしい	大層一・大造一	形容動詞語幹+ラシ	1773
ばからしい	馬鹿一	形容動詞語幹+ラシ	17C前
ひがらしい	僻一	形容動詞語幹+ラシ	1766
まんらしい	慢一	形容動詞語幹+ラシ	1754
みょうもんらしい	名聞一	形容動詞語幹+ラシ	1765
みれんらしい	未練一	形容動詞語幹+ラシ	1800
めんどうらしい	面倒一	形容動詞語幹+ラシ	1809-13
やぼらしい	野暮一	形容動詞語幹+ラシ	1694
いしこらしい		形容詞語幹+ラシ	1746
いとじぼらしい		形容詞語幹+ラシ	1674
いとらしい	愛	形容詞語幹+ラシ	1667-68
おからしい		形容詞語幹+ラシ	1799
かわいらしい	可愛一	形容詞語幹+ラシ	1682
きたならしい	汚一	形容詞語幹+ラシ	1793
くさらしい	臭一	形容詞語幹+ラシ	1791
こわらしい	怖一	形容詞語幹+ラシ	1774
しなっこらしい		形容詞語幹+ラシ	1700
すぼらしい		形容詞語幹+ラシ	19C中
にくらしい	憎一	形容詞語幹+ラシ	1674

どうやららしい		副詞+ラシ	1727
もっともらしい	尤一	副詞+ラシ	1628
うぬぼれらしい	自惚一	動詞連用形+ラシ	1836
すいたらしい	好一	動詞連用形+助動詞タ+ラシ	1772-81頃か
すかんらしい	好一	動詞(否定)+ラシ	1788
につこらしい	似一	動詞+ラシ	1655
にやつこらしい		動詞+ラシ	1698
じょうらかしい	情一	名詞+ラカシ	1749
あいくるしい	愛一	名詞+クルシ	1826
せぐるしい	一苦	名詞+クルシ	1671
むねぐるしい	胸苦	名詞+クルシ	1717
むなぐるしい	胸苦	名詞被覆形+クルシ	1809
あやくるしい		語基+クルシ	1830頃
おもくるしい	重苦	形容詞語幹+クルシ	1811
かたくるしい	堅苦	形容詞語幹+クルシ	1754
むさくるしい		形容詞語幹+クルシ	1753
ねぐるしい	寝苦	動詞連用形+クルシ	1691
ほてくるしい		動詞連用形+クルシ	1814
ませくるしい		動詞連用形+クルシ	1864
あいくろしい	愛一	名詞+クロシ	1716-36
かじくるしい		名詞+クロシ	1682
ねばくるしい	粘一	名詞+クロシ	1794
くんじくるしい		語基+クロシ	1781
かたくろしい	堅苦	形容詞語幹+クロシ	1711頃
せまくろしい	狭一	形容詞語幹+クロシ	1833-39
へたくろしい	下手一	形容動詞語幹+クロシ	1631-35
すねくるしい	拗一	動詞連用形+クロシ	1656
ほてくろしい		動詞連用形+クロシ	1680
いやみたらしい	厭味一	名詞+タラシ	1838-39
あまたらしい	甘一	形容詞語幹+タラシ	1854
えぐたらしい		形容詞語幹+タラシ	1777
ながたらしい	長一	形容詞語幹+タラシ	1659-61頃
むごたらしい	惨一・酷一	形容詞語幹+タラシ	1711頃
なめたらしい	無礼一	形容動詞語幹+タラシ	1751
すかんだらしい	好一	動詞(否定)+タラシ	1745
せせこましい		語基+コマシ	1714頃
へたくらしい	下手一	形容動詞語幹+クラシ	1626頃
ややこしい		語基+コシ	1863-65頃
あぶつかしい	危	あぶかしいの変化した語	1783-86
あぶなっかしい	危	あぶなかしいの変化した語	1780
あらこましい	荒一	あらくましいの変化した語	1745
いかがわしい	如何	いかがしいの変化した語	1816
いきどしい	息	いきだわしいの変化した語	1678
いびしい		いぶせいの変化した語	1830頃
いめえましい		いまいましいの変化した語	1771
いめましい		いまいましいの変化した語	1820-49
いやみたらしい	厭味一	いやみたらしいの変化した語	1820-49
うざっかしい		うざかしいの変化した語か	1770
うだしい	穩	おだしいの変化した語	1766
うるしい	嬉	うれしいの変化した語	1672
おうかましい		おろかにあさましきの変化した語	1775
おっそろしい	恐	おそろしいの変化した語	1802
おっとりしい	恐	おそろしいの変化した語か	1716-36
おはもじい	御は文字	形容動詞おはもじを形容詞化した	1729頃

おろしい		わるいの変化した語か	1775
かあいらしい	可愛	かわいらしいの変化した語	1754
かたっくるしい	堅苦	かたくるしいの変化した語	1838
かるがるしい	輕輕	かるがるしいの変化した語か	18C中か
くいしい		くやしいの変化した語	1789-1801頃
けいげいしい		けけしの変化した語	1710
けばたたい		「けたたましい」の変化した語か	1751
こまっかしい	細	こまかしいの変化した語	1771
さまじい		すさまじいの変化した語	1642
しょうしい	笑止	名詞「笑止」を形容詞化した語	17C初
すんばらしい	素晴	すばらしいを強めた語	1857-63
そそこしい		そそかしいの変化した語か	1659
そそっかしい		そそかしの变化した語	1773
ながったらしい	長一	ながたらしいの変化した語	1823
びんぼうたらしい	貧乏一	びんぼうたらしいの変化した語	1710頃
ふさしい	久	ひさしいの変化した語	1810-22
むごったらしい	惨一	むごたらしいの変化した語	1768
むずがかしい		むずかしいの変化した語か	1809-13
やっかましい	喧	やかましいの変化した語	1809-13
合計289語			
まどしい		語基+シ	記載なし
せせかしい		語基+カ+シ	記載なし
くろぐるしい	黒黒	形容詞語幹の重複+シ	記載なし
じれじれしい	焦焦	動詞連用形の重複+シ	記載なし
くちざびしい	口寂	名詞+形容詞	記載なし
こぎたならしい	小汚	コ+形容詞	記載なし
きらめかしい	煌一	語基+メカシ	記載なし
げんざらしい		名詞+ラシ	記載なし
につくらしい	似付	動詞+ラシ	記載なし
じまんたらしい	自慢一	名詞+タラシ	記載なし
いきどおしい	息	いきだわしいの変化した語か	記載なし
いやこしい		いやらしいとややこしいの合成語	記載なし
にやわしい	似合	にあわしいの変化した語か	記載なし
むつがかしい		むつかしいの変化した語か	記載なし
出現時期未詳14語			

表13 明治時代新出「しい」型形容詞の語構成

見出し語	漢字表記	語構成	『日国』初出例
あいそしい	愛想	名詞＋シ	1891
うざかしい		語基＋カ＋シ	1882
まどかしい		語基＋カ＋シ	1901
きづましい	気詰	動詞未然形＋シ	1902
そぐわしい		動詞未然形＋シ	1910
なかしい	泣	動詞未然形＋シ	1901～02
あぶなかしい	危	形容詞語幹＋シ	1886
まどろかしい		形容詞語幹＋カ＋シ	1900～01
うぶうぶしい	生生	名詞の重複＋シ	1910
とげとげしい	刺刺	名詞の重複＋シ	1892
ふさふさしい	総総・房房	名詞の重複＋シ	1899～1902
みずみずしい	瑞瑞・水水	名詞の重複＋シ	1886
けんけんしい		語基の重複＋シ	1910
したじたしい	親親	語基の重複＋シ	1899～1902
ずずしい	凶凶	語基の重複＋シ	1872
ずぶずぶしい	凶分凶分	語基の重複＋シ	1894
せかせかしい		語基の重複＋シ	1890
そわそわしい		語基の重複＋シ	1910
にやにやしい		語基の重複＋シ	1888～89
あおあおしい	青青	形容詞語幹の重複＋シ	1899～1902
やすやすしい	安安	形容詞語幹の重複＋シ	1873～74
たいだしい	大大	形容動詞語幹の重複＋シ	1892
よぼよぼしい		形容動詞語幹の重複＋シ	1893
れいれいしい	麗麗	形容動詞語幹の重複＋シ	1909
いきいきしい	生生	動詞連用形の重複＋シ	1904
いきぜわしい	息忙	名詞＋形容詞	1886
うらさみしい	心寂	名詞＋形容詞	1907
おりみただしい	折身正	名詞＋形容詞	1892
きそくただしい	規則正	名詞＋形容詞	1878～79
きりつただしい	規律正	名詞＋形容詞	1894
くちあたらしい	口新	名詞＋形容詞	1874～75
くちかしがましい	口喧	名詞＋形容詞	1892～1901
くちさむしい	口寂	名詞＋形容詞	1910
こころざむしい	心寂・心淋	名詞＋形容詞	1870～71
こころせわしい	心忙	名詞＋形容詞	1903
こころだのもしい	心頼	名詞＋形容詞	1891
こどもめずらしい	子供珍	名詞＋形容詞	1899
じゅんじょただしい	順序正	名詞＋形容詞	1896
そとなつかしい	外懐	名詞＋形容詞	1911
はださびしい	肌寂	名詞＋形容詞	1891
ひとなつかしい	人懐	名詞＋形容詞	1898
ひとまちどおしい	人等遠	名詞＋形容詞	1911
ひとめずらしい	人珍	名詞＋形容詞	1884
ふところさみしい	懐寂	名詞＋形容詞	1887～89
みみうっとうしい	耳鬱陶	名詞＋形容詞	1875
みみめずらしい	耳珍	名詞＋形容詞	1875
みめうるわしい	眉目麗・見目麗	名詞＋形容詞	1904
むかしなつかしい	昔懐	名詞＋形容詞	1886
むかしゆかしい	昔床	名詞＋形容詞	1885～86
めあたらしい	目新	名詞＋形容詞	1895

わるざかしい	悪賢	形容詞語幹＋形容詞	1895
あいひとしい	相等	アイ＋形容詞	1883-84
うすさびしい	薄寂一	ウス＋形容詞	1889
うすらさびしい	薄寂	ウスラ＋形容詞	1896
くそいまましい	糞忌忌	クソ＋形容詞	1908
くそやかましい	糞喧	クソ＋形容詞	1899
こぜわしい	小忙	コ＋形容詞	1884
こにくらしい	小憎	コ＋形容詞	1902
こはずかしい	小恥	コ＋形容詞	1906~08
すえおそろしい	素恐	スエ＋形容詞	1911
すなつかしい	素懐	ス＋形容詞	1907~09
なまあたらしい	生新	ナマ＋形容詞	1895
ものあたらしい	物新	モノ＋形容詞	1909
ものずずしい	物涼	モノ＋形容詞	1896
あっせいがましい	压制一	名詞＋ガマシ	1907
おやがましい	親一	名詞＋ガマシ	1899
おんぎがましい	恩義一・恩誼一	名詞＋ガマシ	1899
くじょうがましい	苦情一	名詞＋ガマシ	1897
げいがましい	芸一	名詞＋ガマシ	1870-76
さいそくがましい	催促	名詞＋ガマシ	1896
さしづがましい	指凶一	名詞＋ガマシ	1887-89
せんさくがましい	穿鑿一・詮索一	名詞＋ガマシ	1909
なんだいがましい	難題一	名詞＋ガマシ	1875-81
ようきゅうがましい	要求一	名詞＋ガマシ	1909
みだりがましい	濫一・猥一	動詞連用形＋ガマシ	1887-89
ゆずりがましい	揺一・強請一	動詞連用形＋ガマシ	1893-94
かってがましい	勝手	形容動詞語幹＋ガマシ	1889
きずいがましい	気随一	形容動詞語幹＋ガマシ	1889
ぶしつけがましい	不躰一	形容動詞語幹＋ガマシ	1895
ふそくがましい	不足一	形容動詞語幹＋ガマシ	1870-76
ふふくがましい	不服一	形容動詞語幹＋ガマシ	1907
ふへいがましい	不平一	形容動詞語幹＋ガマシ	1909
みれんがましい	未練一	形容動詞語幹＋ガマシ	1897
しんせつめかしい	親切一	形容動詞語幹＋メカシ	1899
あだめかしい	婀娜一	形容動詞語幹＋メカシ	1891
いんきらしい	陰気一	名詞＋ラシ	1895-96
しょうじらしい	笑止一	名詞＋ラシ	1906
いそがじらしい	忙一	形容詞語幹＋ラシ	1900
こわらしい	強一	形容詞語幹＋ラシ	1891
たのしらしい	楽一	形容詞語幹＋ラシ	1895
まずっぽらしい	不味一	形容詞語幹＋ラシ	1908
やさしらしい	優一	形容詞語幹＋ラシ	1896
いかがらしい	如何一	形容動詞語幹＋ラシ	1886
いかつめらしい	嚴一	形容動詞語幹＋ラシ	1872
おおぎょうらしい	大仰一	形容動詞語幹＋ラシ	1908
ぎょうさんらしい	仰山一	形容動詞語幹＋ラシ	1896
けっこうらしい	結構	形容動詞語幹＋ラシ	1896
しぜんらしい	自然一	形容動詞語幹＋ラシ	1908
そんだいらしい	尊大	形容動詞語幹＋ラシ	1908
まじめらしい	真面目一	形容動詞語幹＋ラシ	1893
いまさららしい	今更一	副詞＋ラシ	1896
すこしらしい	少一	副詞＋ラシ	1884-92
わざとらしい	態一	副詞＋ラシ	1895

いきぐるしい	息苦	名詞＋クルシ	1892
ごらんぐるしい	御覽苦	名詞＋クルシ	1896
みみぐるしい	耳苦	名詞＋クルシ	1891
あつくるしい	厚苦	形容詞語幹＋クルシ	1907～09
せばくるしい	狭苦	形容詞語幹＋クルシ	1908
せまくるしい	狭苦	形容詞語幹＋クルシ	1904
おもくるしい	重苦	形容詞語幹＋クロシ	1887-89
にくたらしい	憎一	形容詞語幹＋タラシ	1886
すけべえたらしい	助兵衛一	形容動詞語幹＋タラシ	1876-82
うらみたらしい	恨一	動詞連用形＋タラシ	1895
まだるこしい	間怠一	形容詞語幹＋コシ	1891
あいっくるしい	愛一	あいくるしいの変化した語	1899
あいらっしい	愛一	あいらしいの変化した語	1902
あつかわしい	厚一	あつかましいの変化した語	1889
あつっくるしい	暑苦・熱苦	あつくるしいの変化した語	1891
おとどしい		おとどおしいの変化した語か	1899
おもっくるしい	重苦	おもくるしいの変化した語	1894
かやましい		やかましいの変化した語	1892
しかつめらしい	鹿爪	しかつべらしいの変化した語	1885-86
すばらしい	素晴	すばらしいの変化した語	1886
せせっこましい		せせこましいの変化した語	1911
にくったらしい	憎一	にくたらしいの変化した語	1910
みそぼらしい		みすぼらしいの変化した語	1888
めぼしい		名詞「目星」を形容詞化した語か	1885-86
めまぐるしい	目紛	めまぎらしいの変化した語か	1871-72
合計128語			

表14 大正時代以降新出「しい」型形容詞の語構成 (大正・昭和)

見出し語	漢字表記	語構成	『日国』初出例
まがしい	凶	名詞＋シ	1963
こわっぱしい	硬一	語基＋シ	1915-30
くるわしい	狂	動詞未然形＋シ	1935
さげすましい	蔑	動詞未然形＋シ	1915
したしましい	親	動詞未然形＋シ	1922
のろわしい	呪	動詞未然形＋シ	1918
はじらわしい	恥	動詞未然形＋シ	1922
ほほえましい	微笑・頬笑	動詞未然形＋シ	1926
いたしい		形容詞語幹＋シ	1929
にぎやかしい	賑	形容動詞語幹＋シ	1926
いたずらいたずらしい		名詞の重複＋シ	1919
ぎぎしい	儀儀	名詞の重複＋シ	1925
こどもこどもしい	子供子供	名詞の重複＋シ	1928
せじせじしい	世辞世辞	名詞の重複＋シ	1919
ぬめぬめしい	滑滑	名詞の重複＋シ	1929
おどおどしい		語基の重複＋シ	1919
だらだらしい		語基の重複＋シ	1952
あまあましい	甘甘	形容詞語幹の重複＋シ	1919
さむざむしい	寒寒	形容詞語幹の重複＋シ	1916
ほそぼそしい	細細	形容詞語幹の重複＋シ	1913
まるまるしい	丸丸	形容詞語幹の重複＋シ	1930
おぼろおぼろしい	朧朧	形容動詞語幹の重複＋シ	1914
はではでしい	派手派手	形容動詞語幹の重複＋シ	1924-25
ふだんふだんしい	不断不断	形容動詞語幹の重複＋シ	1926
ぬけぬけしい	抜抜	動詞連用形の重複＋シ	1928
いみあたらしい	意味新	名詞＋形容詞	1948
おとここいしい	男恋	名詞＋形容詞	1949
おとこはずかしい	男恥	名詞＋形容詞	1919
かくちょうただしい	格調正	名詞＋形容詞	1970
ぎしきただしい	儀式正	名詞＋形容詞	1914
きやさしい	気優	名詞＋形容詞	1913
こころたのしい	心楽	名詞＋形容詞	1939
こころにぎわしい	心賑	名詞＋形容詞	1969
さほうただしい	作法正	名詞＋形容詞	1930
したもどかしい	舌一	名詞＋形容詞	1933-37
じょれつただしい	序列正	名詞＋形容詞	1946-56
ちつじょただしい	秩序正	名詞＋形容詞	1917
うすらかなしい	薄悲	ウスラ＋形容詞	1930
こあたらしい	小新	コ＋形容詞	1912-13
こうれしい	小嬉	コ＋形容詞	1913
こなつかしい	小懐	コ＋形容詞	1913
そこおそろしい	底恐	ソコ＋形容詞	1933-37
そこがなしい	底悲	ソコ＋形容詞	1930
そこさびしい	底寂	ソコ＋形容詞	1930
どいやらしい	一嫌・一厭	ド＋形容詞	1925
へらおかしい		ヘラ＋形容詞	1920
ものおしい	物借	モノ＋形容詞	1955
ものなやましい	物惱	モノ＋形容詞	1928
きょうはくがましい	脅迫一	名詞＋ガマシ	1934
そうだんがましい	相談	名詞＋ガマシ	1912-13
ひながましい	非難一	名詞＋ガマシ	1916

ひはながましい	批判一	名詞+ガマシ	1913
ひひょうがましい	批評一	名詞+ガマシ	1913
べんかいがましい	弁解一	名詞+ガマシ	1930
みだらがましい	淫一	形容動詞語幹+ガマシ	1939
おんきせがましい	恩着一	動詞連用形+ガマシ	1948
ほこりがましい	誇一	動詞連用形+ガマシ	1960
ざわめかしい		語基+メカシ	1928
ふゆめかしい	冬一	名詞+メカシ	1914
けんつくらしい	剣突	名詞+ラシ	1921-37
ことさららしい	殊更一	副詞+ラシ	1924-25
むしぐるしい	蒸苦	動詞連用形+クルシ	1930
あまったらしい	甘一	形容詞語幹+タラシ	1969
はがゆたらしい	齒痒一	形容詞語幹+タラシ	1972
いやたらしい	嫌一	形容動詞語幹+タラシ	1981
きざたらしい	気障一	形容動詞語幹+タラシ	1928-31
きのどくたらしい	気毒一	形容動詞語幹+タラシ	1917-27
ぎょうさんたらしい	仰山一	形容動詞語幹+タラシ	1917
すけべえたらしい	助兵衛一	形容動詞語幹+タラシ	1925-26
びんぼうたらしい	貧乏一	形容動詞語幹+タラシ	1919-27
ふけつたらしい	不潔一	形容動詞語幹+タラシ	1972
ふじゅうたらしい	不自由	形容動詞語幹+タラシ	1928
ぶしょうたらしい	不精一・無精一	形容動詞語幹+タラシ	1926
ふそくたらしい	不足一	形容動詞語幹+タラシ	1915-30
みじめたらしい	惨一	形容動詞語幹+タラシ	1947
みれんたらしい	未練一	形容動詞語幹+タラシ	1919-27
やぼたらしい	野暮一	形容動詞語幹+タラシ	1934
まどろこしい		形容詞語幹+コシ	1917
いめいめしい		いまいましいの変化した語	1934
おどろしい	恐	おどろしいの変化した語	1939
せまくなるしい	狭苦	せまくなるしいの変化した語	1913
につかしい	似付	につかわしいの変化した語か	1928
ひもじい		形容動詞ひもじの形容詞化した語	1947
ぶしょうたらしい	不精一・無精一	ぶしょうたらしいの変化した語	1917
まだるっこしい	間怠一	まだるこしいの変化した語	1965-67
まだろっこしい		まだるこしいの変化した語か	1975
まちどしい	待遠一	まちどおしいの変化した語	1937
まどろっこしい		まどろこしいの変化した語	1922
みじめたらしい	惨一	みじめたらしいの変化した語	1935-36
ややっこしい		ややこしいの変化した語	1933-34
合計90語			

表15 近代語新出「しい」型形容詞語構成の時代別比較

語構成		江戸時代	明治時代	大正以降	時期未詳
	521	289	128	90	14
名詞＋シ	11	9	1	1	0
語基＋シ	13	8	2	1	2
動詞未然形＋シ	10	1	3	6	0
動詞未然形＋ハシ	1	1	0	0	0
副詞＋シ	2	2	0	0	0
動詞連用形＋シ	2	2	0	0	0
形容詞語幹＋シ	10	7	2	1	0
形容動詞語幹＋シ	4	3	0	1	0
単純形容詞	53	33	8	10	2
名詞の重複＋シ	13	4	4	5	0
語基の重複＋シ	20	11	7	2	0
形容詞語幹の重複＋シ	9	2	2	4	1
動詞連用形の重複＋シ	5	2	1	1	1
形容動詞語幹の重複＋シ	9	3	3	3	0
動詞未然形の重複＋シ	0	0	0	0	0
副詞の重複＋シ	0	0	0	0	0
畳語形容詞	56	22	17	15	2
名詞＋形容詞	72	34	25	12	1
語基＋形容詞	0	0	0	0	0
動詞連用形＋形容詞	2	2	0	0	0
副詞＋形容詞	1	1	0	0	0
形容詞語幹＋形容詞	1	0	1	0	0
形容動詞語幹＋形容詞	1	1	0	0	0
複合形容詞（畳語を除く）	77	38	26	12	1
モノ＋形容詞	7	3	2	2	0
イク＋形容詞	0	0	0	0	0
コ＋形容詞	15	8	3	3	1
アイ＋形容詞	1	0	1	0	0
イラ＋形容詞	0	0	0	0	0
オ＋形容詞	2	2	0	0	0
オホ＋形容詞	0	0	0	0	0
ウツ＋形容詞	0	0	0	0	0
ウス＋形容詞	1	0	1	0	0
ウソ＋形容詞	2	2	0	0	0
スエ＋形容詞	1	0	1	0	0
ソコ＋形容詞	3	0	0	3	0
ソラ＋形容詞	1	1	0	0	0
ナマ＋形容詞	3	2	1	0	0
マ＋形容詞	0	0	0	0	0
ア＋形容詞	1	1	0	0	0
ウスラ＋形容詞	2	0	1	1	0
イケ＋形容詞	6	6	0	0	0
ケ＋形容詞	1	1	0	0	0
ケチ＋形容詞	1	1	0	0	0
シチ＋形容詞	2	2	0	0	0
シャ＋形容詞	1	1	0	0	0

ショ+形容詞	1	1	0	0	0
ヒチ+形容詞	1	1	0	0	0
ブ+形容詞	1	1	0	0	0
クソ+形容詞	2	0	2	0	0
ス+形容詞	1	0	1	0	0
ド+形容詞	1	0	0	1	0
ヘラ+形容詞	1	0	0	1	0
接頭語による派生形容詞 [58]		33	13	11	1
ガハシ	0	0	0	0	0
カマシ	0	0	0	0	0
ガマシ	57	29	19	9	0
メカシ	6	1	2	2	1
ラシ	89	67	18	2	2
ラカシ	1	1	0	0	0
カハシ	0	0	0	0	0
クマシ	0	0	0	0	0
クラウシ/クラハシ	0	0	0	0	0
クルシ	18	11	6	1	0
クロシ	10	9	1	0	0
コマシ	1	1	0	0	0
クラシ	1	1	0	0	0
コシ	3	1	1	1	0
タラシ	26	7	3	15	1
接尾語による派生形容詞 [212]		128	50	30	4
派生形容詞	270	161	63	41	5
その他	65	35	14	12	4
★接尾語「ガマシ」	57	29	19	9	0
名詞+ガマシ	27	11	10	6	0
形容詞語幹+ガマシ	1	1	0	0	0
動詞連用形+ガマシ	12	8	2	2	0
語基+ガマシ	2	2	0	0	0
形容動詞語幹+ガマシ	14	6	7	1	0
副詞+ガマシ	0	0	0	0	0
語基の重複+ガマシ	1	1	0	0	0
★接尾語「ラシ」	89	67	18	2	2
名詞+ラシ	35	31	2	1	1
語基+ラシ	0	0	0	0	0
形容動詞語幹+ラシ	26	18	8	0	0
形容詞語幹+ラシ	16	11	5	0	0
副詞+ラシ	6	2	3	1	0
動詞連用形+ラシ	2	1	0	0	1
動詞その他の形+ラシ	4	4	0	0	0
★接尾語「クロシ」	10	9	1	0	0
名詞+クロシ	3	3	0	0	0
形容詞語幹+クロシ	3	2	1	0	0
動詞連用形+クロシ	2	2	0	0	0

語基+クロシ	1	1	0	0	0
形容動詞語幹+クロシ	1	1	0	0	0
★接尾語「クルシ」	18	11	6	1	0
名詞+クルシ	7	4	3	0	0
形容詞語幹+クルシ	6	3	3	0	0
動詞連用形+クルシ	4	3	0	1	0
語基+クルシ	1	1	0	0	0
★接尾語「タラシ」	26	7	3	15	1
名詞+タラシ	2	1	0	0	1
形容動詞語幹+タラシ	15	1	1	13	0
形容詞語幹+タラシ	7	4	1	2	0
動詞連用形+タラシ	1	0	1	0	0
動詞その他の形+タラシ	1	1	0	0	0

表16 シク活用形容詞の出現時期の時代別表

上代語		中古・中世語			近代語			『日国』初出例	項目	出現時期
見出し語	漢字表記	語構成	見出し語	漢字表記	語構成	見出し語	漢字表記	語構成		
			あいあいし	愛愛し	名詞の重複+シ				1-4C前	② 鎌倉
			あいみやうがまし	愛敬がまし	名詞+ガマシ				室町末	室町
						あいきょうらしい	愛敬一	名詞+ラシ	1753	江戸
						あいくるしい	愛一	名詞+クルシ	1826	江戸
						あいころしい	愛一	名詞+クロシ	1716-36	江戸
			あいしたしい	相親一	アイ+形容詞				16C	室町
			あいさうらし	愛そうらし	→あいそうらし					未詳
			あいそうらし	愛そうらし	名詞+ラシ				1603-1604	室町
						あいそしい	愛想	名詞+シ	1891	明治
			あいそらし	愛そらし	あいそうらしの転				1563	室町
						あいっくるしい	愛一	あいくるしいの変化した語	1899	明治
						あいひとしい	相等	アイ+形容詞	1883-84	明治
			あいらし	愛らし	名詞+ラシ				1283	鎌倉
						あいらっしい	愛一	あいらしいの変化した語	1902	明治
						あおあおしい	青青	形容詞語幹の重複+シ	1899-1902	② 明治
あからし	懇	語基+シ	あかあかし	赤赤し	形容詞語幹の重複+シ				810-824	未詳
			あくらし	悪し	名詞+ラシ					上代
						あぐるしい		ア+形容詞	1792	未詳
						あけしい	明	動詞連用形+シ	1778	江戸
			あさあさし	浅浅し	形容詞語幹の重複+シ				1254	鎌倉
			あさあざし	鮮鮮し	語基の重複+シ					未詳
			あさからしい	浅	語基+カ+ラシ				1604-08	室町
			あさすさまじ	朝冷まじ	名詞+形容詞				1603-04	室町
あさまし		動詞未然形+シ							9C末-10C初	⑧ 上代
あし	悪	語基+シ							1458-60	上代
			あしあらがまし		語基+ガマシ					未詳
			あせがまし	汗がまし	名詞+ガマシ	あじゃらしい	戯	名詞+シ	1802-09	江戸
			あせぐらうし	汗ぐらうし	汗苦しの転				室町	室町
			あたあたし		語基の重複+シ					未詳
			あだあだし	徒徒し	形容詞語幹の重複+シ				970-999頃	平安
			あたし		語基の重複+シ				1458-60	室町
あたらし	惜	語基+シ				あだめかしい	婀娜一	形容詞語幹+メカシ	1891	明治
あらし	新	語基+シ							905-914	⑤ 上代
			あつかはし	扱し	動詞未然形+シ					未詳
			あつかはし	暑かはし	語基+カハシ					未詳
			あつかまし	厚かまし	語基+カマシ				1667か	室町
						あつかわしい	厚一	あつかましいの変化した語	1889	明治
						あつくるしい	厚苦	形容詞語幹+クルシ	1907-09	明治
			あつくるしい	暑苦・熱苦	形容詞語幹+クルシ				981	平安
			あつくらうし	暑くらうし	あつくらはしの転				1500頃	室町
			あつくるしい	暑苦	形容詞語幹+クロシ				1349	② 室町
			あつくらはし	暑くらはし	形容詞語幹+クラハシ					未詳
			あつし	篤し	語基+シ				850頃	平安
						あっせいがましい	压制一	名詞+ガマシ	1907	明治
			あつたらし	可惜し	あたらしの強調形				1484	室町
						あつっくるしい	暑苦・熱苦	あつくるしいの変化した語	1891	明治
			あてあてし	当當し	動詞連用形の重複+シ				1603-04	室町

						あてつけがましい	当付一	動詞連用形+ガマシ	1804		江戸
						あなずりがましい	侮一	動詞連用形+ガマシ	1792		江戸
			あひおなじ	相同じ	アイ+形容詞						未詳
						あぶかしい	危	語基+カ+シ	1818		江戸
						あぶかわしい	危	語基+カ+ハシ	1804		江戸
						あぶつかしい	危	あぶつかしいの変化した語	1783-86		江戸
						あぶなかしい	危	形容詞語幹+シ	1886		明治
						あぶなつかしい	危	あぶなつかしいの変化した語	1780		江戸
			あほうらし	阿房らし	名詞+ラシ				1603-04		室町
						あほらしい	阿呆一	名詞+ラシ	1706		江戸
						あまあましい	甘甘	形容詞語幹の重複+シ	1919		大正以降
						あまたらしい	甘一	形容詞語幹+タラシ	1854		江戸
						あまったらしい	甘一	形容詞語幹+タラシ	1969		大正以降
			あまりしい	余	動詞連用形+シ						室町
			あやうしい	危	形容詞語幹+シ				1420		室町
			あやかしい		形容動詞語幹+シ				1539	②	室町
						あやくるしい		語基+クルシ	1830頃		江戸
あやし	怪	語基+シ							720	⑧	上代
			あやぶまし	危し	動詞未然形+シ						未詳
			あらあらし	荒荒し	形容詞語幹の重複+シ				970-999頃	②	平安
			あらあらし	粗粗し	形容詞語幹の重複+シ				1001-14頃		平安
			あらかまし	荒かまし	形容詞語幹+カマシ						未詳
			あらくまし	荒くまし	形容詞語幹+クマシ				10C終		平安
			あらくもし	荒くもし	あらくましの転				室町末-近世初		室町
						あらこましい	荒一	あらこましいの変化した語	1745		江戸
			あらまし	荒し	形容詞語幹+マ+シ				1001-14頃		平安
			あらまほし		動詞未然形+助動詞				974頃		平安
			ありありし	存在し	動詞連用形の重複+シ				970-999頃		平安
			ありつかうし	有付し	ありつかはしの転						未詳
			ありつかはし	有付し	動詞未然形+ハシ						未詳
			あるめかし	有めかし	動詞+メカシ						未詳
			あわあわしい	沫沫	名詞の重複+シ				1475頃		室町
			あはあはし	淡淡し	形容詞語幹の重複+シ				970-999頃	②	平安
						あわしい	淡	形容詞語幹+シ	1688-1710		江戸
			あわたたし	懽し	動詞未然形+シ				974頃	②	平安
			あはれがまし	哀がまし	形容動詞語幹+ガマシ				1477		室町
			あはれし	哀し	形容動詞語幹+シ						未詳
						あわれっぽしい	哀一	形容詞語幹+シ	1801		江戸
						あんまりしい	副詞+シ		1773		江戸
						いいしい	言一	動詞連用形+シ	1660		江戸
						いいわけがましい	言訳	名詞+ガマシ	1801		江戸
			いかいかし	嚴嚴し	語基の重複+シ				1525-34		室町
						いかがらしい	如何一	形容動詞語幹+ラシ	1886		明治
			いかがし	如何し	形容動詞語幹+シ				室町末		室町
						いかがわしい	如何	いかがしいの変化した語	1816	②	江戸
いかし	嚴	語基+シ									上代
						いかつがましい	嚴一	形容動詞語幹+ガマシ	1686		江戸
						いかつめらしい	嚴一	形容動詞語幹+ラシ	1872		明治
			いかめしい	嚴一	語基+メ+シ				9C末-10C初	③	平安
						いきいきしい	生生	動詞連用形の重複+シ	1904		明治
						いきぐるしい	息苦	名詞+クルシ	1892	②	明治
						いきぜわしい	息忙	名詞+形容詞	1886		明治
			いきだうし	息だうし	いきだはしの転						未詳
			いきだはし	息だはし	息旁(いた)はしの転				1177-81	②	平安

いきづかし	気衝	動詞未然形＋シ								8C後		上代
			いきづがはし	息づがはし	動詞未然形＋ハシ							未詳
			いきどろしい	息	いきだわしいの変化した語					室町末	②	室町
					いきどおしい	息	いきだわしいの変化した語か?			?		未詳
					いきどしい	息	いきだわしいの変化した語			1678		江戸
いきどほろし		動詞未然形＋シ										上代
			いくひさし	幾久し	イク＋形容詞					1563		室町
						いけあつかましい	一厚	イク＋形容詞		1773		江戸
						いけずうずうしい	一凶凶	イク＋形容詞		1799		江戸
						いけそうぞうしい	一忿忿・一騒騒	イク＋形容詞		1790		江戸
						いけばかばかしい	一馬鹿馬鹿	イク＋形容詞		1814		江戸
						いけふさふさしい		イク＋形容詞		1809-13		江戸
						いけやかましい	一喧	イク＋形容詞		1802		江戸
			いけんがましい	意見一・異見	名詞＋ガマシ					1604-08		室町
いさをし	功・動	名詞＋シ										上代
			いさまし	勇まし	動詞未然形＋シ					1108頃	③	平安
			いし	美し	語基＋シ					1238	⑥	鎌倉
			いしいし	以次以次し	名詞の重複＋シ							未詳
						いしこらしい		形容詞語幹＋ラシ		1746		江戸
						いじましい		名詞＋マシ		1850		江戸
						いじらしい		名詞＋ラシ		1694		江戸
いすかし	傲佞	語基＋シ								720		上代
			いそがし	忙し	動詞未然形＋シ					850頃	⑤	平安
						いそがしらしい	忙一	形容詞語幹＋ラシ		1900		明治
										1116		平安
いそし	動	語基＋シ								8C後		上代
			いたいけらし	幼気らし	形容詞語幹＋ラシ					1626頃		室町
			いたいたし	痛痛し	形容詞語幹の重複＋シ					13C初	②	鎌倉
			いたかがまし		名詞＋ガマシ							未詳
						いたしい		形容詞語幹＋シ		1929		大正以降
			いたづがはし	勞し	動詞未然形＋ハシ							未詳
						いたずらいたずらしい		名詞の重複＋シ		1919		大正以降
			いたまし	痛し・傷し	動詞未然形＋シ					1238	②	鎌倉
いたはし	勞	語基＋シ								720	④	上代
いたぶらし		動詞未然形＋シ								8C後		上代
			いちしるし	著し	副詞＋形容詞					14C前		鎌倉
いつくし	嚴	動詞未然形＋シ								8C後		上代
			いつたうし	甚し	いつたしの強調形					1527		室町
			いつたし	甚し	いたしの強調形							未詳
いつつし		語基の重複＋シ								927		上代
						いつわりがましい	偽一	動詞連用形＋ガマシ		1813-23		江戸
										1283		鎌倉
			いとうしい		いとおしいの変化した語							室町
			いとしい	愛一	いとおしいの変化した語					室町末一近世初		室町
						いとほらしい		形容詞語幹＋ラシ		1674	②	江戸
						いとらしい	愛	形容詞語幹＋ラシ		1667-68		江戸
										947-957		平安
いとはし	厭	動詞未然形＋シ								970-999頃		上代
いとほし	勞	動詞未然形＋シ								9C末-10C初	③	上代
						いなかめずらしい	田舎珍	名詞＋形容詞		1795		江戸
						いびしい		いふせいの變化した語		1830頃		江戸
いふかし	不審	語基＋カ＋シ								720	②	上代
			いぼいぼしい	疣疣	名詞の重複＋シ					1527		室町
			いまいまし	忌忌し	動詞未然形の重複＋シ					1001-14頃	⑥	平安
			いまいまし	忌忌し	動詞未然形の重複＋ハシ							未詳

						いまさらしい	今更一	副詞+ラシ	1896	明治
						いましい	忌	動詞未然形+シ	1659	江戸
			いまだし	未し	副詞+シ				850頃	平安
			いまめかし	今めかし	名詞+メカシ				970-999頃	④ 平安
			いまめかほし	今めかほし	動詞未然形+ハシ					未詳
			いまはし	忌し	動詞未然形+ハシ				130前	② 鎌倉
			いみいみし		動詞連用形の重複+シ	いみあたらしい	意味新	名詞+形容詞	1948	大正以降
			いみじ		動詞連用形+シ				室町	室町
									90末-100初	平安
						いめいめしい		いまいましいの変化した語	1934	大正以降
						いめえましい		いまいましいの変化した語	1771	江戸
						いめましい		いまいましいの変化した語	1820-49	江戸
						いやこしい		いやらしいとややこしいの合成?		未詳
いやし	賤	語基+シ	いやけし	弥怪し	副詞+形容詞				720	⑦ 上代
						いやつたらしい	嫌一	形容動詞語幹+タラシ	1981	大正以降
						いやみたらしい	厭味一	名詞+タラシ	1838-39	江戸
						いやみつたらしい	厭味一	いやみたらしいの変化した語	1820-49	江戸
						いやみらしい	厭味一	名詞+ラシ	1832-33	江戸
			いやめづらし	弥珍し	副詞+形容詞	いやらしい	嫌一・厭一	形容動詞語幹+ラシ	1682	② 江戸
			いよいよし	弥し	副詞の重複+シ				1563	未詳
			いよし	弥し	副詞+シ				1177-81	室町
			いらいらし	寄寄し	語基の重複+シ				1275	平安
			いらだたしい	寄立	動詞未然形+シ					鎌倉
			いらひどし	寄酷し	イラ+形容詞					未詳
			いろめかし	色めかし	名詞+メカシ	いろがましい	色一	名詞+ガマシ	1791	江戸
									1001-14頃	平安
			うひうひし	初初し	名詞の重複+シ	いんきらしい	陰気一	名詞+ラシ	1895-96	明治
			うかうかし		動詞未然形の重複+シ				100終	② 平安
			うけらうし	受らうし	動詞未然形+ハシ				1269	鎌倉
						うさかしい		語基+カ+シ	1882	明治
						うさつかしい		うさかしいの変化した語か	1770	江戸
						うさんらしい	胡散一	形容動詞語幹+ラシ	1712	② 江戸
						うすうすしい	薄薄一	形容動詞語幹の重複+シ	1791	江戸
			うすかうばし	薄香し	ウス+形容詞	うすさびしい	薄寂一	ウス+形容詞	1889	未詳
						うすらかなしい	薄悲	ウスラ+形容詞	1930	明治
						うすらさびしい	薄寂	ウスラ+形容詞	1896	大正以降
			うそがなし	うそ悲し	ウソ+形容詞	うそさびしい	薄寂	ウソ+形容詞	1665	未詳
			うそがまし	嘘がまし	名詞+ガマシ	うそさみしい	薄寂	ウソ+形容詞	1790	江戸
									1439頃	室町
			うそすさまし	うそ凄し	ウソ+形容詞	うそらしい	嘘	名詞+ラシ	1780	江戸
			うそはづかし	うそ恥し	ウソ+形容詞	うだうだしい		語基の重複+シ	1744	江戸
うたがはし	疑	動詞未然形+シ				うだしい	穩	おだしいの変化した語	720	上代
うただぬし		語基+形容詞							1766	江戸
うただのし		語基+形容詞							720	上代
			うたてし	転し	副詞+シ				712	上代
						うちつけがましい	打付一	動詞連用形+ガマシ	1250頃	鎌倉
									1789	江戸

			おもひでがまし おもふせし	思出がまし 面伏し	名詞+ガマシ 名詞+動詞連用形+シ						未詳 未詳
おもほし		動詞未然形+シ	おもほし	思し	動詞未然形+シ					8C後 990頃	③ 平安 上代
おやじ	同	語基+ジ				おやがましい	親一	名詞+ガマシ		1899	明治
およし		動詞未然形+シ								720	上代
						おりみただし おりめただし	折身正 折目正	名詞+形容詞 名詞+形容詞		1892 1672	明治 江戸
			おろかしい おろし	愚 恐し	形容動詞語幹+シ おそろしの転					13C前	鎌倉 未詳
						おろしい		わるいの変化した語か		1775	江戸
						おんがましい	恩	名詞+ガマシ		1710	江戸
						おんぎがましい	恩義一・恩誼一	名詞+ガマシ		1899	明治
						おんきせがましい	恩着一	動詞連用形+ガマシ		1948	大正以降
						おんなめずらしい	女珍	名詞+形容詞		1809-13	江戸
						おんならしい	女一	名詞+ラシ		1867	江戸
						かあいらしい	可愛	かわいらしいの変化した語		1754	江戸
			かひがひし	甲斐甲斐し	名詞の重複+シ					1001-14頃	③ 平安 上代
			かひがはし	甲斐がはし	かひがひしの転					1626頃	室町
			かいしょうらしい	甲斐性一	名詞+ラシ					14C中か	室町
						かいしょうらしい	甲斐性一	名詞+ラシ		1776	江戸
かからはし		動詞未然形+シ	かがやかしい	輝・耀	動詞未然形+シ					1108頃	③ 平安 上代
			かかりがまし	懸がまし	動詞連用形+ガマシ					1633	室町
			かぎりがまし	限がまし	動詞連用形+ガマシ					1283	鎌倉
かぐはし		名詞+形容詞				かくちょうただし	格調正	名詞+形容詞		1970	大正以降
			かごとがましい	託言一	名詞+ガマシ					712	② 上代
			かしかまし		語基+形容詞					1001-14頃	② 平安
						かじくろしい		名詞+クロシ		905-914	③ 平安 江戸
			かしまし	喧し	語基+マ+シ					1682	江戸
			かたくなし	頑し	形容動詞語幹+シ					10C後	平安
			かたくなはし	頑し	形容動詞語幹+ハシ					810頃	平安
						かたくるしい	堅苦	形容詞語幹+クルシ		1754	② 江戸
						かたくろしい	堅苦	形容詞語幹+クロシ		1711頃	江戸
						かたつくるしい	堅苦	かたくるしいの変化した語		1838	江戸
かたまし	姦	動詞未然形+シ	かたはし	片端し	名詞+シ					720	上代
			かたはらさびし	傍寂し	名詞+形容詞						未詳
						かつてがましい	勝手	形容動詞語幹+ガマシ		1889	明治
			かどかどし	角角し	名詞の重複+シ					1001-14頃	④ 平安
			かどがまし	角がまし	名詞+ガマシ					1477	室町
			かどまし	角まし	名詞+マ+シ					1603-04	室町
かなし	悲	語基+シ								8C後	⑥ 上代
			かなしましい	悲	動詞未然形+シ					1604-08	室町
			かまびすし	喧し	語基+形容詞					1212	鎌倉
			かまびそし	喧し	かまびすしの転					14C後	室町
						かやましい		やかましいの変化した語		1892	明治
かるがるし*	軽軽し	形容詞語幹の重複+シ				かるがるしい	軽軽	かるがるしいの変化した語か		720	② 上代
			かるがるし	軽軽し	形容詞語幹の重複+シ					18C中か	江戸
						かわいらしい	可愛一	形容詞語幹+ラシ		1001-14頃	④ 平安
			かはゆらし		形容詞語幹+ラシ					1682	江戸
										1662	室町

			かんぼし	香し・芳し	かぐはしの転					909	③	平安
			きかまほし	開まほし	動詞未然形+助動詞マホシ							未詳
			ききぐるし	聞苦し	動詞連用形+形容詞					1001-14頃		平安
			きぐるしい	気苦	名詞+クルシ	きぎしい	儀儀	名詞の重複+シ		1925		大正以降
						きざったらしい	気障一	形容動詞語幹+タラシ		1596		安土桃山
						きざきだしい	儀式正	名詞+形容詞		1928-31		大正以降
						きずいがましい	気随一	形容動詞語幹+ガマシ		1914		大正以降
						きぜわしい	気忙	名詞+形容詞		1889		明治
						きそくただしい	規則正	名詞+形容詞		1694	②	江戸
						きたならしい	汚一	形容動詞語幹+ラシ		1878-79		明治
			きづかはし	気遣し	動詞未然形+シ					1793		江戸
						きっしくらしい		形容動詞語幹+ラシ		1602		室町
			きっとしい	急度	副詞+シ					1713		江戸
			きつねがまし	狐がまし	名詞+ガマシ					室町末-近世初		室町
						きづましい	気詰	動詞未然形+シ		1356		室町
						きのどくつたらしい	気毒一	形容動詞語幹+タラシ		1902		明治
						きのどくらしい	気毒一	形容動詞語幹+ラシ		1917-27		大正以降
						きはずかしい	気恥	名詞+形容詞		1754	②	江戸
			きびし	密し・厳し	語基+シ					1778		江戸
きはし	欲服	動詞連用形+形容詞								100終	⑦	平安
						きむずかしい	気難	名詞+形容詞		8C後		上代
			きやくしんがまし	隔心がまし	名詞+ガマシ					1675	②	江戸
						きやさしい	気優	名詞+形容詞		1722		室町
						きょうぎただしい	行儀正	名詞+形容詞		1913		大正以降
			ぎやうぎやうし		形容動詞語幹の重複+シ					1715		江戸
						ぎょうさんたらしい	仰山一	形容動詞語幹+タラシ		1445-46		室町
						ぎょうさんらしい	仰山一	形容動詞語幹+ラシ		1917		大正以降
						ぎょうたくましい	仰逞	形容動詞語幹+形容詞		1896		明治
						きょうはくがましい	脅迫一	名詞+ガマシ		1706頃		江戸
			ぎょうらし		形容動詞語幹+ラシ					1934		大正以降
						きよときよとしい				1603-04		室町
きらきらし	端正	語基の重複+シ								1732		江戸
						きらめかしい	輝一	語基+メカシ		720		上代
			きははし	嫌し	動詞未然形+シ					?		未詳
						ぎりぎりしい	義理義理	名詞の重複+シ		1744		江戸
						きりつただしい	規律正	名詞+形容詞		1894		明治
			きはきはし	際際し	名詞の重複+シ							未詳
						くいしい		くやしいの変化した語		1789-1801頃		江戸
くし	奇	語基+シ				くじょうがましい	苦情一	名詞+ガマシ		1791		江戸
										1910		上代
くすし	奇	語基+シ								1897		明治
くすばし		動詞未然形+シ								766		上代
			くせぐせし	曲曲し	語基の重複+シ					8C後		上代
						くぜつがましい	口舌一	名詞+ガマシ		974頃		平安
						くそいまいましい	糞忌忌	クツ+形容詞		1665頃		江戸
						くそやかましい	糞喧	クツ+形容詞		1908		明治
くだくだし	細碎	名詞の重複+シ								1899		明治
						くちあたらしい	口新	名詞+形容詞		720		上代
			くちをし	口惜し	名詞+形容詞	くちかしましい	口喧	名詞+形容詞		1874-75		明治
						くちがまし	口がまし	名詞+ガマシ		9C末-10C初	③	平安
										1892-1901		明治
						くちさかしい	口賢	名詞+形容詞		1220		鎌倉
										1776		江戸

						くちさびしい	口寂	名詞＋形容詞			未詳
						くちさみしい	口寂	名詞＋形容詞	1779		江戸
						くちさむしい	口寂	名詞＋形容詞	1910		明治
			くちはづかし	口恥し	名詞＋形容詞						未詳
			くどくどし		形容詞語幹の重複＋シ	くちやかましい	口喧	名詞＋形容詞	1791		江戸
くまくまし		名詞の重複＋シ							1901		室町
									733		上代
			くもらはし	曇し	動詞未然形＋ハシ						未詳
			くやくやし		語基の重複＋シ				1529		室町
くやし	悔	語基＋シ							712	②	上代
			くらべぐるし	比苦し	動詞連用形＋形容詞				1001-14頃		平安
			くるおしい	狂	動詞未然形＋シ				1079		平安
くるし	苦	語基＋シ							720	⑧	上代
						くるわしい	狂	動詞未然形＋シ	1935		大正以降
			くれぐれし	呉呉し	語基の重複＋シ						未詳
くはし	妙・細	語基＋シ				くろぐるしい	黒黒	形容詞語幹の重複＋シ	?		未詳
									720	③	上代
						くんじくろしい		語基＋クロシ	1781		江戸
						けいがましい	芸一	名詞＋ガマシ	1870-76		明治
						けいげいしい		けけしの変化した語	1710		江戸
						けいはくらしい	軽薄	名詞＋ラン	1692	②	江戸
						けいまいましい	一忌忌	ケ＋形容詞	1777		江戸
			げうげうし		→ぎょうぎょうし						未詳
			げがし		語基＋シ				1128頃		平安
			げがらうし	穢し	げがらほしの転						未詳
げがらほし	汗穢	動詞未然形＋ハシ							720	②	上代
			げけし		形容動詞語幹の重複＋シ				1001-14頃		平安
げし	異	語基＋シ				げげしい	異異	形容動詞語幹の重複＋シ	1806		江戸
									8C後		上代
			げすげすし	下衆下衆し	名詞の重複＋シ				1001-14頃		平安
			げすし	下衆し	名詞＋シ				1264-88頃		鎌倉
			けたたましい		けたましを強めた語				1275	③	鎌倉
			けたまし		語基＋シ				1494頃		室町
						けちいまいましい		ケチ＋形容詞	1754		江戸
						けっこうらしい	結構	形容動詞語幹＋ラン	1896		明治
			げにげにし	寒寒し	副詞の重複＋シ				1211頃		鎌倉
			げにもらし	寒もらし	副詞＋ラン				1563		室町
						げばげばしい		語基の重複＋シ	1686	②	江戸
						げばたたい		動詞未然形＋シ	1751		江戸
			げふげふし		→ぎょうぎょうし						未詳
			げふらし		→ぎょうらし						未詳
			げはし	険し	語基＋シ				898-901頃	⑦	平安
						げんぎんがましい	現銀一	名詞＋ガマシ	1710		江戸
						げんけんしい		語基の重複＋シ	1910		明治
						げんざらしい		名詞＋ラン			未詳
						げんじらしい	験著	名詞＋形容詞	1776-1801		江戸
						げんじるしい	験著	名詞＋形容詞	1814		江戸
						げんつくらしい	剣突	名詞＋ラン	1921-37		大正以降
						げんべいらしい	権柄一	名詞＋ラン	1681		江戸
						こあたらしい	小新	コ＋形容詞	1912-13		大正以降
こひし	恋	動詞未然形＋シ							8C後	②	上代
						こいまいましい	小忌忌	コ＋形容詞	1731頃か		江戸
						こいやらしい	小嫌	コ＋形容詞	1769		江戸
			かうがうし	神神し	名詞の重複＋シ				10C終		平安

			ことよろし	事宜し	名詞+形容詞				1059頃		平安
						ことらしい	事一	名詞+ラシ	1791-22		江戸
						こなつかしい	小懐	コ+形容詞	1913		大正以降
						こたくてらしい	小僧体	コ+形容詞	1809		江戸
						こにくらしい	小僧	コ+形容詞	1902		明治
			このまし	好し	動詞未然形+シ				1001-14頃		② 平安
			このもし	好し	動詞未然形+シ				10C後		② 平安
			こはこはし	強強し	形容詞語幹の重複+シ						未詳
こほし		動詞未然形+シ				こはずかしい	小恥	コ+形容詞	1906~08		明治
			こまかし	細し	形容動詞語幹+シ				1241		鎌倉
			こまごまし	細細し	形容動詞語幹の重複+シ				1603-04		② 室町
						こまっかしい	細	こまっかしいの変化した語	1771		江戸
						こむさらしい		コ+形容詞	1630頃		江戸
			こむずかしい	小難	コ+形容詞				1535頃		室町
			こむつかし		コ+形容詞						未詳
						こむやくしい	小無益	コ+形容詞	1712頃		江戸
			こめかうし	小目かうし	小目かはしの転						未詳
						こやかましい	小喧	コ+形容詞	1682		江戸
			こやさし		コ+形容詞						未詳
						ごらんぐるしい	御覽苦	名詞+クルシ	1896		明治
						ごわっぱしい	硬一	語基+シ	1915-30		大正以降
						こわらしい	怖一	形容詞語幹+ラシ	1774		江戸
						こわらしい	強一	形容詞語幹+ラシ	1891		明治
			さいかくがまし	才覚がまし	名詞+ガマシ				1283		鎌倉
			さいくがまし	細工がまし	名詞+ガマシ				1466-70		室町
						さいそくがましい	催促	名詞+ガマシ	1896		明治
						さいざえしい	訝訝・訝訝	動詞連用形の重複+シ	1809		② 江戸
			ざうさがまし	造作がまし	名詞+ガマシ						未詳
			さうざし	寂寞し	語基+シ						未詳
			さかさかし	賢賢し	語基の重複+シ						未詳
さかし	賢	語基+シ							8C後		⑥ 上代
さがし	険	語基+シ							712		上代
						さげすましい	蔑	動詞未然形+シ	1915		大正以降
						さしずがましい	指図一	名詞+ガマシ	1887-89		明治
			さしいでがまし	差出がまし	動詞連用形+ガマシ						未詳
			さしでがまし	差出がまし	動詞連用形+ガマシ				1603-04		室町
さだし	貞	語基+シ							1177-81		上代
			さたがまし	沙汰がまし	名詞+ガマシ				1368-76頃		室町
			さつつべらしい	寂寂し	ざありつべらしの転						未詳
			さびさびし		語基の重複+シ						未詳
さびし		動詞未然形+シ							10C前		③ 上代
さぶし	不楽・不	語基+シ							1907		上代
			さまあし	様悪し	名詞+形容詞		さほうたさい	作法正	1930		大正以降
			さまうし		さまわしの転				10C終		平安
			さまし		さまうしの転				1466頃		室町
						さまじい		すさまじいの変化した語	1642		江戸
			さみし	寂し	語基+シ				1590		③ 安土桃山
						さむざむしい	寒寒	形容詞語幹の重複+シ	1916		大正以降
						さむしい	寂・淋	語基+シ	1800		江戸
			さもし		さまうしの転				1590		② 安土桃山
			さもとらし		副詞+ラシ				1628		室町
			さやうめかし	然様めかし	形容動詞語幹+メカシ						未詳

			さるべかし	然べかし	動詞+助動詞ベカリの形容詞化								未詳
さわがし*	騒し	動詞未然形+シ	さるめかし	然めかし	動詞+メカシ								未詳
						さわがましい	騒一	語基+ガマシ		720		⑥	上代
						さわめかしい		語基+メカシ		1776			江戸
			しおらしい		名詞+ラシ					1928			大正以降
			しかしかし	確確し	副詞の重複+シ					1420		④	室町
						しかつがましい		形容詞語幹+ガマシ		1780			江戸
			しかつべしい		しかつべらしいの変化した語								室町中一近世初
			しかつべらしい		しかりつべくあらしの略語か					1661			室町
						しかつめらしい	鹿爪	しかつべらしいの変化した語		1885-86			明治
			しかりつべし	然つべし	動詞連用形+助動詞ツ+助動詞ベシ								未詳
			しかるべし	然べし	動詞+助動詞ベシ					984			平安
しけし	穢・蕪	語基+シ								712			上代
						しさいらしい	子細一	形容詞語幹+ラシ		1655		②	江戸
したゑまし		動詞未然形+シ				しぜんらしい	自然一	形容詞語幹+ラシ		1908			明治
したし	視	語基+シ											上代
						したじたい	親親	語基の重複+シ		720		③	上代
						したしましい	親	動詞未然形+シ		1899-1902			明治
			したはし	慕し	動詞未然形+シ	したもどかしい	舌一	名詞+形容詞		1922			大正以降
						しちむずかしい	一難	シチ+形容詞		1933-37			大正以降
						しちやかましい	一喧	シチ+形容詞		130前		②	鎌倉
			じちらかし	実らかし	名詞+ラカシ					1779			江戸
			じちらし	実らし	名詞+ラシ					1853頃			江戸
			じつらし	実らし	名詞+ラシ								未詳
			じとし	等し	ひとしの音言化形					1603-04			室町
										1686			室町
						しなっこしい		形容詞語幹+シ		1734			江戸
						しなっこらしい		形容詞語幹+ラシ		1700			江戸
			しのぼし	僂し	動詞未然形+シ					1170			平安
						じまんたらしい	自慢一	名詞+タラシ		?			未詳
						じまんらしい	自慢一	名詞+ラシ		1666頃			江戸
						しやこぎかしい	一小賢	シヤ+形容詞		1782			江戸
						じゃまらしい	邪魔一	形容詞語幹+ラシ		1715			江戸
						じゆうがましい	自由一	形容詞語幹+ガマシ		1797			江戸
			しゆつけらし	出家らし	名詞+ラシ								未詳
						じゅんじょたさい	順序正	名詞+形容詞		1896			明治
						じょうしい	突止	名詞「突止」を形容詞化した語		170初			江戸
						じょうしらしい	突止一	名詞+ラシ		1906			明治
			しやうねらし	性根らし	名詞+ラシ					1603-04			室町
			しやうらかしい	性らかしい	名詞+ラカシ								室町末一近世初
						じょうらかしい	情一	名詞+ラカシ		1749			江戸
			しょうろうがしい		名詞+ラウガシ								室町末一近世初
			じやうらふし	上臈し	名詞+シ								未詳
						しよむずかしい	一難	シヨ+形容詞		1813-23			江戸
						じよれつたさい	序列正	名詞+形容詞		1946-56			大正以降
						しらしい	白	名詞被覆形+シ		1785			江戸
			しらしらし	白白し	名詞被覆形の重複+シ					965頃		③	平安
										8C後			上代
しりひかし		名詞+動詞未然形+シ	しれがまし	癩がまし	動詞連用形+ガマシ					100後			平安
						じれじれしい	焦焦	動詞連用形の重複+シ		?			未詳
						しろえらしい	白絵一	名詞+ラシ		1777			江戸
			じんじょうらしい	尋常一	形容詞語幹+ラシ					1563			室町

						しんせつめかしい	親切一	形容動詞語幹+メカシ	1899		明治
						じんたいらしい	人体一・仁体一	名詞+ラシ	1686		江戸
						じんていらしい	人体一・仁体一	名詞+ラシ	1789		江戸
			じんとうらしい	実頭らしい	名詞+ラシ						未詳
						じんぶつらしい	人物一	名詞+ラシ	1628		江戸
						ずいがましい	粹一	形容動詞語幹+ガマシ	1711		江戸
						ずいたらしい	好一	動詞連用形+助動詞タ+ラシ	1772-81頃か		江戸
						ずいらしい	粹一	形容動詞語幹+ラシ	1682		江戸
						ずうずうしい	図図	語基の重複+シ	1811-15		江戸
						ずえおそろしい	未恐	スエ+形容詞	1911		明治
			すえたのもしい	末頼	スエ+形容詞				130前		鎌倉
									1917		上代
すがし									712		② 上代
すがすがし											江戸
						すかんたらしい	好一	動詞(否定)+タラシ	1745		江戸
						すかんらしい	好一	動詞(否定)+ラシ	1788		江戸
											未詳
			すくし	健し	語基+シ						室町
			すぐしい	直	形容動詞語幹+シ				1603-04		室町
			すぐすぐしい	直直	形容動詞語幹の重複+シ				1603-04		室町
			すぐらしい	直一	形容動詞語幹+ラシ				1604-08		室町
						すけべえたらしい	助兵衛一	形容動詞語幹+タラシ	1925-26		大正以降
						すけべえつたらしい	助兵衛一	形容動詞語幹+タラシ	1876-82		明治
						すこしらしい	少一	副詞+ラシ	1884-92		明治
すさまじ*	寒じ・冷じ	動詞未然形+ジ							720		⑧ 上代
						すじめたらしい	筋目正	名詞+形容詞	1686		江戸
すずし	冷	語基+シ							8C後		⑧ 上代
						すずしい	図図	語基の重複+シ	1872		明治
			すすまし	進し	動詞未然形+シ				1211頃		鎌倉
			すずまし	涼し	動詞未然形+シ						未詳
			すずろがまし		形容動詞語幹+ガマシ				1310頃		鎌倉
						すばらしい	素晴	すばらしいの変化した語	1886		明治
						すなつかしい	素懐	ス+形容詞	1907~09		明治
						すねくろしい	拗一	動詞連用形+クロシ	1656		江戸
						すばらしい	素晴	語基+シ	1763		② 江戸
						すぶずぶしい	図分図分	語基の重複+シ	1894		明治
						すぼらしい		形容詞語幹+ラシ	19C中		江戸
						すんばらしい	素晴	すばらしいを強めた語	1857-63		江戸
						せいらしい	勢一	名詞+ラシ	1772		江戸
						ぜいらしい	贅一	名詞+ラシ	1759		江戸
						せかせかしい		語基の重複+シ	1890		明治
			せからしい		語基+ラシ				1603-04		室町
			せきせきし	威威し	語基の重複+シ						未詳
						せぐるしい	一苦	名詞+クルシ	1671		江戸
						せじせじしい	世辞世辞	名詞の重複+シ	1919		大正以降
						せせかしい		語基+カ+シ	?		未詳
			せせかまし		語基+カマシ						室町中
			せせかはし		語基+カハシ				1439頃		室町
						せせこましい		語基+コマシ	1714頃		② 江戸
						せせっこましい		せせこましいの変化した語	1911		明治
						せつらしい		語基+シ	1690		江戸
			せつせつし	切切し	形容動詞語幹の重複+シ						未詳
						せつろしい		語基+シ	1693		江戸
						せばくるしい	狭苦	形容詞語幹+クルシ	1908		明治
						せまくるしい	狭苦	形容詞語幹+クルシ	1904		明治
						せまくろしい	狭一	形容詞語幹+クロシ	1833-39		江戸

			せはし	忙し	語基+シ	せまっくるしい	狭苦	せまくるしいの変化した語	1913		大正以降
			せはせはし	忙忙し	語基の重複+シ				1020	⑤	平安
			せばせばし	狭狭し	形容詞語幹の重複+シ				1520頃	②	室町
						せんさくがましい	穿鑿一・詮索一	名詞+ガマシ	1080-1110頃		平安
						せんしょうらしい	僞上一	名詞+ラシ	1909		明治
						ぞうがましい	驕一	語基+ガマシ	1745		江戸
						ぞうぞうがましい	忿忿一・驕驕一	語基の重複+ガマシ	1753		江戸
			そうぞうし	忿忿し	語基の重複+シ				1794		江戸
			ぞうぞうしい	糲糲	形容動詞語幹の重複+シ				室町末		室町
						そうだんがましい	相談	名詞+ガマシ	1467頃		室町
そがそがし		語基の重複+シ							1912-13		大正以降
			ぞくがまし	俗がまし	名詞+ガマシ						上代
			ぞくたしい	俗たしい	ぞくらしの転か						未詳
			ぞくらし	俗らし	名詞+ラシ				1603-04		室町
									1603-04		室町
						そぐわしい		動詞未然形+シ	1910		明治
						そこおそろしい	底恐	ソコ+形容詞	1933-37		大正以降
						そこがなしい	底悲	ソコ+形容詞	1930		大正以降
						そこさびしい	底寂	ソコ+形容詞	1930		大正以降
			そこすさまじ	底寒じ	ソコ+形容詞						未詳
						そこつらしい	粗忽一	形容動詞語幹+ラシ	1841		江戸
			そそかしい		動詞未然形+シ				1001-14頃		平安
			そそかはし		動詞未然形+ハシ						未詳
			そそかうしい		そそかはしの転				1535頃		室町
						そそこしい		そそかしいの変化した語か	1659		江戸
						そそっかしい		そそかしの变化した語	1773		江戸
						そぞろおそろしい	漫恐	副詞+形容詞	1691		江戸
			そぞろはし		形容動詞語幹+ハシ						未詳
						そとなつかしい	外懐	名詞+形容詞	1911		明治
						そとめずらしい	外珍	名詞+形容詞	1734		江戸
			そねまし	嫉し	動詞未然形+シ				1120頃か		平安
			そばそばし	穉穉し	名詞の重複+シ				1001-14頃		平安
						そらうつくしい	空美	ソラ+形容詞	1821-24		江戸
			そらおそろしい	空恐	ソラ+形容詞				1001-14頃		平安
			そらぞらしい	空空	名詞の重複+シ				1244頃	②	鎌倉
			そらはづかし	空恥し	ソラ+形容詞						未詳
						そわそわしい		語基の重複+シ	1910		明治
						そんだいらしい	尊大	形容動詞語幹+ラシ	1908		明治
						たいぞうらしい	大層一・大造一	形容動詞語幹+ラシ	1773		江戸
						たいだしい	大大	形容動詞語幹の重複+シ	1892		明治
たぎたぎし		語基の重複+シ							712		上代
たくまし	快	語基+シ							810-824	④	上代
			たけし	猛し	語基+シ				970-999頃		平安
			たけだけし	猛猛し	形容詞語幹の重複+シ				1283	②	鎌倉
ただし	正	語基+シ							885	②	上代
たたはし	偉	動詞未然形+シ							8C後	②	上代
たづたづし		語基の重複+シ									上代
			たどたどし		たづたづしの転か				10C後	⑤	平安
たのし	楽	語基+シ				たにんがましい	他人一	名詞+ガマシ	1790		江戸
						たのしらしい	楽一	形容詞語幹+ラシ	712	③	上代
									1895		明治
たのもし	頼	動詞未然形+シ							833	③	上代
						だらだらしい		語基の重複+シ	1952		大正以降
			ちかし	近し	形容詞語幹+シ				1686		室町

			ちかちかし	近近し	形容詞語幹の重複+シ				1216頃か	②	鎌倉
						ちつじょただし	秩序正	名詞+形容詞	1917		大正以降
						ちやわちやわしい		語基の重複+シ	1725		江戸
						ちやんちやらおかし		名詞+形容詞	1853頃		江戸
						ちようじようしい	長上	名詞+シ	1753		江戸
			てふてふし	喋喋し	語基の重複+シ				1638	②	室町
			てうはふらし	調法らし	名詞+ラシ						未詳
つからし	疲	動詞未然形+シ				ついでがましい	序一	名詞+ガマシ	1717		江戸
			つつまし	慎し	動詞未然形+シ				769		上代
			つづまし	約し	つづまやかの形容詞化				970-999頃	③	平安
			つべつべし		語基の重複+シ				1563		室町
			つべらし		語基+ラシ				1362頃		室町
			つまし		語基+シ				1477頃		室町
						つまづましい		語基の重複+シ	1477	②	室町
						つやつやしい	艶艶	名詞の重複+シ	1774		江戸
						つらあてがましい	面当一	名詞+ガマシ	1818		江戸
						つらめしい		語基+メ+シ	1833-35		江戸
			てがまし	手がまし	名詞+ガマシ				17C前		江戸
						てきびしい	手厳	名詞+形容詞	1603-04		室町
						てくだしい	手管	名詞+シ	1785		江戸
			てばてばし		語基の重複+シ				1799		江戸
						てんごうらしい		名詞+ラシ	1430		室町
						どいやらしい	一嫌・一厭	ド+形容詞	1792		江戸
						どうやらしい		副詞+シ	1925		大正以降
						どうやららしい		副詞+ラシ	1727		江戸
とほとほし		形容詞語幹の重複+シ							1727		江戸
			とがとがしい		語基の重複+シ				712	②	上代
ときじ	不時	名詞+ジ							11C中-13C頃		平安
			どくどくし	毒毒し	名詞の重複+シ				8C後		上代
			どくらし	毒らし	名詞+ラシ				1776-1801		室町
						とげとげしい	刺刺	名詞の重複+シ	1477		室町
			とざまがまし	外様がまし	名詞+ガマシ				1892	②	明治
			としひさしい	年久	名詞+形容詞				室町末-近世初		室町
			とのがましい	殿一	名詞+ガマシ				984		平安
			とぼかし	惚し	動詞未然形+シ				1604-08		室町
			とぼし	乏し	ともしの転				1603-04		室町
ともし	乏	語基+シ							1130頃か	②	平安
						なかしい	泣	動詞未然形+シ	712	④	上代
						ながしい	長	形容詞語幹+シ	1901-02		明治
						ながたらしい	長一	形容詞語幹+タラシ	1783		江戸
						ながつたらしい	長一	ながたらしいの變化した語	1659-61頃		江戸
ながながし	長水	形容詞語幹の重複+シ							1823		江戸
			なかむつまじい	仲睦・中睦	名詞+形容詞				8C後		上代
なぐし	和	動詞未然形+シ							9C末-10C初		平安
なぐはし	名細	名詞+形容詞							1273		上代
			なげかし	歎し	動詞未然形+シ						上代
			なげかはし	歎し	動詞未然形+ハシ				1272		鎌倉
						なごりおしい	名残惜	名詞+形容詞	976-987頃		平安
			なさげがまし	情がまし	名詞+ガマシ				1780		江戸
			なさげらしい	情一	名詞+ラシ						未詳
			なずましい	泥	動詞未然形+シ				室町末-近世初		室町
						なたてがましい	名立一	動詞連用形+ガマシ	1069-77頃か		平安
なつかし		動詞未然形+シ							1706頃		江戸
									8C後	③	上代

			なにとやらしい	何一	副詞+シ				1563		室町
						なまあたらしい	生新	ナマ+形容詞	1895		明治
						なまいやらしい	生嫌	ナマ+形容詞	1823-44		江戸
なまし	生	語基+シ							828	②	上代
			なまなまし	生なまし	語基の重複+シ				947-957頃	②	平安
			なまはずかしい	生恥	ナマ+形容詞				1069-77頃か		平安
			なまめかし	生めかし	語基+メカシ				970-999頃	④	平安
なみだぐまし		名詞+グマシ				なまやさしい	生易・生優	ナマ+形容詞	1794	②	江戸
									712	②	上代
なやまし	不平・阻	動詞未然形+シ				なめたらしい	無礼一	形容動詞語幹+タラシ	1751		江戸
			なれなれし	馴馴し	動詞連用形の重複+シ				720	④	上代
									970-999頃	②	平安
			にあはし	似合し	動詞未然形+シ	なんだいがまし	難題一	名詞+ガマシ	1875-81		明治
			におわしい	匂	動詞未然形+シ				室町末		室町
			にがにがし	苦苦し	形容詞語幹の重複+シ				1001-14頃		平安
			にぎにぎし	賑賑し	語基の重複+シ				13C前	③	鎌倉
									1510-50		室町
			にぎはし	賑し	にぎははしの転	にぎやかしい	賑	形容動詞語幹+シ	1926		大正以降
			にぎははし	賑し	動詞未然形+シ	にぎやしい	賑	形容動詞語幹+シ	1831-34		江戸
									1177-81		平安
						にくたらしい	憎一	形容詞語幹+タラシ	1886		明治
						にくつたらしい	憎一	にくたらしいの変化した語	1910		明治
						にくていらしい	憎体一	名詞+ラシ	1655		江戸
						にくてらしい	憎体一	名詞+ラシ	1693		江戸
						にくにくしい	憎憎	形容詞語幹の重複+シ	1755		江戸
						にくらしい	憎一	形容詞語幹+ラシ	1674	②	江戸
にたし		語基+シ							733		上代
						につかしい	似付	につかわしいの変化した語か	1928		大正以降
			につかはし	似つかはし	動詞未然形+ハシ				935頃		平安
						につくらしい	似付	動詞+ラシ	?		未詳
						につこらしい	似一	動詞+ラシ	1655	③	江戸
にはし		語基+シ									上代
にひし	新	語基+シ									上代
						にやつこらしい		動詞+ラシ	1698		江戸
						にやにやしい		語基の重複+シ	1888-89		明治
						にやわしい	似合	にあわしいの変化した語か	?		未詳
						にんげんらしい	人間	名詞+ラシ	1789		江戸
						ぬげぬげしい	抜抜	動詞連用形の重複+シ	1928		大正以降
						ぬめぬめしい	滑滑	名詞の重複+シ	1929		大正以降
ねがはし	願	動詞未然形+シ				ねぐるしい	寝苦	動詞連用形+クルシ	830頃		上代
			ねたまし	妬し	動詞未然形+シ				1691		江戸
			ねだりがまし		動詞連用形+ガマシ				1254		鎌倉
									室町末一近世初		室町
						ねばくろしい	粘一	名詞+クロシ	1794		江戸
						ねばねばしい	粘粘	名詞の重複+シ	1677		江戸
						ねやさびしい	闇寂	名詞+形容詞	1780		江戸
			のこりおしい	残惜	動詞連用形+形容詞						室町末一近世初
			のぞまし	望し	動詞未然形+シ				1593		安土桃山
			のろのろし	呪呪し	語基の重複+シ				1045-68頃		平安
						のろわしい	呪	動詞未然形+シ	1918		大正以降
			はえばえし	映映し	動詞連用形の重複+シ				10C終		平安
			はかし		名詞+シ				1467頃		室町
			はかばかし		名詞の重複+シ				970-999頃	⑥	平安

						ぼかばかしい	馬鹿馬鹿	形容動詞語幹の重複+シ	1772	②	江戸
						はがゆたらしい	歯痒一	形容動詞語幹+タラシ	1972		大正以降
			はからし		名詞+ラシ						未詳
はげし	烈	語基+シ				はからしい	馬鹿一	形容動詞語幹+シ	17C前	②	江戸
			ばげばけし	化化し	動詞連用形の重複+シ				9C末-10C初	②	上代
			ばげちかしい	化一	動詞連用形+ラカン				1477		室町
			ばげらしい	化一	動詞連用形+ラシ				1563		室町
はし	愛	語基+シ							1477		室町
			はちがまし	恥がまし	名詞+ガマシ				8C後		上代
			はちがはし	恥がはし	名詞+ガハシ				10C後		平安
						はじらわしい	恥	動詞未然形+シ	1435頃		室町
はづかし	恥	動詞未然形+カ+シ							1922		大正以降
			はづかはし	恥かはし	はづかしの強調形				8C後	③	上代
						はださびしい	肌寂	名詞+形容詞	1891		未詳
			はつしい		語基+シ				1603-04		明治
						はつはつしい	初初	名詞の重複+シ	1780		江戸
						はではでしい	派手派手	形容動詞語幹の重複+シ	1924-25		大正以降
はなぐはし	花細	名詞+形容詞									上代
						はなげらしい	鼻毛一	名詞+ラシ	1748		江戸
はなはだし	甚	副詞+シ				はなはずかしい	花恥	名詞+形容詞	1766		江戸
			はなばなし	花花し	名詞の重複+シ				720		上代
			はなめづらし	花珍し	名詞+形容詞				12C後か		平安
			はばし	揮し・幅し	語基+シ				1603-04		室町
			はばし		はばしの濁音形				1239頃		鎌倉
			はもじい	は文字	形容動詞はもじを形容詞化した語				1603-04		室町
			はやばやし	早早し	形容動詞語幹の重複+シ				9C末-10C初		平安
			はらあし	腹悪し	名詞+形容詞				1001-14頃		平安
			はらだたし	腹立し	動詞未然形+シ				9C末-10C初		平安
						はるめかしい	春一	名詞+メカシ	1735		江戸
			はれがまし	晴がまし	動詞連用形+ガマシ				1045-68頃	③	平安
			はればれし	晴晴し	動詞連用形の重複+シ				10C終	⑤	平安
						ひえびえしい	冷冷	動詞連用形の重複+シ	1775		江戸
						ひがらしい	僻一	語基+ラシ	1766		江戸
ひさし	久	語基+シ							8C後	③	上代
			ひさびさしい	久久	語基の重複+シ				1604-08		室町
			ひしがまし	秘事がまし	名詞+ガマシ						未詳
			ひすかし		語基+シ				1032		平安
			ひとおそろし	人恐し	名詞+形容詞		ひちむずかしい	一難	ヒチ+形容詞	1820-49	江戸
			ひとがまし	人がまし	名詞+ガマシ				1028-92頃	②	平安
			ひとこひし	人恋し	名詞+形容詞		ひとがららしい	人柄一	1769-71		江戸
			ひとさわがしい	人騒	名詞+形容詞				1500頃		室町
			ひとし	人し	名詞+シ				970-999頃		平安
ひとし	等	語基+シ									未詳
						ひとだかしい	人高	名詞+形容詞	720	⑤	上代
						ひとなつかしい	人懐	名詞+形容詞	1866		江戸
ひねひねし		名詞の重複+シ							1898		明治
			ひとびとし	人人し	名詞の重複+シ				8C後		上代
						ひとまちどおしい	人等遠	名詞+形容詞	970-999頃		平安
						ひとめづらしい	人珍	名詞+形容詞	1911		明治
			ひとらし	人らし	名詞+ラシ				1884		明治
									1477	②	室町

						ひなめずらしい	鄙珍	名詞＋形容詞	1821-24		江戸
						ひなながましい	非難一	名詞＋ガマシ	1916		大正以降
						ひはながましい	批判一	名詞＋ガマシ	1913		大正以降
		びびし	美美し	形容動詞語幹の重複＋シ					974頃		平安
						ひひょうがましい	批評一	名詞＋ガマシ	1913		大正以降
						ひもじい		形容動詞ひもじの形容詞化した	1947		大正以降
						びんぼうたらしい	貧乏一	形容動詞語幹＋タラシ	1919-27		大正以降
						びんぼうたらしい	貧乏一	びんぼうたらしいの変化した語	1710頃		江戸
		ふかし	深し	形容詞語幹＋シ					1423頃		③ 室町
		ふかふかし	深深し	形容詞語幹の重複＋シ					1603-04		室町
						ふきがましい	不義一	形容動詞語幹＋ガマシ	1750頃か		江戸
		ふくふくし	福福し	名詞の重複＋シ					1264-88頃		鎌倉
						ふけつたらしい	不潔一	形容動詞語幹＋タラシ	1972		大正以降
						ふさしい	久	ひさしいの変化した語	1810-22		江戸
						ふさふさしい	総総・房房	名詞の重複＋シ	1899-1902		明治
						ふさぶさしい		語基の重複＋シ	1763		② 江戸
		ふさわしい	相応	動詞未然形＋シ					100後		平安
						ふしぎがましい	不思議一	形容動詞語幹＋ガマシ	1688		江戸
						ふしつけがましい	不義一	形容動詞語幹＋ガマシ	1895		明治
						ふじゆうたらしい	不自由	形容動詞語幹＋タラシ	1928		大正以降
						ふしょうたらしい	不精一・無精一	形容動詞語幹＋タラシ	1926		大正以降
						ふしょうたらしい	不精一・無精一	ふしょうたらしいの変化した語	1917		大正以降
						ふしんがましい	不審一	形容動詞語幹＋ガマシ	1685頃		江戸
						ふそくがましい	不足一	形容動詞語幹＋ガマシ	1870-76		明治
						ふそくたらしい	不足一	形容動詞語幹＋タラシ	1915-30		大正以降
						ふだのもしい	不頼	フ＋形容詞	1752		江戸
						ふだんふだんしい	不断不断	形容動詞語幹の重複＋シ	1926		大正以降
						ふてぶてしい		語基の重複＋シ	1737		江戸
						ふところさみしい	懐寂	名詞＋形容詞	1887-89		明治
						ふとぶとしい	太太	語基の重複＋シ	1724頃		③ 江戸
						ふふくがましい	不服一	形容動詞語幹＋ガマシ	1907		明治
						ふへいがましい	不平一	形容動詞語幹＋ガマシ	1909		明治
						ふゆめかしい	冬一	名詞＋メカシ	1914		大正以降
		ふるし	古し	形容詞語幹＋シ					1520頃		室町
		ふるめかしい	古一	形容詞語幹＋メカシ					970-999頃		④ 平安
		ふんべつがまし	分別がまし	名詞＋ガマシ					1603-04		室町
		ふんべつらし	分別し	名詞＋ラシ					室町末一近世初		室町
		へたくらうし	下手くらうし	形容動詞語幹＋クラウシ		へたくらしい	下手一	形容動詞語幹＋クラシ	1626頃		江戸
									1477		室町
		へだてがましい	隔一	動詞連用形＋ガマシ		へたくろしい	下手一	形容動詞語幹＋クロシ	1631-35		江戸
									1001-14頃		平安
						へらおかしい		ヘラ＋形容詞	1920		大正以降
						べらぼうらしい	便乱坊一・飽棒	名詞＋ラシ	1791		江戸
						べんかいがましい	弁解一	名詞＋ガマシ	1930		大正以降
ほかし	他	名詞＋シ							794		上代
						ほこらしい	誇	動詞未然形＋シ	905-914		平安
						ほこりがましい	誇一	動詞連用形＋ガマシ	1960		大正以降
ほし	欲	語基＋シ							712		③ 上代
						ほそぼそしい	細細	形容詞語幹の重複＋シ	1913		大正以降
						ほてくるしい		動詞連用形＋クルシ	1814		江戸
						ほてくろしい		動詞連用形＋クロシ	1680		江戸
		ほどひさしい	程久	名詞＋形容詞					室町末一近世初		室町
		ほねがまし	骨がまし	名詞＋ガマシ					1563		室町
		ほねぼねし	骨骨し	名詞の重複＋シ					1563		室町

			ほれほれし	惚惚し	動詞連用形の重複+シ	ほほえましい	微笑・類笑	動詞未然形+シ	1926		大正以降
			まあたらしい	真新	マ+形容詞				970-999頃		平安
									1563		室町
			まがまがし		形容動詞語幹の重複+シ	まがしい	凶	名詞+シ	1963		大正以降
まぎらはし*	紛し	動詞未然形+シ							100中		平安
まくはし	目繰	名詞被覆形+形容詞							8C後	⑤	上代
			まことがまし	美がまし	名詞+ガマシ	まけおしい	負け	動詞連用形+形容詞	1792		江戸
			まことし	美し	名詞+シ				1535頃		室町
			まことらし	寒らし	名詞+ラシ				100終	④	平安
まさし	正	語基+シ							1595		安土桃山
									830頃	⑤	上代
						まざまざしい		語基の重複+シ	1683	②	江戸
まづし	貧	語基+シ				まじめらしい	真面目一	形容動詞語幹+ラシ	1893		明治
									8C後	②	上代
						まずっぼらしい	不味一	形容動詞語幹+ラシ	1908		明治
						ませくるしい		動詞連用形+クルシ	1864		江戸
まだし		副詞+シ	またうどし	真人し	名詞+シ						未詳
									905-914		上代
						まだるこしい	間意一	形容詞語幹+コシ	1891		明治
						まだるっこしい	間意一	まだるこしいの変化した語	1965-67		大正以降
						まだろっこしい		まだるこしいの変化した語か	1975		大正以降
			まちどほし	待遠し	動詞連用形+形容詞	まちどしい	待遠一	まちどおしいの変化した語	1773		室町
			まちびさし	待久し	動詞連用形+形容詞	まちわびしい	待詫	動詞連用形+形容詞	1937		大正以降
			まつおなじ	真同じ	同じの強調形				1603-04		室町
			まつぼなじ	真同じ	まつおなじの転				1834-48頃		江戸
											未詳
			まどし	貧し	まづしの転	まどかしい		語基+カ+シ	1901		明治
									850頃		平安
						まどしい		語基+シ			未詳
						まどろかしい		形容動詞語幹+カ+シ	1900~01		明治
						まどろこしい		形容動詞語幹+コシ	1917		大正以降
						まどろしい		形容動詞語幹+シ	1750頃		江戸
						まどろっこしい		まどろこしいの変化した語	1922		大正以降
			まぶしい	眩	語基+シ	まばしい	眩	語基+シ	1550頃	②	室町
			ままし	纏し	語基の重複+シ				1775		江戸
			まめし		形容動詞語幹+シ				室町末		室町
			まめまめし		形容動詞語幹の重複+シ				1368-76頃		室町
									970-999頃	③	平安
						まるまるしい	丸丸	形容動詞語幹の重複+シ	1930		大正以降
						まんらしい	慢一	形容動詞語幹+ラシ	1754		江戸
みがほし	欲見	動詞連用形+ガ+形容詞							712		上代
			みぐるし	見苦し	動詞連用形+形容詞				947-957頃	③	平安
			みこみこし	神子神子し	名詞の重複+シ				1563		室町
						みじめたらしい	惨一	形容動詞語幹+タラシ	1947		大正以降
						みじめつたらしい	惨一	みじめたらしいの変化した語	1935-36		大正以降
			みすぼらし	身窄し	名詞+形容詞				1477		室町
						みずみずしい	瑤瑤・水水	名詞の重複+シ	1886		明治
						みそぼらしい		みすぼらしいの変化した語	1888		明治
						みだらがましい	淫一	形容動詞語幹+ガマシ	1939		大正以降
						みだりがましい	濫一・猥一	動詞連用形+ガマシ	1887-89		明治
みだりかほし	妄	動詞連用形+カハシ							909	⑤	上代
			みだれがほし	乱がほし	動詞連用形+ガハシ				810-824		平安

みほし	欲見	動詞連用形＋形容詞						みみあたらしい	耳新	名詞＋形容詞	1834-48頃	上代
								みみうっとうしい	耳鬱陶	名詞＋形容詞	1875	江戸
								みみかしましい	耳聾	名詞＋形容詞	1436	明治
								みみがまし	耳喧し	名詞＋形容詞	1028-92頃	室町
								みみぐるしい	耳苦	名詞＋クルシ	1891	平安
								みみけがらわしい	耳汚・耳穢	名詞＋形容詞	1834-48頃	明治
								みみめずらしい	耳珍	名詞＋形容詞	1875	江戸
								みみやかましい	耳喧	名詞＋形容詞	1753	明治
								みめうるわしい	眉目麗・見目麗	名詞＋形容詞	1904	江戸
								みょうもんらしい	名聞一	形容動詞語幹＋ラシ	1765	明治
								みれんがましい	未練一	形容動詞語幹＋ガマシ	1897	江戸
								みれんたらしい	未練一	形容動詞語幹＋タラシ	1919-27	大正以降
								みれんらしい	未練一	形容動詞語幹＋ラシ	1800	江戸
むがし	幸	語基＋シ									8C後	上代
								むかしなつかしい	昔懐	名詞＋形容詞	1886	明治
								むかしゆかしい	昔床	名詞＋形容詞	1885-86	明治
								むごたらしい	惨一・酷一	形容詞語幹＋タラシ	1711頃	江戸
								むごつたらしい	惨一	むごたらしいの変化した語	1768	江戸
								むごらしい	惨一・酷一	形容詞語幹＋ラシ	室町末	室町
								むさくらしい		形容詞語幹＋クルシ	1753	江戸
								むさくらうし		形容詞語幹＋クラウシ	1563	室町
								むさくろしい		形容詞語幹＋クロシ	1603-1604	室町末-近世初
								むさらし		形容詞語幹＋ラシ	1603-1604	室町
								むしぐるしい	蒸苦	動詞連用形＋クルシ	1930	大正以降
								むずがかしい		むずかしいの変化した語か	1809-13	江戸
								むつかし	難・六借	語基＋カ＋シ	970-999頃	⑩ 平安
								むつがかしい		むつかしいの変化した語か	?	未詳
むつまし	親	動詞未然形＋シ						むなぐるしい	胸苦	名詞被覆形＋クルシ	720	③ 上代
								むねぐるしい	胸苦	名詞＋クルシ	1809	江戸
むなし	空	語基＋シ						むねやくしい	無益	形容動詞語幹＋シ	760	⑤ 上代
								めあたらしい	目新	名詞＋形容詞	1717	江戸
								めざまし	目覚まし	動詞未然形＋シ	1655	江戸
								めざまし	目覚まし	動詞未然形＋シ	1895	明治
めづらし	珍	動詞未然形＋ラ＋シ						めざまし	目覚まし	動詞未然形＋シ	965頃	② 平安
めだし	珍	動詞未然形＋シ						めたし	目立し	動詞未然形＋シ	8C後	⑤ 上代
								めだたし	目立し	動詞未然形＋シ	753頃	上代
								めだれがまし	目垂がまし	名詞＋ガマシ	1216頃か	鎌倉
								めぼかし	目恥し	名詞＋形容詞	1867	江戸
								めぼしい		名詞「目星」を形容詞化した語	1220頃か	鎌倉
								めまぎらしい	目紛	名詞＋形容詞	1885-86	明治
								めまぐらしい	目紛	名詞＋形容詞	1813-23	江戸
								めまぐるしい	目紛	名詞＋形容詞	1841	江戸
								めまぎらしい	目紛	めまぎらしいの変化した語か	1871-72	明治
								めまぐるしい	目紛	名詞＋形容詞	1818	江戸
								めめしい	女女	名詞の重複＋シ	10C後	② 平安
								めらうがまし	女郎がまし	名詞＋ガマシ		未詳
								めんどうしい	面倒一	形容動詞語幹＋シ		江戸
								めんどうらしい	面倒一	形容動詞語幹＋ラシ	1789-1801頃	江戸
								めんどしい	面倒	形容詞語幹＋シ	1809-13	江戸
								めんぼくがまし	面目がまし	名詞＋ガマシ	1779	江戸
								めんぼくらしい	面目らし	名詞＋ラシ		未詳
								もったいらしい	勿体一	名詞＋ラシ		未詳
											1671	江戸

			もどかし		動詞未然形+シ	もっともらしい	尤一	副詞+ラシ	1628		江戸
			もどかはし		動詞未然形+ハシ				970-999頃	②	平安 未詳
			ものおそろしい	物恐	モノ+形容詞	ものあたらしい	物新	モノ+形容詞	1909		明治
			ものおもわしい	物思	モノ+形容詞	ものおしい	物借	モノ+形容詞	1955		大正以降
ものかなし	物悲	モノ+形容詞	ものおそろしい	物恐	モノ+形容詞				970-999頃		平安
			ものおもわしい	物思	モノ+形容詞				970-999頃		平安
			ものがまし	物がまし	名詞+ガマシ				8C後		上代
			ものぐるはし	物狂し	モノ+形容詞				1297-1350頃		鎌倉
ものこひし	物恋	モノ+形容詞	ものぐるはし	物狂し	モノ+形容詞				974頃		平安
			ものさびし	物淋し	モノ+形容詞				8C後		上代
									11C初か		平安
						ものさみしい	物寂・物淋	モノ+形容詞	1838		江戸
			ものさわがし	物騒し	モノ+形容詞				10C中		② 平安
			ものすさまじい	物凄	モノ+形容詞				1001-14頃		② 平安
						ものすずしい	物涼	モノ+形容詞	1896		明治
						ものせわしい	物忙	モノ+形容詞	1655		江戸
			ものなつかしい	物懐	モノ+形容詞				1008		平安
						ものなやましい	物悩	モノ+形容詞	1928		大正以降
			ものほしい	物欲	モノ+形容詞				1120頃か		平安
			ものめずらしい	物珍	モノ+形容詞				12C末		鎌倉
			ものものし	物物し	名詞の重複+シ				970-999頃		③ 平安
			ものわびしい	物侘	モノ+形容詞				1653		江戸
						もやもやしい		語基の重複+シ	100前		平安
									19C中		江戸
やさし		動詞未然形+シ	やかまし		語基+シ				1678		⑥ 室町
									8C後		⑩ 上代
						やさしらしい	優一	形容詞語幹+ラシ	1896		明治
						やすやすい	安安	形容詞語幹の重複+シ	1873-74		明治
						やかましい	喧	やかましいの変化した語	1809-13		江戸
やはし	肌	語基+シ	やつやつし	褻褻し	語基の重複+シ				1177-81		② 平安
											上代
						やぼったらしい	野暮一	形容詞語幹+タラシ	1934		大正以降
						やぼらしい	野暮一	形容詞語幹+ラシ	1694		江戸
			やまし	病し	動詞未然形+シ				1475頃		③ 室町
						ややこしい		語基+コシ	1863-65頃		江戸
						ややっこしい		ややこしいの変化した語	1933-34		大正以降
						ゆいしょたらしい	由緒正	名詞+形容詞	1863		江戸
			ゆかし		動詞未然形+シ	ゆずりがましい	掃一・強請一	動詞連用形+ガマシ	9C末-10C初		⑥ 平安
									1893-94		明治
			ゆだんがましい	油断一	名詞+ガマシ				1603-04		室町
			ゆめがまし	夢がまし	名詞+ガマシ				1216頃か		鎌倉
			ゆめゆめし	夢夢し	名詞の重複+シ				1708頃		室町
ゆゆし	齋忌	語基の重複+シ	ゆ急ゆ急し	故故し	名詞の重複+シ				712		⑦ 上代
			ゆるかしい	緩	動詞未然形+シ				970-999頃		平安
ゆるほし	縦	動詞未然形+シ							1565-66頃		室町
			やうがまし	様がまし	名詞+ガマシ						上代
						ようきゆうがましい	要求一	名詞+ガマシ	14C前		② 鎌倉
						ようだいらしい	容体一	名詞+ラシ	1909		明治
						ようらくらしい	瓔珞	名詞+ラシ	1843		江戸
						よくどうしい	欲一	名詞+シ	1798		江戸
						よくどしい	欲一	名詞+シ	1755		江戸
									1660		江戸
			よしよしし	由由し	名詞の重複+シ				970-999頃		平安

			よそがましい	余所一	名詞+ガマシ			14C前		鎌倉
			よそよそし	余所余所し	名詞の重複+シ			1069-77頃か	②	平安
			よたたし	夜多多し	副詞+シ			1603-04		室町
						よばよばしい		1893		明治
								712		上代
よらし		動詞未然形+シ						720		上代
よろこぼし	悦	動詞未然形+シ						712		⑩ 上代
よろし	宜	動詞未然形+シ						1216頃か		鎌倉
			よわよわし	弱弱し	形容詞語幹の重複+シ					未詳
			らうらうし	良良し	名詞の重複+シ					江戸
						らんがしい	乱	1772		江戸
						りくつがましい	理屈一	1680		江戸
						りくつらしい	理屈一	1777		江戸
						りこりこしい	利口利口	1823-44		江戸
						りょうげんらしい	料簡一・了簡一	1746		江戸
						りりし		1275		鎌倉
								1830		江戸
						りんきがましい	悋気一	1770		江戸
						れいぎたさい	礼儀正	1909		明治
						れいれいしい	麗麗	970-999頃	②	平安
			わかわかしい	若若	形容詞語幹の重複+シ			830		上代
わきわきし	分明	動詞運用形の重複+シ						1001-14頃		平安
			わざとがまし	態とがまし	副詞+ガマシ			1895		明治
						わざとらしい	態一	9C末-10C初	⑤	平安
			わづらはし	煩し	動詞未然形+シ			1603-04		室町
			わづらうし	煩し	わづらはしの転			8C後	⑥	上代
わびし		動詞未然形+シ								未詳
			わらうべし		名詞+シ			1711頃		江戸
						わらべしい	童一	1595		安土桃山
			わらべらし	童らし	名詞+ラシ			1895		明治
						わるざかしい	悪賢	8C後		上代
われじ		名詞+ジ						1241		鎌倉
			わわし		語基の重複+シ					
合計148語			合計492語			合計521語				

表17 シク活用形容詞語構成の歴史的変化

上代語シク活用	142	中古・中世語シク活用	492	近代語シク活用	521
名詞+シ	4	名詞+シ	10	名詞+シ	11
語基+シ	51	語基+シ	24	語基+シ	13
動詞未然形+シ	39	動詞未然形+シ	47	動詞未然形+シ	10
動詞未然形+ハシ	2	動詞未然形+ハシ	12	動詞未然形+ハシ	1
副詞+シ	3	副詞+シ	7	副詞+シ	2
		動詞連用形+シ	2	動詞連用形+シ	2
		形容詞語幹+シ	9	形容詞語幹+シ	10
		形容動詞語幹+シ	12	形容動詞語幹+シ	4
単純形容詞	99	単純形容詞	123	単純形容詞	53
名詞の重複+シ	6	名詞の重複+シ	29	名詞の重複+シ	13
語基の重複+シ	11	語基の重複+シ	27	語基の重複+シ	20
形容詞語幹の重複+シ	2	形容詞語幹の重複+シ	20	形容詞語幹の重複+シ	9
動詞連用形の重複+シ	1	動詞連用形の重複+シ	9	動詞連用形の重複+シ	5
		形容動詞語幹の重複+シ	11	形容動詞語幹の重複+シ	9
		動詞未然形の重複+シ	3	動詞未然形の重複+シ	0
		副詞の重複+シ	3	副詞の重複+シ	0
疊語形容詞	20	重複形容詞	102	重複形容詞	56
名詞+形容詞	11	名詞+形容詞	42	名詞+形容詞	72
語基+形容詞	2	語基+形容詞	2	語基+形容詞	0
動詞連用形+形容詞	5	動詞連用形+形容詞	6	動詞連用形+形容詞	2
		副詞+形容詞	3	副詞+形容詞	1
		形容詞語幹+形容詞	2	形容詞語幹+形容詞	1
				形容動詞語幹+形容詞	1
複合形容詞（疊語を除く）	18	複合形容詞（疊語を除く）	55	複合形容詞（疊語を除く）	77
接頭語による派生形容詞 [2]		接頭語による派生形容詞 [35]		接頭語による派生形容詞 [58]	
モノ+形容詞	2	モノ+形容詞	10	モノ+形容詞	7
		イク+形容詞	1		
		コ+形容詞	8	コ+形容詞	15
		アイ+形容詞	2	アイ+形容詞	1
		イラ+形容詞	1		
		オ+形容詞	1	オ+形容詞	2
		オホ+形容詞	1		
		ウツ+形容詞	1		
		ウス+形容詞	1	ウス+形容詞	1
		ウソ+形容詞	3	ウソ+形容詞	2
		スエ+形容詞	1	スエ+形容詞	1
		ソコ+形容詞	1	ソコ+形容詞	3
		ソラ+形容詞	2	ソラ+形容詞	1
		ナマ+形容詞	1	ナマ+形容詞	3
		マ+形容詞	1		
				ア+形容詞	1
				ウスラ+形容詞	2
				イケ+形容詞	6
				ケ+形容詞	1
				ケチ+形容詞	1
				シチ+形容詞	2
				シヤ+形容詞	1
				ショ+形容詞	1
				ヒチ+形容詞	1
				ブ+形容詞	1
				クソ+形容詞	2
				ス+形容詞	1
				ド+形容詞	1
				ヘラ+形容詞	1
接尾語による派生形容詞 [2]		接尾語による派生形容詞 [118]		接尾語による派生形容詞 [212]	
動詞連用形+ガハシ	1	ガハシ	2		
名詞+グマシ	1				
		カマシ	3		
		ガマシ	54	ガマシ	57
		メカシ	7	メカシ	6
		ラシ	39	ラシ	89

		ラカシ	3	ラカシ	1
		カハシ	2		
		クマシ	1		
		クラウシ/クラハシ	3		
		クルシ	2	クルシ	18
		クロシ	2	クロシ	10
				コマシ	1
				クラシ	1
				コシ	3
				タラシ	26
派生形容詞	4	派生形容詞	153	派生形容詞	270
その他	1	その他	59	その他	65
		★接尾語「ガマシ」	54	★接尾語「ガマシ」	57
		名詞+ガマシ	40	名詞+ガマシ	27
		形容詞語幹+ガマシ	1	形容詞語幹+ガマシ	1
		動詞連用形+ガマシ	9	動詞連用形+ガマシ	12
		語基+ガマシ	1	語基+ガマシ	2
		形容動詞語幹+ガマシ	2	形容動詞語幹+ガマシ	14
		副詞+ガマシ	1	副詞+ガマシ	0
				語基の重複+ガマシ	1
		★接尾語「ラシ」	39	★接尾語「ラシ」	89
		名詞+ラシ	24	名詞+ラシ	35
		語基+ラシ	3	語基+ラシ	0
		形容動詞語幹+ラシ	5	形容動詞語幹+ラシ	26
		形容詞語幹+ラシ	4	形容詞語幹+ラシ	16
		副詞+ラシ	2	副詞+ラシ	6
		動詞連用形+ラシ	1	動詞連用形+ラシ	2
		★接尾語「クロシ」	2	★接尾語「クロシ」	10
		名詞+クロシ	0	名詞+クロシ	3
		形容詞語幹+クロシ	2	形容詞語幹+クロシ	3
		動詞連用形+クロシ	0	動詞連用形+クロシ	2
		語基+クロシ	0	語基+クロシ	1
		★接尾語「クルシ」	2	★接尾語「クルシ」	18
		名詞+クルシ	1	名詞+クルシ	7
		形容詞語幹+クルシ	1	形容詞語幹+クルシ	6
		動詞連用形+クルシ	0	動詞連用形+クルシ	4
				★接尾語「タラシ」	26
				名詞+タラシ	2
				形容動詞語幹+タラシ	15
				形容詞語幹+タラシ	7
				動詞連用形+タラシ	1
				動詞その他の形+タラシ	1

表18 各資料におけるシク活用形容詞の収録語彙

万葉集	時代別国語大辞典 上代篇		日葡辞書 (邦訳)		時代別国語大辞典 室町時代篇		大辞林 (第二版)		日本国語大辞典 (第二版)			
	見出し語	漢字表記	見出し語	漢字表記	見出し語	漢字表記	見出し語	漢字表記	見出し語	漢字表記		
							あいあいし	愛愛し	あいあいしい	愛愛しい	あいあいしい	愛愛
							あいぎやうがまし	愛敬がまし			あいぎやうがまし	愛敬一
								あいきょうらしい	愛敬らしい		あいきょうらしい	愛敬一
								あいくるしい	愛くるしい		あいくるしい	愛一
											あいくるしい	愛一
											あいしたい	相親一
							あいさうらし	愛そうらし				
				あいそうらしい	愛崇らしい		あいさうらし	愛そうらし			あいさうらしい	愛想一
							あいそらし	愛そらし			あいそしい	愛想
											あいそらしい	愛想一
											あいつくるしい	愛一
								あいひとしい	相等しい		あいひとしい	相等
				あいらしい	愛らしい		あいらし	愛らし	あいらしい	愛らしい	あいらしい	愛一
											あいらっしい	愛一
											あおあおしい	青青
		あからし	懸				あかあかし	赤赤し				
							あくらし	悪し				
											あぐるしい	
								あけしい			あけしい	明
							あさあさし	浅浅し	あさあさしい	浅浅しい	あさあさしい	浅浅
							あさあさし	鮮鮮し				
											あさからしい	浅
		あさまし		あさずさまじい	朝冷まじい		あさずさまじ	朝冷まじ				
				あさましい	浅ましい		あさまし	浅まし	あさましい	浅ましい	あさましい	浅
あし	悪	あし	悪	あしい	悪しい		あし	悪し	あしい	悪しい	あしい	悪
							あしあらがまし					
								あじやらしい	戯しい		あじやらしい	戯
							あせがまし	汗がまし				
							あせぐらうし	汗ぐらうし				
							あたあたし					
							あだだし	徒徒し				
あたし	他						あたたし		あたたしい		あたたしい	
											あだめかしい	婀娜一
あたらし	惜	あたらし	惜				あたらし	可惜し				
あたらし	新	あたらし	新	あたらしい	新しい		あたらし	新し	あたらしい	新しい	あたらしい	新
							あつかはし	扱し				
							あつかはし	暑かはし				
							あつかまし	厚かまし	あつかましい	厚かましい	あつかましい	厚一
											あつかわしい	厚一
											あつくるしい	厚苦
									あつくるしい	暑苦しい・熱苦しい	あつくるしい	暑苦・熱苦
											あつくるしい	暑苦
							あつくらうし	暑くらうし			あつくるしい	暑苦
							あつくらほし	暑くらほし				
							あつし	篤し				
											あっせいがましい	压制一

						あつたらし	可惜し			あつたらしい	惜
				あてあてしい	当て当てしい	あてあてし	当			あつづくるしい	暑苦・熱苦
								あてつけがましい	当て付けがましい	あてつけがましい	当付一
				あなあさましい	あな浅しい						
				あなかましい	あな難しい						
						あひおなじ	相同じ			あなずりがましい	侮一
										あぶかしい	危
										あぶかわしい	危
										あぶつかしい	危
										あぶなかしい	危
								あぶなつかしい	危なつかしい	あぶなつかしい	危
				あほうらしい	阿房らしい					あほうらしい	阿呆一
								あほらしい	阿呆らしい	あほらしい	阿呆一
										あまあましい	甘甘
										あまたらしい	甘一
										あまつたらしい	甘一
										あまりしい	余
										あやうしい	危
										あやかしい	
										あやくるしい	
あやし	怪	あやし	怪	あやしい	怪しい	あやし	怪し	あやしい	怪しい	あやしい	怪・妖・奇
						あやぶまし	危し				
						あらあらし	荒荒し	あらあらしい	荒荒しい	あらあらしい	荒荒
						あらあらし	粗粗し				
						あらかまし	荒かまし				
						あらくまし	荒くまし			あらくましい	荒一
						あらくもし	荒くもし	あらくもしい	荒くもしい	あらくもしい	荒一
										あらかましい	荒一
						あらまし	荒し			あらかましい	荒一
				あらまほしい	ありありしい	あらまほし	在在し				
ありがほし	有欲					ありつかうし	有付し				
						ありつかはし	有付し				
						あるめかし	有めかし				
										あわあわしい	沫沫
						あはあはし	淡淡し	あわあわしい	淡淡しい	あわあわしい	淡淡
						あほうらし	阿房らし				
				あわたたしい	慌しい	あわたたし	慌し	あわたたしい	慌ただしい	あわたたしい	慌・遽
						あはれがまし	哀がまし			あわれがましい	哀一
						あはれし	哀し				
										あわれっほしい	哀一
										あんまりしい	
										いいしい	言一
										いいわけがましい	言訳
										いかがしい	如何
						いかいかし	嚴嚴し				
										いかがらしい	如何一
						いかがし	如何し	いかがわしい	如何わしい	いかがわしい	如何

								いとらしい	愛らしい	いとしほらしい	愛
						いとどし				いとらしい	
		いとほし	勞			いとほし	厭し	いとわしい	厭わしい	いとわしい	厭
						いとほし					
										いなかめずらしい	田舎珍
いふかし	訝	いふかし	不審	いぶかしい	訝しい	いぶかし	訝し	いぶかしい	訝しい	いぶかしい	訝
										いびしい	
				いまましい	忌々しい	いままし	忌忌し	いまましい	忌まましい	いまましい	忌忌
						いままほし	忌忌ほし				
								いまさらしい	今更らしい	いまさらしい	今更一
										いましい	忌
						いまだし	未し				
				いまめかしい	今めかしい	いまめかし	今めかし	いまめかしい	今めかしい	いまめかしい	今一
						いまめかほし	今めかほし				
				いまわしい	忌まはしい	いまほし	忌し	いまわしい	忌まわしい	いまわしい	忌一
										いみあたらしい	意味新
				いみじい		いみいみし					
						いみじ					
										いめいめしい	
										いめえましい	
										いめましい	
										いやこしい	
いやし	賤	いやし	賤	いやしい	卑しい・賤しい	いやけし	弥怪し	いやしい	卑しい・賤しい	いやしい	賤・卑・鄙
						いやし	賤し・卑し			いやったらしい	嫌一
								いやみたらしい	嫌みたらしい	いやみたらしい	厭味一
										いやみたらしい	厭味一
				いやめずらしい	弥珍しい	いやめづらし	弥珍し			いやみらしい	厭味一
								いやらしい	嫌らしい	いやらしい	嫌一・厭一
						いよいよ	弥し				
						いよし	弥し			いよしい	
				いらいらしい	苛々しい	いらいらし	苛苛し	いらいらしい	苛苛しい	いらいらしい	苛苛
								いらだたしい	苛立しい	いらだたしい	苛立
						いらひどし	苛酷し				
										いろがましい	色一
						いろめかし	色めかし				
										いんきらしい	陰氣一
				ういういしい	初々しい	うひうひし	初初し	ういういしい	初初しい	ういういしい	初初一
				うかうかしい		うかうかし					
						うけらうし	受らうし				
										うざかしい	
										うざっかしい	
										うざんらしい	胡散一
										うずうずしい	薄薄一
						うすかうばし	薄香し				
										うすさびしい	薄寂一
										うすらかなしい	薄悲
										うすらさびしい	薄寂
						うそがなし	うそ悲し				
						うそがまし	嘘がまし				

				おぼしい	覚しい			おぼしい	思しい	おぼおぼしい	
おほほし	鬱	おほほし	鬱			おほひさし	大久し			おぼしい	思・覚
		おむがし	欣感							おぼろおぼろしい	臙臙
				おもおもしろい	重々しい	おもおめし おもおもしろ おもきらはし	重重し 面嫌し	おもおもしろい	重重しい	おもおもしろい	重重
								おもくろしい	重苦しい	おもくろしい	重苦
						おもしろをかし	面白をかし	おもしろおかし	面白おかし	おもしろおかし	面白可笑
						おもだたし	面立し			おもつくるしい	重苦
						おもはづかし	面恥し				
おもひがなし	思悲	おもひがなし				おもひぐるし	思苦し				
おもひぐるし	思苦	おもひぐるし				おもひでがまし	思出がまし				
						おもふせし	面伏し				
おもほし	思	おもほし				おもほし	思し	おもわしい	思わしい	おもわしい	思
										おやがましい	親一
おやじ	同	おやじ	同			おやじ	同じ				
		およし									
								おりめたさい	折(り)目正しい	おりめたさい	折身正
						おろし	恐し	おろかしい	愚かしい	おりめたさい	折目正
								おろしい		おろかしい	愚
								おんがましい	恩がましい	おろしい	
								おんがましい	恩がましい	おんがましい	思
								おんきせがましい	恩着せがましい	おんきせがましい	恩義一・恩誼一
								おんなめずらしい		おんきせがましい	恩着一
								おんならしい	女らしい	おんなめずらしい	女珍
								おんらしい	女らしい	おんならしい	女一
								かあいらしい	可愛らしい	かあいらしい	可愛
				かいかましい	甲斐甲斐しい	かひがひし	甲斐甲斐し	かいかましい	甲斐甲斐しい	かいかましい	甲斐甲斐
						かひがはし	甲斐がはし			かいかましい	
										かいしょうらしい	甲斐性一
										かいしょうらしい	甲斐性一
						かうがうし	神神し				
						かうばし	香し				
								かがやかしい	輝かしい・耀かしい・赫かしい	かがやかしい	輝・耀
かからはし	懸	かからはし				かかりがまし	懸がまし				
						かきりがまし	限がまし				
						かぐはし	香し・芳し	かぐわしい	香しい・芳しい・馨しい	かくちょうたさい	格調正
かぐはし	馨	かぐはし								かぐわしい	芳・香・馨
										かごとがましい	託言一
				かしかましい	驚しい	かしかまし		かしかましい	驚しい	かしがましい	驚・喧
										かじくろしい	
				かしましい	姦しい	かしまし	喧し	かしましい	姦しい・驚しい	かしましい	驚・姦・喧
				かたくなしい	頑しい	かたくなし	頑し				
						かたくなはし	頑し				

								かたくるしい	堅苦しい	かたくるしい	堅苦
										かたくろしい	堅苦
		かたまし	姦	かだましい	しい	かだまし	姦し・奸し			かたつくろしい	堅苦
						かたほし	片端し			かだましい	奸・夫
						かたほらさびし	傍寂し				
								かってがましい	勝手がましい	かってがましい	勝手
				かどかどしい	角々しい	かどかどし	角角し	かどかどしい	角角しい	かどかどしい	角角
				かどがましい	角がましい	かどがまし	角がまし			かどがましい	
				かどましい	角ましい	かどまし	角まし			かどましい	
かなし	愛・悲	かなし	悲	かなしい	悲しい	かなし	愛し・悲し	かなしい	悲しい・哀しい・愛しい	かなしい	悲・哀・愛
										かなしましい	悲
				かまびすしい	喧しい	かまびすし	喧し	かまびすしい	喧しい・囂しい	かまびすしい	囂・喧
						かまびそし	喧し				
										かやましい	
				かるがるしい	軽々しい	かるがるし	軽軽し	かるがるしい	軽軽しい	かるがるしい	軽軽
										かるがるしい	軽軽
				かろがろしい	軽々しい	かろがろし	軽軽し	かろがろしい	軽軽しい	かろがろしい	軽軽
								かわいらしい	可愛らしい	かわいらしい	可愛一
						かはゆらし		かわゆらしい		かわゆらしい	可愛一
						かんぼし	香し・芳し	かんぼしい	芳しい・香しい・馨しい	かんぼしい	芳・香・馨
				きかまほしい	聞かまほしい	きかまほし	聞まほし				
						ききぐるし	聞苦し	ききぐるしい	聞(き)苦しい	ききぐるしい	聞苦
										ぎぎしい	儀儀
				きぐるしい	氣苦しい					きぐるしい	氣苦
								きざったらしい	氣障ったらしい	きざったらしい	氣障一
										ぎしきただしい	儀式正
										きずいがましい	氣随一
								きぜわしい	氣忙しい	きぜわしい	氣忙
								きそくただしい	規則正しい	きそくただしい	規則正
								きたならしい	汚らしい	きたならしい	汚一
						きづかはし	氣遣し	きづかわしい	氣遣わしい	きづかわしい	氣遣
										きつくらしい	
										きつとしい	急度
						きつねがまし	狐がまし				
										きづましい	氣詰
										きのどくったらしい	氣毒一
										きのどくらしい	氣毒一
				きびしい	厳しい	きびし	密し・厳し	きびずかしい	氣恥ずかしい	きびずかしい	氣恥
きほし	着欲	きほし	欲服					きびしい	厳しい	きびしい	嚴
										きむずかしい	氣難しい
						きやくしんがまし	隔心がまし			きむずかしい	氣難
										きやくしんがまし	隔心一
										きやさしい	氣優
				ぎょうぎょうしい		ぎやうぎやうし		ぎょうぎただしい	行儀正しい	ぎょうぎただしい	行儀正
								ぎょうぎょうしい	仰仰しい	ぎょうぎょうしい	仰仰
										ぎょうさんたらしい	仰山一
										ぎょうさんらしい	仰山一
										ぎょうたくましい	仰達
				ぎょうらしい	(げうらしい)	ぎやうらし				きやうはくがまし	脅迫一
										ぎやうらしい	仰一
										きよときよとしい	
きらぎらし		きらきらし	端正			きらきらし	輝煌し				

						きはらし	嫌し			きらめかしい	煌一
								ざりざりしい	義理義理しい	ざりざりしい	義理義理
						きはきはし	際際し			きりつたしい	規律正
										くいしい	
くし	奇	くし	奇							くさらしい	臭一
										くしい	奇
くすし	奇	くすし	奇							くじょうがましい	苦情一
						くせぐせし	曲曲し				
								くぜつがましい	口舌がましい	くぜつがましい	口舌一
										くそいまいましい	糞忌
										くそやかましい	糞喧
		くたぐたし	細碎			くたぐたし		くたぐたしい		くたぐたしい	
				くちおしい	口惜しい	くちをし	口惜し	くちおしい	口惜しい	くちあたらしい	口新
										くちおしい	口惜
				くちがましい	口がましい	くちがまし	口がまし			くちかしましい	口喧
										くちがましい	口喧
										くちさかしい	口賢
								くちさびしい	口寂しい	くちさびしい	口寂
								くちさみしい	口淋しい	くちさみしい	口寂
										くちさむしい	口寂
						くちはづかし	口恥し				
						くどくどし		くちやかましい	口喧しい	くちやかましい	口喧
		くまくまし				くまぐまし	隈隈し	くどくどしい		くどくどしい	
						くもらはし	曇し				
くやし	悔	くやし	悔	くやしい	悔しい	くやし	悔し	くやしい	悔しい・口惜しい	くやしい	悔・口惜
						くらべぐるし	比苦し				
								くるおしい	狂おしい	くるおしい	狂
くるし	苦	くるし	苦	くるしい	苦しい	くるし	苦し	くるしい	苦しい	くるしい	苦
								くるわしい	狂わしい	くるわしい	狂
						くれぐれし	呉呉し				
										くろぐるしい	黒黒
		くはし	妙・細	くわしい	委しい	くはし	精し・委し	くわしい	詳しい・委しい・精しい	くわしい	美・細・妙・詳・委・精
										くんじくろしい	
										げいがましい	芸一
								けいげいしい		けいげいしい	
								けいはくらしい	軽薄らしい	けいはくらしい	軽薄
										けいまいましい	一忌忌
						げうげうし					
						げがし					
						げがらうし	穢し				
		げがらはし	汗穢	げがらわしい	穢らわしい	げがらはし	穢し	げがらわしい	汚らわしい・穢らわしい	げがらわしい	汚・穢
						げけし					
										げげしい	異異
		げし	異			げし					
						げすげすし	下衆下衆し				
						げすし	下衆し				
								けたたましい		けたたましい	

				けたましい		けたまし				けたましい	
										けちいまいましい	
						げにげにし	実実し			けっこうらしい	結構
						げにもらし	実もらし				
								げばげばしい		げばげばしい	
										げぼたしい	
						げふげふし					
						げふらし					
				けわしい	験しい	げはし	険し	けわしい	険しい	けわしい	険・験
										げんぎんがましい	現銀一
										けんけんしい	
										げんざらしい	
										げんじらしい	験著
										げんじるしい	験著
										けんつくらしい	剣突
										けんべいらしい	権柄一
										こあたらしい	小新
こひし	恋	こひし	恋	こいしい	恋しい	こひし	恋し	こいしい	恋しい	こいしい	恋
										こいまいましい	小忌忌
										こいやらしい	小嫌
								こうごうしい	神神しい	こうごうしい	神神
				こうばしい	香ばしい・芳ばしい			こうばしい	香ばしい・芳ばしい	こうばしい	香・芳
										こうれしい	小嬉
										こえめずらしい	声珍
				こきだし							
										こぎたならしい	小汚
こごし	凝	こごし									
						こころいそがはし	心忙し				
						こころうつくし	心愛し				
				こころうれしい	心嬉しい	こころうれし	心嬉し	こころうれしい	心嬉しい	こころうれしい	心嬉
こころがなし	心悲	こころがなし	情悲							こころがなしい	心悲
こころぐる	心苦	こころぐる	情苦	こころぐるしい	心苦しい	こころぐるし	心苦し	こころぐるしい	心苦しい	こころぐるしい	心苦
										こころぐるわしい	心狂
こころこひ	心恋	こころこひ	心恋								
								こころさびしい	心寂しい・心淋しい	こころさびしい	心寂・心淋
								こころさみしい	心淋しい	こころさみしい	心寂・心淋
										こころさむしい	心寂・心淋
										こころさわがしい	心騒
						こころすずし	心涼し			こころすずしい	心涼
								こころぜわしい	心忙しい	こころせわしい	心忙
										こころたのしい	心楽
										こころだのもしい	心頼
										こころにぎわしい	心賑
				こころむつかしい	心むつかしい	こころむつかし	心むつかし			こころむずかしい	心難
										こころやさしい	心優
								こころやましい	心疚しい・心疾しい	こころやましい	心疚
										こころゆかしい	心床
				こごかしい	小賢しい	こごかし	小賢し	こごかしい	小賢しい	こごかしい	小賢
						こさびし	小寂し	こさびしい	小寂しい	こさびしい	小寂・小淋
										こじおらしい	
						こしつがまし	故実がまし				
						こすさまじ	小凄じ			こすさまじい	小凄

						こすずし	小涼し			こすずしい	小涼
								こぜわしい	小忙しい	こぜわしい	小忙
								ごたいそうらしい	御大層らしい	ごたいそうらしい	御大層一
						このし	小樂し			このしい	小樂
						こちくらし					
								こっばずかしい	小っ恥ずかしい	こっばずかしい	小恥
						こつがまし	骨がまし				
						ことあし	事悪し				
						ことあたらし	事新し	ことあたらしい	事新しい	ことあたらしい	事新
						こといそがはし	事忙し				
						ことがまし	言がまし				
						ことがまし	事がまし				
						ことごとしい	事事し	ことごとしい	事事しい	ことごとしい	事事
						ことさびし	事寂し				
										ことさらしい	殊更一
						ことすさまじ	事凄し				
						ことそうぞうし	事忿念し				
						ことばさかし	言葉賢し				
						ことむつかし	事むつかし			ことむずかしい	事難
						ことめづらし	事珍し				
										こどもこどもしい	子供子供
										こどもめずらしい	子供珍
										こどもらしい	子供一
						ことよしい	事よしい				
						ことよろし	事宜し				
										ことらしい	事一
										こなつかしい	小懐
										こにくてらしい	小憎体
								こにくらしい	小憎らしい	こにくらしい	小憎
						このましい	好ましい	このましい	好ましい	このましい	好
						このもし	好し	このもし	好ましい	このもし	好
						こはごはし	強強し				
								こはずかしい	小恥ずかしい	こはずかしい	小恥
こほし	恋		こほし								
						こまかし	細し	こまかしい	細かい	こまかしい	細
						こまごましい	細細し	こまごましい	細細しい	こまごましい	細細
										こまっかしい	細
										こむさらしい	
								こむずかしい	小難しい	こむずかしい	小難
						こむつかし		こむつかしい	小難しい		
										こむやくしい	小無益
						こめかうし	小目かうし				
						こやさし		こやかましい	小喧しい	こやかましい	小喧
										ごらんぐるしい	御覽苦
										こわっぼしい	疎一
								こわらしい	怖らしい	こわらしい	怖一
										こわらしい	強一
						さいかくがまし	才覚がまし				
						さいくがまし	細工がまし				
								さいそくがましい	催促がましい	さいそくがましい	催促
								さえざえしい	訝え訝えしい	さえざえしい	訝訝・互互
						ざうさがまし	造作がまし				

						さうざし	寂寞し				
さかし	賢	さかし	賢	さかしい	賢しい	さかざかし	賢賢し				
		さがし	険	さがしい	険しい	さかし	賢し	さかしい	賢しい	さかしい	賢
						さがし	険し			さげすましい	蔑
										さしずがましい	指図一
						さしいでがまし	差出がまし				
						さしでがまし	差出がまし	さしでがましい	差(し)出がましい	さしでがましい	差出
		さだし	貞	さしでがましい	差し出がましい						
						さたがまし	沙汰がまし				
				さつつべらしい		きつつべらしい					
						さびさびし	寂寂し				
さぶし	寂・淋	さびし	不楽・不	さびしい	寂しい	さびし	寂し	さびしい	寂しい・淋しい	さびしい	寂・淋
		さぶし								さぶしい	寂・淋
										さほうただし	作法正
						さまあし	様悪し				
						さまうし				さまうしい	様憂
						さまし					
						さみし	寂し	さみしい	淋しい・寂しい	さまじい	寂・淋
								さむざむしい	寒寒しい	さむざむしい	寒寒
								さむしい	寂しい・淋しい	さむしい	寂・淋
						さもし		さもしい		さもしい	
						さもとらし					
						さやうめかし	然様めかし				
						さるべかし	然べかし				
						さるめかし	然めかし				
				さわがしい	騒がしい	さわがし	騒し	さわがしい	騒がしい	さわがしい	騒
										さわがましい	騒一
										さわめかしい	
				しおらしい	(しほらしい)			しおらしい		しおらしい	
						しかしかし	確確し				
										しかつがましい	
										しかつべしい	
								しかつべらしい		しかつべらしい	
								しかつめらしい		しかつめらしい	鹿爪
						しかりつべし	然つべし				
						しかるべし	然べし				
		しけし	穢・蕪								
								しさいらしい	子細らしい・仔細らしい	しさいらしい	子細一
										しぜんらしい	自然一
したゑまし	下笑	したゑまし									
		したし	親	したしい	親しい	したし	親し	したしい	親しい	したしい	親
										したじたしい	親親
										したしましい	親
										したもどかしい	舌一
						したはし	慕し	したわしい	慕わしい	したわしい	慕
								しちむずかしい	しち難しい	しちむずかしい	二難
										しちやかましい	一喧
						じちらかし	実らかし				
						じちらし	実らし	じちらしい	実らしい	じちらしい	実一
				じちらしい	実らしい	じつらし	実らし			じつらしい	実一
						じよし	等し				

								そそっかしい		そそこしい そそっかしい そぞろおそろしい	漫恐
								そぞろはし			
										そとなつかしい そとめずらしい	外懐 外珍
								そねまし そばそばし	嫉し 稜稜し		
										そらうつくしい そらおそろしい そらぞらしい そらぞらしい	空美 空恐 空空 空空
								そらほづかし	空恥し	そらはずかしい そわそわしい	空恥ずかしい
										そわそわしい そんだいらしい たいそうらしい たいだしい	尊大 大層一・大造一 大大
		たぎたぎし たくまし	快	たくましい	逞しい	たくまし たけし	逞し 猛し	たくましい	逞しい	たくましい	逞
		ただし たたはし	正 偉	ただしい	正しい	ただけし ただし	猛猛し 正し	ただけしい ただしい	猛猛しい 正しい	ただけしい ただしい	猛猛 正
		たづたづし		たどたどしい		たづたづし たどたどし		たどたどしい		たどたどしい	
たのし	楽	たのし	楽	たのしい	楽しい	たのし	楽し	たのしい	楽しい	たにんがましい たのしい たのしらしい たのもしい だらだらしい ちかしい ちかちかしい ちつじょただしい ちやわちやわしい ちゃんちゃらおかしい	他人一 楽 楽一 頼 近・親 近近 秩序正
		たのもし	頼	たのもしい	頼もしい	たのもし	頼し	たのもしい	頼もしい	ちかちかしい ちつじょただしい ちやわちやわしい ちゃんちゃらおかしい ちょうちょうしい ちょうほうらしい	長上 喋喋
				ちかちかしい	近々しい	ちかし ちかちかし	近し 近近し	ちかしい	近しい・親しい	ちつじょただしい ちやわちやわしい ちゃんちゃらおかしい ちょうちょうしい ちょうほうらしい	喋喋
										ちやわちやわしい ちゃんちゃらおかしい ちょうちょうしい ちょうほうらしい	
				ちょうちょうしい (てうでうしい)		てふてふし	喋喋し	ちょうちょうしい	喋喋しい	ちやわちやわしい ちゃんちゃらおかしい ちょうちょうしい ちょうほうらしい	
				ちょうほうらしい	調法らしい	てうはふらし	調法らし			ちやわちやわしい ちゃんちゃらおかしい ちょうちょうしい ちょうほうらしい	
										ついでがましい	序一
つきよらし	着宜	つからし	疲								
				つつましい	慎ましい	つつまし つづまし つべつべし つべらし	慎し 約し	つつましい	慎ましい	つつましい つづましい	慎 約
						つましい	つまし	つましい	約しい・儉しい	つましい	儉
								つやつやしい	艶艶しい	つやつやしい	艶艶
								つらあてがましい	面当てがましい	つらあてがましい	面当一
						てがましい	手がまし			つらめしい	
				てがましい	手がましい	てがまし	手がまし	てきびしい	手厳しい	てがましい てきびしい てくだしい	手 手厳 手管
				てばてばしい		てばてばし		てばてばしい		てがましい てきびしい てくだしい	

										てんごうらしい	
										どいやらしい	一嫌・一厭
										どうやらしい	
										どうやららしい	
		とほとほし		とおどおしい	遠しい	とほどほし	遠遠し	とおどおしい	遠遠しい	とおどおしい	遠遠
										とがどがしい	
ときじ	時	ときじ	不時			どくどくし	毒毒し	どくどくしい	毒毒しい	どくどくしい	毒毒
						どくらし	毒らし				
								とげとげしい	刺刺しい	とげとげしい	刺刺
とこめづらし	常珍					とざまがまし	外様がまし	とざまがましい	外様がましい		
				としひさしい	年久しい					としひさしい	年久
										とのがましい	殿一
				とほかしい		とほかし	惚し			とほかしい	
				とほしい	乏しい	とほし	乏し	とほしい	乏しい	とほしい	乏
ともし	乏・惹/少/渺	ともし	乏	ともししい	乏しい	ともし	乏し	ともししい	乏しい・羨しい	ともししい	乏・羨
										ながしい	泣
								ながたらしい	長たらしい	ながたらしい	長一
								ながったらしい	長ったらしい	ながったらしい	長一
		ながながし	長永	ながながしい	長々しい	ながながし	長長し	ながながしい	長長しい	ながながしい	長長・久久
										なかむつまじい	仲睦・中睦
		ながし	和								
ながはし	名細	ながはし	名細								
				なげかしい	歎かしい	なげかし	歎し			なげかしい	嘆
						なげかほし	歎し	なげかわしい	嘆かわしい	なげかわしい	嘆
				なごりおしい	名残惜しい			なごりおしい	名残惜しい	なごりおしい	名残惜
						なさげがまし	情がまし			なさけらしい	情一
								なさけらしい	情けらしい	なさけらしい	泥
								なててがましい	名立てがましい	なててがましい	名立一
なつかし	懐	なつかし		なつかしい	懐かしい	なつかし	懐し	なつかしい	懐かしい	なつかしい	懐
								なまあたらしい	生新しい	なにとやらしい	何一
										なまあたらしい	生新
										なまいやらしい	生嫌
		なまし	生	なまししい	生しい	なまし	生し			なまししい	生
				なまなまししい	生々しい	なまなまし	生なまし	なまなまししい	生生しい	なまなまししい	生生
										なまはずかしい	生恥
				なまめかしい		なまめかし	生めかし	なまめかしい	艶かしい	なまめかしい	艶一
								なまやさしい	生易しい	なまやさしい	生易・生優
なみだぐまし	涙	なみだぐまし						なみだぐましい	涙ぐましい	なみだぐましい	涙一
										なめたらしい	無礼一
なやまし	悩	なやまし	不平・阻					なやましい	悩ましい	なやましい	悩
				なれなれしい	馴々しい	なれなれし	馴馴し	なれなれしい	馴れ馴れしい	なれなれしい	馴馴
										なんだいがましい	難題一
						にあほし	似合し	にあわしい	似合(わ)しい	にあわしい	似合
										におわしい	匂
				にがにがしい	苦々しい	にがにがし	苦苦し	にがにがしい	苦苦しい	にがにがしい	苦苦
				にぎにぎしい	賑々しい	にぎにぎし	賑賑し	にぎにぎしい	賑賑しい	にぎにぎしい	賑賑
										にぎやかしい	賑
										にぎやしい	賑
						にぎはし	賑し	にぎわしい	賑わしい	にぎわしい	賑

						にぎはほし	賑し	にくたらしい	憎たらしい	にくたらしい	憎一
										にくったらしい	憎一
										にくていらしい	憎体一
								にくてらしい	憎体らしい	にくてらしい	憎体一
								にくにくしい	憎憎しい	にくにくしい	憎憎
								にくらしい	憎らしい	にくらしい	憎一
		にたし									
				につかわしい	似つかはしい	につかはし	似つかはし	につかわしい	似付かわしい	につかわしい	似付
										につくらしい	似付
								につこらしい	似つこらしい	につこらしい	似一
にはし	急・俄	にはし にひし	新								
										にやつこらしい	
										にやにやしい	
										にやわしい	似合
								にんげんらしい	人間らしい	にんげんらしい	人間
										ぬげぬげしい	抜抜
										ぬめぬめしい	滑滑
		ねがはし	願	ねがわしい	願はしい	ねがはし	願し	ねがわしい	願わしい	ねがわしい	願
				ねたましい	妬ましい	ねたまし	妬し	ねぐるしい	寝苦しい	ねぐるしい	寝苦
						ねだりがまし		ねたましい	妬ましい	ねたましい	妬・嫉
										ねだりがまし	強請
										ねぼくろしい	粘一
										ねぼねぼしい	粘粘
										ねやさびしい	閑寂
								のこりおしい	残り惜しい	のこりおしい	残惜
			のぞましい	望ましい	のぞまし	望し	望し	のぞましい	望ましい	のぞましい	望
					のろのろし	呪	呪し				
								のろわしい	呪わしい	のろわしい	呪
						はえばえし	映映し				
						はかし					
				はかばかしい		はかばかし		はかばかしい	捗捗しい	はかばかしい	捗捗・果果
								ばかばかしい	馬鹿馬鹿しい	ばかばかしい	馬鹿馬鹿
										はがゆたらしい	備痒一
						はからし					
								ばからしい	馬鹿らしい	ばからしい	馬鹿一
		はげし	烈	はげしい	烈しい	はげし	烈し	はげしい	激しい・劇しい・烈しい	はげしい	激烈・劇
				ばげばげしい	化け化けしい	ばげばげし	化化し			ばげばげしい	化化
				ばけらしい	化けらしい					ばげちかしい	化一
								ばけらしい		ばけらしい	化一
はし	愛	はし	愛			はちがまし	恥がまし			はちがましい	恥一
				はじがわしい	恥ちがはしい	はちがはし	恥がはし			はじがわしい	恥一
										はじらわしい	恥
はづかし	恥	はづかし	恥	はずかしい	恥づかしい	はづかし	恥し	はずかしい	恥ずかしい	はずかしい	恥・羞・辱
						はづかほし	恥かほし				
				はつしい		はつしい		はだきびしい	肌寂しい	はだきびしい	肌寂
										はつしい	
										はつはつしい	初初
はなぐほし	花妙	はなぐほし	花細					はではでしい	派手派手しい	はではでしい	派手派手

まづし	貧	まづし	貧	まづしい	貧しい	まづし	貧し	まづしい	貧しい	まづしい	貧
										まづっぼらしい	不味一
										ませくるしい	
		まだし				またうどし	真人し				
						まだし	未し				
								まだるこしい	間愈こしい	まだるこしい	間愈一
								まだるっこしい	間愈っこしい	まだるっこしい	間愈一
										まだろっこしい	
						まちどほし	待遠し	まちどおしい	待(ち)遠しい	まちどおしい	待遠一
										まちどしい	待遠一
			まちびさしい	待久しい	まちびさし	待久し				まちひさしい	待久
								まちわびしい	待ち侘しい	まちわびしい	待侘
						まつおなじ	真同じ				
						まつほなじ	真同じ				
										まどかしい	
			まどしい	貧しい	まどし	貧し				まどしい	貧
										まどしい	
										まどろかしい	
								まどろこしい		まどろこしい	
										まどろしい	
								まどろっこしい		まどろっこしい	
								まぶしい	眩しい	まぶしい	眩
			まほしい								
								まぼしい	眩しい	まぼしい	眩
						ままし	繼し	まましい	繼しい	まましい	繼
			まめしい			まめし		まめしい		まめしい	忠実
						まめまめし		まめまめしい	忠実忠実しい	まめまめしい	忠実忠実・実実
										まるまるしい	丸丸
										まんらしい	椀一
みがほし	見欲	みがほし	欲見	みぐるしい	見苦しい	みぐるし	見苦し	みぐるしい	見苦しい	みぐるしい	見苦
						みこみこし	神子神子し				
										みじめたらしい	慘一
										みじめたらしい	慘一
						みすぼらし	身窄し	みすぼらしい	見窄らしい	みすぼらしい	
								みずみずしい	瑞瑞しい・水水しい	みずみずしい	瑞瑞・水水
										みそぼらしい	
										みだらがましい	淫一
								みだりがましい	齷りがましい・猥りがましい	みだりがましい	齷一・猥一
		みだりかはし	妄			みだりがはし	乱がはし	みだりがわしい	齷りがわしい・猥りがわしい	みだりがわしい	齷一・猥一
			みだれがわしい	乱れがほしい	みだれがはし	乱がはし				みだれがわしい	齷一・猥一
みほし	見欲	みほし	欲見								
								みみあたらしい	耳新しい	みみあたらしい	耳新
										みみうっとうしい	耳鬱陶
										みみかましい	耳聾
						みみがましい	耳聾しい	みみがましい		みみがましい	耳聾
								みみぐるしい	耳苦しい	みみぐるしい	耳苦
										みみけがらわしい	耳汚・耳穢
										みみぬずらしい	耳珍
										みみやかましい	耳喧
								みめうるわしい	見目麗しい	みめうるわしい	眉目麗・見目麗
										みょうもんらしい	名聞一
								みれんがましい	未練がましい	みれんがましい	未練一

								みれんたらしい	未練たらしい	みれんたらしい	未練一
むがし	幸	むがし	幸							みれんらしい	未練一
										むかしなつかしい	昔懐
										むかしゆかしい	昔床
								むごたらしい	惨たらしい・酷たらしい	むごたらしい	惨一・酷一
										むごつたらしい	惨一
								むごらしい	惨らしい・酷らしい	むごらしい	惨一・酷一
								むさくらしい	むさ苦しい	むさくらしい	
						むさくらうし				むさくらうしい	
								むさくろしい		むさくろしい	
						むさらし				むさらしい	
										むしぐるしい	蒸苦
										むずがかしい	
								むずかしい	難しい	むずかしい	難・六借
										むづがかしい	
								むづかしい	難しい	むづかしい	難・六借
								むづかしい	難しい	むづかしい	難・六借
		むつまし	親	むつかしい	睦ましい	むつかし	睦し	むつまじい	睦ましい	むつまじい	睦
				むつましい		むつまし		むなぐるしい	胸苦しい	むなぐるしい	胸苦
むなし	空	むなし	空	むなしい	空しい	むなし	空し	むなしい	空しい・虚しい	むなしい	空・虚
										むねぐるしい	胸苦
										むやくしい	無益
								めあたらしい	目新しい	めあたらしい	目新
				めざましい	目覚しい						
				めざましい	目覚しい	めざまし	目覚まし	めざましい	目覚(ま)しい	めざましい	目覚
めづらし	珍	めづらし	珍	めずらしい	珍しい	めづらし	珍し	めずらしい	珍しい	めずらしい	珍
		めだし									
				めたたい	目立たしい	めたたし	目立し			めだたい	目立
										めだたわしい	目立
								めだれがまし	目垂がまし		
								めぼしい		めぼしい	目恥
								めまぎらしい	目紛らしい	めまぎらしい	目紛
								めまぐるしい	目紛しい	めまぐるしい	目紛
										めまぐるしい	目紛
										めまぐるしい	目紛
								めめしい	女女しい	めめしい	女女
						めらうがまし	女郎がまし				
										めんどうしい	面倒一
										めんどうらしい	面倒一
										めんどしい	面倒
						めんぼくがまし	面目がまし				
						めんぼくらし	面目らし				
								もったいらしい	勿体らしい	もったいらしい	勿体一
								もっともらしい	尤もらしい	もっともらしい	尤一
						もどかし		もどかしい		もどかしい	擬
						もどかほし					
								ものあたらしい	物新しい	ものあたらしい	物新
										ものおしい	物借
								ものおそろしい	物恐ろしい	ものおそろしい	物恐
								ものおもわしい	物思わしい	ものおもわしい	物思
ものがなし	物悲	ものかなし	物悲	ものがなしい	物悲しい	ものがなし	物悲し	ものがなしい	物悲しい	ものがなしい	物悲

よらし	宜	よらし									
		よろこぼし	悦	よろこぼしい	喜ばしい	よろこぼし	喜し	よろこぼしい	喜ばしい	よろこぼしい	喜・悦
よろし	宜	よろし	宜	よろしい	宜しい	よろし	宜し	よろしい	宜しい	よろしい	宜
						よわよわし	弱弱し	よわよわしい	弱弱しい	よわよわしい	弱弱
						らうらうし	良良し				
								らんがしい	乱がしい	らんがしい	乱
										りくつがましい	理屈一
										りくつらしい	理屈一
										りこりこしい	利口利口
										りょうけんらしい	料簡一・了簡一
				りりしい	凜しい	りりし		りりしい	凜凜しい	りりしい	凜凜・律律
										りんきがましい	恪気一
										れいぎただしい	礼儀正
								れいれいしい	麗麗しい	れいれいしい	麗麗
								わかわかしい	若若しい	わかわかしい	若若
		わきわきし	分明								
						わざとがまし	態とがまし	わざとがましい	態とがましい	わざとがましい	態一
								わざとらしい	態とらしい	わざとらしい	態一
				わずらわしい	煩はしい	わづらはし	煩し	わずらわしい	煩わしい	わずらわしい	煩
				わずらうしい	煩うしい	わづらうし	煩し			わずらうしい	煩
わびし	侘	わびし		わびしい	侘しい	わびし	侘し	わびしい	侘しい	わびしい	侘
						わらうべし					
										わらべしい	童一
				わらべらしい	童らしい	わらべらし	童らし			わらべらしい	童一
										わるざかしい	悪賢
われじ	我・吾	われじ									
						わわし					
合計86語		合計142語		合計222語		合計484語		合計396語		合計897語	

表 19 逆引き『日本国語大辞典』「しい」型形容詞

ア							
あしい	悪	そっこうしい		むさくろうしい		下手	
いしい	美	ずうずうしい	凶凶	へたくろうしい		暑苦	
あいあいしい	愛愛	いけずうずうしい	一凶凶	あつくろうしい		煩	
いしい	言一	そうぞうしい	忿忿・騒騒	わずろうしい		冷冷	
ういういしい	初初一	いけそうぞうしい	一忿忿・一騒騒	さえざえしい		惜・愛	
おいしい	美味・旨味	ぞうぞうしい	雑雑	ひえびえしい		青青	
かがいいしい	甲斐甲斐	いとうしい		おいしい		多	
くいしい		いっとうしい	甚	あおあおしい		英雄・男男	
けいげいしい		うつとうしい	鬱陶	おおしい		口惜	
こいしい	恋	みみうつとうしい	耳鬱陶	おおしい		負惜	
おとここいしい	男恋	いきどうしい	息	まけおしい			
ひとこいしい	人恋	よくだうしい	欲一	くちおしい			
ものこいしい	物恋	めんどうしい	面倒一	いとおしい			
おぞいしい		さまうしい	様憂	とおどおしい		遠遠	
たいだいしい	大大	あやうしい	危	おとどおしい		御遠遠	
れいれいしい	麗麗	ぎようぎようしい	仰仰	いきどおしい		息	
そそこしい		しようしい	笑止	まちどおしい		待遠一	
こうこうしい	神神	ちようじようしい	長上	ひとまちどおしい		人等遠	
		ちようちようしい	蝶蝶	ものおしい		物借	

なごりおいしい	名残惜	わるざかしい	悪賢	こころむずかしい	心難
のこりおいしい	残惜	すがしい	清	せかせかしい	
くるおいしい	狂	すがすがしい	清清	せせかしい	
ものぐるおいしい	物狂	はずかしい	恥・羞・辱	いそがしい	忙・急
		きはざかしい	気恥	そそかしい	
		こはずかしい	小恥	ひとだかしい	人高
カ		おとこはずかしい	男恥	ちかしい	近・親
いいがしい	如何	うそはずかしい	薄恥	ちかぢかしい	近近
しょうろうがしい		こつぱずかしい	小恥	うぎっかしい	
おかしい		はなはずかしい	花恥	そそっかしい	
へらおかしい		なまはずかしい	生恥	なつかしい	懐
ちゃんちゃらおかしい		めはずかしい	目恥	こなつかしい	小懐
おもしろおかしい	面白可笑	うらはずかしい	心恥	むかしなつかしい	昔懐
むずがかしい		むずかしい	難・六借	すなつかしい	素懐
むつがかしい	嘆	きむずかしい	気難	そとなつかしい	外懐
なげかしい		こむずかしい	小難	ひとなつかしい	人懐
さかしい	賢	しちむずかしい	一難	ものなつかしい	物懐
うざかしい		ひちむずかしい	一難	あぶなつかしい	危
こざかしい	小賢	ことむずかしい	事難	につかしい	似付
しゃこざかしい	一小賢	しょむずかしい	一難	あぶっかしい	危
くちさかしい	口賢				

こまっかしい	細	こまかしい	細	ゆるかしい	緩
むつかしい	難・六借	あだめかしい	婀娜	おろかしい	愚
とがとがしい		しんせつめかしい	親切	まどろかしい	
まどかしい	擬	いまめかしい	今	わかわかしい	若若
もどかしい		なまめかしい	艶	さわがしい	騷
したもどかしい	舌	ふゆめかしい	冬	ひとさわがしい	人騷
なかしい	泣	きらめかしい	煌	ものさわがしい	物騷
ながしい	長	はるめかしい	春	こころさわがしい	心騷
ながながしい	長長・久久	ふるめかしい	古	らんがしい	乱
あぶなかしい	危	ざわめかしい		いきいきしい	生生
にがにがしい	苦苦	あやかしい		ぎぎしい	儀儀
はかばかしい	抄抄・果果	かがやかしい	輝・耀	にぎにぎしい	賑賑
ばかばかしい	馬鹿馬鹿	にぎやかしい	賑	くしい	奇
いけばかばかしい	一馬鹿馬鹿	ゆかしい	床・懐	すぐしい	直
ふかしい	深	おくゆかしい	奥床	すぐすぐしい	直直
あぶかしい	危	むかしゆかしい	昔床	うつくしい	美・愛
いぶかしい	訝	こころゆかしい	心床	そらうつくしい	空美
ふかぶかしい	深深	しようらしい		どくどくしい	毒毒
とぼかしい		じょうらしい	情	にくにくしい	憎憎
まがしい	凶	ばげらしい	化	ふくぶくしい	福福

むやくしい	無益
こむやくしい	小無益
あけしい	明
けげしい	異異
ただけしい	猛猛
とげとげしい	刺刺
ぬけぬけしい	抜抜
はげしい	激烈・劇
ばげばげしい	化化
しなっこしい	
やっこしい	
まだるっこしい	間意
まだろっこしい	
まどろっこしい	
いやこしい	
ややこしい	
りこりこしい	利口利口
まだるこしい	間意
まどろこしい	

あさあさしい	浅
ひさしい	久・尚
いくひさしい	幾久
ひさびさしい	久久
としひさしい	年久
まちひさしい	待久
ほどひさしい	程久
ふさしい久	
ふさふさしい	総総・房房
ふさぶさしい	
いけふさふさしい	
まさしい	正
まざまざしい	
やさしい	優・易
きやさしい	気優
ものやさしい	物優
なまやさしい	生易・生優
こころやさしい	心優
うすうすしい	薄薄

すずしい	涼
ずずしい	凜凜
こずずしい	小涼
ものすずしい	物涼
こころすずしい	心涼
かまびすしい	囁・喧
まづしい	貧
みずみずしい	瑞瑞・水水
やすやすしい	安安
せじせじしい	世辞世辞
あいそしい	愛想
ほそほそしい	細細
よそよそしい	余所余所
夕	
いたしい	痛痛・傷傷
いたいたしい	
うだしい	穩
うだうだしい	
おだしい	穩

ぞくたしい	俗	すじめただしい	筋目正	いきどしい	息
くだくだしい		おりめただしい	折目正	くどくどしい	
てくだしい	手管	ゆいしよただしい	由緒正	よくだしい	欲
したしい	親	ちつじよただしい	秩序正	ことごとしい	事事
あいしたしい	相親	じゅんじよただしい	順序正	まことしい	真実
したじたしい	親親	いらだたしい	苛立	たどたどしい	待遠
ただしい	正	はらだたしい	腹立	まちどしい	鬱陶
あたたしい		あわただしい	慌・遽	うっとしい	急度
さほうただしい	作法正	はなはだしい	甚	きつとしい	
かくちようただしい	格調正	はつしい		おとどしい	
れいぎただしい	礼儀正	はつはつしい	初初	ひとしい	等・均・斉
ぎようぎただしい	行儀正	やつやつしい	寔寔しい	あいひとしい	相等
ぎしきただしい	儀式正	あいらつしい	愛	ふとぶとしい	太
きそくただしい	規則正	おとろつしい	恐	まどしい	貧
きりつただしい	規律正	はではでしい	派手派手	まどしい	
じよれつただしい	序列正	ふてぶてしい		きよときよとしい	
けばたたしい		いとしい	愛	めんどしい	面倒
おびただしい	夥	うとうとしい	疎疎		
おりみただしい	折身正	おどおどしい		ナ	
めだたしい	目立	かどかどしい	角角	おなじい	同

かなしい	悲・哀・愛	こわっぱしい	硬―	びびしい	美美
そこがなしい	底悲	てばてばしい		わびしい	侘
うれしがなしい	嬉・悲	ねばねばしい	粘	まちわびしい	待侘
ものがなしい	物悲	ばばしい		ものわびしい	物侘
うらがなしい	心悲	かんばしい	芳・香・馨	うぶうぶしい	生生
うすらかなしい	薄悲	いびしい		さぶしい	寂・淋
こころがなしい	心悲	きびしい	厳	ずぶずぶしい	図分図分
おとなしい	大人	てきびしい	手厳	まぶしい	眩
はなばなしい	花花・華華	さびしい	寂・淋	しかつべしい	童―
むなしい	空・虚	こさびしい	小寂・小淋	わらべしい	
ほねほねしい	骨骨	そこさびしい	底寂	ほしい	欲
たのしい	楽	うすさびしい	薄寂―	いぼいぼしい	疣疣
こたのしい	小楽	うそさびしい	薄寂	おいぼいぼしい	
こころたのしい	心楽	くちさびしい	口寂	おぼしい	思・覚
ものものしい	物物	はださびしい	肌寂	おぼおぼしい	
ハ		ものさびしい	物寂・物淋	あわれつぼしい	哀―
こうばしい	香・芳	ねやさびしい	閨寂	とぼしい	乏
けげげばしい		うらさびしい	心寂・心淋	ものほしい	物欲
よろこばしい	喜・悦	うすらさびしい	薄寂	まぼしい	眩
		こころさびしい	心寂・心淋	めぼしい	

よぼよぼしい

マ

あまあましい

甘甘

いましい

忌

いまいまいしい

忌忌

けいまいまいしい

一忌忌

こいまいまいしい

小忌忌

くそいまいまいしい

糞忌忌

けちいまいまいしい

羨

うらいまいしい

羨

うまうまいしい

羨

ほほえましい

微笑・頬笑

いめえましい

羨

べんかいがましい

弁解

げいがましい

芸

すいがましい

粹

きずいがましい

氣随

あつせいがましい

压制

なんだいがましい

難題

ふへいがましい 不平

おうかましい

騷

そうがましい

騷

そうぞうがましい 忿念・騷騷

ようきゆうがましい 要求

じゆうがましい 自由

ようがましい 様

あいぎようがましい 愛敬

くじようがましい 苦情

ひひようがましい 批評

ふしぎがましい 不思議

ふぎがましい 不義

おんぎがましい 恩義・恩誼

りんきがましい 愷気

さいそくがましい 催促

ふそくがましい 不足

せんたくがましい 穿鑿・詮索

きようはくがましい 脅迫

ふふくがましい 不服

おしつけがましい 押付

ぶしつけがましい 不躙

うちつけがましい 打付

あてつけがましい 当付

いいわけがましい 言訳

おこがましい 痴・烏滸

かしがましい 囁・喧

くちかしがましい 口喧

はじがましい 恥

さしづがましい 指図

おんきせがましい 恩着

せせかましい 余所

よそがましい 口喧

くちがましい 厚

あつかましい 厚

いけあつかましい 一厚

いかつがましい 蔽

しかつがましい 蔽

りくつがましい 理屈

くぜつがましい 口舌

ふんべつがましい 分別

やかましい	喧	おやがましい	親	おんがましい	恩
てがましい	手	いけやがましい	喧	げんぎんがましい	現銀
つらあてがましい	面当	こやかましい	小喧	いけんがましい	意見・異見
ついでがましい	序	くそやかましい	糞喧	きやくしんがましい	隔心
さしでがましい	差出	くちやかましい	口喧	ふしんがましい	不審
なたてがましい	名立	しちやかましい	喧	そうだんがましい	相談
へだてがましい	隔	みみやがましい	耳喧	ゆだんがましい	油断
かつてがましい	勝手	えんりよがましい	遠慮	ひなんがましい	非難
かどがましい		みだらがましい	淫	たにんがましい	他人
かごとがましい	託言	おごりがましい	驕・奢	ひはんがましい	批判
わざとがましい	態	ほこりがましい	誇	みれんがましい	未練
ひとがましい	人	あなずりがましい	侮	たくましい	逞
おとながましい	大人	ゆすりがましい	揺・強請	ぎようたくましい	仰逞
ほねがましい	骨	ねだりがましい	強請	なみだぐましい	涙
とのがましい	殿	みだりがましい	濫・猥	あらくましい	荒
ものがましい	物	いつわりがましい	偽	せせこましい	
みみがましい	耳驚	はれがましい	晴	せせつこましい	
うらみがましい	恨	あわれがましい	哀	こまごましい	細細
ゆめがましい	夢	いろがましい	色	あらこましい	荒
やかましい	喧	さわがましい	騒	さまじい	

あさましい	浅	つましい	儉	こころやましい	心病
いさましい	勇	きづましい	気詰	うらましい	恨
すさまじい	凄	つつましい	慎	さみしい	寂・淋
こすさまじい	小凄	つづましい	約	うそさみしい	薄寂
めざましい	目覚	つまづましい	睦	くちざみしい	口寂
いじましい		むつまじい	仲睦・中睦	ものさみしい	物寂・物淋
かしましい	囁・姦・喧	なかむつまじい	疎	うらさみしい	心寂
みみかしましい	耳囁	うとましい	疎	こころさみしい	心寂・心淋
したしましい	親	おとましい	疎	ふとこころざみしい	懐寂
かなしましい	悲	かどましい	生	さむしい	寂・淋
さげすましい	蔑	なましい	生	くちさむしい	口寂
なすましい	泥	なまなましい	生生	さむざむしい	寒寒
おぞましい	悍	このましい	好	こころざむしい	心寂・心淋
おぞましい	鈍	まましい	繼	いめいめしい	心寂・心淋
のぞましい	望	いめましい		いかめしい	厳
いたましい	痛・傷	やましい	疾・疚	ぬめぬめしい	滑滑
かだましい	奸・夫	かやましい		まめしい	忠実
けたましい		なやましい	悩	まめまめしい	忠実忠実・実実
けたたましい		ものなやましい	物悩	めめしい	女女
ねたましい	妬・嫉	うらやましい	羨	ゆめゆめしい	夢夢

うらめしい	恨・怨	うやうやしい	恭	じんたいらしい	人体―・仁体―
つらめしい		にぎやしい	賑	そんだいらしい	尊大
おもおもしろい	重重	くやしい	悔・口惜	にくていらしい	憎体―
あらくもしい	荒―	つやつやしい	艶艶	じんていらしい	人体―・仁体―
さもしい		にやにやしい	早早	けんべいらしい	権柄―
ともしい	乏・羨	はやばやしい		いらいらしい	苛苛
こどもこどもしい	子供子供	もやもやしい		かわいらしい	可愛―
このもしい	好	ゆゆしい	由由・忌忌	けつこうらしい	結構
たのもしい	頼	いよしい		てんごうらしい	愛想―
すえたのもしい	末頼			あいそうらしい	愛想―
おくだのもしい	奥頼	ラ		たいそうらしい	大層―・大造―
ぶたのもしい	不頼	あらあらしい	荒荒	ごたいそうらしい	御大層―
こころだのもしい	心頼	あいらしい	愛―	めんどうらしい	面倒―
はもじい	は文字	かあいらしい	可愛	あほうらしい	阿呆―
おはもじい	御は文字	しさいらしい	子細―	べらぼうらしい	便乱坊―・篋棒―
ひもじい		すいらしい	粹―	えようらしい	栄耀―
ヤ		せいらしい	勢―	ぎようらしい	仰―
あやしい	怪・妖・奇	ぜいらしい	贅―	あいきようらしい	愛敬―
いやしい	賤・卑・鄙	ようだいらしい	容体―	おおぎようらしい	大仰―
		もったいらしい	勿体―	かいしようらしい	甲斐性―

きんどくらしい	気毒ー	こむさらしい		はなめずらしい	花珍
けんつくらしい	剣突	むさらしい	臭ー	ひとめずらしい	人珍
につくらしい	似付	くさらしい	臭ー	そとめずらしい	外珍
へたくらしい	下手ー	むごらしい	惨ー・酷ー	おとこめずらしい	男珍
ぞくらしい	俗ー	ほこらしい	誇	いなかめずらしい	田舎珍
すぐらしい	直ー	おなごらしい	女子ー	こえめずらしい	声珍
きつしくらしい		おとこらしい	男ー	めずらしい	珍
いんきらしい	陰気ー	にやつこらしい		いたずらいたずらしい	珍
うわきらしい	浮気ー	につこらしい	似ー	げんじらしい	驗著
めまぎらしい	目紛	しなっこらしい		しらじらしい	白白
ひがらしい	僻ー	いしこらしい		たのしらしい	楽ー
ばからしい	馬鹿ー	ばけらしい	化ー	いとしらしい	愛
せからしい		はなげらしい	鼻毛ー	やさしらしい	優ー
あさからしい	浅	なさけらしい	情ー	すこしらしい	少ー
いかがらしい	如何ー	いたいけらしい	幼気ー	いそがしらしい	忙ー
こじおらしい		ようらくらしい	瓔珞	おかしらしい	
しろえらしい	白絵ー	めまぐらしい	目紛	しょうしらしい	笑止ー
せんしょうらしい	僭上ー	けいはくらしい	軽薄	いじらしい	白
じんじょうらしい	尋常ー	こにくらしい	小憎	げんざらしい	
		にくらしい	憎ー	しらしい	

ひなめずらしい	鄙珍	びんぼうたらしい	貧乏―	やぼったらしい	野暮―
おんなめずらしい	女珍	ぶしようたらしい	不精―・無精―	あまつたらしい	甘―
ものめずらしい	物珍	すけべえたらしい	助兵衛―	いやみつたらしい	厭味―
みみめずらしい	耳珍	ながたらしい	長―	みじめつたらしい	惨―
こどもめずらしい	子供珍	えぐたらしい		いやつたらしい	嫌―
おおせらしい	仰―	ふそくたらしい	不足―	あまたらしい	甘―
あいそらしい	愛想―	にくたらしい	憎―	いやみたらしい	厭味―
うそらしい	嘘	そこつらしい	粗忽―	うらみたらしい	恨―
そらぞらしい	空空	むごたらしい	惨―・酷―	みじめたらしい	惨―
あたらしい	新	あつたらしい	惜	なめたらしい	無礼―
こあたらしい	小新	びんぼうつたらしい	貧乏―	はがゆたらしい	齒痒―
くちあたらしい	口新	ぶじゆうつたらしい	不自由	だらだらしい	
ことあたらしい	事新	ぶしようつたらしい	不精―・無精―	すかんだらしい	好―
ものあたらしい	物新	すけべえつたらしい	助兵衛―	ぎょうさんたらしい	仰山―
まあたらしい	真新	ながつたらしい	長―	じまんたらしい	自慢―
なまあたらしい	生新	きのどくつたらしい	気毒―	みれんたらしい	未練―
いみあたらしい	意味新	にくつたらしい	憎―	じちらしい	実―
みみあたらしい	耳新	むごつたらしい	惨―	りくつたらしい	理屈―
めあたらしい	目新	きざつたらしい	気障―	じつらしい	実―
すいたらしい	好―	ふけつたらしい	不潔―	せつらしい	

じんぶつらしい	人物―	すぼらしい	かいしよらしい	甲斐性―
ふんべつらしい	分別―	みすぼらしい	ひとがららしい	人柄―
にくてらしい	憎体―	みそぼらしい	ことさららしい	殊更―
こにくてらしい	小憎体	まずつぼらしい	いまさららしい	今更―
ことらしい	事―	やぼらしい	どうやららしい	
まことらしい	真―	じゃまらしい	うぬぼれらしい	自惚―
わざとらしい	態―	いやみらしい	こわらしい	怖―
ひとらしい	人―	まじめらしい	こわらしい	強―
おさならしい	幼―	いかつめらしい	すかんらしい	好―
きたならしい	汚―	しかつめらしい	りようけんらしい	料簡―・了簡―
こぎたならしい	小汚	こどもらしい	にんげんらしい	人間
おんならしい	女―	もつともらしい	うさんらしい	胡散―
しょうねらしい	性根―	いやらしい	ぎようさんらしい	仰山―
すばらしい	素晴	こいやらしい	しぜんらしい	自然―
すつばらしい	素晴	どいやらしい	まんらしい	慢―
すんばらしい	素晴	なまいやらしい	じまんらしい	自慢―
しかつべらしい		どうやららしい	みようもんらしい	名聞―
わらべらしい	童―	あじやらしい	みれんらしい	未練―
あほらしい	阿呆―	なにとやらしい	ぎりぎりしい	義理義理
いとしばらしい		かわゆらしい	あまりしい	余
				可愛―
				何―
				戯
				生嫌
				―嫌・一厭
				小嫌
				嫌―・厭―
				尤―
				子供―
				鹿爪
				巖―
				真面目―
				厭味―
				邪魔―
				野暮―
				不味―

あんまりしい	りりしい	うるしい	かるがるしい	くるしい	あぐるしい	あいくるしい	きぐるしい	いきぐるしい	きぎぐるしい	むさぐるしい	むしぐるしい	せぐるしい	ませくるしい	かたくるしい	あつくるしい	あつくるしい	あいつくるしい	かたつくるしい	あつつくるしい
	凜凜・律律	嬉	輕輕	苦	愛一	氣苦	息苦	聞苦	蒸苦	一苦	堅苦	厚苦	暑苦・熱苦	愛一	堅苦	暑苦・熱苦	堅苦	暑苦・熱苦	暑苦・熱苦
せまつくるしい	おもつくるしい	ほてくるしい	むなぐるしい	ねぐるしい	むねぐるしい	せばくるしい	せまくるしい	めまぐるしい	みぐるしい	みみぐるしい	おもくるしい	あやくるしい	こころぐるしい	ごらんぐるしい	いちじるしい	げんじるしい	ふるしい	まるまるしい	うれしい
狭苦	重苦		胸苦	寝苦	胸苦	狭苦	狭苦	目紛	見苦	耳苦	重苦	心苦	御覽苦	著	驗著	古	丸丸	嬉・快・歎	
こうれしい	こころうれしい	じれじれしい	なれなれしい	はればれしい	おろしい	かるがるしい	かるがるしい	あいくろしい	むさくろしい	かじくろしい	くんじくろしい	かたくろしい	へたくろしい	あつくろしい	ほてくろしい	すねくろしい	ねばくろしい	めまぐるしい	せまくろしい
小嬉	心嬉	焦焦	馴馴	晴晴		輕輕	輕輕	愛一			堅苦	下手一	暑苦		拗一	粘一	目紛	狭一	

あわあわしい	沫沫
にあわしい	似合
あわしい	淡
ワ	
よろしい	宜
おぼろおぼろしい	朧朧
まどろしい	
おっとろしい	恐
おとろしい	恐
せつろしい	
おっそろしい	恐
そぞろおそろしい	漫恐
そらおそろしい	空恐
ものおそろしい	物恐
そこおそろしい	底恐
すえおそろしい	末恐
おそろしい	恐
くろぐろしい	黒黒
おもくろしい	重苦

あわあわしい	淡淡
にあわしい	句
かがわしい	
いかがわしい	如何
なげかわしい	嘆
はじがわしい	恥
せせかわしい	
いそがわしい	忙
うたがわしい	疑
あつかわしい	厚
きづかわしい	氣遣
につかわしい	似付
ねがわしい	願
あぶかわしい	危
みだりがわしい	濫
みだれがわしい	濫
にぎわしい	賑
こころにぎわしい	心賑
くわしい	美・細・妙・詳・委・精
かぐわしい	芳・香・馨

そぐわしい	
けわしい	陰・嶮
ふさわしい	相応
せわしい	忙
えせわしい	似非
きぜわしい	氣忙
いきぜわしい	息忙
こぜわしい	小忙
ものせわしい	物忙
こころせわしい	心忙
せわせわしい	忙忙
そわせわしい	
いたわしい	勞・痛
いきだわしい	息
したわしい	慕
たたわしい	湛
めだたわしい	目立
いとわしい	厭
いまわしい	忌
うやまわしい	敬

おもわしい	思
ものおもわしい	物思
ちやわちやわしい	
にやわしい	似合
よわよわしい	弱弱
けがらわしい	汚・穢
みみけがらわしい	耳汚・耳穢
まぎらわしい	紛
はじらわしい	恥
わずらわしい	煩
うるわしい	美・麗
みめうるわしい	眉目麗・見目麗
くるわしい	狂
ものぐるわしい	物狂
こころぐるわしい	心狂
のろわしい	呪
けんけんしい	
ふだんふだんしい	不断不断

表20 『分類語彙表』からみるシク活用形容詞の意味傾向

●抽象的關係		354	●精神および行為		947
真偽	こそあど・他	0	心	心	0
	真偽・是非	11		感覚	3
	本体・代理	5		感動・興奮	10
類	等級・系列	0		飢渴・酔い・疲労・睡眠など	5
	関係	3		快・喜び	31
	因果	0		恐れ・怒り・悔しさ	49
	理由・目的・証拠	16		安心・焦燥・満足	46
	相對	1		苦惱・悲哀	90
	異同・類似	11		好悪・愛憎	137
存在	存在	1		敬意・感謝・信頼など	2
	出没	0		表情・態度	20
	必然性	0		信念・努力・忍耐	14
様相	趣・調子	17		自信・誇り・恥・反省	49
	特徴	26		欲望・期待・失望	29
	良不良・適不適	26		意志	13
	調和・混乱	10		判断・推測・評価	1
	弛緩・粗密・繁簡	11		詳細・正確・不思議	25
	美醜	35		意味・問題・趣旨など	3
	難易・安危	22		説・論・主義	0
力	力	8		見聞き	3
作用	作用・変化	5	言語	言語活動	63
	連続・反復	1		評判	3
	動き	0	生活	文化・歴史・風俗	46
	動揺・回転	0		人生・禍福	16
	固定・傾き・転倒など	0		労働・作業・休暇	10
	進行・過程・経由	2		生活・起臥	0
	走り・飛び・流れなど	0		身振り・立ち居・動作	0
	入り・入れ	0	行為	身上	16
	包み・覆いなど	0		人柄	55
	乗り降り・浮き沈み	0		才能	44
	統一・組み合わせ	0		威厳・行儀・品行	35
	分割・分裂・分散	0		行為・活動	29
	開閉・封	0	交わり	交わり	16
	接近・接触・隔離	0	待遇	公式・公平	4
	切断	0		待遇・礼など	46
	限定・優劣	1	経済	経済・収支	7
時間	時間	8		貧富	27
	時機	1			
	毎日・毎度	5			
	現在	0	●自然現象		121
	過去	0	自然	自然	2
	未来	0		光	13
	順序	1		色	6
	終始	0		音	28
	新旧・遅速	20		におい	4
	時間的前後	1		味	5
	即時	3		材質	7
空間	空間・場所	0	物質	水・乾湿	0
	方向	0		気象	6
形	形	8		火	0
量	多少	12		熱	0
	長短・高低・深浅・厚薄・遠	10	天地	地	9
	広狭・大小	10	生物	生物	1
	速度	19	身体	身体	8
	軽重	2	生命	生	11
	寒暖	11		生理・病気など	21
	程度	27			
	限度	1			
	過不足	3			
	一般・全体・部分	0			

表21 シク活用形容詞の意味分類

上代語	漢字表記	意味分類	中古・中世語	漢字表記	意味分類	近代語	漢字表記	意味分類	『日国』項目
見出し語	漢字表記	意味分類	見出し語	漢字表記	意味分類	見出し語	漢字表記	意味分類	『日国』項目
			ありありし	存在し	存在一実在 (実在するに思われる)				
			ありつかうし	有付し	存在一是認				
			ありつかはし	有付し	存在一是認				
			あるめかし	有めかし	存在一実在 (実在するに思わせる)				
			うそがまし	嘘がまし	存在一真偽	いつわりがまし	偽一	存在一真偽 (うそくさい)	
うつし	現	①存在一実在②評価一正気				うそらしい	嘘	存在一真偽 (うそのように)	
			さつべらしい		存在一そのものにふさわしい性格を具え、体言しているさま				
			さやうめかし	然様めかし	存在一そのようすだと思われるさま				
			さるべかし	然べかし	存在一その場にふさわしいさま				
			さるめかし	然めかし	存在一みるからにそれ相当のものと思わせるさま				
			じちらかし	実らかし	存在一真偽 (真実、誠実)				
			じちらし	実らし	存在一真偽 (真実、誠実)				
			じつらし	実らし	存在一真偽 (真実、誠実)				
			すぐしい	直	存在一是非 (正直)				
			すぐすぐしい	直直	存在一是非 (正直)				
			すぐらしい	直一	存在一是非 (まっすぐ)				
			そらぞらしい	空空	存在一空虚				
ただし	正	存在一是非 (正しい、まっすぐ)							②
			まことがまし	実がまし	存在一真偽 (真実のように思わせるさま)				②
			まことし	実し	存在一真偽 (本物、実直、正統)				④
			まことらし	実らし	存在一真偽 (本当だと思われるさま)				④
まさし	正	存在一真偽 (まこと、確か)				まざまざしい		存在一実在 (目の前に見るようである)	⑤
									②
わなし	空	①存在一空虚 (から) ②評価一価値 (無益)							
			あいしたい	相親一	関係一互いに仲がよい				
			あひおなじ	相同じ	関係一異同	あいひとしい	相等	関係一異同	
おなじ	同	関係一異同							
おやじ	同	関係一異同				おやがましい	親一	関係一類似	
かからはし	同	関係一相聞 (関係を断ちにくい)							
けし	異	関係一異同 (「異心」多用)							
			しとし	等し	関係一異同 (同等)	しさいらしい	子細一	関係一因果 (わけがありそうだ)	②
			なかむつまじ	仲睦・中睦	関係一仲が良い				
			なにとやらし	何一	関係一因果 (何かいわくありげである)				
ひとし	等	関係一異同 (同等)							⑤
ほかし	他	関係一異同							
			まつおなじ	真同じ	関係一異同 (同様)				
			まつななじ	真同じ	関係一異同 (同様)				
			ままし	継し	関係一継父・継母・継子または腹違いの間柄である				
			みこみこし	神子神子し	関係一類似 (髣髴とさせる、神がかり的なさまである)	もっともらしい	尤一	関係一因果 (そうするだけの理由があるようである)	
						ゆいじょただし	由緒正	関係一因果 (正当な来歴がある、正しいいわれを帯びている)	
			ゆゑゆゑし	故故し	関係一因果 (由緒ありげな格調の高さがみられるさま)				
			やうがまし	様がまし	関係一因果 (わけがありそうだ)				②
			よしましし	由由し	関係一因果 (いわくありげなさまである)				
			よぞよぞし	余所余所し	関係一無関係である				②
			わらうべし		関係一類似 (子供じみている)				
			わらべらし	童らし	関係一類似 (子供じみている)	わらべしい	童一	関係一類似 (子供じみている)	
われじ		関係一異同 (自分自身のことのように)							
あらたし	新	時空一新旧 (「新年」多用)							⑤

			ゆめがまし ゆめゆめし	夢がまし 夢夢し	量的—多少（きわめて少である） 量的—多少（きわめてわずかである）	べらぼうらしい 便乱坊一・窓	量的—程度（まったくとんでもない）		
			あかあかし	赤赤し	属性—色	あおおしい 青青	属性—色	②	
						あわしい 淡	属性—色、味、調子などが薄い		
いかし	厳	①属性—自然（樹木繁茂）②様相—おごそか③評価—価値（重大）				うすうすしい 薄薄一	属性—薄い		
			うつつし	鬱鬱し	属性—自然（気が曇っていて、陰気である）				
おほほし	鬱	①属性—自然（火、月夜の明暗）②対自—不快③評価—才能（愚か）	かどかし 角角し		①属性—形（角が突きだしている）②評価—性格が円満でない			④	
くまくまし		属性—自然（道、山谷の奥が深くて暗い）	ようなきさま くもらほし	曇し	属性—自然				
			けはし	険し	属性—山や坂などの傾斜が急で、道が急峻である	くろくろしい 黒黒	属性—色	⑦	
ごごし		属性—自然（山道などで、岩がごっこつて険しい）	こほはし こまごまし	強強し 細細し	属性—材質（硬そうで、弾力性・柔軟性に欠けている） 属性—小さい、細かい			②	
						こわばしい こわらしい	硬一 強一	属性—材質（硬そうで、なめらかでない） 属性—材質（かたくてごわごわした感じ）	
さがし	険	属性—自然（山や坂が険しい、波が激しい）	しららし そぼそぼし	白白し 稜稜し	属性—色（白く見える） 属性—物事が円滑さを欠く	しろえらしい たいだいしい	白繪一 大大	属性—色（色つやがない、みずぼらしい） 属性—太っている、大きい	③
たぎたぎし		属性—自然（道が凹凸・高底・深淺のある状態）				ながしい ながたらしい ながたらしい	長 長一 長一	属性—長短（長い） 属性—長短（長い） 属性—長短（長い）	
にたし		属性—自然（水気が多い）							
にはし		属性—自然（にわか、波があわただしい）				ぬめぬめしい はるめかしい	滑滑 春一	属性—なめらかですべるようである 属性—自然（春らしい感じである）	⑤
			はればれし ふかふかし	晴晴し 深深し	属性—自然（よく晴れわたって明るい） 属性—深淺（どこまでも深いさま）	ふとぶとしい ふゆめかしい	太太 冬一	属性—太い（姿、声） 属性—自然（冬らしい様子である）	③
			ほねがまし ほねほねし	骨がまし 骨骨し	属性—形（骨張ってごっこつしている） 属性—形（骨張ってごっこつしている）	まるまるしい	丸丸	属性—形（まるまるとしたさま）	
			あさあざし あたあだし あつかほし	鮮鮮し 様相—並外れた勢い 様相—難易（処置しにくい）	様相—鮮明				
						あぶかしい あぶかわしい あぶつかしい あぶなかしい あぶなっかしい あまあましい	危 危 危 危 危 甘甘	様相—安危（危ない） 様相—安危（危ない） 様相—安危（危ない） 様相—安危（危ない） 様相—安危（危ない） 様相—表情（やさしい）	
			あやうしい あやかしい あやぶまし あらあらし 粗粗し あらまし あわあわしい いかいかし	危 様相—弱調しい、不明瞭 危し 荒荒し 粗粗し 荒し 様相—変化（くずれやすく、消えやすい） 厳厳し	様相—安危（危ない） 様相—弱調しい、不明瞭 様相—安危（危ない） ①様相—猛烈②評価—言動（乱暴、粗野） ①様相—粗雑②評価—価値（品質が基準に達していない） ①様相—勢いが激しい（風、波）②評価—言動（乱暴、粗野） 様相—変化（くずれやすく、消えやすい） 様相—厳めしい、荒々しく激しい	いかつかましい いかつめらしい	厳一 厳一	様相—厳めしい 様相—形式ばっている	② ②

						しちむずかしい	一難	様相一難易 (困難、面倒、こみ入っている)	
						しなっこしい		様相一態度、動作などがしなやかである	
						しなっこらしい		様相一態度、動作などがしなやかである	
						じゃまらしい	邪魔一	様相一妨害	
						じゅんじょただし	順序正	様相一調和 (整然としている)	
						じょうしい	笑止	様相一滑稽、気の毒	
						しょうらしい	笑止一	様相一滑稽、気の毒	
						しまむずかしい	一難	様相一難易 (困難、面倒)	
						じょれつただし	序列正	様相一調和 (順序がまちがっていない)	
				しれがまし	痛がまし	様相一馬鹿げている			
				じんじょうらし	尋常一	様相一常態 (尋常)			
すがし		①様相一清らか②対自一快い							
						すねくろしい	拗一	様相一異常 (拗ねた様子、ひねかれているさま)	
						せいらしい	勢一	様相一威勢がある	
				せはし	忙し	様相一速度や調子が速く、次から次へと	間断なく続いている		⑤
						ぞとめずらしい	外珍	様相一外に出ることがすくないので外の様子が目新しい	
						たいぞうらしい	大層一・大造	様相一おおげさ	
						だらだらしい		様相一しまりがない、だらだらしている	
						ちつじょただし	秩序正	様相一調和 (順序やまりがきちんとととのっている)	
						ちゃんちゃらおかしい		様相一笑止千方である	
				つづまし	約し	様相一緊縮 (節約、質素)			
				つまし		様相一緊縮 (節約、質素)			②
				とのがましい	殿一	様相一殿様ぶっている		てんごうらしい	
				なずましい	泥	様相一進行状態 (難波)			
なまし	生	様相一生、新鮮		なまなまし	生なまし	様相一新鮮さ (生きている)			②
									②
						なまやさしい	生易・生優	様相一難易 (たやすい、なみひととおりである)	②
						なんだいがまし	難題一	様相一難易 (難題のきらいがある)	
				にぎにぎし	賑賑し	様相一賑やか			
				にぎはし	賑し	様相一賑やか、繁盛			
				にぎははし	賑し	様相一賑やか、繁盛			
						にやにやしい		様相一表情 (やさしくほほえんでいる、やわらかい)	
						ねぼくろしい	粘一	様相一いやにねぼけする	
						ねぼねぼしい	粘粘	様相一べたべたしている	
				はえばえし	映映し	様相一きわだっている、非常にはえて見える			②
はげし	烈	様相一勢いが強い (気、性、風、波)							
				はつしい		様相一安危 (危険)			
				はやばやし	早早し	様相一速度 (迅速)			
				はれがまし	晴がまし	様相一表立っている、公である			③
				ひとさわがしい	人騒	様相一混乱 (人の出入りなどがはげしく騒がしい)		ひちむずかしい	一難
								様相一難易 (難しい)	
						ひとだかしい	人高	様相一混乱 (人が多く集まる)	
						ふけつたらしい	不潔一	様相一不潔	
						ふきふきしい	総縁・房房	様相一多く集まって垂れ下がる	
						かさかさしい		様相一おおげさ	②
						ふだんふだんしい	不断不断	様相一常態 (不断と変わらない感じ、いつもの様子)	
				ほれほれし	惚惚し	様相一確かさ (意識がぼんやりとして、認識できない状態である)			
						ませくるしい		様相一年の割に大人びている	
				まだるこしい		間怠一		様相一調子 (時間、努力を多く費やしてめんどうである)	
				まだるっこしい		間怠一		様相一調子 (時間、努力を多く費やしてめんどうである)	
				まだるっこしい		間怠一		様相一調子 (時間、努力を多く費やしてめんどうである)	
				まどしい		様相一速度 (手間どって遅い)			
				まどろかしい		様相一速度 (手間どって遅い)			
				まどろこしい		様相一速度 (手間どって遅い)			
				まどろしい		様相一速度 (手間どって遅い)			
				まどろっこしい		様相一速度 (手間どって遅い)			

									みずみずしい みだりがましい	瑞瑞・水水 産一・糞一	様相—光沢があって著々しい、生氣があって美しい 様相—混乱(秩序や規律、作法に反するさま)	
みだりかは	妄	様相—混乱(乱雑、無秩序)										⑤
			みだれがはし	乱がはし	様相—混乱(秩序や規律、作法に反するさま)							
								みみめずらしい むさくるしい	耳珍		様相—異常(あまり聞いたことがない) 様相—乱雑(だらしがなく不潔である)	
			むさくらうし むさくろしい むさらし めたし		様相—乱雑(だらしがなく不潔である) 様相—乱雑(だらしがなく不潔である) 様相—乱雑(だらしがなく不潔である)							
				目立し	様相—目立つ							
								めだたわしい めぼしい めんどうしい めんどうらしい めんどしい	目立 面倒一 面倒一 面倒一		様相—目立つ 様相—特に目立っている 様相—難易(面倒くさい) 様相—難易(面倒くさい) 様相—難易(面倒くさい)	
			ものがまし ものものし	物がまし 物物し	様相—おおげさ 様相—厳めしき(おごそかだ、堂々としている)							③
								みやこしい やっこしい			様相—驚筋(複雑である、混乱していてわずらわしい) 様相—驚筋(複雑である、混乱していてわずらわしい)	
ゆるほし	縦	様相—緩やか	ゆるかしい	緩	様相—弛緩(ゆったりとしている、ゆとりがある)							
				よわよわし	弱弱し	様相—力がないように見えるさまである		よぼよぼしい			様相—体つきや足どりが弱々しく、危なっかしいありさまである	
								らがしい れいれいしい	乱 離離		様相—混乱(やかましい、騒がしい) 様相—目立つ(人目につくように派手に飾りたてている)	
おきわかし	分明	様相—はっきり										
			あつし せはせはし	篤し 忙し	境遇—病弱 境遇—多忙							⑤
			いそがはし おもおもし	忙し 重重し	境遇—多忙 境遇—身上(地位身分が高く威厳がある)			いそがしらしい	忙一		境遇—多忙	⑤
およし		境遇—生命(老)										
			こたし こといそがはし さもとらし しやうらかしい しょうろがしい すくし	小楽し 事忙し 境遇—しかるべき身分・家柄であると、納得されるさま 性らかしい 境遇—身上(素性が正しい) 境遇—身上(素性が正しい) 健し	①境遇—裕福②対自—安楽 境遇—多忙 境遇—しかるべき身分・家柄であると、納得されるさま 境遇—身上(素性が正しい) 境遇—身上(素性が正しい) 境遇—健康							
								すじめたらしい すぼらしい	筋目正		境遇—身上(立派な血筋、由緒ある家系) 境遇—貧しい(しみつたれている、貧弱、貧相)	②
								たのしらしい ちやうじようしい びんぼうたらしい びんぼうたらしい	楽一 長上 貧乏一 貧乏一		境遇—裕福(暮らし向きなどが豊かで、不足がない) 境遇—身上(目上らしいさま) 境遇—貧乏 境遇—貧乏	
			ふくふくし	福福し	境遇—みるからに金持ちで幸福そうである)							
まづし	貧	境遇—貧しい						ふところさみしい	懐寂		境遇—金回りが悪い、所持金・財産が乏しい)	②
			まどし	貧し	境遇—貧乏							
								みじめたらしい みじめたらしい	惨一 惨一		境遇—いかにもみじめだという感じである 境遇—いかにもみじめだという感じである	
				みすぼらし	身卑し	境遇—貧乏(姿がやつれている、外見が貧弱である)					境遇—貧乏(姿がやつれている、外見が貧弱である)	
			やつやつし よたたし あさすさまじ あせぐらうし	寥寥し 夜多し 朝冷まじ 汗ぐらうし	境遇—貧乏(ひどくやつれている、非常にみすぼらしい) 境遇—多忙(夜通しねないでばたばたするさま) 感覚—温度(秋の朝の寒さ) 感覚—眼堂(汗臭い)			みそぼらしい ものせわしい	物忙		境遇—多忙(せかせかしている、いそがしい)	②

				あつかはし	暑かほし	感覚—温度 (蒸暑い)							
				あつくらしい	暑苦・熱苦	感覚—温度 (暑い)							
				あつくらうし	暑くらうし	感覚—温度 (暑い)							②
				あつくらしい	暑苦	感覚—温度 (暑い)							
				あつくらはし	暑くらはし	感覚—温度 (暑い)							
								あつこくらしい	暑苦・熱苦	感覚—温度 (暑い)			
								あまたらしい	甘一	感覚—味覚 (あまずき)			
								あまつらしい	甘一	感覚—聴覚 (声)			
								いけそうぞうし	一忿怒・一騒	感覚—聴覚 (いやにさわがしい)			
								いげやかましい	二喧	感覚—聴覚 (いやにうるさい)			
				うすかうばし	薄香し	感覚—匂い							
								おいしい	美味・旨味	感覚—味覚 (うまい)			
かくはし		①感覚—匂い②対他一愛 (心ひかれる)		かがやかしい	輝・耀	感覚—視覚 (まぶしい)							③
				かしかまし		感覚—聴覚 (耳ざわりなど騒々しい)							③
				かしまし	喧し	感覚—聴覚 (耳障り)							
				かまびずし	喧し	感覚—聴覚 (耳障り)							
				かまびぞし	喧し	感覚—聴覚 (耳障り)							
				かんばし	香し・芳し	感覚—匂い			かやましい		感覚—聴覚 (耳障り)		
								くさらしい	鼻一	感覚—嗅覚 (臭い)			③
								くそやかましい	糞喧	感覚—聴覚 (やかましい, うるさい)			
								くちかしがまし	口喧	感覚—聴覚 (口うるさい)			
				くちがまし	口がまし	感覚—聴覚 (口数が多い)							
								くちやかましい	口喧	感覚—聴覚 (口数が多くてうるさい)			②
かうばし*	香し	感覚—匂い		こすさまじ	小凄じ	感覚—温度 (風などが寒い)							
				こすずし	小涼し	感覚—温度 (涼しい)							
				ことがまし	言がまし	感覚—聴覚 (口うるさい)							
								こやかましい	小喧	感覚—聴覚 (口うるさい)			
								さわさわしい	寒寒	感覚—温度 (寒い)			
さわがし*	騒し	①感覚—聴覚②様相—不安定						さわがましい	騒一	感覚—聴覚 (物音が大きくてうるさい)			⑥
								ざわめかしい		感覚—聴覚 (さわがしい, やかましい)			
								しちやかましい	二喧	感覚—聴覚 (不必要と思われるほどうるさい)			
すさまじ*	寒じ・冷じ	感覚—温度 (風などが寒い)											⑧
すずし	冷	感覚—温度 (さわやか)											⑧
				すずまし	涼し	感覚—温度 (冷氣)							
								そうがましい	騒一	感覚—聴覚 (騒がしい)			
								そうぞうがまし	忿怒一・騒騒	感覚—聴覚 (騒がしい, うるさい)			
				そうぞうし	忿怒し	感覚—聴覚 (耳にうるさい)							
				そこすさまじ	底凄じ	感覚—温度 (冷え冷えとした気配)							
つからし	疲	感覚—疲労						ひえびえしい	冷冷	感覚—温度 (寒い)			
								ひもじい		感覚—肌膚 (空腹である, 飢えている)			
まぎらはし	紛し	感覚—視覚 (まばゆい)											⑤
				まぶしい	眩	感覚—視覚 (明る過ぎて, 目をあけていられない)			まずっぽい	不味一	感覚—味覚 (まずそうな様子)		②
				みみかしまし	耳聾	感覚—聴覚 (耳にやかましく聞こえる, うるさい)			まぼしい		感覚—視覚 (明る過ぎて, 目をあけていられない)		
				みみがまし	耳喧し	感覚—聴覚 (やかましくて, うるさい)							
								みみやかましい	耳喧	感覚—聴覚 (音や声などが, 騒々しい)			
								むしぐるしい	蒸苦	感覚—温度 (苦しいまでに蒸し暑い)			
								めまぎらしい	目紛	感覚—視覚 (形・色などが多種多様で, 目がちらちらする)			
								めまぐるしい	目紛	感覚—視覚 (ものが次々に移り変わって, 目がちらちらする)			
								めまぐるしい	目紛	感覚—視覚 (ものが次々に移り変わって, 目がちらちらする)			
								めまぐるしい	目紛	感覚—視覚 (ものが次々に移り変わって, 目がちらちらする)			
								ものすずしい	物涼	感覚—温度 (さわやかである)			
				やかまし		感覚—聴覚 (音や声などが大きかったりして, 神経をいらだたせる)							⑥

やほし	肌	感覚一肌感					やっかましい	喧	感覚一聴覚 (音や声などが大きかったりして、神経をいらだたせる)	
あからし	眼	対自一悲しみ	わわし							
							あぐるしい		対自一苦しみ (窮屈)	
あさまし		対自一驚き					あけしい	明	対自一快い	⑧
			あせがまし	汗がまし	対自一恥					
							あつくるしい	厚苦	対自一苦しみ (着物が厚っぽくて苦しい)	
							あやくるしい		対自一苦しみ (手足がだるい、中風)	
			あわたたし	慌し	対自一焦燥					②
			あはれし	哀し	対自一悲しみ					
							いきぐるしい	息苦	対自一苦しみ (呼吸、圧迫感)	②
							いきせわしい	息忙	対自一苦しみ (苦しそうに息をつくさま)	
			いきだうし	息だうし	対自一苦しみ (呼吸が早く、あえぐように荒いさま)					
			いきだはし	息だはし	対自一苦しみ (呼吸が早く、あえぐように荒いさま)					②
いきづかし	気衝	対自一感嘆 (悲しみ)								
			いきづがはし	息づがはし	対自一苦しみ (呼吸が困難な状態)					
			いきどろしい	息	対自一苦しみ (息がせわしい)					②
							いきどおしい	息	対自一苦しみ (息がせわしい)	
いきどほろし		対自一不快 (憂鬱)					いきどしい	息	対自一苦しみ (息がせわしい)	
いたはし	労	対自一苦しみ (骨折って苦しい)	いたづがはし	勞し	対自一苦しみ (過重な負担)		いたしい		対自一苦しみ (からだに苦痛)	④
いたぶらし		対自一焦燥								
いとほし	労	対自一苦しみ	いとうしい		対自一苦しみ					
										③
			いらだたい	苛立	対自一焦燥				対自一恐れ (気味が悪い)	
							いびしい			
							うざかしい		対自一嫌悪 (うるさい、むさくるしい)	
							うざっかしい		対自一嫌悪 (面倒、うるさい)	
							うすさびしい	薄寂一	対自一不快	
							うすらかなしい	薄悲	対自一悲しみ	
							うすらさびしい	薄寂	対自一不快	
			うそがなし	うそ悲し	対自一悲しみ					
							うそさびしい	薄寂	対自一不快	
							うそさみしい	薄寂	対自一不快	
			うそはづかし	うそ恥し	対自一恥					
							うだしい	穩	対自一安心 (穩やかで、のんびりしている)	
うただぬし		対自一楽しみ								
うただのし		対自一楽しみ								
			うつつうし	鬱陶し	対自一不快					②
			うつとし	鬱陶し	対自一不快					
			うつはづかし	打恥し	対自一恥					
うむがし		対自一喜び					うぬぼれらしい	自惚一	対自一自尊 (自惚れ)	
			うらうらし		対自一安心 (おだやかで、安らかな気持)					
うらがなし		対自一悲しみ								
			うらさびし	心寂し	対自一不快					
							うらさみしい	心寂	対自一不快	
							うらはずかしい	心恥	対自一恥	
							うるしい	嬉	対自一喜び	
うれし	敏	対自一喜び								
			うれしがなし	嬉悲し	対自一悲喜					
			うれはし	憂し	対自一不快					
							えぐたらしい		対自一嫌悪 (憎たらしい)	
ゑまはし		対自一喜び								
			おおそれがまし	恐がまし	対自一恐怖					

をし	措	①対他一借しむ、愛②対自一残念				おごりがましい	驕一・奢一	対自一自尊	③
			おそいし	対自一恐れ					
			おそし	対自一恐れ					
			おそれがまし	対自一恐縮					
			おそろし	対自一恐れ					③
						おっそろしい	恐	対自一恐れ	
						おっとろしい	恐	対自一恐れ	
						おどおどしい		対自一恐れ	
						おとこはずかしい	男恥	対自一恥	
			おとろし	対自一恐れ、うんざり					
おどろおどろし		対自一驚き				おとろっしい	恐	対自一恐れ、うんざり	
おむがし	欣感	対自一喜び				おほもじい	御は文字	対自一恥	
						おもくるしい	重苦	対自一苦しみ(陰鬱)	
						おもくろしい	重苦	対自一苦しみ(陰鬱)	
			おもだたし	面立し	対自一名誉				
			おもはづかし	面恥し	対自一恥	おもつくるしい	重苦	対自一苦しみ(陰鬱)	
おもひがなし		対自一悲しみ							
おもひぐるし		対自一苦しみ							
			おもひでがまし	思出がまし	対自一満足				
			おもふせし	面伏し	対自一恥				
			おろし	恐し	対自一恐れ				
			かたはらさびし	傍寂し	対自一不快				
かなし	悲	①対自一悲しみ②対他一愛(いとしい)							⑥
			かなしましい	悲	対自一悲しみ				
			かはゆらし		対自一愛(可愛らしい)	かわいらしい	可愛一	対自一愛(可愛らしい)	
			ききぐるし	聞苦し	対自一不愉快				
			きぐるしい	気苦	対自一苦しみ(つらく悲しい)				
			きづかはし	気遣し	対自一心配	きぜわしい	気忙	対自一焦燥	②
						きづましい	気詰	対自一心配	
						きはづかしい	気恥	対自一恥	
						きむずかしい	気難	対自一不快(気分がすぐれない)	②
						くいしい		対自一悔しさ	
						くじょうがまし	苦情一	対自一不満(文句がありそうである)	
						くせつがまし	口舌一	対自一不満(文句、苦情があるらしい)	
						くそいまいまし	糞忌忌	対自一怒り	
			くちはづかし	口恥し	対自一恥(覗かれてきまりが悪い)				
			くやくやし		対自一不安や不満				
くやし	悔	対自一残念							②
くるし	苦	対自一苦しみ(肉体、精神)	くるおしい	狂	①対自一興奮②様相一常軌を逸している				⑧
						くるわしい	狂	対自一興奮	
						けいまいまし	一忌忌	対自一怒り	
			けたたましい		対自一驚き(びっくりさせるほど騒がしい)				③
			けたまし		対自一驚き(びっくりさせるほど騒がしい)				
						けちいまいまし		対自一怒り	
						こいまいまし	小忌忌	対自一怒り	
						こうれしい	小嬉	対自一喜び	
こころがな	情悲	対自一悲しみ	こころいそがは	心忙し	対自一焦燥				
こころぐる	情苦	対自一苦しみ、心配	こころうれし	心嬉し	対自一喜び				
									③
			こころさびしい	心寂・心淋	対自一不快	こころぐるわしい	心狂	対自一興奮	

						こころさみしい	心寂・心淋	対自一不快	
						こころさむしい	心寂・心淋	対自一不快	
						こころさわがし	心騒	対自一焦燥	
						こころすずし	心涼し	対自一快い	
						こころせわしい	心忙	対自一焦燥	
						こころたのしい	心楽	対自一楽しみ	
						こころだものしい	心頼	対自一安心	
						こころにぎわしい	心賑	対自一快い (心を浮き立たせる)	
						こころむつかし	心むつかし	対自一不快	
						こころやましい	心疚	対自一不満、怒り、あせり	②
						こさびし	小寂し	対自一不快	
						こぜわしい	小忙	対自一焦燥	
						こっぼすかしい	小恥	対自一恥	
						こはずかしい	小恥	対自一恥	
						こむずかしい	小難	対自一迷惑 (煩わしい)	
						こむつかし	小難	対自一迷惑 (煩わしい)	
						ごらんぐるしい	御覽苦	対自一苦しみ (見苦しい)	
						ごわらしい	怖一	対自一恐れ	③
さびし		対自一不快							
さぶし	不楽・不	対自一不快							③
						さみし	寂し	対自一不快	③
したゑまし		対自一喜び				さむしい	寂・淋	対自一不快	
						したもどかしい	舌一	対自一焦燥 (うまく言えなくてはがゆい)	
						じまんたらしい	自慢一	対自一驕り (自慢)	
						じまんらしい	自慢一	対自一驕り (自慢)	
しりひかし		対自一残念 (未練が残る)				じれじれしい	焦焦	対自一焦燥	
						すえおそろしい	未恐	対自一恐れ (将来どうなるかと予想する場合)	
すがすがし		対自一快い							②
						すずろがまし	対自一焦燥		
						せきせきし	威威し	対自一焦燥 (落ち着いてられない)	
						せぐるしい	一苦	対自一苦しみ (こみあげて苦しい、胸苦しい)	
						せつらしい		対自一焦燥 (気忙しい状態)	
						せつせつし	切切し	対自一苦しみ (身にしみて実感される)	
						せつろしい		対自一焦燥 (気忙しい状態)	
そがそがし		対自一快い				そこおそろしい	底恐	対自一恐れ	
						そこなしい	底悲	対自一悲しみ	
						そこさびしい	底寂	対自一不快	
						そぞろおそろしい	漫恐	対自一恐れ、不安	
						そぞろはし			
						そらおそろしい	空恐	対自一不安 (居心地が悪くて、逃げ出したい気持)	
						そらはづかし	空恥し	対自一恥	
						そわそわしい		対自一焦燥 (落ち着かない様子)	
						そんたいらしい	尊大	対自一驕り (尊大、傲慢)	
たくまし	快	対自一快い							④
たづたづし		対自一心配 (心細い、夜の道があぶなっかしい)							
たのし	楽	対自一楽しみ							③
						つつまし	懐し	対自一恥 (人目がはばかられ、気の引ける心持)	③
						てがまし	手がまし	対自一焦燥 (落ち着かない)	
						どくらし	毒らし	対自一恐れ (人をそこねる恐ろしさが感じられる)	
						なげかし	歎し	対自一悲しみ	
						なげかほし	歎し	対自一悲しみ	
						なごりおしい	名残惜	対自一残念 (心残り)	
						なまはずかしい	生恥	対自一恥	

なみだぐまし		対自一悲しみ									②
なやまし	不平・阻	対自一苦悩(障害、病気、官能)									④
			にがにがし	苦苦し	対自一不愉快(おもしろくなく感じる)						③
						ねぐるしい	寝苦	対自一苦しみ(安らかに眠りにつきにくい)			
						ねやさびしい	閑寂	対自一不快(独り寝で、寂しく物足りない)			
			のこりおしい	残惜	対自一残念(心残りして気持ちがひかれる)						
						はがゆたらしい	雷聲一	対自一焦燥(はがゆい)			
			はちがまし	恥がまし	対自一恥(外開が悪い)						
			はちがはし	恥がはし	対自一恥						
						はじらわしい	恥	対自一恥			
はづかし	恥	対自一恥									③
			はづかほし	恥かほし	対自一恥						
						はださびしい	肌寂	対自一不快(異性と肌を触れ合わせないため寂しい)			
						はなはずかしい	花恥	対自一恥(若い女性などのほじらうさま)			
			はもじい	は文字	対自一恥						
			はらだたし	腹立し	対自一怒り						
			ひとおそろし	人畏し	対自一恐れ						
						ふじゆうたらし	不自由	対自一不満(不自由)			
						ふそくがましい	不足一	対自一不満(不足)			
						ふそくたらしい	不足一	対自一不満(不足)			
						ふふくがましい	不服一	対自一不満(不服)			
						ふふいがましい	不平一	対自一不満(不平)			
			ほこらしい	誇	対自一驕り(得意で自慢したい気持)						
						ほこりがましい	誇一	対自一栄辱(栄響に感じる)			
						ほそぼそしい	細細	対自一不安(細くたよらないさま)			
						ほてくるしい		対自一恥(恥ずかしきのために身のほてる思いである)			
						ほてくろしい		対自一恥(恥ずかしきのために身のほてる思いである)			
						ほほえましい	微笑・類笑	対自一喜び(好ましくて、ほほえみたくなるようである)			
						まがしい	凶	対自一不安(不吉である)			
			まがまし		対自一不安(不吉である)						
						まけおしい	負惜	対自一悔しき(負けていることが口惜しい)			
						まどかしい		対自一焦燥(心がいらだっている)			
			みぐるし	見苦し	対自一苦しみ(外から見るのがつらい気持である)						③
						みみうとうしい	耳鬱陶	対自一不快(耳障りである、聞かざるしい)			
						みみぐるしい	耳苦	対自一苦しみ(聞くのがつらい)			
						みようもんらしい	名聞一	対自一栄辱(名誉をてらうようである)			
むがし	幸	対自一喜び									
						むずがかしい		対自一不快(機嫌が悪い、気に入らず不愉快である)			
			むづかし	難・六倍	対自一不快(機嫌が悪い、気に入らず不愉快である)						⑩
						むづがかしい		対自一不快(機嫌が悪い、気に入らず不愉快である)			
						むなぐるしい	胸苦	対自一苦しみ(苦痛を感じる)			⑤
						むねぐるしい	胸苦	対自一苦しみ(苦痛を感じる)			
						むやくしい	無益	対自一怒り(くやしい、腹が立つ)			
			めざまし	目覚まし	対自一驚き・不快(物事が心外であり目もさめる思いがする)						②
			めはづかし	目恥し	対自一恥(見られて気おくれする気持)						
			もどかし		対自一不満・焦燥(気に入らない、心がいらだっている)						②
			もどかほし		対自一焦燥(悠長でじつれたく思われるさま)						
						ものおしい	物借	対自一惜しい(物を失うのが惜しい)			
ものかなし	物悲	対自一悲しみ									
			ものぐるはし	物狂し	対自一興奮(何かにかりたてられるようで、じっと落着いていられない)						
			ものさびし	物淋し	対自一不快(寂しい)						
						ものさみしい	物寂・物淋	対自一不快(寂しい)			
			ものさわがし	物騒し	対自一焦燥(落着かない)						②
			ものすさまじ	物凄	対自一不快(感興がさめてしまい、気落ちしたりする様子)						②
						ものなやましい	物悩	対自一苦悩			
			ものわびしい	物侘	対自一不快(なんとなくわびしい、うらさびしい)						

やさし		対自—恥ずかしい (肩身が細い)				もやもやしい		対自—苦悩 (悩みごとがあるなどして、すっきりしない)	⑩
よろこぼし	悦	対自—喜び	やまし	病し	対自—不満 (思い通りにならなくて、不満・もどかしさなどが感じられる)				③
			わづらはし	煩し	対自—苦悩				⑤
			わづらうし	煩し	対自—苦悩				
			あいあいし	愛愛し	対他—愛 (可愛らしい)				②
			あいきやうがまし	愛敬がまし	対他—愛 (可愛らしい)				
						あいきょうらしい	愛敬—	対他—愛 (可愛らしい)	
						あいくるしい	愛—	対他—愛 (可愛らしい)	
						あいくろしい	愛—	対他—愛 (可愛らしい)	
			あいさうらし	愛そうらし	対他—愛 (親切)				
			あいそうらし	愛そうらし	対他—愛 (親切)				
			あいぞらし	愛ぞらし	対他—愛 (親切)	あいぞしい	愛想	対他—愛 (親切)	
						あいっくるしい	愛—	対他—愛 (可愛らしい)	
			あいらし	愛らし	対他—愛 (親切)				
あたらし	借	対他—借しむ				あいらっしい	愛—	対他—愛 (可愛らしい)	
			あつたらし	可借し	対他—借しむ				
			あはれがまし	哀がまし	対他—同情	あなずりがまし	侮—	対他—軽蔑	
						あわれっぽしい	哀—	対他—愛 (可愛らしい)	
			いたいけらし	幼氣らし	対他—愛 (優しく可憐なさま)	いじらしい		対他—愛、同情 (子供に多用)	
			いたいたし	痛痛し	対他—同情				②
			いたまし	痛し・傷し	対他—同情				②
			いとしい	愛—	対他—愛 (可愛らしい)、同情				
						いとしぼらしい		対他—愛 (可愛らしい)、同情	②
いとほし	厭	対他—嫌悪				いとしらしい	愛	対他—愛 (可愛らしい)	
			いまいまし	忌忌し	対他—憚る				⑥
			いまいまはし	忌忌はし	対他—憚る				
			いまはし	忌し	対他—憚る	いましい	忌	対他—憚る	②
						いめいめしい		対他—憚る	
						いめえましい		対他—憚る	
						いめましい		対他—憚る	
						いやごしい		対他—嫌悪	
いやし	賤	対他—軽蔑				いやっらしい	嫌—	対他—嫌悪	⑦
						いやみたらしい	厭味—	対他—嫌悪	
						いやみったらしい	厭味—	対他—嫌悪	
						いやみらしい	厭味—	対他—嫌悪	
						いやらしい	嫌—・厭—	対他—嫌悪	②
うつくし	愛	対他—愛							⑥
			うとうとし	疎疎し	対他—疎遠、不快				
			うとまし	疎し	対他—疎遠、不快、不安				②
うやうやし	恭	対他—尊重 (礼儀正しい)							②
			うやまわしい	敬	対他—尊重 (礼儀正しい)				
			うらいまし	羨し	対他—嫉妬				
うらごひし	裏恋	対他—愛							
うらごほし		対他—愛							
			うらまし	恨し	対他—恨み				
						うらみがまし	恨—	対他—恨み	
						うらみたらしい	恨—	対他—恨み	
うらめし	恨	対他—恨み							③
			うらめづらし	心珍し	対他—愛 (心ひかれる)				
うらやまし	妬忌	対他—嫉妬							②

			をそなし	幼し	対他一愛執	えんりよがまし	遠慮一	対他一疎遠 (遠慮しすぎる)	
						おとここしい	男恋	対他一愛	
						おとこめずらし	男珍	対他一愛 (男性を慕わしく感じる)	
			おとまし	疎し	対他一疎遠、嫌悪、不安				
			おもきらはし	面嫌し	対他一嫌悪				
			おもはし	思し	対他一愛 (いとおしく感じる)				③
						おんなめずらし	女珍	対他一愛 (女性を愛らしく感じる)	
						かあいらしい	可愛	対他一愛 (可愛らしい)	
			かごとがまし	託言一	対他一恨み (恨みごとを言っているようだ)				②
						きのどくつらし	気毒一	対他一同情	
						きのどくらしい	気毒一	対他一同情	②
			きやくしんがまし	隔心がまし	対他一疎遠 (水くさい)				
			きはらし	嫌し	対他一嫌悪				
			けけし		対他一疎遠 (他人行儀で親しみにくい)				②
こひし	恋	対他一愛							
こころうつ	心愛し	対他一愛 (いとしい)				こいやらしい	小嫌	対他一嫌悪	
こころこひ	心恋	対他一愛							
						こころやさしい	心優	対他一親切	
			こころゆかしい	心床	対他一愛 (心ひかれる)	こなつかしい	小懐	対他一愛 (懐かしい)	
						こにくでらしい	小憎体	対他一憎悪	
						こにくらしい	小憎	対他一憎悪	
			このまし	好し	対他一愛 (気に入る)				②
			このもし	好し	対他一愛 (気に入る)				②
こほし		対他一愛							
したし	親	対他一親近				さげすましい	蔑	対他一輕蔑	③
						したじたい	親親	対他一親近	
						したしましい	親	対他一親近	
			したはし	慕し	対他一愛 (心ひかれる)				②
			しのぼし	偲し	対他一愛 (隔っている人や場所が恋しく思われる)	じょうらかしい	情一	対他一愛 (愛情がありそうである)	
						しんせつめかしい	親切一	対他一親切	
						すいたらしい	好一	対他一愛 (気に入る)	
						すかんたらしい	好一	対他一嫌悪 (気に入らない)	
						すかんらしい	好一	対他一嫌悪 (気に入らない)	
						すなつかしい	素懐	対他一愛 (懐かしい、親しく思う)	
						せじせじしい	世辞世辞	対他一親近 (愛想がよい、お世じたっぶりである)	
			そねまし	嫉し	対他一嫉妬	たにんがまし	他人一	対他一疎遠 (遠慮や気兼ねをするさま)	
			ちちおかし	近近し	対他一親近 (昵懇である)				②
						どいやらしい	一嫌・一厭	対他一嫌悪	
						どうやらしい		対他一嫌悪、気が引ける	
						どうやららしい		対他一嫌悪、気が引ける	
			どくどくし	毒毒し	対他一憎悪 (にくにくしい、悪意を含んでいる)				
			とさまがまし	外様がまし	対他一疎遠 (格式ぶって、よそよそしいさま)				
			なさけがまし	情がまし	対他一親切 (思いやり)				
			なさけらしい	情一	対他一親切 (思いやり)				
なつかし		対他一愛 (離れがたい)				なまいやらしい	生嫌	対他一嫌悪	③
			なれなれし	馴馴し	対他一親近 (なれて心やすそうなさま)	にくたらしい	憎一	対他一憎悪	②
						にくつたらしい	憎一	対他一憎悪	
						にくていらしい	憎体一	対他一憎悪	
						にくてらしい	憎体一	対他一憎悪	
						にくにくしい	憎憎	対他一憎悪	
						にくらしい	憎一	対他一憎悪	②

			ねたまし のろのろし	妬し 呪呪し	対他一嫉妬、憎悪 対他一憎悪 (のろいたい気持)						
はし	愛	対他一愛				のろわしい	呪	対他一憎悪 (のろいたい気持)			
						ひとなつかしい	人懐	対他一親近 (人が妙に親しみをもって感じられる)			
						ひとめずらしい	人珍	対他一親近 (人に会ってなつかしく親しく感じる)			
						ひなめずらしい	鄙珍	対他一愛 (いなかふうで好ましい)			
			へだてがましい	隔一	対他一疎遠 (うちとけない様子)						
						みみげがらわしい	耳汚・耳機	対他一嫌悪 (不愉快な内容で、聞くのきえいやなほど)			
						むかしなつかしい	昔懐	対他一愛 (昔の思い出に心がひかれて慕わしい)			
						むかしゆかしい	昔床	対他一愛 (昔がしのばれる感じである)			
むつまじ	親	対他一親近									③
めづらし	珍	①対他一愛 (可愛らしい) ②評価一珍しい									⑤
めだし		対他一愛、賞賛									
ものこひし	物恋	対他一愛									
			ものなつかしい	物懐	対他一愛 (心が引かれる様子、なつかしい)						
ゆゆし	斎忌	対他一畏敬									⑦
			よそがましい	余所一	対他一疎遠 (他人行儀である)	ようらくらしい	瑣落	対他一同情 (かわいそうだ、きのどくである)			
			あらまほし		意向一願望	りんきがましい	悟気一	対他一嫉妬			
			いけんがましい	意見一・異	意向一意志 (説教忠告)	いいしい	言一	意向一意志 (いいたい)			
			いさまし	勇まし	意向一奮起						③
			いまめかはし	今めかはし	意向一意図 (今さら取り上げ)	いまさららしい	今更一	意向一意図 (今さら取り上げ)			
			うけらうし	受らうし	意向一意志 (喜んで受け入れたい)						
			おくだのもし	奥頼し	意向一期待						
			おくゆかし	奥ゆかし	意向一願望						②
おもほし		意向一願望				おしつけがましい	押付一	意向一意志 (押し付けるような態度)			
						おんがましい	恩	意向一意志 (ありがたく思わせるようとする態度)			
						おんぎがましい	恩義一・恩誼	意向一意志 (ありがたがらせようとする態度)			
						おんきせがましい	恩着一	意向一意志 (ありがたく思わせるようとする態度)			
			かざりがまし	限がまし	意向一意志 (区切りをもうけたがる)						
			きかまほし	聞まほし	意向一願望 (聞きたい)						
きほし	欲服	意向一意志									
			くちをし	口惜し	意向一失望、落胆	くちあたらしい	口新	意向一意図 (ことさらに言うさま)			③
						くちさびしい	口寂	意向一欲望 (口にするものがほしい感じ)			
						くちさみしい	口寂	意向一欲望 (口にするものがほしい感じ)			
						くちさわしい	口寂	意向一欲望 (口にするものがほしい感じ)			
			げにもらし	実もらし	意向一意図 (意図的に真実らしく見せる)						
			ことあたらし	事新し	意向一意図 (ことさらに初めてのことのように)						②
						ことさららしい	殊更一	意向一意図 (わざとらしい、改まったように感じる)			
						しらしい	白	意向一意図 (知らないふりをしている)			
						すいがましい	粹一	意向一意図 (さも粹人らしくふるまっている)			
			すえたのもし	末頼	意向一期待 (将来有望)						
			すすまし	進し	意向一意志 (積極的に立ち向かっていこうとする気持)						
						せんさくがましい	穿鑿一・詮索	意向一意志 (探り求めたりしがちである)			
						そうだんがましい	相談	意向一意志 (相談めている)			
						そとなつかしい	外懐	意向一意志 (外出したい)			
						ついでがましい	序一	意向一意志 (事のついでにするようである)			
			とぼかし	惚し	意向一意図 (わざと知らぬふりをしているようである)						
						なたでがましい	名立一	意向一意図 (ことさらに評判を立てるようである)			
						ぬけぬけしい	抜抜	意向一意図 (知っていないが知らないふりをする)			
ねがはし	願	意向一願望									
			ねだりがまし		意向一欲望 (強請る、仕組んでゆするようである)						
			のぞまし	望し	意向一願望 (そうあってほしい)						

			ひとこひし	人恋し	意向一意志 (人に会いたい、人と話したい気持)							
ほし	欲	意向一欲望				ひとまちどおし	人等遠	意向一願望 (人の来るのが待ち遠しい)				③
			まちどほし	待遠し	意向一期待 (その時や事態が早く来ることを望んでいるさま)							
						まちどしい	待遠一	意向一期待 (その時や事態が早く来ることを望んでいるさま)				
			まちびさし	待久し	意向一期待 (その時や事態が早く来ることを望んでいるさま)							
みがほし	欲見	意向一意志				まちわびしい	待往	意向一期待 (その時や事態が早く来ることを望んでいるさま)				
みほし	欲見	意向一意志										
			ものほしい	物欲	意向一欲望 (ほしい、手に入りたい)							
			ゆかし		意向一願望 (それが心がひかれ、実際に自分で接してみたい気持)							⑥
						ゆすりがましい	掃一・強請一	意向一欲望 (おどし、おだろうとするように見える)				
						ようきゆうがまし	要求一	意向一欲望 (せひこうしてほしいと強く求める様子)				
						よくどうしい	欲一	意向一欲望 (欲が深い、欲ばりである)				
						よくどしい	欲一	意向一欲望 (欲が深い、欲ばりである)				
			わざとがまし	態とがまし	意向一意図 (いかにも意識的な感じである)							
わびし		意向一失望 (落胆し気力をなくした状態)				わざとらしい	態一	意向一意図 (不自然で、いかにも意識してそうしているようである)				⑥
あやし	怪	思考一不思議										⑧
			いかがし	如何し	思考一疑念を持つ							
いふかし	不審	思考一不審				いかがわしい	如何	思考一疑念を持つ				②
												②
うたがはし	疑	思考一疑い				うさんらしい	胡散一	思考一疑念を持つ				②
くし	奇	思考一不思議										
くすし	奇	思考一不思議										
くすばし		思考一不思議										
			くらべぐるし	比苦し	思考一判断が困難だ							
			げにげにし	実実し	思考一肯定し納得できる							
			しかりつべし	然つべし	思考一判断 (状況に照らして妥当だ)							
			しかるべし	然べし	思考一判断 (状況に照らして妥当だ)							
						ふしぎがましい	不思議一	思考一不思議				
						ふしんがましい	不審一	思考一不審				
			ものおもわしい	物思	思考一もの思いをする様子である							
			あくらし	悪し	評価一悪意							
			あさあさし	浅浅し	評価一才能 (浅はか)							
あし	悪	評価一価値 (不良)										
			あしあらがまし		評価一態度 (荒々しい)							
			あだあだし	徒徒し	評価一移り気	あじやらしい	戯	評価一態度 (ふざける)				
			あつかまし	厚かまし	評価一人柄 (ずうずうしい)	あだめかしい	婀娜一	評価一美 (容姿や態度)				
						あつかわしい	厚一	評価一人柄 (ずうずうしい)				
						あつせいがまし	圧制一	評価一態度 (無理じいするような態度)				
			あてあてし	当当し	評価一言語 (気に障ることを言う)	あてつけがまし	当付一	評価一態度 (あてつけるような態度)				
			あはうらし	阿房らし	評価一才能 (愚か)	あほらしい	阿呆一	評価一才能 (愚か)				
			あらかまし	荒かまし	評価一言動 (乱暴、粗野)							
			あらくまし	荒くまし	評価一言動 (乱暴)							
			あらくもし	荒くもし	評価一言動 (乱暴)							
			あはあはし	淡淡し	評価一才能 (軽薄)	あらこましい	荒一	評価一言動 (乱暴)				②
						いいわけがまし	言訳	評価一言語 (言い訳くさい)				
						いかがらしい	如何一	評価一不良 (よくない、下品)				
						いまいましい	生々	評価一性格 (活気にみちている)				
						いけあつかまし	一厚	評価一人柄 (ずうずうしい)				

							いけずうずうしい	一凶凶	評価一人柄 (ずうずうしい)		
							いげばかばかしい	一馬鹿馬鹿	評価一才能 (愚か)		
							いけふさふさしい		評価一人柄 (ずうずうしい)		
いさをし	功・動	評価一人柄 (勇敢、勤勉、てがらがある)									⑥
			いし	美し	評価一良						
							いしこらしい		評価一態度 (生意気)		
							いじましい		評価一人柄 (けちくさい)		
いすかし	傲慢	評価一性格 (曲がっている)									
いそし	勤	評価一勤勉									
			いたかがまし		評価一言動 (表面だけ、一人がよりな言動)						
							いたずらいたずらしい		評価一言動 (活発)		
			いつたうし	甚し	評価一 (打消) たいしたことのない、適当でない						
			いつたし	甚し	評価一 (打消) たいしたことのない、適当でない						
			いまめかし	今めかし	①評価一当世風だが、軽薄②意向一意図 (今さら取り上げ)						④
							いみあたらしい	意味新	評価一価値 (現代的な価値・重要性を持つ)		
			いみいみし		評価一良 (立派)						
			いやめづらし	歌珍し	評価一極めて珍しい						
			いらいらし	哥哥し	評価一性格 (許立ちやすい)						
							いろがましい	色一	評価一品行 (好色、淫ら)		
			いろめかし	色めかし	評価一好色、派手						
			うひうひし	初初し	評価一若若しくけがれのないさま		いんきらしい	陰気一	評価一性格 (陰気)		②
			うかうかし		評価一才能 (軽率)						
							うだうだしい		評価一才能 (愚か)		
							うぶうぶしい	生手	評価一若若しくけがれのないさま		
うらぐはし		評価一美	うまうましい		評価一言動 (上手)						
うるはし	愛	評価一美 (風景、容姿)、人柄 (誠実)									⑩
							うわきらしい	浮気一	評価一品行 (多情、好色)		
							えようらしい	栄耀一	評価一性格 (贅沢、わがまま勝手)		
							おうかましい		評価一才能 (愚か)		
ををし	雄	評価一人柄 (雄雄しい)									
			おほせらしい	仰らしい	評価一言語 (言葉に品位がある)						
			をここし	痴痴し	評価一才能 (愚か)						
おここし	沈黙	評価一人柄 (沈着豪毅)									
をさをさし	幹了・直	評価一才能 (機れる)									
			をさながまし	幼がまし	評価一言動 (幼稚)						
			をさなし	幼し	評価一才能 (幼稚、幼少)						
			おきならしい	幼一	評価一言動 (幼稚)						
			おずまし	擇し	評価一性格 (強情)						
			おぞまし	擇し	評価一性格 (強情)						②
おだひし	穏	評価一人柄 (穏やか)					おぞましい	鈍	評価一才能 (愚か)		③
			をとこらし	男らし	評価一言動 (女なのに言動が荒々しい)						
			おとながましい	大人一	評価一言動 (子供なのに、大人びているさま)						
			おとなし	大人し	評価一才能 (年長者らしい思慮、分別がある)						③
			をなごらし	女らし	評価一言動 (男なのに柔弱)						
			おめおめし		評価一態度 (弱気な不甲斐ないさま)						
			おもしろをかし	面白をかし	評価一情趣 (人の気持を愉快にさせる)						
							おりみただしい	折身正	評価一礼儀 (礼儀作法がきちんとしている)		
							おりめただしい	折目正	評価一礼儀 (態度や服装がきちんとしている)		
							おろしい		評価一悪い		
							おんならしい	女一	評価一性格 (しとやかでやさしい)		
			かひがひし	甲斐甲斐し	評価一価値 (かいのあるさま)						③
			かひがはし	甲斐がはし	評価一価値 (かいのあるさま)						
			かいしよろし	甲斐性一	評価一価値 (働きのあって、頼もしい)						
							かいしよろしい	甲斐性一	評価一価値 (働きのあって、頼もしい)		

						かくちょうだし かじくろしい	格調正	評価—体裁や調子が正当である 評価—人柄など（堅苦しい、自由がきかない）	
			かたくなし	頑し	評価—才能（愚か）、人柄（固執）、不体裁				
			かたくなはし	頑し	評価—才能（愚か）、人柄（固執）、不体裁				
						かたくろしい	堅苦	評価—人柄や態度（きまじめで厳格すぎる）	②
						かたたくろしい	堅苦	評価—人柄や態度（きまじめで厳格すぎる）	
						かたつろしい	堅苦	評価—人柄や態度（きまじめで厳格すぎる）	
かたまし	姦	評価—品行（心がねじけている）							
			かたはし	片端し	評価—優劣（欠陥や異常が認められ、見苦しい）				
						かかってがまし	勝手	評価—人柄（自分の都合だけで行ったりする）	
			かどがまし	角がまし	評価—態度（かどだっている、妥協しない）				
			かどまし	角まし	評価—態度（かどだっている、妥協しない）				
かるがるし	輕輕し	評価—才能（軽率）							②
						かるがるしい	輕輕	評価—才能（軽率）	
			かろがろし	輕輕し	評価—才能（軽率）				④
						ぎぎしい	儀儀	評価—体裁をつくろって堅苦しい	
						ぎざつらしい	気隙一	評価—態度（気隙である）	
						ぎしまだしい	儀式正	評価—礼儀（礼儀、作法がしっかりしている）	
						ぎずいがまし	気固一	評価—態度（気まま）	
						ぎぞくだしい	規則正	評価—言動（規則、原理に従う）	
						ぎっくらしい		評価—人柄（融通がきかない）	
			きつとしい	急度	評価—人柄（堅苦しい、きびしい）				
			きつねがまし	狐がまし	評価—人柄（にじけたずるい性根）				
						きやさしい	気優	評価—性格（優しい）	
						ぎようぎだしい	行儀正	評価—礼儀（行儀を守っている）	
						きょうはくがまし	脅迫一	評価—言動（脅迫するような言動）	
きらきらし	端正	評価—美（容姿）							
						きらめかしい	想一	評価—立派、きらめく	
						ぎりまりしい	義理義理	評価—人柄（義理がたい、厳格）	
						きりつただしい	規律正	評価—言動（規則にのっとっている）	
			きはきはし	際際し	評価—言動（水ぎわだってあざやかに処理するさま）				
			くせくせし	曲曲し	評価—情緒（一風変わっていて、嫌みが感じられるさま）				
くはし	妙・細	評価—美、優				くちさかしい	口賢	評価—才能（口先がうまい）	③
						くんじくろしい		評価—性格（優柔不断）	
						げいがまし	芸一	評価—態度（芸をひけらかすような態度）	
			けがし		評価—不潔				
			げすげすし	下衆下衆し	評価—優劣（品格が劣り、いやしげなさま）				
			げすし	下衆し	評価—優劣（下品）				
						けっこうらしい	結構	評価—見事	
						げんぎんがまし	現銀一	評価—自分の損得によってすぐ態度をかえるさま	
						げんけんしい		評価—態度や言い方がつけんどんである	
						げんざらしい		評価—言動が変わっている	
						げんじらしい	顯著	評価—人柄（現金である、効果できめんである）	
						げんじるしい	顯著	評価—人柄（現金である、効果できめんである）	
						げんつくらしい	剣突	評価—態度（荒々しく人につかかかるさま）	
						げんべいらしい	權柄一	評価—態度（もったいぶったさま、いばった態度）	
こざかし	小賢し	評価—才能（利口ぶっている、こましゃくれている）							③
						こじおらしい		評価—性格（ひかえめで従順な様子）	
こしつがまし	故実がまし	評価—才能（先例や典故によく通じて、口うるさくいうさま）							
ごたいやうらし	御大層一	評価—態度（いばった様子、もったいぶった様子）							
こつがまし	骨がまし	評価—風格（その道の真髄に通じている様子）							
ことあし	基業し	評価—事態が険悪である							
ことばさかし	言葉賢し	評価—才能（一人前にあれこれ言いたてるさま）							
						こどもこどもしい	子供子供	評価—言動（あどけない）	
						こどもらしい	子供一	評価—言動（あどけない）	
			こまかし	細し	評価—人柄（心づかいが、細部まで行き届いたさま）				
						こまつかしい	細	評価—人柄（心づかいが、細部まで行き届いたさま）	
						こわやくしい	小無益	評価—価値（役に立たない）	

			こめかうし	小目かうし	評価一人柄 (些細な点までいちいち議論だてするさま)				
			こやさし		評価一情趣 (優雅な趣のあるさま)				
			さいかくがまし	才覚がまし	評価一才能 (ありもせぬ知識や才能を誇示するさま)				
						さいそくがまし	催促	評価一態度 (催促するような様子)	
			ごうさがまし	造作がまし	評価一手数がかかって煩わしいと感じさせる				
			さかさかし	敷衍し	評価一才能 (才気煥発)				
さかし	賢	評価一才能 (賢明)				さしずがまし	指図一	評価一態度 (でしゃばって指図するようである)	⑥
			さしいでがまし	差出がまし	評価一態度 (でしゃばるようである)				
			さしでがまし	差出がまし	評価一態度 (でしゃばるようである)				
さだし	貞	評価一人柄 (貞節、直実)							
			さたがまし	沙汰がまし	評価一態度 (細かな問題を取り上げて、理屈を述べたがるさま)				
						さほうただし	作法正	評価一言動 (立居ふるまいが作法にかなっている)	
			さまあし	様無し	評価一不良 (不恰好、いやしげで感心できない)				
			さまうし		評価一不良 (不恰好、いやしげで感心できない)				
			さまし		評価一不良 (不恰好、いやしげで感心できない)				
			しおらしい		評価一性格 (ひかえめで従順な様子)				
			しかつべしい		評価一性格 (まじめくさったさま)	しかつがまし		評価一性格 (まじめくさったさま)	④
			しかつべらしい		評価一性格 (まじめくさったさま)				
						しかつめらしい	麁爪	評価一性格 (まじめくさったさま)	
						しぜんらしい	自然一	評価一態度・行動などがわざとらしくない	
						しやごさかし	一小賢	評価一人柄 (相手をのしつて、なまいきなさまをいう)	
						じゆうがまし	自由一	評価一態度 (気まま勝手)	
			しゆつけらし	出家らし	評価一言動 (俗塵を離れた、僧侶だよみえる物腰である)				
			しやうねらし	性根らし	評価一性格 (確かな心を持っている、分別がある)				
			じやうらふし	上臈し	評価一人品や言動に高貴な出らしい趣が見られる				
						じんたいらしい	人体一・仁体	評価一人柄 (立派)	
						じんていらしい	人体一・仁体	評価一人柄 (立派)	
			じんとうらしい	実頭らしい	評価一人柄 (落ち着いて謙虚である)				
						じんぶつらしい	人物一	評価一人柄、才能 (優れる)	
						ずいらしい	粹一	評価一才能 (芸事や花柳界に精通している様子)	
						ずうずうしい	図図	評価一人柄 (ずぶとい)	
						すけべえたらしい	助兵衛一	評価一品行 (好色)	
						すけべえたらしい	助兵衛一	評価一品行 (好色)	
						ずずしい	図図	評価一人柄 (ずぶとい)	
						ずぶずぶしい	図分図分	評価一人柄 (ずぶとい)	
						せかせかしい		評価一性格 (こせこせしている)	
			せからしい		評価一性格 (こせこせしている)				
			せせかまし		評価一性格 (こせこせしている)	せせかしい		評価一性格 (こせこせしている)	
			せせかはし		評価一性格 (こせこせしている)				
						せせこましい		評価一性格 (こせこせ、気が小さい)	②
						せんしようらしい	僭上一	評価一言動 (分を超えた言動をするさま)	
			ぞくがまし	俗がまし	評価一不良 (出家の身でありながら、俗臭が感ぜられる)				
			ぞくたしい	俗たしい	評価一不良 (出家の身でありながら、俗臭が感ぜられる)				
			ぞくらし	俗らし	評価一不良 (出家の身でありながら、俗臭が感ぜられる)				
						ぞわしい		評価一適切 (ふさわしい)	
						ぞこつらしい	粗忽一	評価一言動 (いそぎあわてる、不注意なさま)	
			そそかしい		評価一言動 (いそぎあわてる、不注意なさま)				
			そそかほし		評価一言動 (いそぎあわてる、不注意なさま)				
			そそかうしい		評価一言動 (いそぎあわてる、不注意なさま)				
						そそこしい		評価一言動 (いそぎあわてる、不注意なさま)	
						そそつかしい		評価一言動 (いそぎあわてる、不注意なさま)	
						そらうつくしい	空美	評価一美 (非常にきれいだ)	
			たけし	猛し	評価一性格 (何ものをも恐れない烈しい気性をもっている)				
			たけだけし	猛猛し	評価一性格 (何ものをも恐れない烈しい気性をもっている)				②
			たどたどし		評価一才能 (習熟・精通していない、危なげで不安定)				⑤
たのもし	頼	評価一才能 (頼みとしよう)							③

							ちやわちやわしい		評価一性格 (口が軽く多弁である、おしゃべりである)	②
			てふてふし	喋喋し	評価一性格 (饒舌)					
			てうはふらし	調法らし	評価一才能 (物事の処理に、才覚がはたらくさま)					
			つべつべし		評価一態度 (情け容赦なく責めさいなむさま)					
			つべらし		評価一態度 (情け容赦なく責めさいなむさま)					
							つまづましい		評価一態度 (てきばきとして労を惜しまないさま)	
							つやつやしい	艶艶	評価一美 (光沢があつて美しい)	
							つらあてがまし	面当一	評価一態度 (つらあてしている様子)	
							てきびしい	手厳	評価一態度 (容赦なく、辛辣である)	
							てくどしい	手管	評価一才能 (巧みな技術で物事を行う様子)	
			てばてばし		評価一美醜 (けげばけしく派手である)					
			とがとがしい		評価一性格 (角立っている、理屈っぽい)					
なぐし	和	評価一人柄 (穏やか)					とげとげしい	刺刺	評価一性格 (意地悪そうで角立っている)	②
なぐはし	名細	評価一評判 (名がすぐれている)								
			なまめかし	生めかし	評価一美 (容姿や態度が優美、上品)					
							なめたらしい	無礼一	評価一礼儀 (失礼)	④
			にあはし	似合し	評価一適切 (ふさわしい)					
			におわしい	匂	評価一美 (つややかに美しい)					
							につかしい	似付	評価一適切 (ふさわしい)	
			につかはし	似つかはし	評価一適切 (ふさわしい)					
							につくらしい	似付	評価一適切 (ふさわしい)	
							につこらしい	似一	評価一適切 (ふさわしい)	③
							にやつこらしい		評価一適切 (ふさわしい)	
							にやわしい	似合	評価一適切 (ふさわしい)	
							にんげんらしい	人間	評価一人柄 (人間といわれるにふさわしい、人情味がある)	
			はかし		評価一価値 (打消に用いられ、ばつとしない)					
			はかばかし		評価一価値 (期待されるだけの進歩手・効果が認められる)					⑥
			はからし		評価一価値 (期待されるだけの効果が見込まれる)					
							ばからしい	馬鹿一	評価一才能、価値 (ばかっている、無意味でくだらない)	②
			ばげばけし	化化し	評価一美醜 (みにくいほどにげげばしい、化物じみている)					
			ばげらかしい	化一	評価一美醜 (みにくいほどにげげばしい、化物じみている)					
			ばげらしい	化一	評価一美醜 (みにくいほどにげげばしい、化物じみている)					
はなぐはし	花細	評価一美					はではでしい	派手派手	評価一美 (派手)	
							はなげらしい	鼻毛一	評価一人柄 (女にだらしないさま、女にあまいさま)	
			はなばなし	花花し	評価一美 (はなやか、見事)					
			はばし	權し・幅し	評価一言動 (つつしみがなく、さし控えるべきだと思われるさま)					
			はばし		評価一言動 (放縱してだらしないさま)					
			はらあし	腹悪し	評価一性格 (怒りっぽく、根性がねじれているさま)					
							ひがらしい	僻一	評価一美醜 (やぼくさい、いなかっぽい)	
			ひじがまし	秘事がまし	評価一態度 (秘事であるかのように、もったいぶるさまである)					
			ひすかし		評価一人柄 (臆かしくも片意地多ほるさま)					
			ひとがまし	人がまし	評価一評判 (相当の人物、人にしられるほどである)					②
							ひとがらしい	人柄一	評価一人柄 (上品)	
			ひとし	人し	評価一評判 (一人前のものとして恥ずかしくないさま)					
			ひとびとし	人入し	評価一人柄 (立派)					
			ひとらし	人らし	評価一人柄 (立派)					②
							ひなんがましい	非難一	評価一態度 (とがめだてしているようだ)	
							ひはんがましい	批判一	評価一態度 (批判しているようである)	
			びびし	美美し	評価一美 (華麗)					
							ひひょうがましい	批評一	評価一態度 (批評のようである)	
							ふきがましい	不義一	評価一人柄 (不義のようにみえる)	
			ふさわしい	相応	評価一適切					
							ぶしつけがまし	不躰一	評価一礼儀 (無作法で失礼な感じ)	
							ぶしようたらし	不精一・無精	評価一言動 (不精らしく、ものぐさそうな感じである)	
							ぶしようつたらし	不精一・無精	評価一言動 (不精らしく、ものぐさそうな感じである)	
							ぶたのもし	不頼	評価一才能 (たよりにならない)	

			ふんべつがまし ふんべつらし	分別がまし 分別し	評価一才能 (分別がありそうである) 評価一才能 (分別がありそうで、思慮が深いように感じられる)	ふてぶてしい		評価一人柄 (ひらき直って図太くかまえている、大胆不敵)	
			へたくらうし	下手くらう	評価一才能 (拙劣)	へたくらしい へたくろしい	下手一	評価一才能 (拙劣)	
						へらおかしい べんかいがまし	下手一 弁解一	評価一才能 (拙劣) 評価一価値 (まったくおかしい) 評価一態度 (責任のがれの言い訳をするようである)	
まぐはし	目細	評価一美				まじめらしい	裏面目一	評価一人柄 (まじめであるように見える)	
			またうどし まめし まめめし	真人し	評価一人柄 (直実で生真面目なさまである) 評価一人柄 (まめである、まじめである) 評価一人柄 (まじめ、誠実)				③
						まんらしい みだらがまし みめうわしい みれんがまし みれんたらしい みれんらしい むごたらしい むごつたらしい	機一 漆一 眉目麗・見目 末練一 末練一 末練一 機一・醜一 機一	評価一態度 (高慢な感じがする) 評価一品行 (みだらな傾向がある) 評価一美 (容貌が美しい) 評価一性格 (思い切りが悪いさま) 評価一性格 (思い切りが悪いさま) 評価一性格 (思い切りが悪いさま) 評価一性格 (残忍である) 評価一性格 (残忍である)	
			むごらしい めだれがまし めめしい めらうがまし めんぼくがまし めんぼくらし	惨一・醜一 評価一言動 (相手の弱みにつけこんで、卑劣なさまである) 女女 評価一人柄 (いかにも女らしいさまである) 評価一評判 (世間の評価を得そうなさま) 評価一評判 (世間に誇りを得ることとして、晴れがましく思われるさま)					②
						もつたらしい ものやさしい やさらしい やすやすい やぼつたらしい やぼらしい ゆだんがまし	勿体一 物優 優一 安安 野暮一 野暮一	評価一態度 (もったいぶった様子、もったいくさい) 評価一人柄 (性質・態度などが穏やかである) 評価一人柄 (優しい) 評価一価値 (安っぽい) 評価一美醜 (やぼくさい) 評価一美醜 (やぼくさい)	
						ようだらしい	容体一	評価一態度 (重々しげである、もったいぶっている)	
まらし よろし		評価一良、適 評価一良、適							⑩
			らうらうし	良良し	評価一価値 (上品で美しいさま)				
						りくつがまし りこりこしい りょうけんらしい	理屈一 利口利口 料簡一・了簡	評価一態度 (理屈っぽい) 評価一才能 (利口そうである、かしこそうだ) 評価一才能 (分別がありそうに見える)	
						りりし		評価一才能 (賢い)	
						れいぎたらしい わかわかしい わるざかしい	礼儀正 愚賢	評価一礼儀 (礼儀をわきまえていて、折目正しい) 評価一才能 (愚賢い)	②

表22 シク活用形容詞の意味分類の時代別比較

	上代語	プラス	マイナス	その他
存在形容詞	4	0	0	4
関係形容詞	7	0	0	7
時空形容詞	8	0	0	8
量的形容詞	4	0	0	4
属性形容詞	8	0	0	8
様相形容詞	10	4	4	2
境遇形容詞	2	1	1	0
感覚形容詞	8	3	5	0
対自形容詞	39	14	23	2
対他形容詞	22	17	4	1
意向形容詞	7	2	1	4
思考形容詞	6	0	2	4
評価形容詞	23	19	4	0
合計	148	60	44	44
	中古・中世語	プラス	マイナス	その他
存在形容詞	19	0	0	19
関係形容詞	15	0	0	15
時空形容詞	10	0	0	10
量的形容詞	19	0	0	19
属性形容詞	13	0	0	13
様相形容詞	71	15	26	30
境遇形容詞	17	7	10	0
感覚形容詞	26	5	20	1
対自形容詞	89	5	81	3
対他形容詞	46	22	24	0
意向形容詞	23	10	10	3
思考形容詞	7	3	3	1
評価形容詞	137	49	83	5
合計	492	116	257	119
	近代語	プラス	マイナス	その他
存在形容詞	3	0	0	3
関係形容詞	6	0	0	6
時空形容詞	14	0	0	14
量的形容詞	7	0	0	7
属性形容詞	16	0	0	16
様相形容詞	82	16	43	23
境遇形容詞	12	3	9	0
感覚形容詞	30	2	23	5
対自形容詞	109	18	91	0
対他形容詞	65	28	37	0
意向形容詞	27	3	14	10
思考形容詞	5	0	4	1
評価形容詞	145	47	98	0
合計	521	117	319	85

表23 シク活用形容詞の意味変化

上代語		中古・中世語		近代語		『日国』項目	意味変化						
見出し語	漢字表記	見出し語	漢字表記	見出し語	漢字表記								
存在形容詞													
		ありありし	在在し			③	存在→様相	存在→意向					
うつし	現					②	存在→評価						
		そらぞらしい	空空			②	存在→意向						
ただし	正					②	存在→様相	存在→評価					
		まことし	実し			④	存在→評価						
まさし	正					⑤	存在→様相	存在→思考	存在→評価				
むなし	空					⑤	存在→評価	存在→関係	存在→境遇				
関係形容詞													
けし	異					③	関係→評価	関係→思考	関係→量的				
				しさいらしい	子細一	②	関係→意向						
ひとし	等					⑤	関係→様相	関係→時空					
		やうがまし	様がまし			②	関係→様相	関係→対自					
		よそよそし	余所余所し			②	関係→対他						
時空形容詞													
あらたし	新					⑤	時空→様相	時空→評価					
とほとほし						②	時空→対他						
ひさし	久					③	時空→関係	時空→様相					
		ふるめかしい	古一			④	時空→評価						
まだし						②	時空→量的						
量の形容詞													
たたはし	偉					②	量の→様相	量の→評価					
		とぼし	乏し			②	量の→境遇						
ともし	乏					④	量の→対他	量の→意向	量の→境遇				
				ばかばかしい	馬鹿馬鹿	②	量の→評価						
		ふかし	深し			③	量の→評価						
属性形容詞													
いかし	蔽			あおあおしい	青青	②	属性→様相						
		かどかどし	角角し			④	属性→様相	属性→評価					
くまくまし						③	属性→評価						
		けはし	険し			⑦	属性→様相	属性→評価	属性→境遇	属性→量的			

		いそがし	忙し			⑤	境遇→対自	境遇→様相						
		おもおもし	重重し			⑤	境遇→評価	境遇→対自	境遇→対他	境遇→属性				
		せはせはし	忙忙し			②	境遇→対自							
まづし	貧					②	境遇→量的							
		まどし	貧し			②	境遇→量的							
感覚形容詞														
		かがやかしい	輝・耀			③	感覚→対自	感覚→評価						
かぐはし						②	感覚→対他							
		かしかまし	喧し				感覚→対自	感覚→評価						
		かんばし	香し・芳し			③	感覚→評価							
かうばし	香し					②	感覚→評価							
さわがし	騒し					⑦	感覚→様相	感覚→境遇	感覚→対自					
すさまじ	寒じ・冷じ					⑧	感覚→属性	感覚→様相	感覚→対自	感覚→境遇	感覚→量的	感覚→評価		
すずし	冷					⑧	感覚→対自	感覚→評価	感覚→様相	感覚→思考				
まぎらはし	紛し					⑤	感覚→境遇	感覚→対自	感覚→関係					
		まぶしい	眩			②	感覚→評価							
		やかまし				⑥	感覚→対自	感覚→評価						
		わわし				③	感覚→評価							
対自形容詞														
あさまし						⑧	対自→境遇	対自→量的	対自→評価					
		あわたたし	慌し			②	対自→様相							
		おそろし	恐し・畏し			③	対自→評価	対自→量的						
おどろおどろし						④	対自→感覚	対自→境遇	対自→様相					
		おもだたし	面立し			②	対自→評価							
かなし	悲					⑥	対自→評価	対自→境遇						
				きぜわしい	気忙	②	対自→評価							
				きむずかしい	気難	②	対自→評価							
くるし	苦					⑧	対自→様相	対自→意向						
		けたたましい				③	対自→様相	対自→感覚						
さびし						③	対自→様相	対自→評価						
		さみし	寂し			③	対自→様相	対自→評価						
すがすがし						②	対自→意向	対自→様相						
たのし	楽					③	対自→境遇	対自→量的						
		つつまし	慎し			③	対自→評価							
		にがにがし	苦苦し			③	対自→様相	対自→感覚						
はづかし	恥					③	対自→評価							
		まがまがし				③	対自→量的	対自→意向						
		みぐるし	見苦し			③	対自→評価	対自→様相						
		むつかし	難・六借				対自→様相	対自→評価	対自→境遇					
		ものさわがし	物騒し			②	対自→様相	対自→評価						

		ものおもわしい	物思			②	思考→評価							
評価形容詞														
		あはあはし	淡淡し			②	評価→様相							
		いし	美し			⑥	評価→感覚							
いそし	勤					②	評価→境遇							
		うひうひし	初初し			②	評価→対自							
うるはし	愛					⑩	評価→様相	評価→対他						
		おぞまし	俾し			②	評価→様相							
おだひし	穏					③	評価→様相	評価→思考						
かるがるし	軽軽し					③	評価→境遇	評価→対他						
		かるがるし	軽軽し			④	評価→境遇	評価→属性						
きらきらし	端正					⑤	評価→属性	評価→様相						
くはし	妙・細					③	評価→様相							
さかし	賢					⑦	評価→様相							
		しおらしい				④	評価→対他							
			せせこましい			②	評価→時空							
		ただけし	猛猛し			②	評価→対自							
		たどたどし				⑤	評価→様相							
たのもし	頼					③	評価→対自	評価→意向	評価→境遇					
			とげとげしい	刺刺		②	評価→属性							
			につこらしい	似一		③	評価→関係	評価→意向						
		はかばかし				②	評価→様相							
			ばからしい	馬鹿一		②	評価→量的							
		ひとがまし	人がまし			②	評価→様相							
よろし	宜					⑩	評価→量的	評価→境遇	評価→様相	評価→思考				
		わかわかしい	若若			②	評価→境遇							

表24 分類からみるシク活用形容詞の意味変遷傾向

右→下	存在	関係	時空	量的	属性	様相	境遇	感覚	対自	対他	意向	思考	評価	合計
	7語	5語	5語	5語	12語	31語	5語	12語	25語	20語	6語	6語	24語	163語
存在	—	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
関係	1	—	1	0	0	0	0	1	0	2	0	1	1	7
時空	0	1	—	0	1	2	0	0	0	2	0	0	1	7
量的	0	1	1	—	1	3	2	1	4	2	0	0	2	17
属性	0	0	0	0	—	4	1	1	0	0	0	0	3	9
様相	3	2	2	1	9	—	1	3	13	4	1	2	12	53
境遇	1	0	0	2	1	4	—	3	7	1	2	1	6	28
感覚	0	0	0	0	1	1	0	—	3	0	1	0	1	7
対自	0	1	0	0	2	8	3	7	—	—	1	1	3	26
対他	0	1	1	1	2	5	1	1	—	—	2	0	3	17
意向	2	1	0	1	2	1	0	0	3	3	—	1	2	16
思考	1	1	0	0	0	1	0	1	0	1	0	—	2	7
評価	5	1	2	3	6	22	1	9	14	14	4	5	—	86